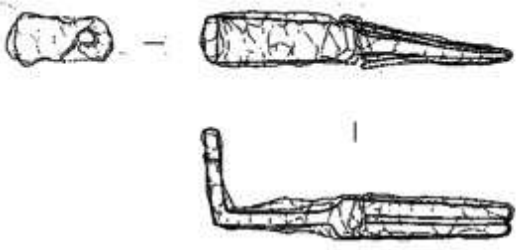
太宰府市の文化財　第43集

大宰府条坊跡　XII

-大宰府条坊跡第149次調査-



149SX090出土海老錠

1999

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡　XII

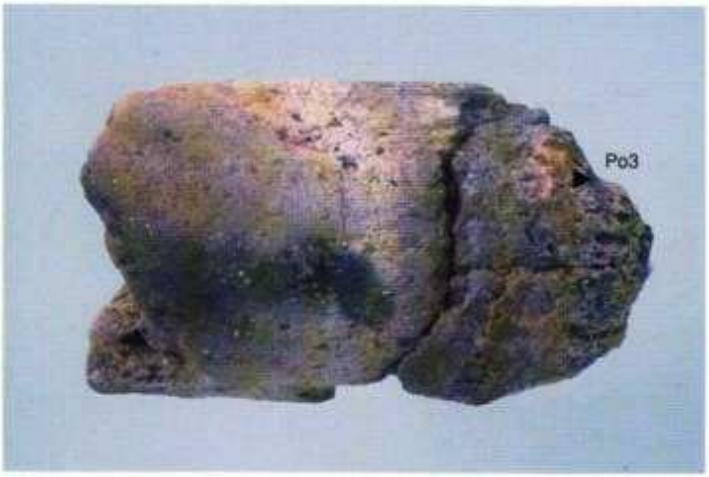
-大宰府条坊跡第149次調査-

1999

太宰府市教育委員会

149SX090出土食器および硯

149SX017出土ルツボ分析点



149黒色土出土羽口分析点

序

本書は、平成６年度に発掘調査を行いました、大宰府条坊跡第149次調査の報告書であります。この調査は、当初計画されておりました太宰府市保健センター建設に伴う、建設用地ならびに移転に伴う代替え地に埋蔵されております文化財の発掘調査成果にあたります。大宰府条坊跡は全国的にも知られております都市遺跡にあたり、今回報告いたします第149次調査地は、観世音寺前面に位置し、数多くの遺構が重なり合い、永い年月人々が生活していたことをうかがわせる地域にあたります。

本書が学術研究はもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対して御理解いただきました皆様をはじめ、関係された諸機関の皆様方に心からお礼申し上げます。

太宰府市教育委員会

教育長　長野治己

例　言

1.本書は、太宰府市教育委員会が行なった平成６年度に実施した大宰府条坊跡第149次調査の発掘調査の報告書である。

2.本書に掲載した発掘調査の原因、調査期間等の調査に関わる経緯については、調査の報告部分に記載している。

3.本書に掲載した調査年度は、先述した平成６年度に実施してきたものであるため、調査組織は第II章にまとめておいた。なお整理作業は各調査終了後随時行なってきたが、主として平成10年度に実施した。

4.遺構の実測は重松麻里子が行ない、図の浄書は中島恒次郎が行なった。

5.遺物の実測は、中島恒次郎・森田レイ子・中西武尚・阿部浩子・酒井三保子・時津裕子・松隈里恵子・黒木美幸が行ない、図の浄書は森田レイ子・中西武尚・阿部浩子・酒井三保子・時津裕子が行なった。

6.遺構の写真撮影は重松麻里子が行ない、空中写真は(有)空中写真企画が行なった。遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表岡　紀久夫）が行なった。

7.遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N）を指している。磁北と座標北との偏差は西偏６°30′（1992年）である。

8.出土した金属製品の応急処置は、下川可容子が担当した。

9.本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、『佐野地区遺跡群　I』に記載している。

10.本書の執筆は、目次及び項目末尾に記し、編集は中島恒次郎が行った。

11.出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。なお、本書が用いた整理および報告の方法に関しては第I章３項に記載している。

目次

I.はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（中島恒次郎） 1
1.調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2.調査地の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
3.報告にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
II.調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
III.調査報告
1.遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
2.遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（森田レイ子） 20
3.出土金属製品の保管状況について・・・・・・・・・・・（下川可容子） 103
IV.自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（中島恒次郎） 107
V.調査成果と課題
1.搬入食器の出土状況・・・・・・・・・・・・（中島恒次郎・森田レイ子） 114
2.遺構の展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（中島恒次郎） 122

I.はじめに

1.調査に至る経過

平成５年９月に太宰府市観世音寺１丁目（観世音寺区画整理113街区13号）における、市立保健センター建設計画が市財政課より提出され、文化課（現：文化財課）に保健センター建設に伴う関連地域の埋蔵文化財に関する取り扱いの有無についての照会がなされた。具体的には保健センター建設地および付帯する駐車場整備地ならびに立ち退きに伴う移転地（以下、付帯事業地と記載）全てが該当する。これら建設に伴う地域は、大宰府条坊跡内に位置し、鏡山条坊復原案による左郭六・七条六坊にあり、観世音寺前面域に所在している。周辺の調査では、観世音寺区画整理事業に先立つ調査をはじめとして、古代から中世にかけての生活面が複数確認されており、保健センター建設予定地および付帯事業地域全てに同様の遺跡が包蔵されている可能性は極めて高かった。したがって、保健センター建設に先立って埋蔵文化財の調査が必要となり、財政課および所管の健康課と協議し、事業開始年度の前年度に発掘調査を実施すること、さらに調査終了年度の次の年度より整理報告書作成に入るための予算確保について合意をみた。

調査は、まず付帯事業地となる観世音寺１丁目164-1他から着手した。調査期間は、平成６年４月１日から同年９月19日。調査は、重松麻里子（山本麻里子）が担当し、中島恒次郎が補佐した。整理作業は、調査担当者退職に伴い、調査補佐を行った中島恒次郎が担当した。

その後平成６年12月に至り、保健センター建設計画の見直しがなされ、残事業地についての調査は、平成８年度に実施することで再度協議を行っている。また、保健センター建設に伴って実施した付帯事業地（観世音寺１丁目164-1他）についての整理作業については、調査が終了していることもあり、当初計画どおり整理作業を実施することで合意をみたため、平成８

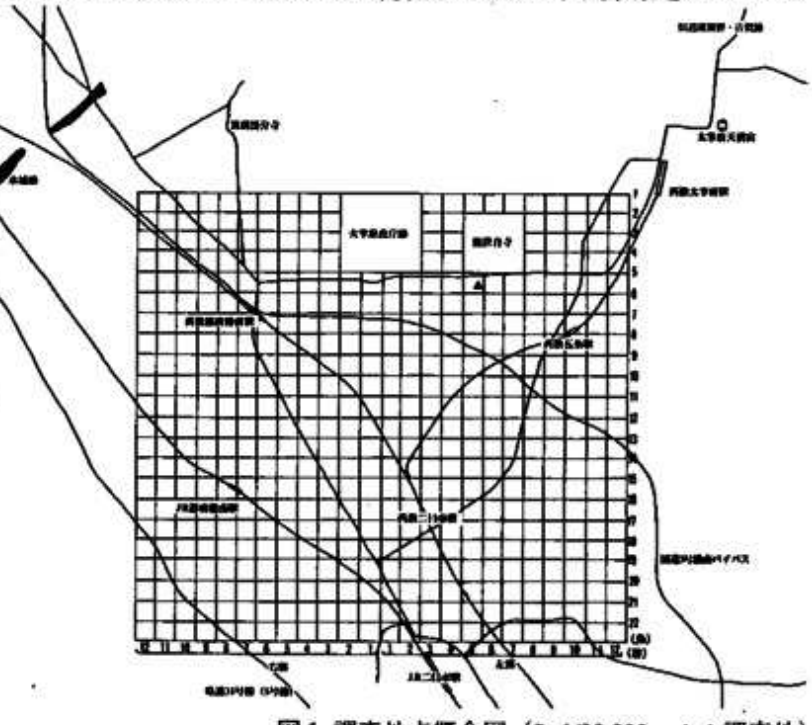


図１.調査地点概念図（S=1/30,000、▲：調査地）

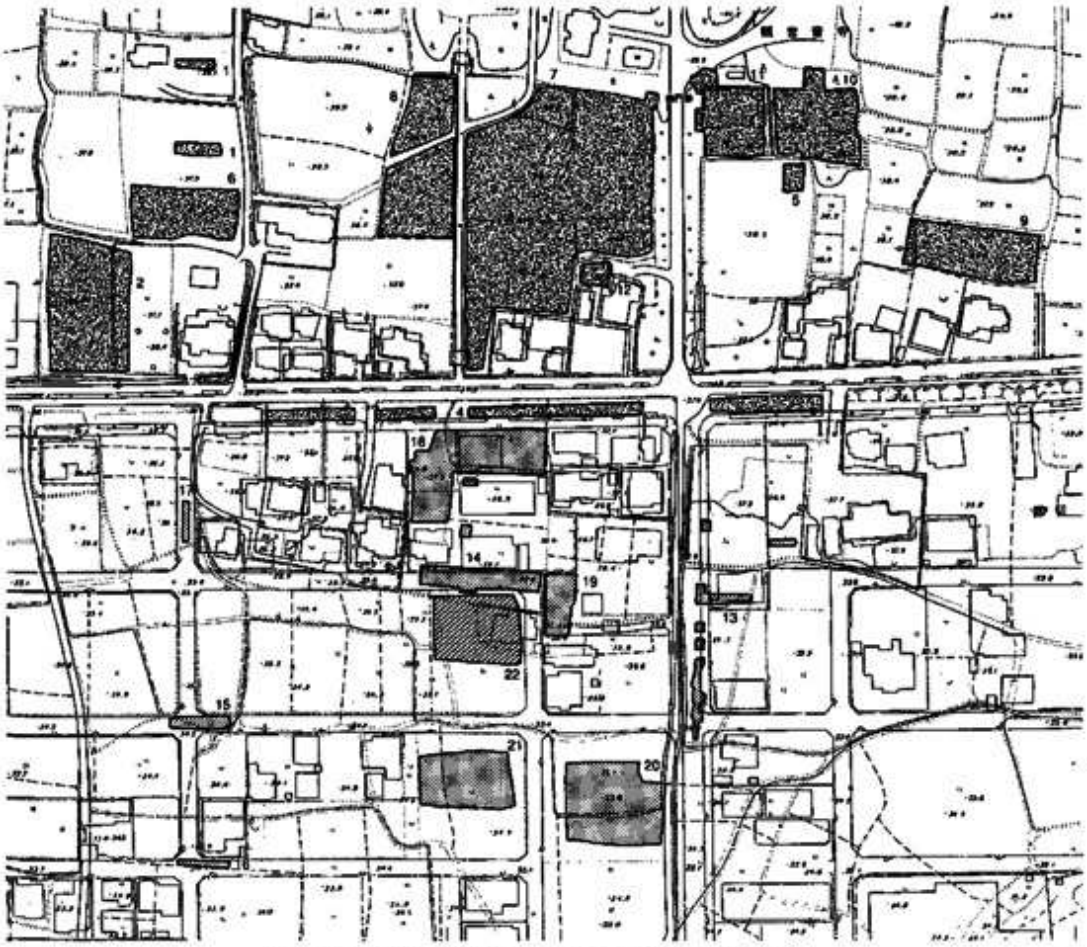


図２.大宰府条坊跡第149次調査地周辺の調査状況

年度より３ヶ年の計画で進めてきた。さらに、平成９年度に至り事業全体の見直しが再度実施され、当初計画地とは異なる地域への建設計画となり、残地の調査が現状計画（職員駐車場・市役所倉庫）では不必要と判断されたため、未調査のまま現状保存されている。したがって、今回報告する大宰府条坊跡第149次調査地は、付帯事業地として計画された観世音寺１丁目164-1他についての調査報告である。

開発対象面積は1,908㎡、調査面積は500㎡を測る。

2.調査地の環境

発掘調査地は、鏡山条坊推定案左郭五条五坊に位置しており、観世音寺前面にあたる（図１）。ここは、条坊跡71次調査および88次調査にて検出した観世音寺から南進する道路（坊路）から西へ一坊のところにあたっている。周辺では既に観世地区区画整理事業によって旧地形の情報は、見る影もないが、区画整理事業に先立って実施された条坊跡第19次から25次調査によって奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構の広がりが確認できている。この時の調査では、調査組

表１.大宰府条坊跡第149次調査地周辺の調査箇所一覧（番号は、図２に一致）

番号	調査遺跡名	調査次数	掲載文献
1	大宰府史跡	22	九州歴史資料館（1973）『大宰府史跡　-昭和47年度発掘調査概報-』
2	大宰府史跡	38	九州歴史資料館（1977）『大宰府史跡　-昭和51年度発掘調査概報-』
3	大宰府史跡	39－1	九州歴史資料館（1976）『大宰府史跡　-昭和50年度発掘調査概報-』
4	大宰府史跡	39－2	九州歴史資料館（1977）『大宰府史跡　-昭和51年度発掘調査概報-』
5	大宰府史跡	61	九州歴史資料館（1979）『大宰府史跡　-昭和53年度発掘調査概報-』
6	大宰府史跡	74	九州歴史資料館（1982）『大宰府史跡　-昭和56年度発掘調査概報-』
7	大宰府史跡	109・111	九州歴史資料館（1989）『大宰府史跡　-昭和63年度発掘調査概報-』
8	大宰府史跡	115	九州歴史資料館（1990）『大宰府史跡　-平成元年度発掘調査概報-』
9	大宰府史跡	117	九州歴史資料館（1990）『大宰府史跡　-平成元年度発掘調査概報-』
10	大宰府史跡	122	九州歴史資料館（1991）『大宰府史跡　-平成２年度発掘調査概報-』
11	大宰府史跡	130	九州歴史資料館（1993）『大宰府史跡　-平成４年度発掘調査概報-』
12	大宰府史跡	154	九州歴史資料館（1995）『大宰府史跡　-平成６年度発掘調査概報-』
13	大宰府条坊跡	14	太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡　II』
14	大宰府条坊跡	19	太宰府市教育委員会（1984）『大宰府条坊跡　III』
15	大宰府条坊跡	22	太宰府市教育委員会（1984）『大宰府条坊跡　III』
16	大宰府条坊跡	23	太宰府市教育委員会（1984）『大宰府条坊跡　III』
17	大宰府条坊跡	25－2	太宰府市教育委員会（1984）『大宰府条坊跡　III』
18	大宰府条坊跡	50	太宰府市教育委員会（1999）『大宰府条坊跡　XI』
19	大宰府条坊跡	67	未報告
20	大宰府条坊跡	71	未報告
21	大宰府条坊跡	134	未報告
22	大宰府条坊跡	149	本書掲載

織上の制約からトレンチ調査に留まっており、遺構の全体像の把握には限界があった。これらのトレンチ調査後は、各種開発事業に先だって遺跡破壊の場合にのみ発掘調査を実施しているが（図２）、区画整理事業によって過度の盛り土が為されている箇所もあり、作業上の安全面や開発対象地の面積に近い調査面積は確保できていない等、充分な調査が実施できていないのが課題として残っている。しかし調査面積に制約はあるものの建物跡、井戸、墓など様々な事象が面的に明らかになりつつあることも事実である。今次調査地周辺においては、観世音寺前面を南進する道路を検出した71次調査や、掘立柱建物、井戸、墓など鎌倉期の条坊内での集落構造を理解する上で参考になる134次調査などが実施されている。この134次調査地では、最下層に平安中期に起こったと考えられる自然崩壊層が確認できており、大宰府条坊跡北部を襲った洪水層である可能性が高い。また134次および先述した71次調査地で検出した墓からは、人骨が残存しており、当時の人々の形質人類学的所見を得る上でも、貴重な成果を納めている。今次調査を実施するにあたっても、北に隣接している条19次調査で検出した遺構との連続性や、明確にできなかった面的な把握が可能になるものと考えられた。しかし報告にて記述するように明らかに為し得なかった部分もあり、集落構造を理解する上においては不十分と言わざるを

得ない面もある。その反面、大宰府外からもたらされた遺物が多種多量に出土するなど、他地域との関係を知る上で貴重な成果を納めることができた。また今次調査地周辺では鉱滓や金属製品を生産したと考えられる工具などが出土している。しかし工房本体の検出は残念ながら為し得ておらず、今後の調査に委ねる結果となった。

3.報告にあたって

報告にあたり、報告簡便化への試みとして記号化を進める方法を模索する必要性を感じ、特に出土遺物については遺構とは異なることから、太宰府市にて保管している限り閲覧要求に応えることが可能と判断し、記号化を進めることにした。しかし、記号化に伴って注意をしておく必要のある点があり、その諸点を以下に記載しておく。これら諸点については、現状での注意点であり、この報告書刊行後に析出する問題点については、随時付加および改善していく必要性は感じている。

1）時空間軸上で弁別できる記号化を進める。

2）可能な限り簡便な記号を記載する。

3）現行の分類で妥当なものについては、無用な混乱を防ぐ意味で、可能な限り使用する。

4）記号化をした報告遺物が、閲覧要求に応じられるよう整備する。

5）記号化した遺物群を逸脱する遺物、新規の遺物については、実測図を掲載すると同時に、可能であれば分析後、記号化を進める。

6）既記載の記号と新規に改正した場合の記号との対応一覧の必要性。

以上の諸点を踏まえた上で、現状で記号化が進んでいる遺物について、実測図および説明は省略し、出土遺物一覧に記載した記号によって表現する。つまり、陶磁器・瓦については分類記号を記載する。ただし陶磁器については、現在再分類を検討していることもあり、将来改正した記号との対応一覧を掲載することにし、現行の分類を用いる。

分類の根拠となる文献は、以下のとおり。

土師器・須恵器

太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡　II』

太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡　II　－窯跡篇－』

瓦

石松好雄・高橋章（1976）「大宰府出土の瓦について（一）」『九州歴史資料館　研究論集2』

石松好雄・高橋章（1978）「大宰府出土の瓦について（二）」『九州歴史資料館　研究論集4』

『大宰府条坊跡』XII
高橋章（1983）「鴻臚館系瓦の様相」『大宰府古文化論叢　（下）』
高橋章（1995）「都府楼瓦考」『王朝の考古学』
陶磁器
青磁
a）越州窯系青磁I類～III類
横田賢次郎・森田勉（1978）「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館　研究論集4』
山本信夫（1995）「北宋期越州窯系青磁の検討」『大宰府陶磁器研究　－森田勉氏追悼論文集－』
NOBUO YAMAMOTO（1994）'Shifts in the use of Zhejiang green glazed Wares at Dazaifu between the late Eighth and Fourteenth Centuries.' "New Light on Chinese Yue and Longquan Wares"
b）龍泉窯系青磁I類～IV類
横田賢次郎・森田勉（1978）「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館　研究論集4』
横田賢次郎・森本朝子・山本信夫（1989）「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究　No.9』
太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡　II』
太宰府市教育委員会（1984）『大宰府条坊跡　III』
c）同安窯系青磁I類～IV類
横田賢次郎・森田勉（1978）「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館　研究論集4』
d）高麗青磁
山本信夫（1985）「日本における初期高麗青磁について　－大宰府出土品を中心として－」『貿易陶磁研究　No.5』
e）長沙窯系青磁
横田賢次郎（1995）「長沙窯系の椀雑感」『大宰府陶磁器研究　-森田勉氏追悼論文集-』
白磁
a）白磁I類～XIV類（椀I類～XIV類、皿I類～X類）
横田賢次郎・森田勉（1978）「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館　研究論集4』
山本信夫（1988）「北宋期貿易陶磁器の編年」『貿易陶磁研究　No. 8』（椀・皿XI類）
山本信夫（1989）「太宰府の中国陶磁　-白磁分類の問題点-」『古文化談叢　第20集（中）』

（椀I類～XIII類）

山本信夫（1995）「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』（椀・皿X類）

山本信夫（1992）「大宰府の陶磁器」『貿易陶磁研究会　九州大会資料』（椀XII類～XIV類）

陶器

太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡　II』

太宰府市教育委員会（1984）『大宰府条坊跡　III』

山本信夫（1990）「大宰府における13世紀中国陶磁の一群」『貿易陶磁研究　No.10』

山本信夫・山村信榮（1997）「中世食器の地域性　－九州・南西諸島－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

石鍋

森田勉（1983）「滑石製容器　－特に石鍋を中心として－」『佛教藝術』148号

焼塩壷

森田勉（1983）「焼塩壷考」『大宰府古文化論叢　（下）』

硯

横田賢次郎（1983）「福岡県内出土の硯について　－分類と編年に関する一試案－」『九州歴史資料館　研究論集9』

火打ち金

兵庫県教育委員会（1989）『中尾城跡』

鍵

合田芳正（1998）『古代の鍵』ニューサイエンス社

収納方法としては、分類記号を遺物個々に記載し、閲覧に対応できるよう整える。また収納状態は、遺構性格ごとに分類収納する方法をとった。この方法は、報告書刊行後の閲覧希望の多くが、遺構性格までを付加した記号および番号、例えば「149SX085出土遺物の緑釉陶器が見たい」といった具合になされることから実施したが、報告書刊行までの諸作業中での遺物実見には、対応表無くしては判断できないという欠点がある。ただし利点としては、これまで遺構番号順に実測分類作業を実施してきたが、報告書掲載時に遺構性格順に遺物図版が組まれることを考えると、遺構性格ごとに実測を完了してゆけば、一性格の遺構出土遺物の実測完了とともに図版が完了してゆくことになる。この方法をとったことにより、条坊内出土の遺物図版完成までにこれまで約半年ほどかかっていた作業が、約３ケ月に短縮できたのも事実である（ただしトレース作業は除く）。　（中島恒次郎）

II.調査組織

発掘調査は平成６年度事業として実施し、また整理作業年度については、平成８年度から平成10年度の三ヶ年で実施したが、主として作業を実施した平成10年度の組織を記載しておく。

（中島恒次郎）

（平成6／1994年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎
		重松麻里子（調査担当）
	技　　師	井上信正
	技師（嘱託）	田中克子（～6年7月31日）
		下川可容子

（平成10／1998年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主　　事	今村江利子
	嘱　　託	鈴木弘江
調査	技術主査	狭川真一
	主任技師	城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎（整理報告担当）
		井上信正
	技　　師	髙橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子（整理報告担当）
		森田レイ子（整理報告担当）

なお、調査報告書をまとめるにあたり、以下に記述する方々に、多くの御教示、御指導を賜った。御芳名を記し心より謝意を表します。

井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、斎藤孝正（文化庁）、柴垣勇夫（静岡大学）、藤沢良祐（瀬戸市教育委員会）、前川　要（富山大学）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、森田　稔（文化庁）、吉瀬勝康（防府市教育委員会）

III.調査報告

1.遺構

a.土層（図３～図５）

検出された生活面はV面を数え、各生活面上に遺物包含層および整地土が堆積していた。これらの土層関係は、以下の通り。なお、上位から下位へ向けて記載しているが、並列している土層に関しては、上下関係が空間的に離れているため確認できなかったものである。

最上層
↓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・I面
明茶色土
↓
黒色土
↓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・II面
灰黒色土
↓
茶色土・灰茶色土
↓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・III面
明茶色砂・黄色土
↓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・IV面
黄茶色土・暗茶色土
↓
灰茶色砂・・・・・・・・・・・・・・・・・・・V面

最上層は、黒茶色の遺物包含層であり、調査区全面に堆積していた。下位にある明茶色土および黒色土は分布域が限られいづれも調査区南半部分に堆積していた。この明茶色土および黒色土の上面で検出できた遺構を生活面I面として取扱い、これら土層の下位にて検出した遺構を、生活面II面として取り扱っている。検出手順上生活面をII面に想定しているが、先の２土層が部分的にしか堆積していないことならびに、II面とした遺構がI面生活面の遺構密度に比べ、極めて低下することから、同一生活面である可能性は高い。

ついで灰黒土、茶色土、灰茶土を除去すると生活面III面が展開している。これらの土層も、先のII面遺構上面を覆う土層と同様に、部分的に堆積していた。これらIII面遺構の下位に明茶色土および黄色土が堆積しており、土質から整地がなされたものと考えることも可能である。

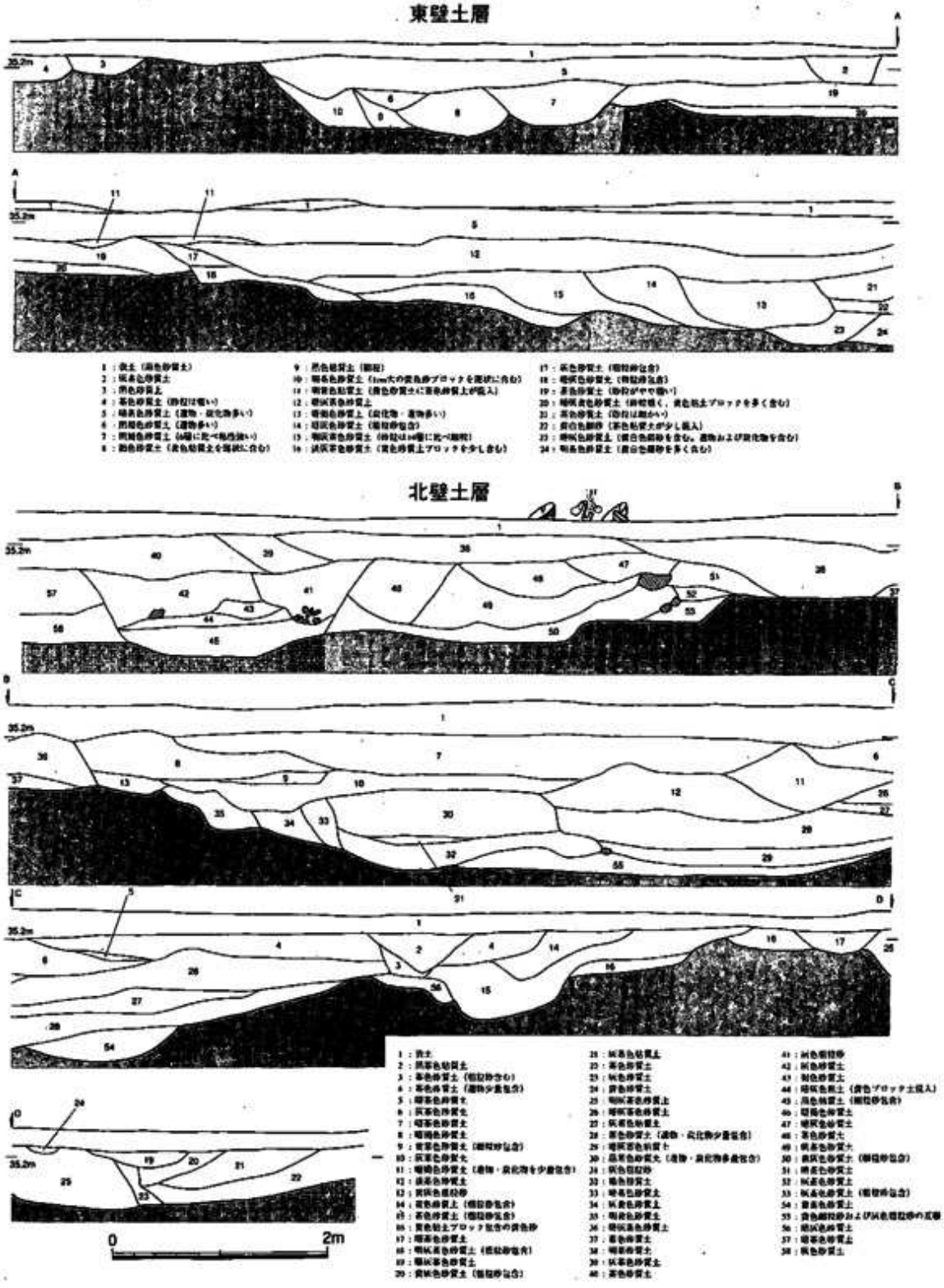


図 3 .基本土層実測図（S=1/60）

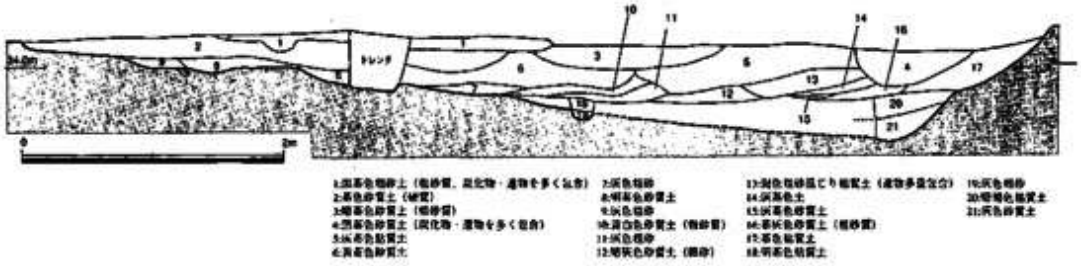


図4.Aトレンチ土層実測図（S=1/60）

b.遺構

土層の項で述べたように、検出された生活面はV面を数える。ただし調査区全面に等しく確認できたわけではなく、調査区南半部分を中心に検出している。調査前の状況で水田畦畔によって削平を受けており、この畦畔を境にして、上位ではI面が残存し、下位ではII面およびI面が同一標高で検出されるなど調査を進める上で混乱を生じやすい原因があった。したがって後述する遺構の説明は、以下に各生活面を基準にして説明を加えるが、上記理由からI面およびII面を一項目として、またIII面からV面を一項目として主要な各検出遺構を性格別に記述してゆく。また、各遺構の前後関係については、図5に記載している。ここで記載しなかった遺構については、遺構一覧を御参照いただきたい。

なお調査担当者と報告担当者が異なっていることからくる事実誤認を避けるため、随時協議を行い共通認識の基に記載を心がけたが、調査情報に記載された内容以上のことは記載できなかった。また調査後保存措置がとられたこともあり遺構形状確認に留めた遺構もある。これについては、形状のみから遺構性格を推測したものある。これらの不備な点は御容赦願いたい。

生活面I・II面（図6）

1）溝

149SD007

調査区北西部にて検出した南北溝で、南側へ展開する149SX091へつながるものと考えられ

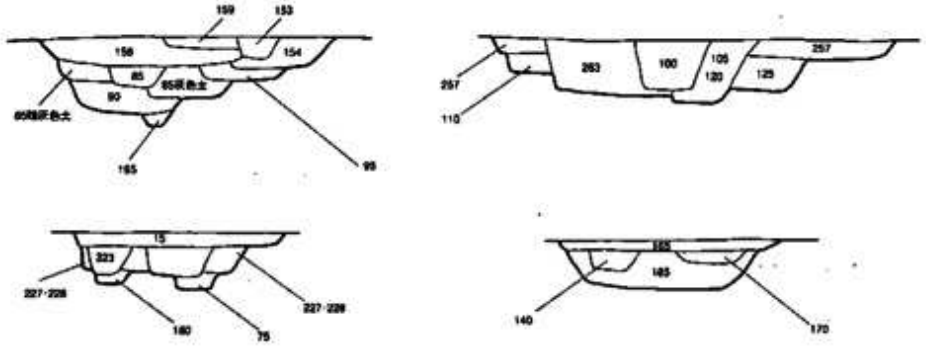


図5.各遺構の前後関係

る。検出できた溝幅は0.74mで検出した深さは0.31m～0.15mを測る。溝内には砂が堆積していた。

149SD015

調査区北半部分を東西に横断する溝で現状畦畔に沿って検出できた。溝幅は1.80mを測り、残存する深さは0.36mを測る。溝内には茶黒色土が堆積している。

149SD040

調査区東部に検出した南北溝で、残存度合いが悪かったためか、土壙状に検出している。溝幅は0.9m、残存する深さは0.1mを測る。堆積土は灰色の粘質土であった。一部下位土層ないしは遺構の遺物を含んでいる。

149SD050

調査区北半部分を東西に横断する東西溝で、上位に149SX010がある。溝南端を149SD015によって欠失しており、正確な溝幅は計測できないが、残存する溝幅は2.6mを測る。溝内には黒褐色土が堆積している。

149SD055

調査区北半部分に検出しているが、上位に149SX010、149SD050、149SD015があるため、そのほとんどが欠失しており、溝であるのかについても不明確である。上位にある各遺構が溝遺構が多いことから、溝開削時の堆積土という理解で解釈した。

2）土壙

149SK006

調査区北西部に検出した略円形の土壙で、短軸長1.18m、長軸長1.42m、残存する深さは0.38mを測る。土壙内には下位より暗茶色土が堆積し、上位には黒茶色土が堆積していた。

149SK035

調査区東南部に検出した不整形の土壙で、短軸長2.7m、長軸長3.5m、残存する深さは0.2mを測る。土壙内には下位より褐色粘土→黒色砂が堆積しており、これらを切るように中央東寄りに、茶色砂が平面形状で円形に堆積していた。なおこの遺構は下位にあるSK175の最終堆積層の可能性もある。

149SK092

調査区北西部に検出した略円形の土壙で、149SD007を切っている。短軸長1.64m、長軸長1.85m、残存する深さは0.27mを測る。堆積土は粗粒砂を含む灰色砂が堆積していた。

3）その他の遺構

149SX010（001）

調査区北側を東西に検出した溝状の遺構で、調査手順の関係から東西両側から調査を実施し

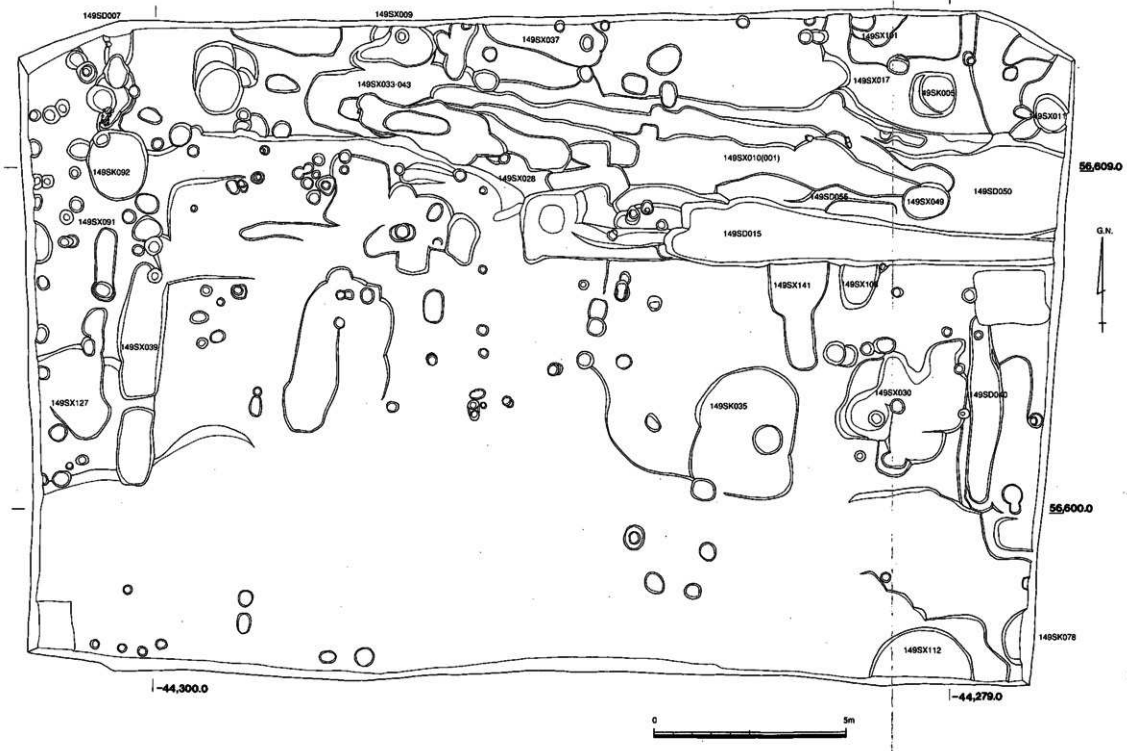


図6.条149次遺構配置図（I・II面、S=1/100）

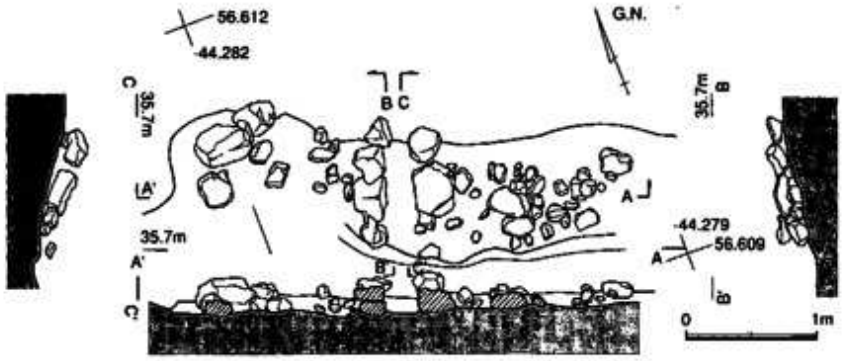


図7.149SX020遺構実測図（S=1/60）

たため、遺構番号を個別に記載した。001と010を統合し149SX010にしている。遺構性格については、溝である可能性が高く、上位にのる旧畦畔の方向に一致しており、この旧地割り（区画整理以前）の成立時期を考える上で参考になるものと考えられる。法量は、幅2.4mを測り、残存する深さは0.05mを測る。遺構内の堆積土は黒灰色土が堆積していた。

149SX009

調査区北部中央に検出した小穴で、0.36m×0.38mの略円形を呈し、検出した深さは0.21mを測る。堆積土は茶黒色土であった。

149SX011

調査区東北隅に検出した小穴で、0.92m×1.08mの楕円形を呈し、0.25mの深さ残存していた。

149SX020

調査区東北部にて検出した礫集石遺構で、中央部分に20cm～30cm大の角礫を溝護岸様に配置し、両側を20cm大の角礫を敷きつめていた。溝幅は、礫内法で約0.2m、深さ約0.1mを測る。溝の検出時の方向はN21°11′39″Eを測る。

149SX025

調査区北側中央部分にて検出した礫集積遺構で、径10cm大の角礫が東西に帯状に敷きつめられていた。礫内から散在的に瓦、金属製品および鉱滓の出土をみた。検出できた礫群の長さは、長軸方向約5.4m、短軸方向約0.7mを測る。

149SX030

調査区東部にて検出した不整形の窪みで、炭化物を多く含む堆積土であった。

149SX033（043）

調査区北東部にて検出した不整形の窪みで、長軸長2m×短軸長1.5mを測る。下層遺構であるSX085の最終堆積層である可能性もある。なお上位に149SX009が切っている。

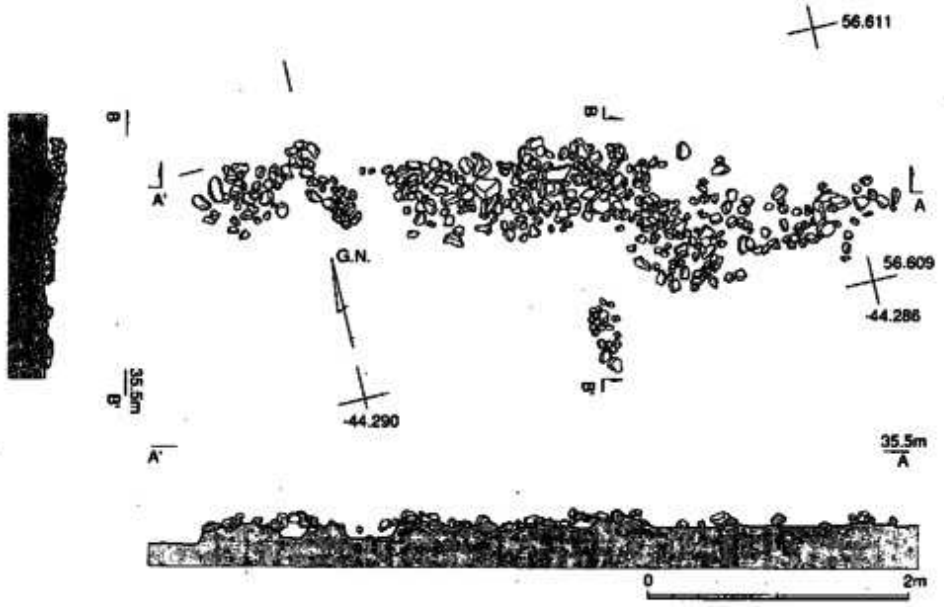


図８.149SX025遺構実測図（S=1/60）

149SX039

調査区西部に検出した南北に長い窪みで、検出できた幅は1.26m、長さ3.6mをそれぞれ測る。残存する深さは約0.24mであった。

149SX091

先述した149SX039に平行するように検出した南北に延びる遺構で、149SD007の延長になる可能性は高い。幅約0.58mを測り、残存する深さは0.04mと僅かであった。遺構内には茶色砂質土が堆積していた。

149SX108

149SD015に切られ、北部分を欠失した遺構で、南北に延びていたものと推定できる。幅は1.04mを測り、残存する深さ0.07mと僅かであった。遺構内には暗灰色土が堆積していた。

149SX112

調査区南東隅に検出した遺構で、調査区の関係から完全に検出できていない。ほぼ円形の形状を呈しているものと推定できる。深さ約0.11mを測り、窪み状を呈していた。遺構内堆積土は暗茶色土が堆積していた。

149SX141

149SX108同様に、149SD015によって北側を欠失した遺構で形状から南北に延びていたものと考えられる。検出した幅は1.53m～0.8mを測り、残存する深さは0.15mであった。なお下位にあるSD075の最終堆積層である可能性がある。

生活面III～IV面（図９）

1）井戸

今回の調査で検出した井戸と考えられる遺構は6基存在していたが、遺跡保存のため完掘しきっていない。したがって、遺構形状から井戸と考えられるが、確定的でないため、ここでは可能性のある遺構を以下に列記し、性格については限定しない。

149S-100・105・115・120・125・160

2）溝

149SD065

調査区東部に検出した南北方向に延びるとみられる遺構で、149SX060によって遺構南部を欠失している。検出幅は1.6mを測り、深さ0.18mを測る。

149SD075

調査区西部に南北に延びる遺構で、幅1.85m、検出長8.6mを測り、深さ0.31m～0.21mを測る。遺構内には炭化物混じりの暗灰色粘質土が堆積している。

149SD080

調査区北部中央部分に検出した南北方向に延びると考えられる遺構で、上位にある149SX015によって南部分を欠失している。幅1.1m、深さ0.27mを測り、褐色粘質土が堆積していた。

149SD130

調査区東部を南北に延びる遺構で、やや蛇行する傾向にある。溝幅0.4m、深さ0.07mを測り、黒色粘質土が堆積していた。

149SD140

調査区西部に検出した窪み状の遺構で、下位に存在している149SD185の堆積土の一部の可能性は高い。幅2.2m、深さ0.16mを測る。炭化物と土器を多量に含む黒茶色砂質土が堆積していた。

149SD155

調査区南部に検出した南北方向に延びる遺構で、幅0.9m、残存長4.2mをそれぞれ測る。遺構内には炭化物混じりの黒色土が堆積していた。

149SD165

調査区北部のほぼ中央から南西隅にかけて検出された遺構で、隣接する条19SD080に連続するものと考えられ、また下位にある149SD185の堆積土である可能性もある。幅7.4m、深さ0.08mを測り、北部に検出した149SD080と同一の遺構である可能性も高い。

149SD170

調査区中央部分に検出した凹み状の遺構で、不整形の形状をとる。遺構の検出幅は、最大部

分で2.2mを測り、深さ0.11mが残存していた。遺構内堆積土は、暗灰茶色粘質土であった。

149SD180

調査区西部を南北に伸びる遺構で、149SD080の南側延長部分と考えられる。遺構規模は、幅1.45m、深さ0.07mを測り、遺構内の埋土は、硬質の黒色粘質土であった。

149SD185

149SD165の下位に検出した遺構で、トレンチ調査によって確認できたものである。したがって遺構形状に関しては不明である。検出できた遺構の深さは最深部で0.6mを測る。なお堆積土は均質ではなく砂質土と粘質土の互層となっていた。

149SD190

先述した149SD165および149SD185の下位に検出した遺構で、本来一連の溝内における堆積土の違いである可能性は高い。この遺構も149SD185と同様にトレンチによる確認であったことから、遺構形状については不明確である。検出できた深さは、0.54mであった。遺構内には、下位より粗粒砂の混じる褐色粘質土→暗茶色粘質土が堆積していた。下層には遺物が多量に包含されていた。

149SD195

調査区北部にて検出した遺構で、全ての遺構に切られた最下層の遺構である。黒色土が堆積し、検出できた深さは0.54mであった。

3）土壙

149SK095

調査区北部にて検出した遺構で、調査区の関係から遺構全体については不明確であるが、調査区内では半円形を呈していることから、円形の遺構形状を示す可能性はある。遺構内には、黒色粘質土が堆積し、最下層には暗灰色で粘性の強い土が堆積していた。深さ0.6mを測る。

149SK166

調査区北西部に検出した遺構で、1.0m×1.2mの楕円形を呈し、深さ0.45mが残存していた。SK006の一部である可能性もある。

4）その他の遺構

149SX085

調査区北部に検出した凹み状の遺構で149SD140・165・170・185・190・195・149SX085・090と一連のものと考えることができる。検出できた幅は約3.0m、深さ0.09mを測る。遺構内には多量の炭化物と遺物が堆積していた。堆積土は暗灰色土・灰色土→黒色粘質土であった。

149SX090

149SX085の下位に検出した遺構で、SX085と一連のものと考えられる。検出できた幅は約

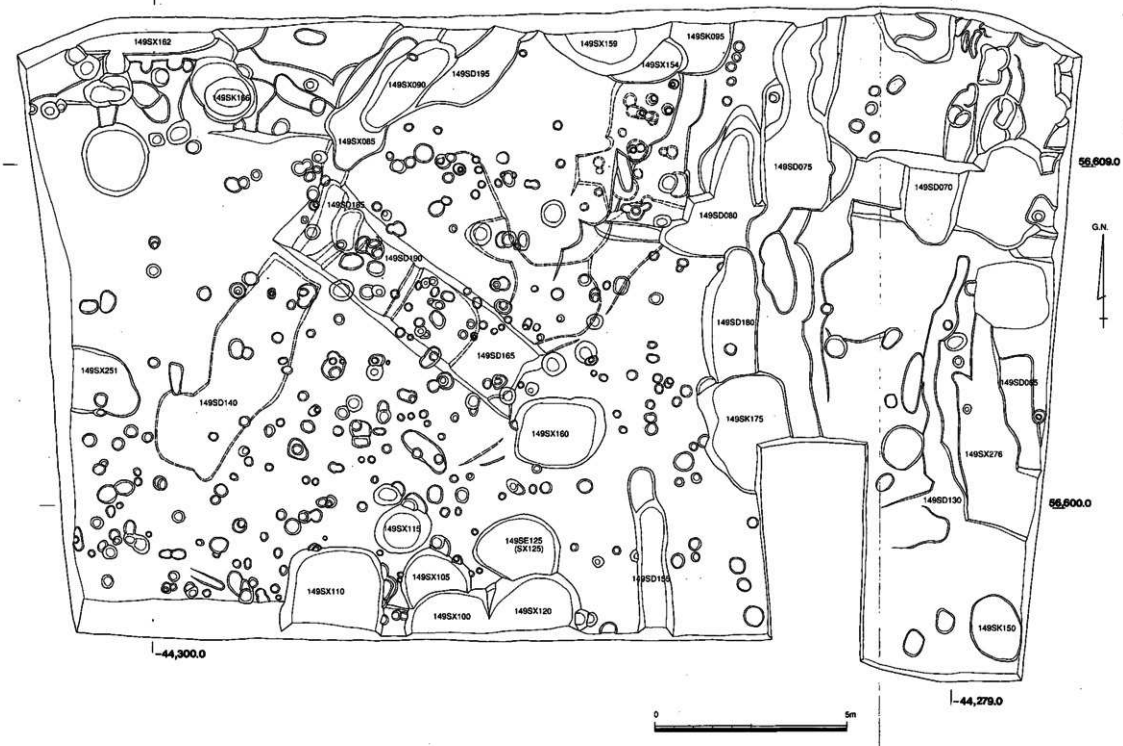


図9.条149次遺構配置図（III～V面、S=1/100）

3.0mほどで、深さ0.7mが残存していた。遺構内には炭化物と遺物を多量に含む茶色砂質土が堆積し、下位には粗粒砂を含む褐色粘質土が堆積していた。

149SX110

調査区南部に検出した凹み状の遺構で、調査区の関係から全形を把握するまでには至っていない。遺構内には灰色粘質土→黒色粘質土が堆積していた。　　（中島恒次郎・山本麻里子）

2.遺物

1）井戸出土遺物

SE125 出土遺物（図10）

黒色土器

椀（1）　口径14.5cm、器高5.1cm、高台径8.1cmを測る。手持ちによる成形で器壁は薄く、口縁を薄く引き出し端部内側に浅い段をつくっている。外面は指押さえの上から丁寧なヘラミガキを施すが下位は凹凸が残り、見込みはコテあてとヘラミガキを行ったことが観察される。高台は断面三角形で小さい。畿内からの搬入品と考えられる。A 類。

SE125 からは他にA 期からD 期の陶磁器と、土師器の小皿類が出土、陶磁器の中心はC 期である。

白磁

皿（2）　口径13.2cmを測る。胎土は明灰色を呈し精良で、淡く空色味を帯びた釉がやや厚めに施され、貫入がある。口縁部の外側からヘラ状のもので押圧して推定7 個の輪花をつくる。体部は見込みで屈曲して立ち上がる。

緑釉陶器

椀（3）　底径7.8cm。茶灰色の胎土に黄色味を帯びた緑黄色の釉を全面に施している。円盤高台を削り出し全面にヘラミガ

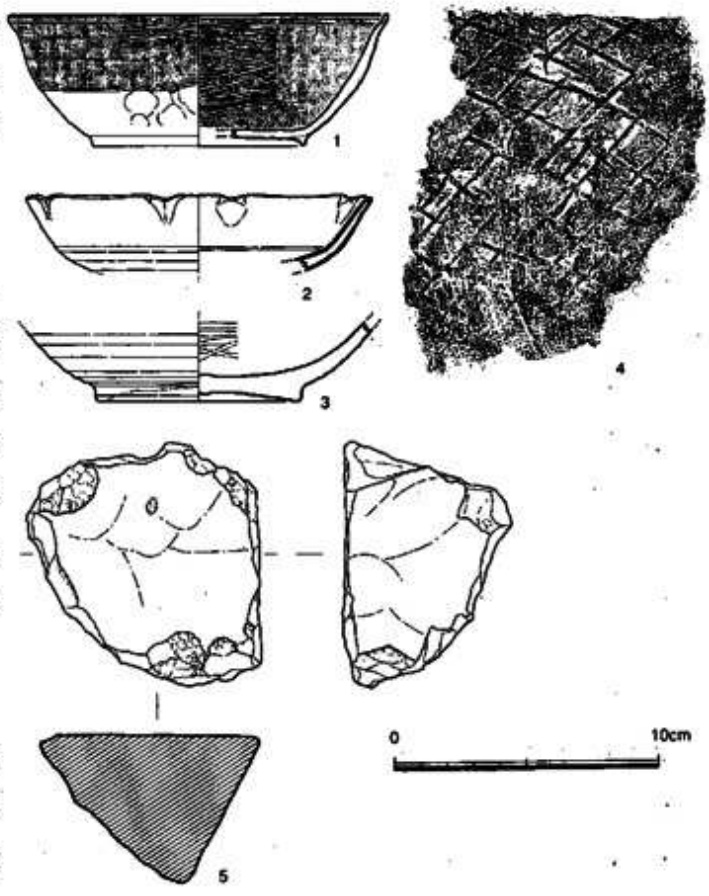


図10.149SE125出土遺物実測図（1/3）

キを行う。やや硬質に焼成されており、京都(洛北)産と考えられる。

瓦類

平瓦（4）　須恵質に焼成され、「大」が三カ所に読み取れる。XV類。

石製品

砥石（5）　三角柱のような形状で、二面使用している。石材は細粒砂岩。

2）溝出土遺物

SD015 出土遺物（図11）

瓦質土器

火鉢（1）　底部径は推定27cmを測る。内面は刷毛調整されている。外面は体部下位に二本の突帯が巡り、間に三重の×印の文様のスタンプで押捺している。貼付された脚の残存部に竹管文が観察される。

陶器

甕（2・3）　2 の口径は38.5cmに推定復原される。暗灰色のキメの細かい胎土に砂粒を多めに含み、明茶褐色の自然釉が掛かっている。粘土紐を巻き上げて成形した痕跡が内面に観察され、口縁部は「T」字口縁である。常滑産。3 は口縁部のみの小片で、青灰色から紫灰色を呈し砂粒をやや多めに含んだ胎土で須恵質に焼き締まっている。幅広で大きめの玉縁口縁をもつ大形甕で備前産と考えられる。

瓦類

軒平瓦（4・5）　4 は内区に偏行唐草文、下外区に突鋸歯文をもつ老司 I 式の瓦。5 は内区は偏行唐草文、上外区は突鋸歯文、下外区に珠文を施す。瓦当面の幅は3.4cm と狭い。

平瓦（6）　大きめの斜格子の中に陽刻の菱形を配した叩きを行っている。

石製品

石臼（7）　下臼の一部で、受け皿部と台部の一部が残存している。台部は浅いドーム状に抉られ、抉られた部分に粗い削りが施されている。

砥石（8）　現存4.6×4.4×0.8cm。石材は細粒砂岩で、側面に使用痕がある。

石斧（9）　現存7.1×4.0×2.4cm。上端と刃部を欠損するが、断面は長円形である。石材は結晶片岩。

SD015 茶黒色土出土遺物（図11）

土師器

坏（10）　口径14.0cmに復原される。器壁はやや薄目で体部を横ナデし、口縁部は外反する。

皿（11）　推定底径8.4cm。キメの細かい胎土に砂粒、白雲母片が多めに入っている。見込

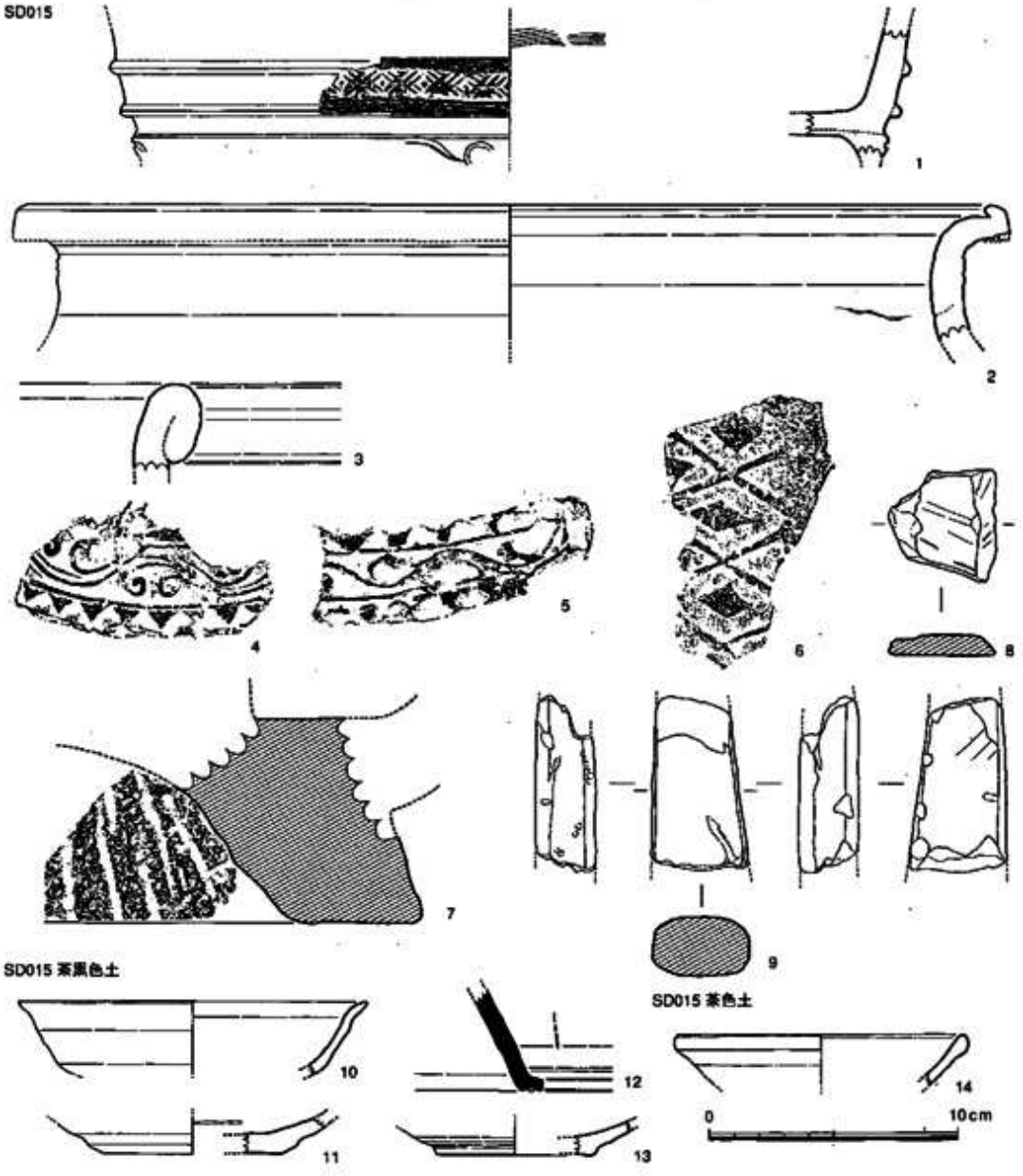


図11.149SD015出土遺物実測図（1/3）

みは丁寧なミガキaを施し、底部は回転ヘラ削りされて、坏dにも似るが、体部が欠損して形状が不明なのでここでは皿とした。

須恵器

円面硯（12）　圏台部が残る。底部を「く」の字に外側に屈曲させ端部は下方に摘んでいる。圏台部に縦方向の線刻があり、文様の一部かもしれない。

緑釉陶器

椀（13）　高台径6.4cmに復原される。磨耗して釉はかなり剥落しているが、焼成は土師質

で、底部は円盤高台を削りだしている。京都産と考えられる。

SD015 茶色土出土遺物 （図11）

白磁

皿(14)　口径は11.4cmに復原される。明灰色の精良な胎土に明灰緑色の半透明の釉を体部上位まで施している。口縁部は玉縁状に肥厚し、体部外面は口縁部近くまで削っている。口縁端部は露胎になっているが釉を掻き取っているのか、または掛け残しかは不明。

SD007 出土遺物 （図12）

瓦類

軒平瓦（1）　明青灰色の胎土に多量の白色砂粒を含んでおり、瓦当面の文様は偏行唐草文、外区は上下とも珠文を巡らせている。焼成は須恵質。

石製品

石斧（2）　現存8.3×5.8×2.8cm。両端部を欠損しているが、側面に浅く穿かれた窪みがあり、石斧と考えた。石材は片岩。

SD040 出土遺物 （図12）

土師器

小壺（3）　底径8.4cmを測る。円盤状の底部に粘土紐を足して横ナデし、小振りの壺にしている。

石製品

用途不明（4）　円柱状に削った石の上位に、直径0.5cm程の穴を水平方向に貫通させているが、穴のところで上部が欠損している。滑石製で、石鍋にあいた穴を補填する道具の可能性がある（宮崎県教育委員会、1995）。

宮崎県教育委員会（1995）『学頭遺跡・八児遺跡』

SD040 暗灰色砂質土出土遺物 （図12）

須恵器

甕b（5）　口縁部を外反させ端部を上位に摘む、二重口縁の甕。

白磁

椀（6）　口径16.4cm、器高6.6cm、高台径6.2cm。胎土は黄灰色を呈しキメは細かいがやや砂っぽい感じで、黄色味を帯びた灰緑色の透明釉を施し化粧土はない。体部は丸味があり上位まで回転ヘラ削りして、口縁は玉縁に作っている。II 類に似るが通常のタイプとは異なっている。

SD055 出土遺物 （図12）

須恵器

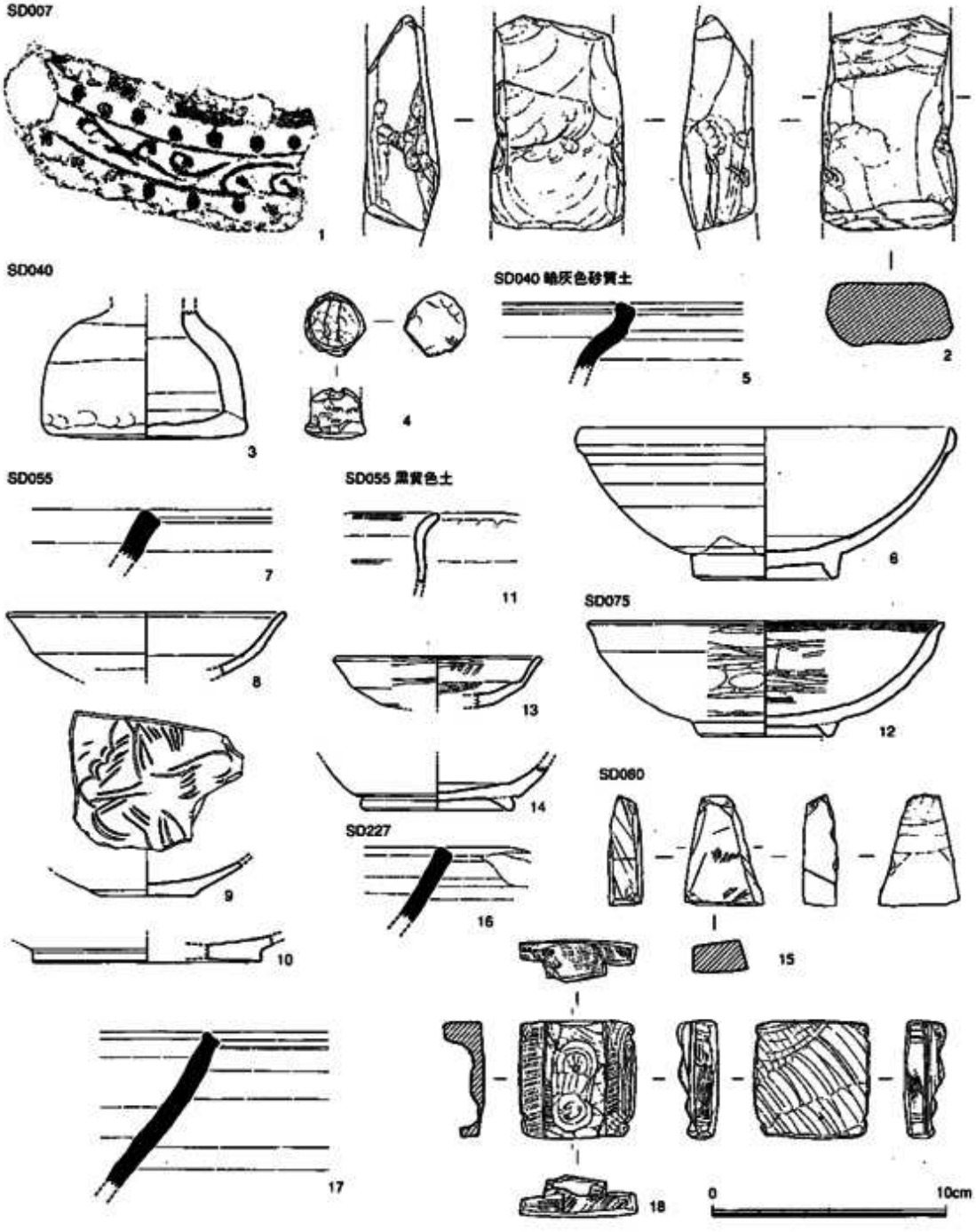


図12.149SD007・040・055・075・080・227出土遺物実測図（1/3）

鉢（7）　明灰色のキメの粗い胎土で、白色砂粒と黒色粒を多めに含み、口縁部は断面四角形を呈す。

白磁

皿（8）　口径は12.0cmに復原される。乳白色のキメの細かい胎土に、わずかに水色味を帯

びた白色で半透明の釉が施されている。見込みに段があり、外面は体部中位まで回転ヘラ削りを行う。口縁はやや外反している。

青白磁

皿（9）　底径3.8cm。胎土は乳白色を呈しキメが細かい。見込みに花文を陰刻し、水色を帯びた釉をやや厚めに施している。底部の釉は掻き取って露胎とする。

緑釉陶器

椀（10）　高台径は推定で9.8cmを測る。底部は円盤高台を削りだし、明茶白色の胎土に淡黄緑色の釉を施す。土師質である。京都産。

SD055 黒黄色土出土遺物（図12）

黒色土器

小甕（11）　緩やかに外反させた口縁部の内面は細かいミガキcが残っている。外面は磨耗して調整は不明であるが、口縁端部まで褐色の付着物がある。A 類。

SD075 出土遺物（図12）

瓦器

椀（12）　口径15.4cm、器高5.0cm、高台径6.0cmに復原される。明灰色の胎土に白色砂を若干含み、内面はコテあての上からミガキc、外面は粗いミガキcを行っている。口縁部内面は黒色になっており重ね焼きされたと考えられる。体部外面は押し出しによる凹凸が残り、やや大きめの高台を貼付する。

小皿（13）　口径は9.0cmに復原される。体部内面および外面にミガキcを施し、黒灰色に焼成されている。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。

灰釉陶器

椀（14）　高台径6.6cm。明灰色の胎土で若干白色砂粒を含んでいる。体部内外面、底部とも回転ナデで見込みは平滑になっている。残存部には釉は残っていない。

出土した土師器はヘラ切りのみで、他の共伴遺物からXII 期までと考えられる。

SD080 出土遺物（図12）

石製品

砥石(15)　現存4.8×3.4×1.4cm。四面が使用されている。石材は粘板岩。

SD227 出土遺物（図12）

須恵質土器

鉢（16・17）　いずれも胎土は青灰色を呈し、白色砂粒、黒色粒を含んでいる。体部は外方に直線的に開きながら回転ナデ調整し、口縁部を断面方形に作る。16 は片口になっている。両者とも東播系と考えられる。

石製品

用途不明品（18）　現存5.1×5.0×1.8cm。長方形に削りだした部分に円を二つ抉り繋げている。円の一つは抉った際に、削りが深く底が一部抜けてしまって製品として使用されなかったと考えられる。滑石石鍋の再利用で外面底部に削りの痕跡が観察される。

SD140 出土遺物（図13～18）

土師器

蓋（1～4）　1・2 は口径が18.6・21.0cmに復原される。それぞれ摘みが付き、天井部を回転ヘラ削りした後丁寧に磨いている。口縁端部は断面三角形に作る。3 は外面を口縁部近くまで回転ヘラ削りし、内外面を磨く。口縁端部は1・2 と同じ。4 は蓋bで環状の摘みを接合し、中心付近の粘土が盛り上がっているので更に摘みが付いていたと考えられる。内面は丁寧なミガキaを行う。

坏e（6～9）　口径7.8～10.5cm、器高3.0～4.1cm、底径5.4～6.8cm。6～8は内外面を磨いて、底部外面は回転ヘラ削り調整される。9 は磨耗気味であるが体部を横ナデし、底部はヘラ切り後ナデている。

坏a（5）　口径13.1cm、器高3.9cm、底径8.6cmを測る。体部は上位まで回転ヘラ削りし、その上から粗いミガキaを施している。底部はヘラ切り後ナデ。

坏d（10～20）　口径10.4～18.4cm、器高2.7～4.1cm、底径5.9～8.8cm。殆どのものは外面の底部から体部下位まで回転ヘラ削りした後、ミガキaを行っているが12、16は回転ヘラ削り調整のみで終わっている。17～19には細い線刻によるヘラ記号が見られる。

坏c（21～24）　口径12.8～15.2cmに復原される。いずれも坏dに高台を貼付した形状で調整は坏dと同じである。24 は体部が欠損しているが坏cに含めた。

椀c（25・26）　口径16.2・21.0cm、器高5.7・8.4cm、高台径9.4・11.4cm。調整は坏cと同様であるが、体部が直線的に開いて器高が高い。

皿a（27～34）　口径14.8～20.4cm、器高1.5～2.4cm。27・33・34 は底部は回転ヘラ削り調整され、28～32はヘラ切り後ナデている。31と33 は内面にミガキaが観察されるが、他は磨耗のため不明である。34の底部外面に線刻のヘラ記号あり。

皿c（35）　口径28.2cmに推定復原される。内面は丁寧なミガキaを行い、見込みには螺旋状の暗文が残っている。口縁部内面に細い沈線が巡り、外面の体部下位に手持ちのヘラ削りを行う。断面の形状から高台が付くと考えられる。搬入品の可能性が考えられる。

鉢（36・37）　36は口径28.8cmに復原される。体部を大きく開き口縁端部を上方に摘む。内外面は丁寧なミガキaを施している。37は口径11.2cm、器高3.1cm、高台径5.0cmのミニチュア鉢で調整は36と同様である。

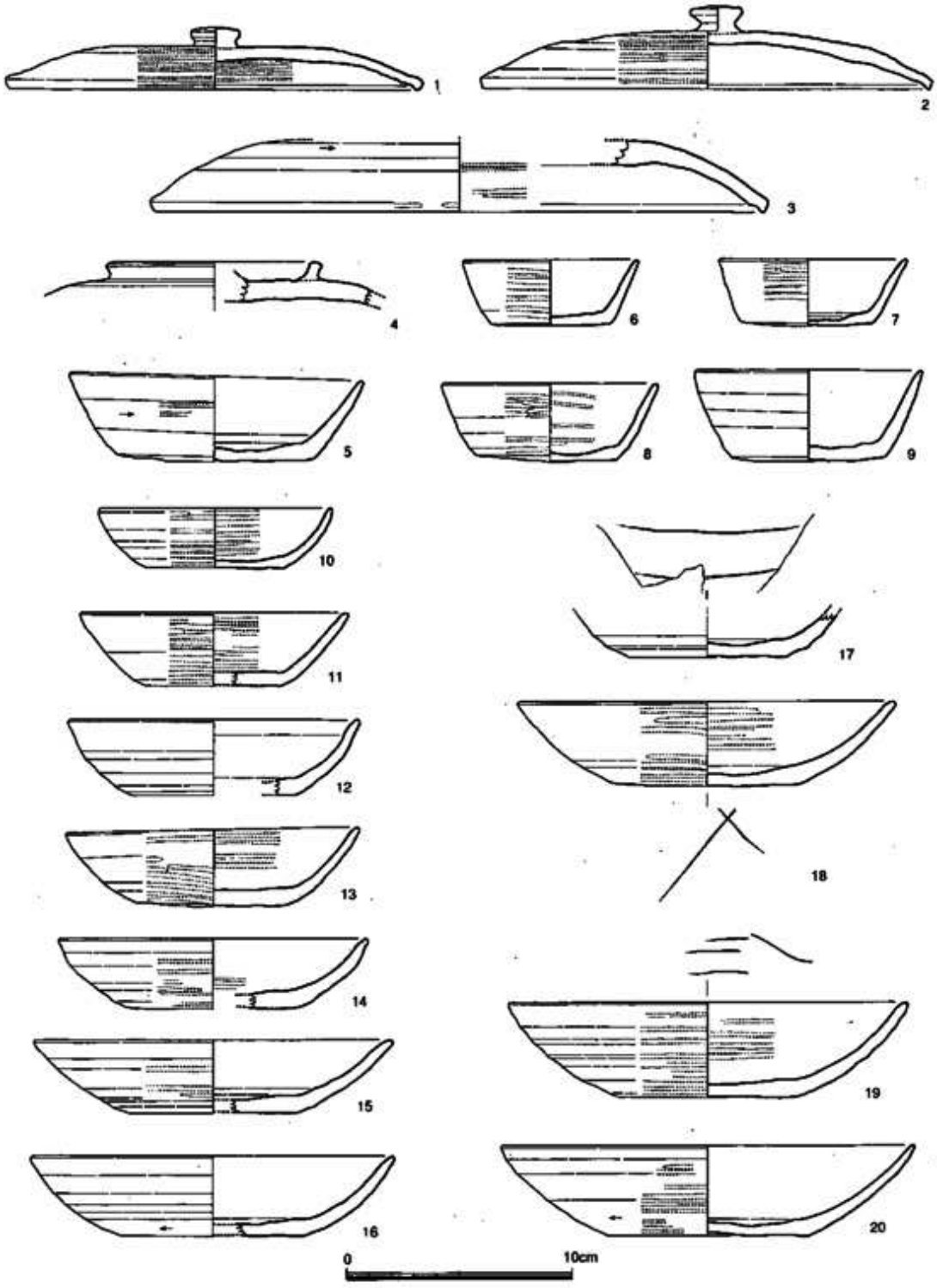


図13.149SD140出土遺物実測図（1）（1/3）

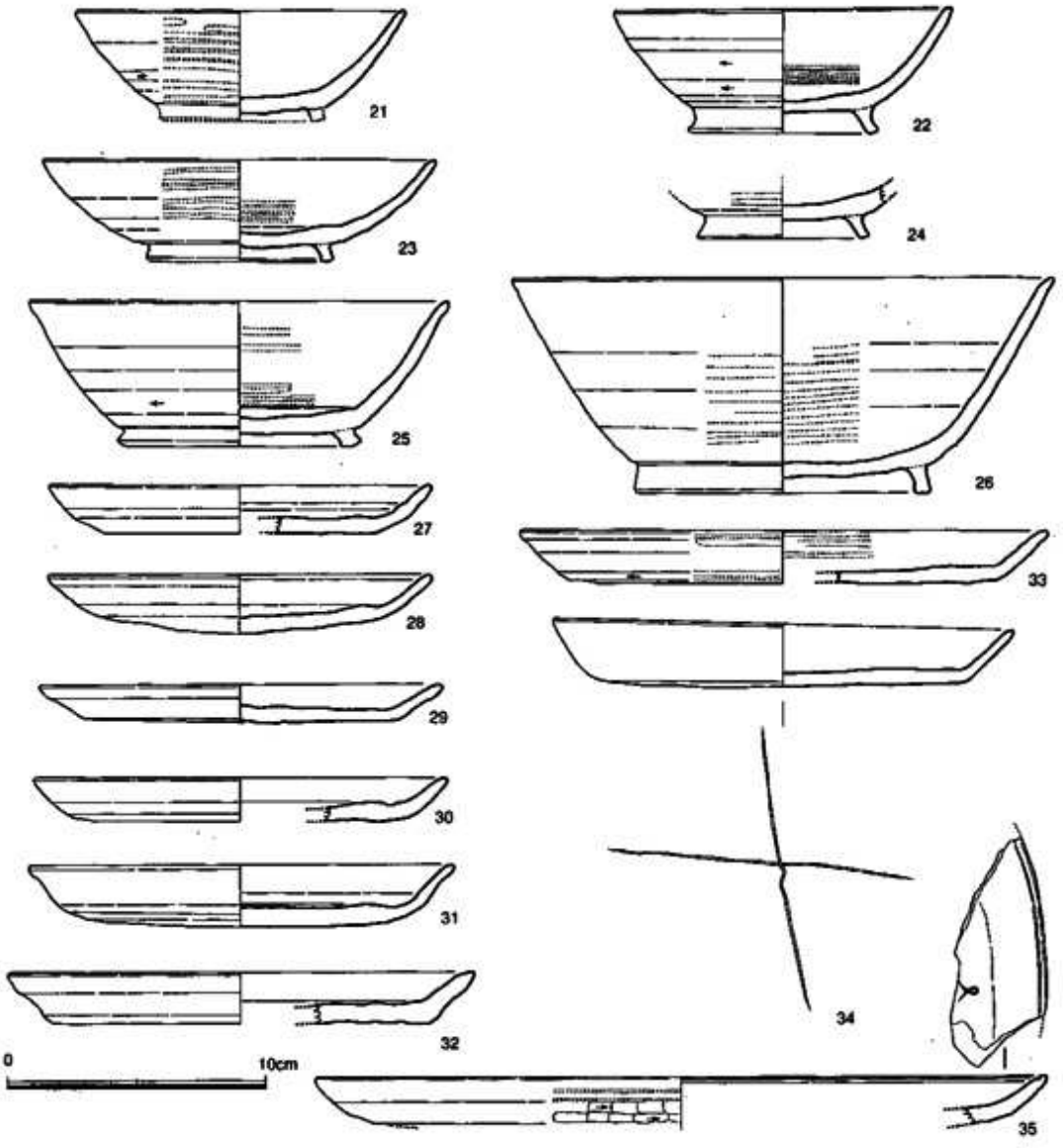


図14.149SD140出土遺物実測図（2）（1/3）

小壺（38・39）　口径6.8・8.8cmに復原される。肩部の屈曲がシャープで、口縁部は小さく摘んでいる。39は回転ヘラ削りの上からミガキaを行っている。

甕a（40）　口径26.0cmを測る。外面は口縁部まで刷毛で調整し、内面は手持ちのヘラ削りを行っている。胎土に白雲母を多く含む。

高坏（41）　推定口径32.4cm。外面は口縁近くまでヘラ削りした後、丁寧にヘラミガキしている。口縁端部に沈線が巡り、蓋3に似るが口径が大きいのでここでは高坏とした。

須恵器

蓋c3（42～44）　口径14.0～15.0cm。器高2.3～2.6cm。43のみ天井部を回転ヘラ削りしてい

る。42・43は擬宝珠形、44はボタン状の摘みがつく。

坏a（45～47）口径13.7～15.1cm、器高3.1～5.0cmに復原される。46は体部中位まで回転ヘラ削りし、他は回転ナデである。底部はすべてヘラ切り後ナデている。

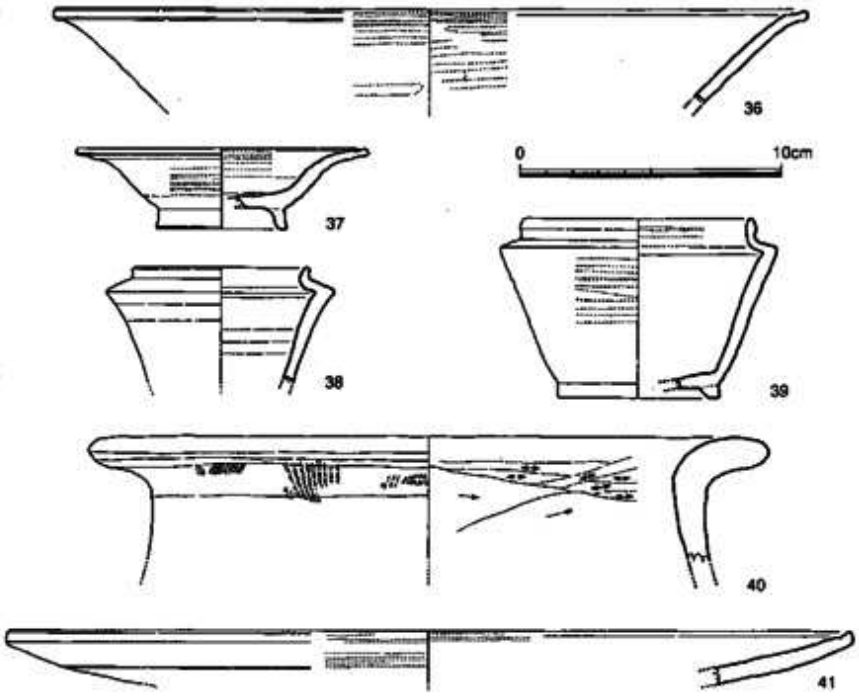


図15.149SD140出土遺物実測図（3）（1/3）

坏c（48～52）口径11.9～13.0cm、器高4.1～5.0cm、高台径3.8～7.8cmに復原される。体部が外方に開いて、断面四角形の低い高台が貼付される。すべて体部外面下位に回転ヘラ削りを行い、底部はヘラ切り後ナデている。

皿a（53～57）　口径13.8～19.7cm、器高1.3～2.6cmに復原される。56は底部から体部外面下位まで回転ヘラ削りされるが、他はすべてヘラ切りである。56は底部に丸味があり、高坏の可能性も考えられる。

皿c（58）　高台径は17.5cmに復原される。底部から体部への屈曲はシャープで残存部は回転ナデ調整されている。

鉢（59）　推定復原で口径23.4cmを測る。口縁部で緩やかに外方に屈曲し、内外面とも回転ナデ調整される。内面は口縁部直下まで茶褐色に変色、使用によるものと考えられる。

壺蓋（60）　口径14.9cmに復原される。天井部はヘラ削りし、口縁部は端部付近で外方に開いている。

甕（61～63）　口径14.2～25.0cmを測る。口縁を直線的に外方に開いているが、63は口縁部を外側に折って二重口縁風に作っている。61・63は体部の叩き締めを行い、61は平行叩き、63は格子叩きで両者とも内面に同心円状の当て具痕が観察される。63の頸部の傷は叩き具の当たりによるものと考えられる。

黒色土器

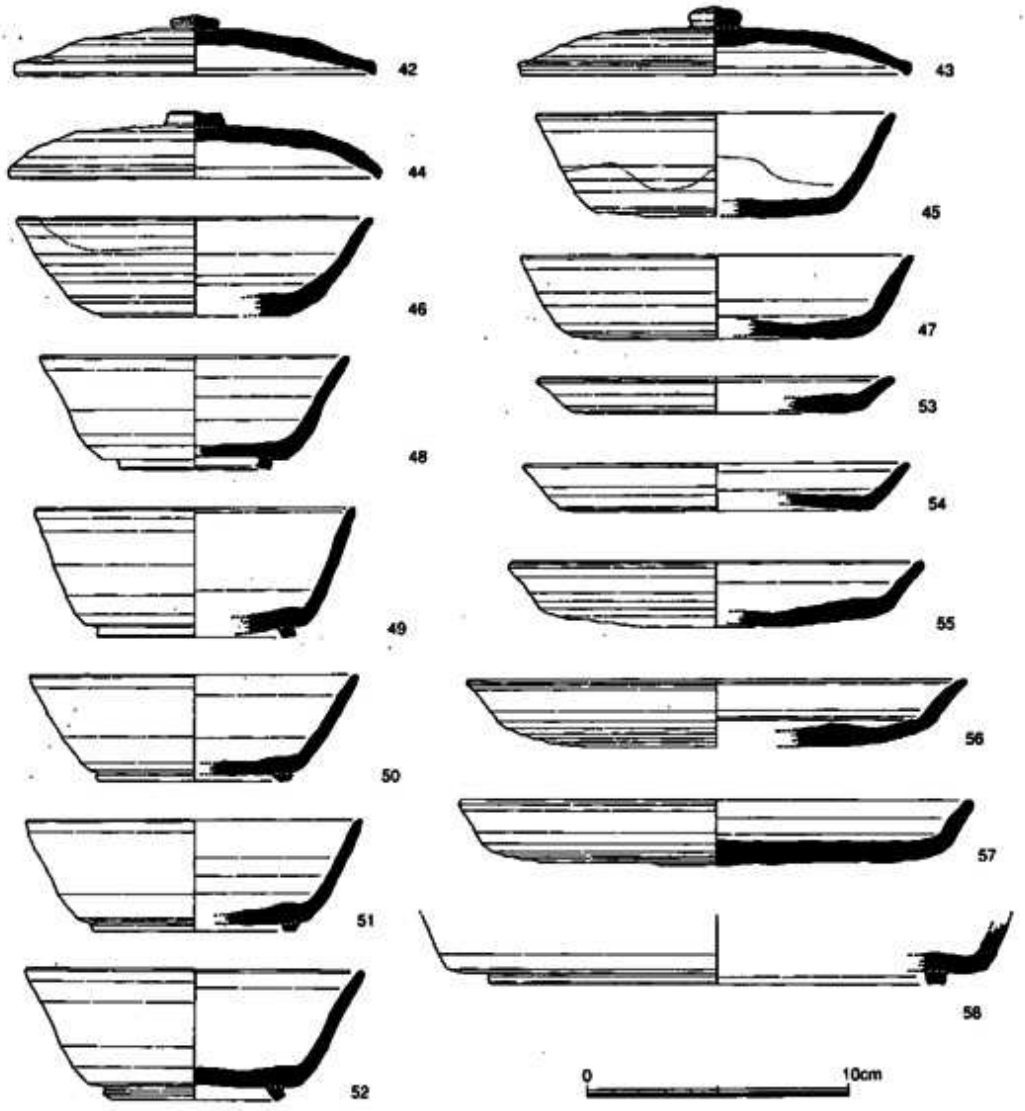


図16.149SD140出土遺物実測図（4）（1/3）

椀c1（64）　内面には丁寧で細かいミガキc、外面は体部下位に回転ヘラ削りを行った後ミガキaを施している。A類。

高坏（65）　口径18.8cmに復原される。内面は前記椀と同様に丁寧なミガキcを行っている。口縁部と脚部の小片だが胎土、色調が酷似しており、図上で一個体として復原した。A類。

灰釉陶器

壷蓋（66）　直径が3.4cmの擬宝珠形をした摘み。胎土は暗灰色を呈し、キメは細かく白色砂粒を少量含んでいる。残存部外面に暗灰緑色の釉が厚く掛かっているが自然釉で、猿投の折戸-10号ないしは井ヶ谷-78号段階のものと考えられる。

土製品

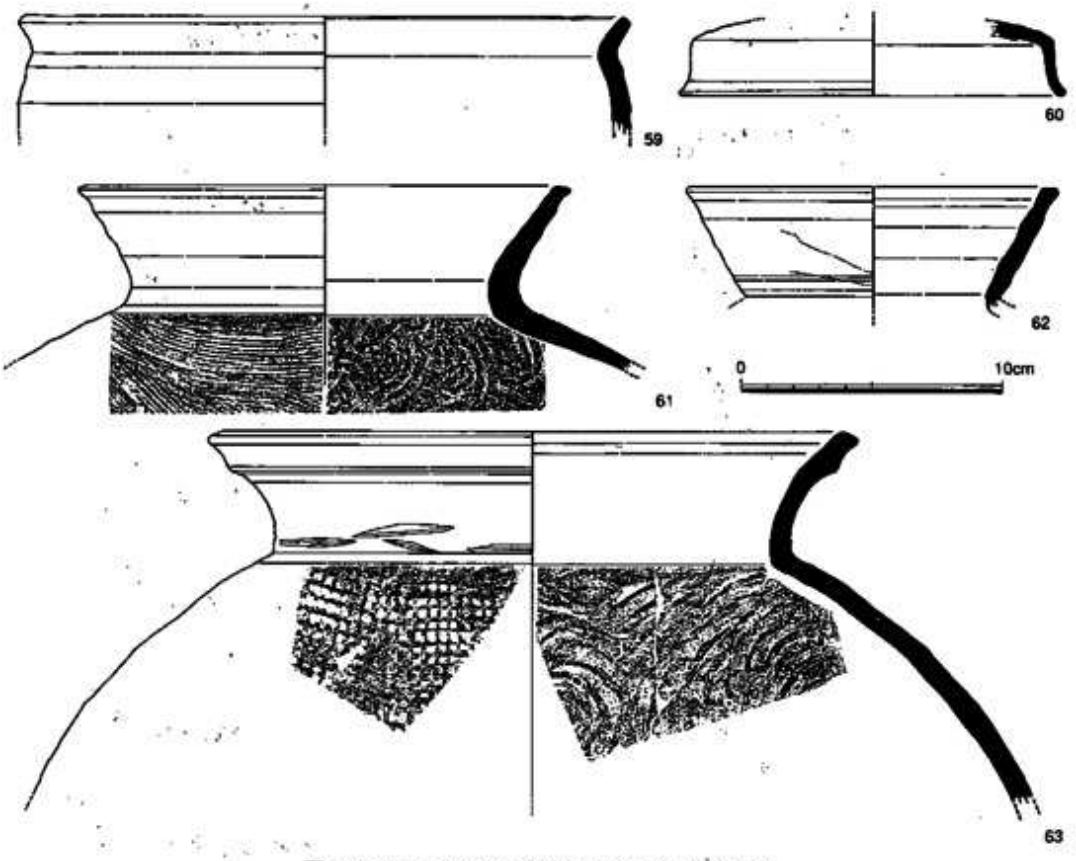


図17.149SD140出土遺物実測図（5）（1/3）

用途不明（67）　残存部は「L」字型の板状製品で厚みが2.5cm前後、内面には方形のものを削りだした痕跡がある。胎土は灰白色を呈し瓦質に焼成される。条坊第19 次調査のSD080上層出土のものと接合した。

土錘（68）　現存6.5×2.4×2.1cm。手捏ねで須恵質に焼成されている。重量は31.2gを測る。

瓦類

丸瓦（69）　全長38.3cmを測る行基瓦。胎土は茶白色～茶灰色～暗灰色を呈し、砂粒を多く含んでいる。外面は縄目叩きを縦方向3回ぐらいに叩き分けている。内外面に糸切り痕が観察できる。焼成はあまく、還元も不良である。

SD155 出土遺物（図19）

土師器

坏d（1）　口径13.8cm、器高3.8cm、底径8.5cmを測る。底部はヘラ切り後ナデ、体部は横ナデを行う。調整は通常の坏dと異なるが、体部を丸く作っており坏dとした。胎土に白雲母を多く含んでいる。

黒色土器

椀c2（2）　口径は15.6cmを測る。体部下位に丸味があり、内外面にミガキcを施しているが、

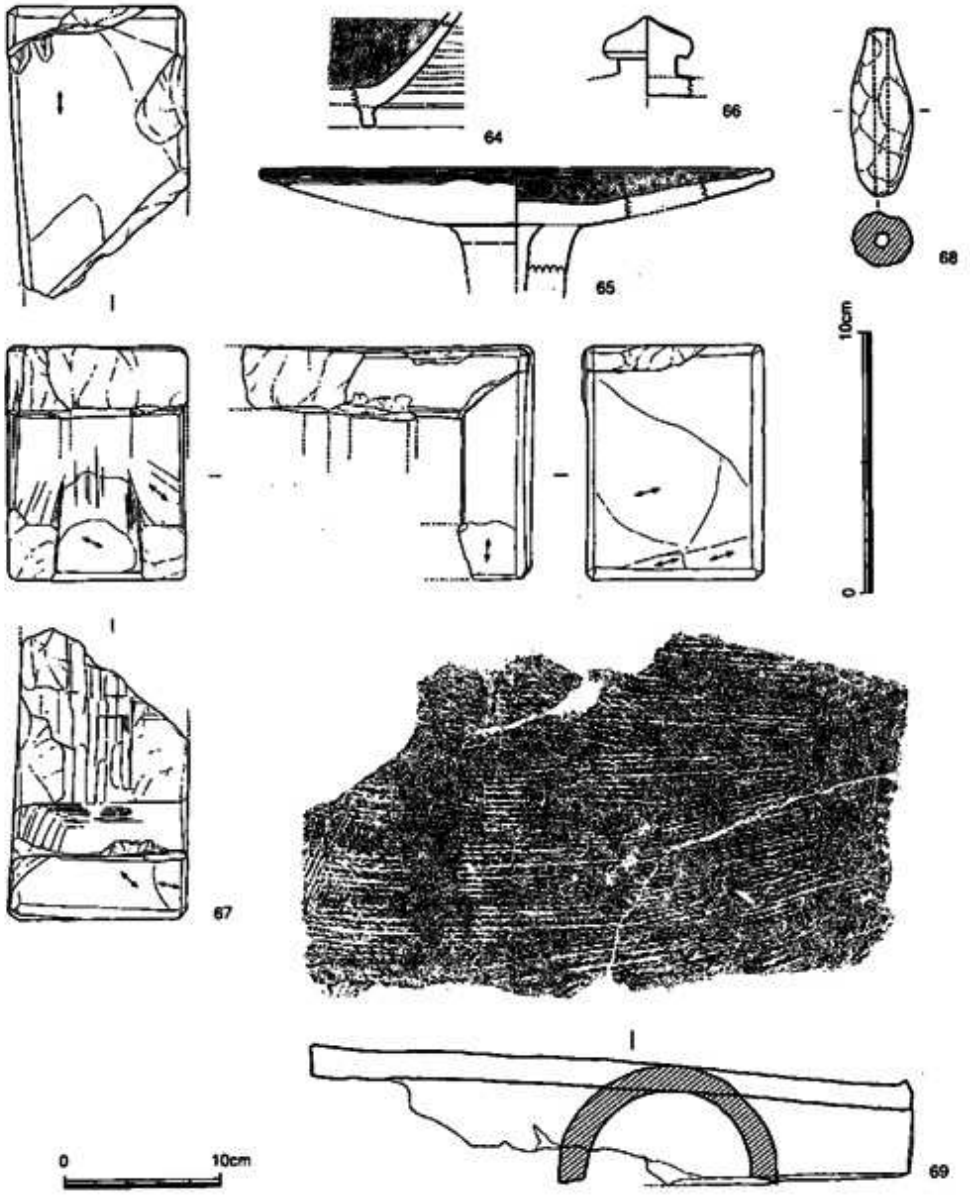


図18.149SD140出土遺物実測図（6）（1/3・1/5）

胎土に砂粒を多く含むので器面が荒れている。A 類。

SD165 出土遺物（図19）

土師器

蓋3（3）　口径13.9cmに復原される。天井部は回転ヘラ削りし、内外面を丁寧に磨いている。

坏a（4）　口径13.0cm、器高3.1cm、底径8.5cmに復原される。底部はヘラ切り後ナデ、体部は内外面とも横ナデを行う。胎土に白雲母を多量に含んでいる。

坏d（5・6）　口径12.4・14.4cm、器高3.7・2.8cmを測る。いずれも底部から体部外面下位を回転ヘラ削りして内外面にミガキaを施している。

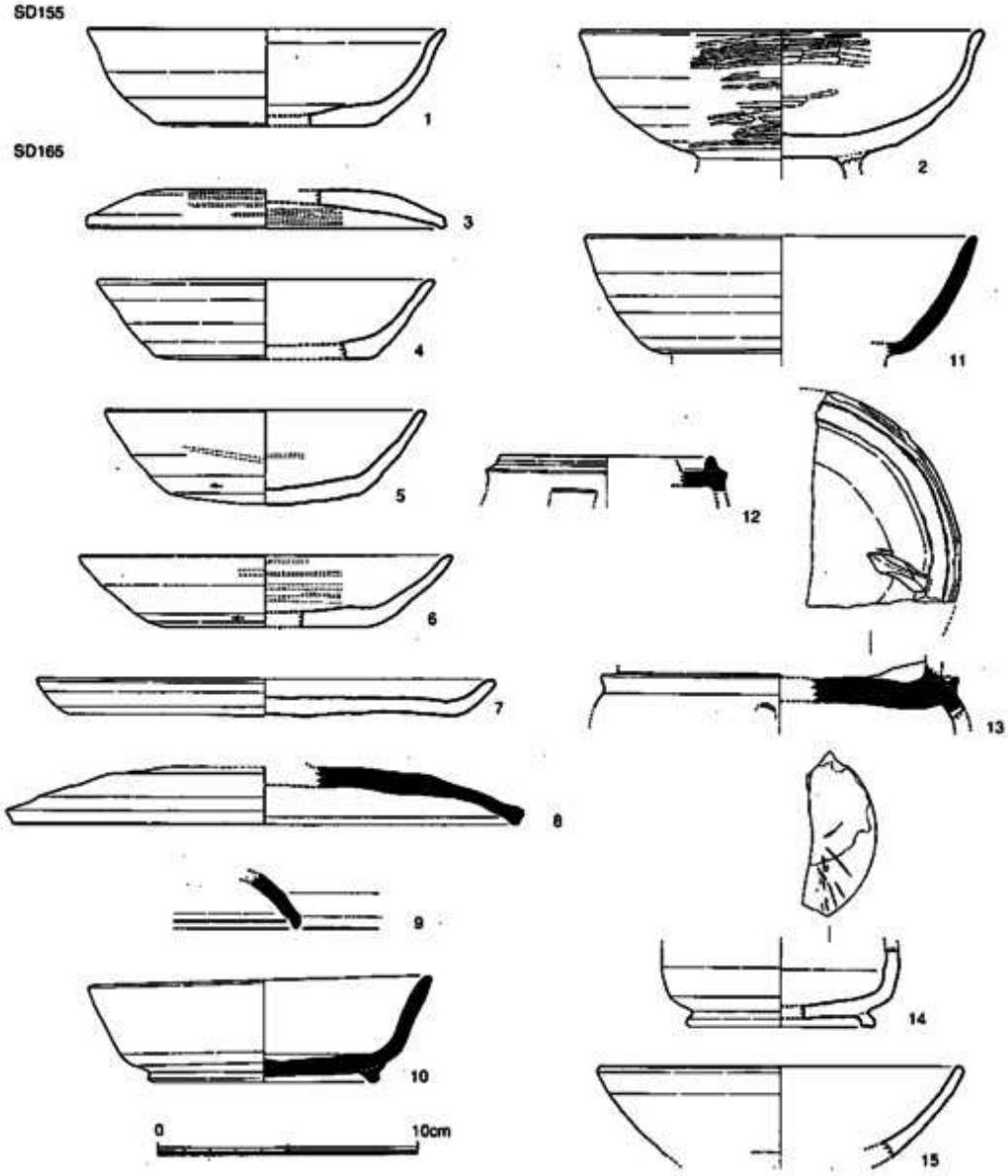


図19.149SD155・165出土遺物実測図（1/3）

皿a（7）　口径17.7cm、器高1.4cm、底径15.1cmを測る。底部処理はヘラ切り後ナデ、体部内外面は横ナデである。

須恵器

蓋c3（8）　口径19.5cm。天井部はヘラ切り後粗いナデを行い、口縁部の内外面は黒灰色に焼けて重ね焼きしている。

蓋3（9）　口縁部に丸味のある小振りの蓋。口縁端部内面に鋭い沈線が巡る。

坏c（10）　口径13.3cm、器高4.0cm、高台径9.0cmを測る。体部はやや直線的に立ち上がり、断面四角形の低い高台が貼付される。底部はヘラ切りで丁寧にナデている。

円面硯（12・13）　硯面と圏台を連続して作った後、外提と突帯を接合したものと考えられる。いずれも圏台に透かしを彫る。13は外提の内側がやや凹み海になっているが、海の一部に粘土を貼り付けている。仕切のように見えるが、装飾の可能性もある。

灰釉陶器

器種不明（14）　高台径7.1cm。明黄灰色の胎土で、体部は下位でシャープに屈曲し直線的に立ち上がる。底部は糸切りで断面四角形の高台が外方へ開いて接合される。内面の調整、降灰の様子から小振りの壺もしくは瓶のような器形と考えられるが、SD170出土の把手付き小壺と胎土、調整、体部下位の法量が極めて近いので同一個体の可能性もある。ただし、輪状高台が付く小壺は例がないとのことであった。[註1)]

註1）斎藤孝正氏教示。

長沙窯系青磁

椀（15）　残存する口縁部が1／8程の小片で、口径は14.0cm前後に復原される。器壁が厚く、明黄灰色のやや砂っぽい胎土で、明黄茶色の釉を体部上位まで施す。釉には細かい貫入が入っている。口縁部はやや内湾し、横田分類のB類と考えられる。

SD170出土遺物（図20）

土師器

皿（1）　底径10.5cmに復原される。体部が大きく開き、底部が円盤高台状になっている。外面は淡赤茶色を呈し、赤色顔料が塗布されていたと考えられる。

甕a（2）　口径15.8cmに復原される。体部と口縁部の境は緩やかで、体部内面はナデ、外面は粗い刷毛で調整する。口縁部は内外面とも横ナデし、体部に粘土紐の痕跡が観察される。胎土に角閃石を少量含み、産地不明であるが豊前南部の可能性も考えられる。

盤（3）　高台径21.5cmを測る。底部外面は回転ヘラ削りし、断面四角形の高台を付す。体部は磨耗気味だが丁寧にヘラミガキを施しており、残存部に幅3cm、厚み1cm前後の把手が付く。二個で一対をなすと考えられる。

須恵器

蓋1（4）　口径15.1cmに復原される。返りが付く。

蓋c3（5・6）　口径13.3・13.4cm。器高2.5・2.1cm。いずれも天井部外面は回転ヘラ削りし、ボタン状の摘みを貼付する。5は内面が平滑で転用硯になっている。

蓋3（7）　口径13.7cmに復原される。口縁部内面に浅い段が巡っている。

坏c（8～12）　口径12.7～15.0cm。器高3.7～5.0cm、高台径7.6～10.6cmを測る。体部はやや立ち気味で、8・10～12の高台は底部際に接合される。

灰釉陶器

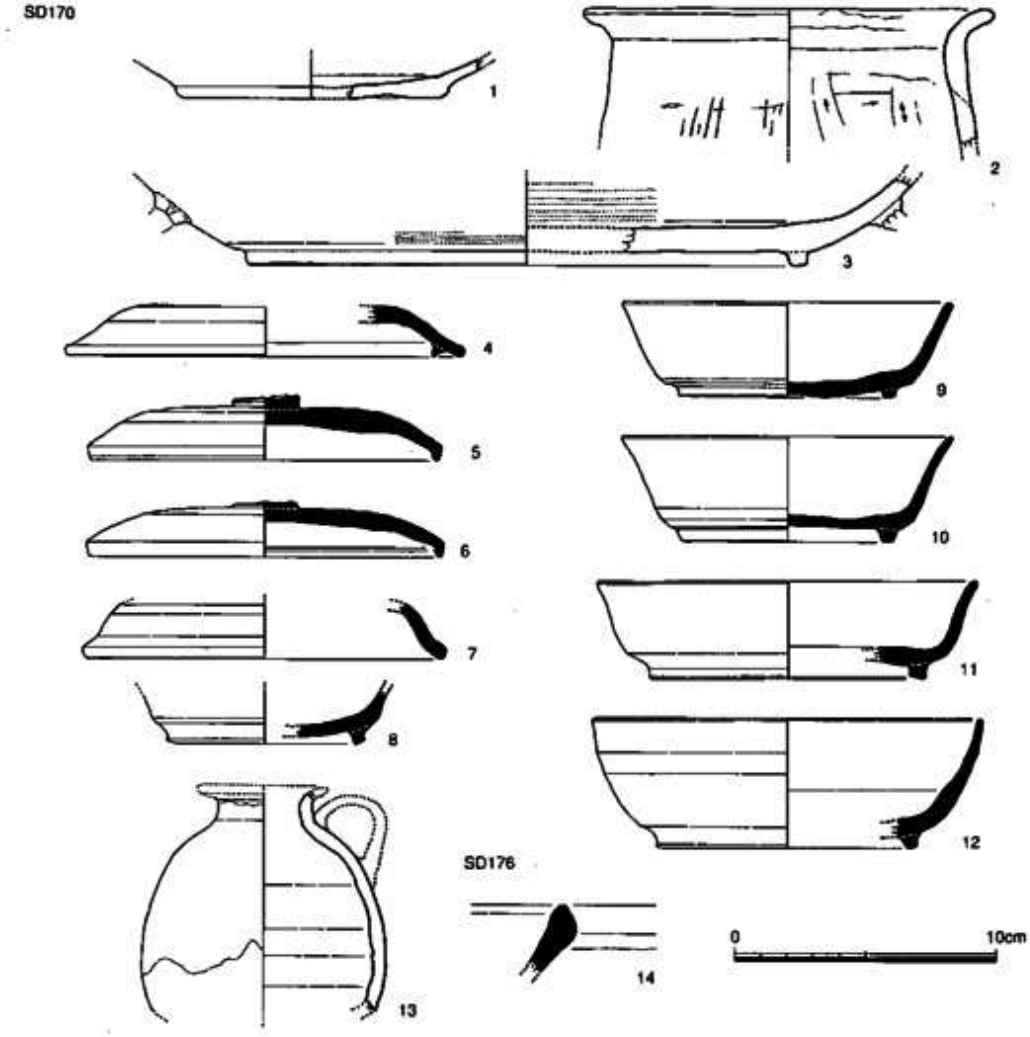


図20.149SD170・176出土遺物実測図（1/3）

小壺（13）　明黄灰色の胎土で、外面と頸部内面に灰緑色の自然釉が掛かっている。

回転ナデされ、体部最下位は「く」の字に屈曲、上位には把手の接合痕が見える。SD165出土の灰釉と同一個体の可能性がある。

SD176 出土遺物（図20）

須恵質土器

捏鉢（14）　胎土は青灰色を呈し、口縁端部は暗灰色になっている。口縁部を断面三角形につくる。東播系。

SD185 出土遺物（図21～23）

土師器

坏d（1～6）　口径14.2～16.0cm、器高3.2～3.8cm、底径6.6～8.5cmを測る。いずれも外衣面を底部から体部下位にかけて回転ヘラ削りして、内外面にミガキaを施している。

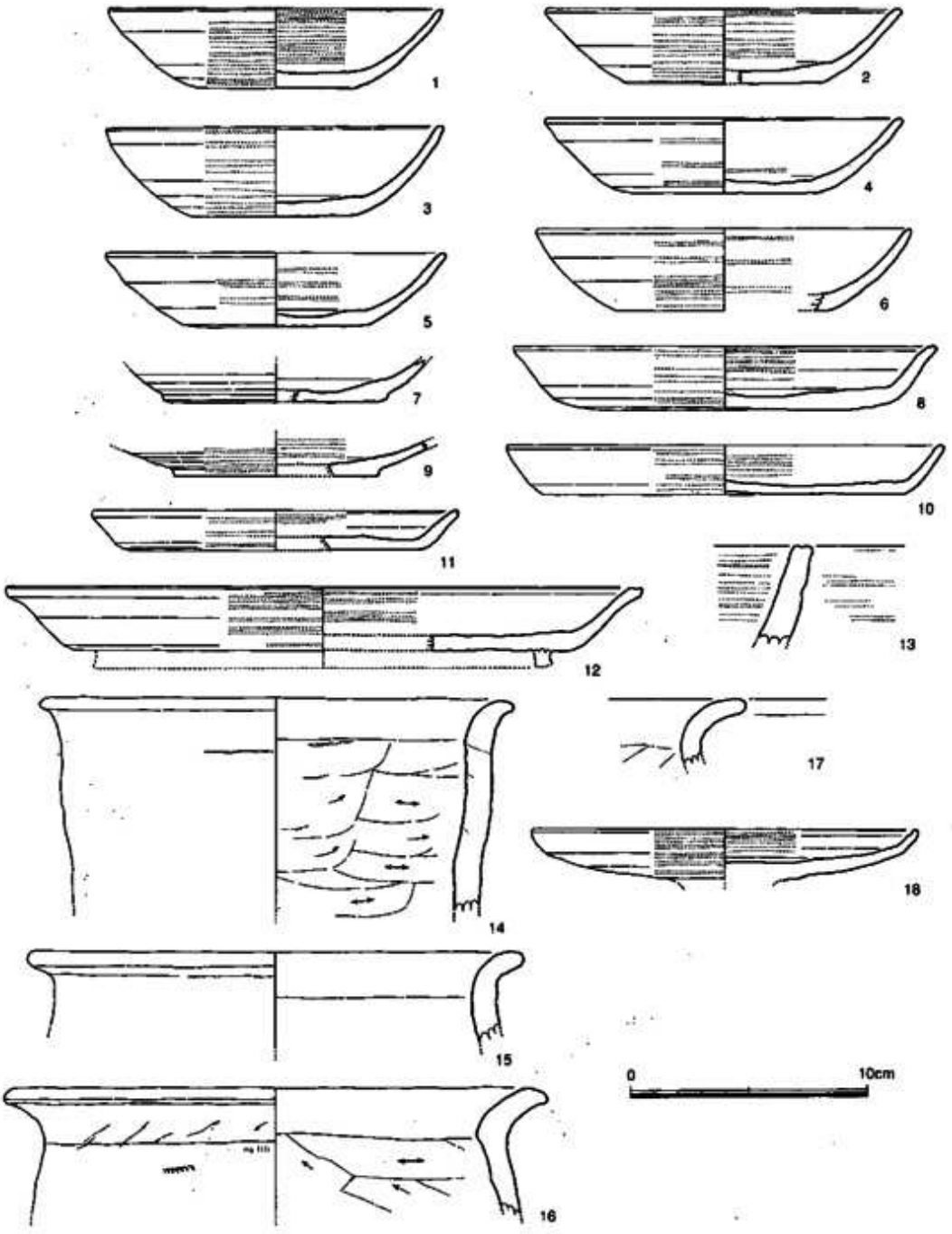


図21.149SD185出土遺物実測図（1）(1/3)

坏（7）　底径9.5cmに復原される。底部はヘラ切り後ナデ、体部は横ナデをおこなう。

皿a（8・10・11）　口径15.6～18.5cm、器高1.7～2.7cmを測る。底部外面を回転ヘラ削りし、内外面にミガキaを施す。

皿（9）　底径は8.8cmを測る。胎土は橙色を呈す。底部の形状が特徴的で円盤高台になっている。底部と体部の内外面にミガキaを行う。

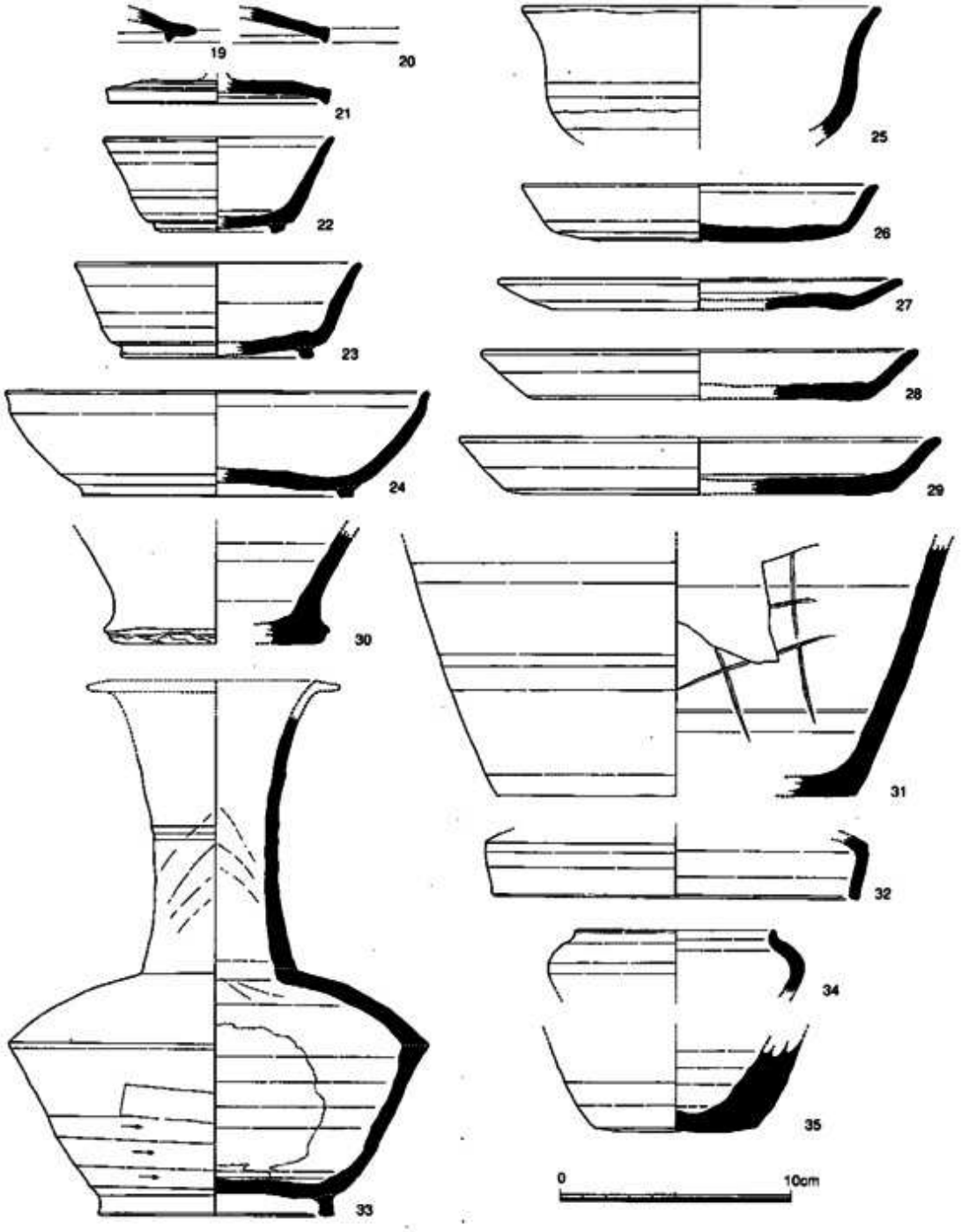


図22.149SD185出土遺物実測図（2）(1/3)

皿c（12）　口径27.0cm前後に復原される大皿。高台の剥離痕が観察される。底部外面は回転ヘラ削りを行い、体部内外面にミガキaを施す。口縁端部は外反し端面に幅0.2cm程の沈線が巡っている。

鉢b（13）　口縁まで直線的に立ち上がる。外面は体部上位まで回転ヘラ削りし、内外面に

ミガキaを行う。

甕（14～17）　口径20～23.0cm。14は口縁部を短く外反させ体部内外面はナデ調整する。15・17はいずれも胎土が粗く角閃石を含んでいる。体部と口縁部の境は緩やかで、内面は15は横方向にナデ、17は手持ちのヘラ削りである。いずれも筑後産と考えられる。16は体部から口縁の屈曲がシャープで、内面にヘラ削り、外面に刷毛調整を行っている。

高坏（18）　口径16.4cmを測り、内外面を丁寧に磨いている。口縁端部の内側に鋭い沈線を巡らせる。

須恵器

蓋1（19）　胎土に砂粒を多く含みキメは粗い。断面三角形の返りが付く。

蓋3（20）　口縁端部は断面三角形で、黒灰色に焼けており、重ね焼きされたと考えられる。

小蓋c3（21）　口径9.4cm。天井部外面は回転ヘラ削りし、内面に赤色顔料が付着している。

坏c（22・23）　口径10.0・12.4cm。器高はいずれも4.2cm。高台径5.6・8.4cmを測る。底部は両者ともヘラ切りで体部を外方に開いている。22は体部外面下位に回転ヘラ削りを施している。

大坏c（24）　口径18.4cm、器高4.6cm、高台径11.8cmを測る。暗灰色を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。外面の底部から体部下位は回転ヘラ削りを行う。

椀（25）　口径15.6cm。丸味をもった体部は口縁部で外反する。体部外面下位はヘラ削りを行うが、回転が遅いためか稜線が乱れている。

皿a（26～29）　口径15.5～21.0cm、器高1.4～2.4cmを測る。26は底部を回転ヘラ削りしている。他はヘラ切り後ナデ。26と29は見込みが平滑で転用硯として使用されたと考えられる。

鉢（30・31）　底径9.8・15.6cm。30は胎土のキメが粗く砂粒を多量に含んでおり、円盤状の底部に粘土を接合して体部を作ったものと考えられる。31は鉢bで外面を底部から体部上位まで回転ヘラ削りし、内面に「井」の字形のヘラ記号が線刻されている。

壺蓋（32）　口径15.8cmに復原される。口縁部はやや内傾し、外面には自然釉が付着している。

壺b（33）　高台径10.3cm。外面の底部から体部下位を回転ヘラ削りし、体部、肩部、頸部をそれぞれ接合している。頸部は中位に浅い幅広の沈線が巡っている。

壺（34・35）　34は口径8.8cmの小壺で口縁部は短く立ち上がる。35は壺の底部で底径7.0cmを測り、キメ細かい胎土である。底部に静止糸切り痕が観察され、底部外周と体部下位を回転ヘラ削りしている。畿内からの搬入品と考えられる。

甕a（36）　口径33.cm前後に復原される。口縁端部を玉縁状に肥厚させている。体部は外面に格子叩き、内面に同心円の当て具の痕跡が観察される。

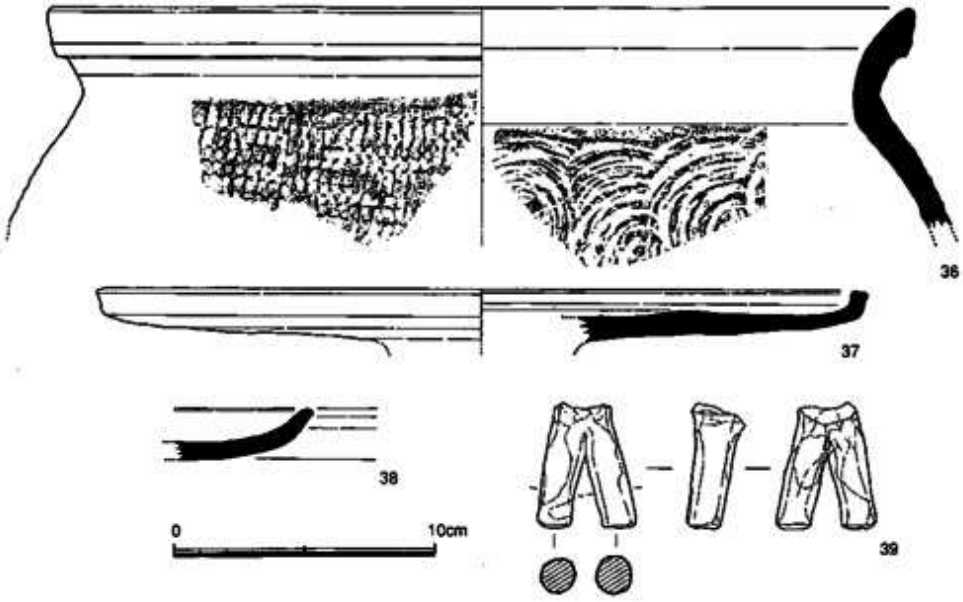


図23.149SD185出土遺物実測図（3）（1/3）

高坏（37・38）　37は口径29.5cmを測る。口縁部の立ち上がりは低く、体部外面は回転ヘラ削りを行う。38は体部から口縁部へ緩やかに内湾し、端部を丸く納める。

土製品

土馬（39）　円柱状の粘土紐を半分に曲げ、屈曲部を削って土馬の胴に貼り付けたと考えられ、脚部のみ出土している。脚部の長さは4.7cm、脚の直径1.5cmを測る。須恵質に焼成される。

SD190 出土遺物（図24～26）

土師器

蓋c3（1）　口径21.3cmを測る。天井部外面は粗い回転ヘラ削りを行う。

坏e（2・3）　口径10.0・10.3cm、器高4.2・4.1cmと法量は殆ど同じであるが、2は底部をヘラ切り、3は外面の底部から体部下位まで回転ヘラ削りしている。3は内外面にミガキaを施す。

坏a（4・5）　口径13.2・14.0cm、器高3.0・4.0cm、底径8.2・9.2cmを測る。いずれも底部はヘラ切り後ナデている。5は器壁が厚く重い。4は磨耗して調整は不明だが7の坏dと酷似しており、坏dの可能性もある。

坏d（6～14）　口径13.2～17.3cm、器高2.7～3.7cmに復原される。いずれも外面の底部と体部下位を回転ヘラ削りし、内外面にミガキaを行う。13は器面が磨耗し回転ヘラ削りは観察されるが、ミガキの有無は不明である。

椀c（15・16）　16は口径19.0cm、器高8.5cmを測る。いずれも高めの高台を底部際に接合、体部は外方に開いている。体部外面下位は回転ヘラ削りして内外面に丁寧なミガキaを施す。

皿a（17～27）　口径13.4～19.0cm、器高1.6～1.9cm。22は底部をヘラ切りし、体部は横ナデ

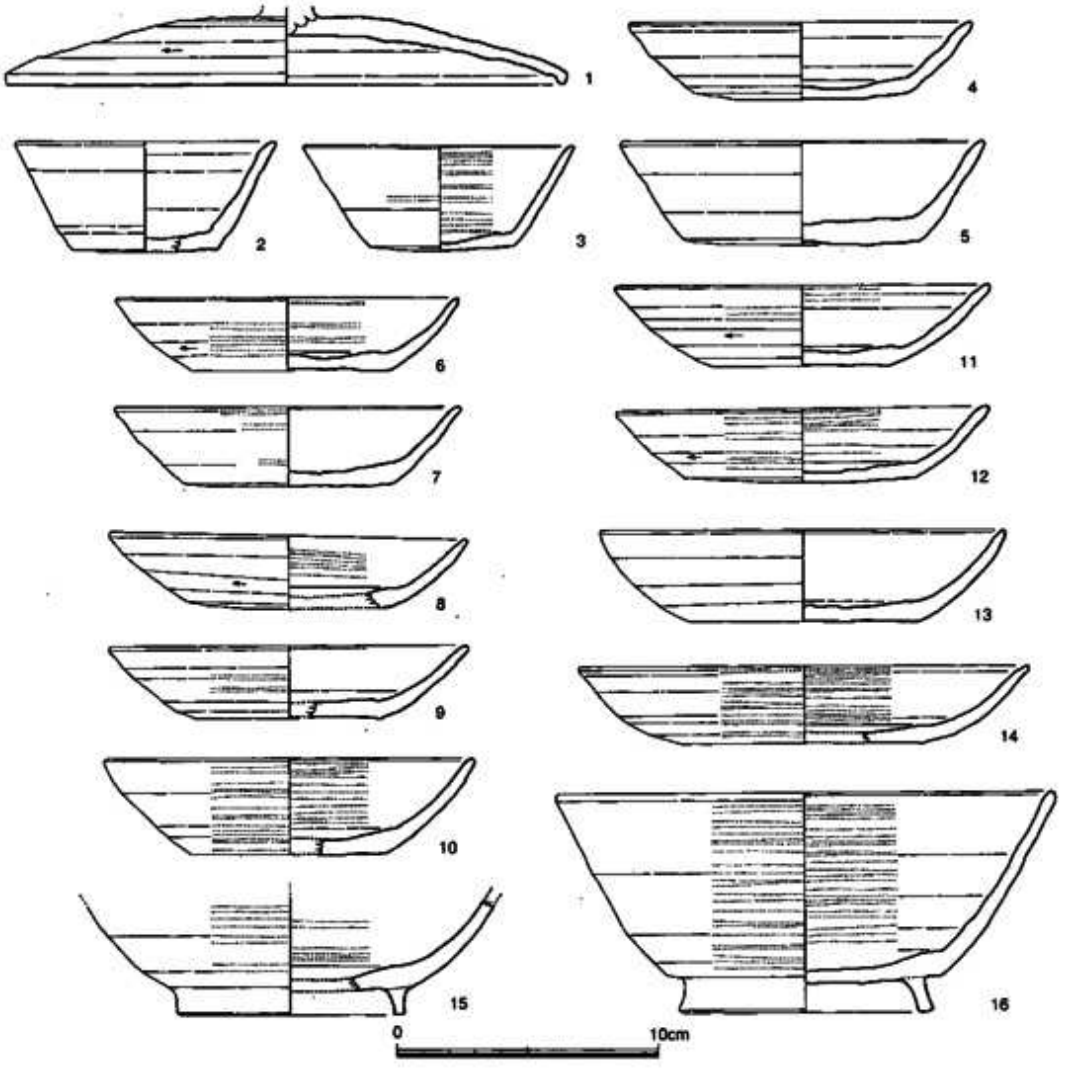


図24.149SD190出土遺物実測図（1）(1/3)

調整で、他はすべて外面の底部から体部下位を回転ヘラ削りし、その上から精粗はあるがミガキaを行っている。19は見込みに細い線でヘラ記号を刻む。

鉢（28）　底部径11.8cmを測る。胎土に多めの砂粒を含み、やや器壁を厚めに作っている。底部外面はナデ調整、体部は磨耗気味であるが横ナデと考えられる。

小壷（29）　口径7.0cm、器高4.8cm、底径5.0cmを測る。底部はヘラ切り、体部は横ナデで、口縁部を上方に小さく摘み出す。

小甕（31）　口径16.0cm。口縁部を逆「L」字形に屈曲させ、内面は横方向に手持ちのヘラ削りを行う。外面は体部下位を回転ヘラ削りしている。

甕a（30・32・33）　30は口縁部を丸く外反させ、内面は体部と口縁部の境は緩やかである。32・33は口径22.0～31.6cmを測り、三個体とも体部は内面は手持ちヘラ削り、外面は刷毛で調

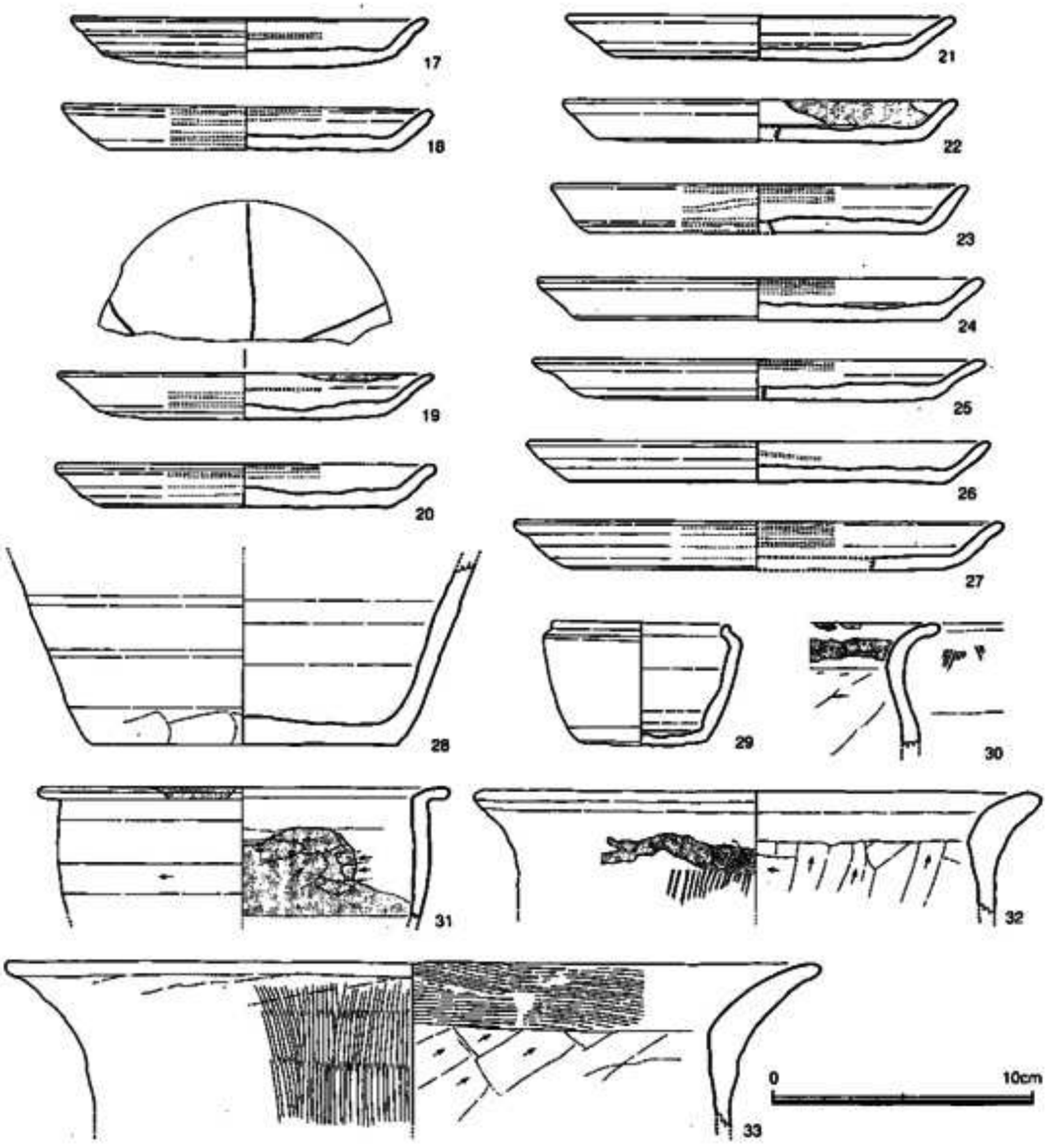


図25.149SD190出土遺物実測図（2）(1/3)

整されている。33は口縁部内面も刷毛調整する。それぞれ口縁部や体部に黒色の煤が付着している。

須恵器

蓋3（34・35）　口径10.0・17.0cm。天井部外面はヘラ切りである。

蓋c3（36～38）　口径11.8～14.6cmを測る。36・38は天井部外面を回転ヘラ削り、36にはミガキのような痕跡があるが、判断し難い。37は天井部外面をヘラ切り後ナデ、ボタン状の摘みを貼付する。

坏d（39）　口径13.3cm、器高3.1cm、底径7.5cm。外面の底部と体部下位を回転ヘラ削りし、

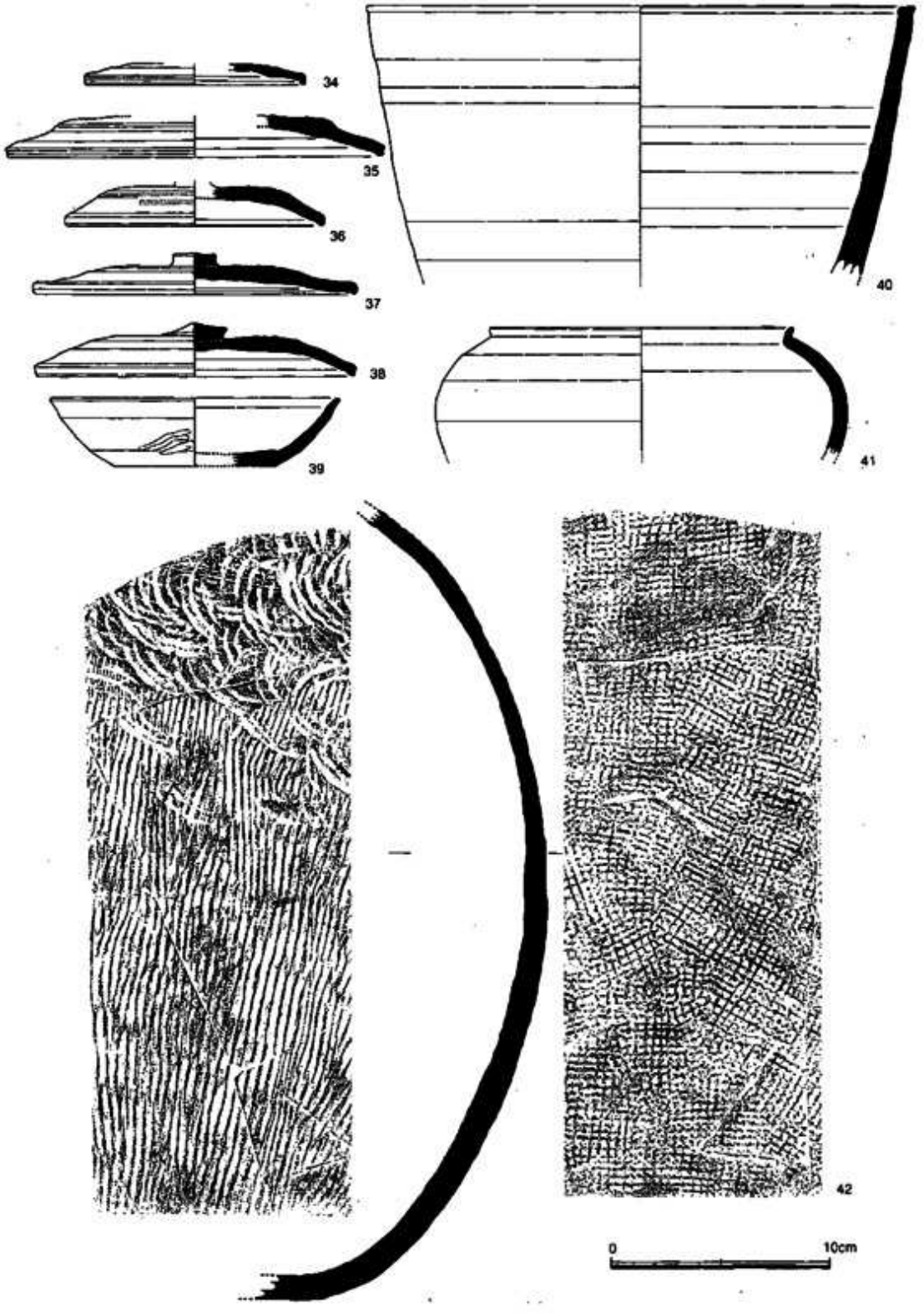


図26.149SD190出土遺物実測図（3）（1/3）

体部外面の一部にヘラを当ててミガキを行ったような痕跡がある。

鉢b（40）　口径は推定25cm前後を測る。外面最下位に回転ヘラ削りが観察されるが、残存部は殆ど回転ナデ調整である。

壺a（41）　口径は14.0cm。体部外面下位を回転ヘラ削りし、上位と内面は回転ナデしている。口縁部を短く上方に摘む。

大甕（42）　体部の破片で外面は格子叩きを行い、内面は上位は同心円、下位は平行線の当て具を使用している。

3）土壙出土遺物

SK035 出土遺物（図27）

須恵質土器

捏鉢（1）　玉縁状の口縁をもち、胎土は明灰色で口縁端部は暗灰色に焼けている。東播系のものと考えられる。

SK078 出土遺物（図27）

須恵質土器

捏鉢（2・3）　胎土は暗灰色で玉縁口縁が黒灰色に焼けている。1と同じく重ね焼きの痕と考えられる。1と同様に東播系と考えられる。

SK092 出土遺物（図27）

ベトナム青磁

椀（4）　高台径4.6cm。胎土は明黄灰色を呈し微細な黒色粒を多く含んで、淡い灰緑色をおびた透明釉をやや厚めに体部下位まで施している。釉には大きめの貫入が入る。見込みの釉は幅1.5cm程、環状に掻き取る。体部は外方へシャープに開き、高台の内側は中央部が尖っているのが特徴的である。

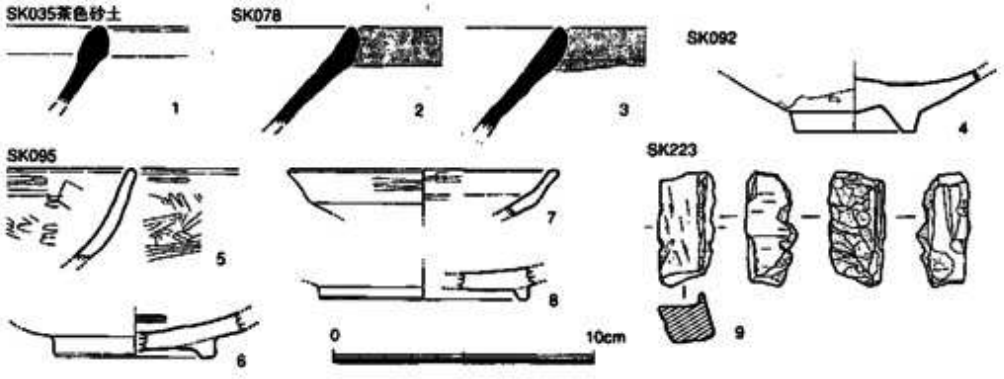


図27.149SK035・078・092・095・223出土遺物実測図（1/3）

SK095 出土遺物（図27）

瓦器

椀（5・6）　6は底径6.2cmに復原される。胎土はいずれも茶色味を帯びた明灰色でキメが細かい。器面は黒色に焼成される。5はコテあて後にミガキcを行っている。6は見込みにミガキcが観察され、太めの高台が貼付される。

小皿（7）　口径10.4cm。底部はヘラ切りした後押し出す。内面と体部外面はミガキcを行う。内外面とも黒色を呈す。

緑釉陶器

皿（8）　高台径8.2cmに復原される。明灰白色の胎土に淡黄緑色の釉を全面に施している。底部外面に0.2cm程のハリ痕が一箇所残り、二次焼成で重ね焼きしたことが判る。高台の形状は断面四角形。焼成はやや硬質で、東海産と考えられる。

SK223 出土遺物（図27）

石製品

用途不明（9）　滑石製で現存4.5×2.2×1.9cm。三面を削り、その内の一面には削り残したような突起がある。

4）その他の遺構出土遺物

SX010 出土遺物（図28）

須恵器

甕（1）　口径32.5cm前後を測る。緩やかに外反する口縁は回転ナデされる。

瓦質土器

火鉢（2）　口径は35cm前後を測る。外面上位は横方向、中位は縦方向に手持ちのヘラミガキを行った後、体部上位に菊花文のスタンプを押印している。内面に手捏ねの突起物を貼り付ける。

土師質土器

鍋（3）　体部はほぼ直線的に開くが、口縁部はやや肥厚し外面に指頭痕が乱雑に残っている。内面は横方向に細かい刷毛で器面調整を行う。胎土は砂粒を多めに含み粗い。

龍泉窯系青磁

水注（4）　口径は10.4cmに復原される。灰色の胎土に白濁気味な灰緑色の失透性の釉が厚く掛けられている。口縁はまっすぐ立ち上がり、端部で逆「L」字状に屈曲する。ここでは龍泉窯系青磁とした。

青白磁

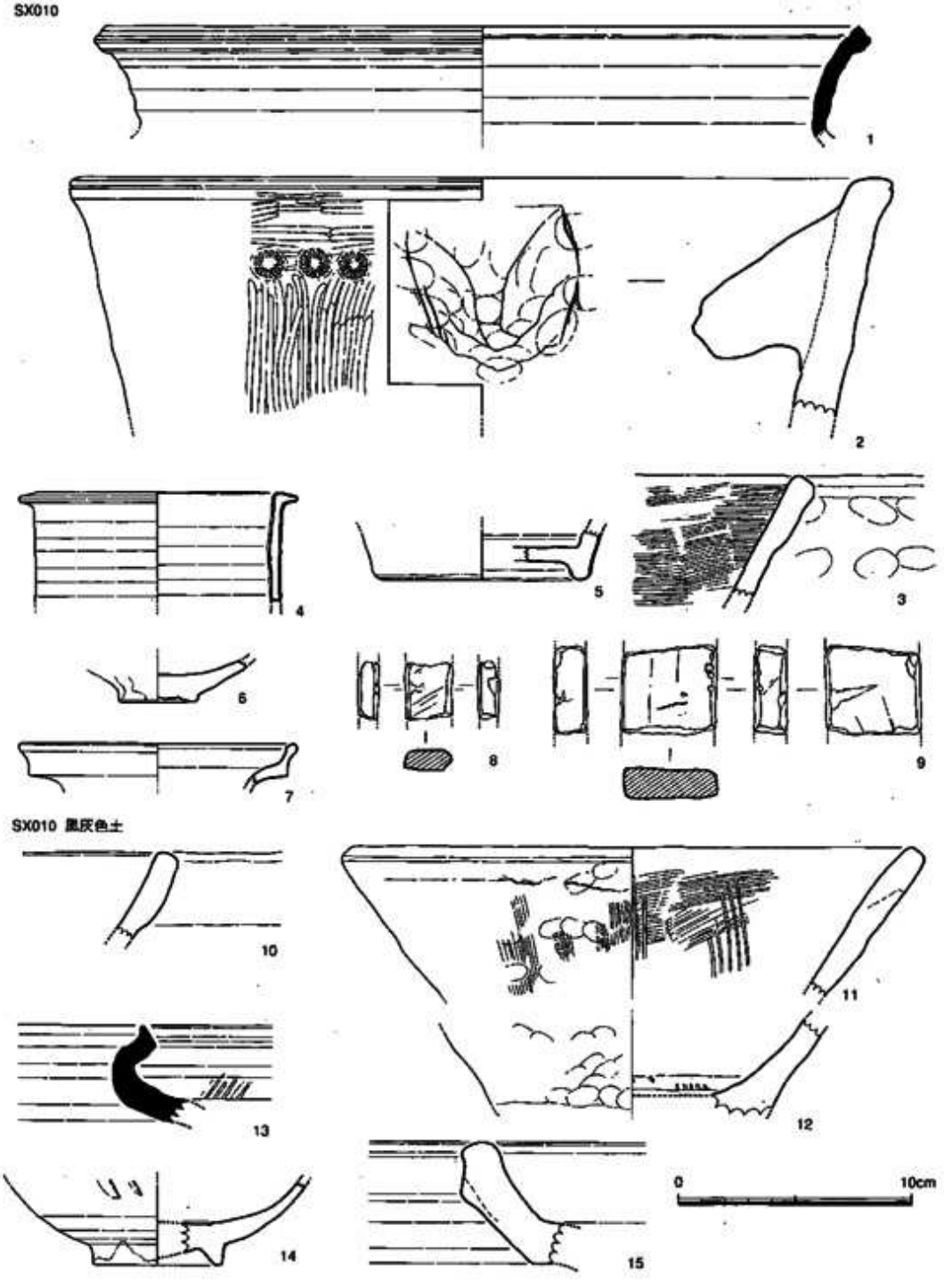


図28.149SX010出土遺物実測図（1）（1/3）

梅瓶（5）　底径は9.4cm。胎土は明灰色で、水色を帯びた透明釉を施す。底部外面は内側を削って高台を作り、畳付けの釉は掻き取っている。露胎部は明赤茶色に発色。

中国陶器

小皿（6）　底径3.4cm。淡茶色の精良な胎土で、見込みと体部外面に薄く黄茶色の釉が残っている。高台の削りだしは粗雑で、上げ底気味に作っているが一部潰れている。

朝鮮系無釉陶器

壺（7）　口径は12.0cmをに復原される。紫茶色の緻密な胎土で硬質に焼き締まり、内外面は黒灰色を呈す。口縁を外反させた後、上方に立ち上げた盤口壺である。

石製品

砥石（8・9）　8は現存2.3×2.0×0.9cmで三面を使用、石は緑色片岩。9は3.9×4.1×1.3cm。四面を使用している。石材は砂岩。

SX010 黒灰色土出土遺物（図28）

須恵器

甕（13）　青灰色のキメの細かい胎土である。口縁部を大きく外反させ、端部を上方に摘んでいるので端部内面に浅い凹みが巡る。体部には平行叩きを行う。焼成、還元ともに良好。

土師質土器

鍋（10）　胎土は砂粒を多量に含んで粗い。口縁部はやや肥厚させ外反。内面は磨耗気味だが、細かい目の刷毛で横方向にナデている。外面は口縁端部まで煤が付着している。

擂鉢（11・12）　11の口径は25.0cmに復原される。砂粒を多く含む粗い胎土で、内面に一単位が5本の線を刻む擂目が残る。12と11は同一個体と考えられる。

青磁

椀（14）　高台径5.6cm。胎土は灰色を呈し精良であるが気泡が多く、やや青味をおびた灰色の透明釉が高台まで施される。高台畳付けと底部外面は露胎。体部外面下位は回転ヘラ削り、中位にはヘラで文様を片切り彫りしている。見込みは高台径より小さく、段がある。産地不明。

中国陶器

甕（15）　赤茶色のキメの粗い胎土で、白色粒、黒色粒を多く含んでいる。釉は白濁気味で黄灰色に発色。口縁部を内側に屈曲させ、外面に稜をつくる形態の甕。

SX010 茶色土出土遺物（図29）

土師器

丸坏c（16）　口径12.6cm、器高3.7cm、高台径6.6cmに復原される。浅い坏部に太い高台を付したもので、内面にコテ当ては無く横ナデ調整されているが、坏部の底部外面をヘラ切り後少し押し出している。全体的に粗雑な作りで在地のものである可能性は低い。

椀c（17）　高台径は6cm前後。見込みはナデ、底部はヘラ切りである。

甕a（18）　胎土は粗く、口縁部内外面を刷毛調整している。

須恵質土器

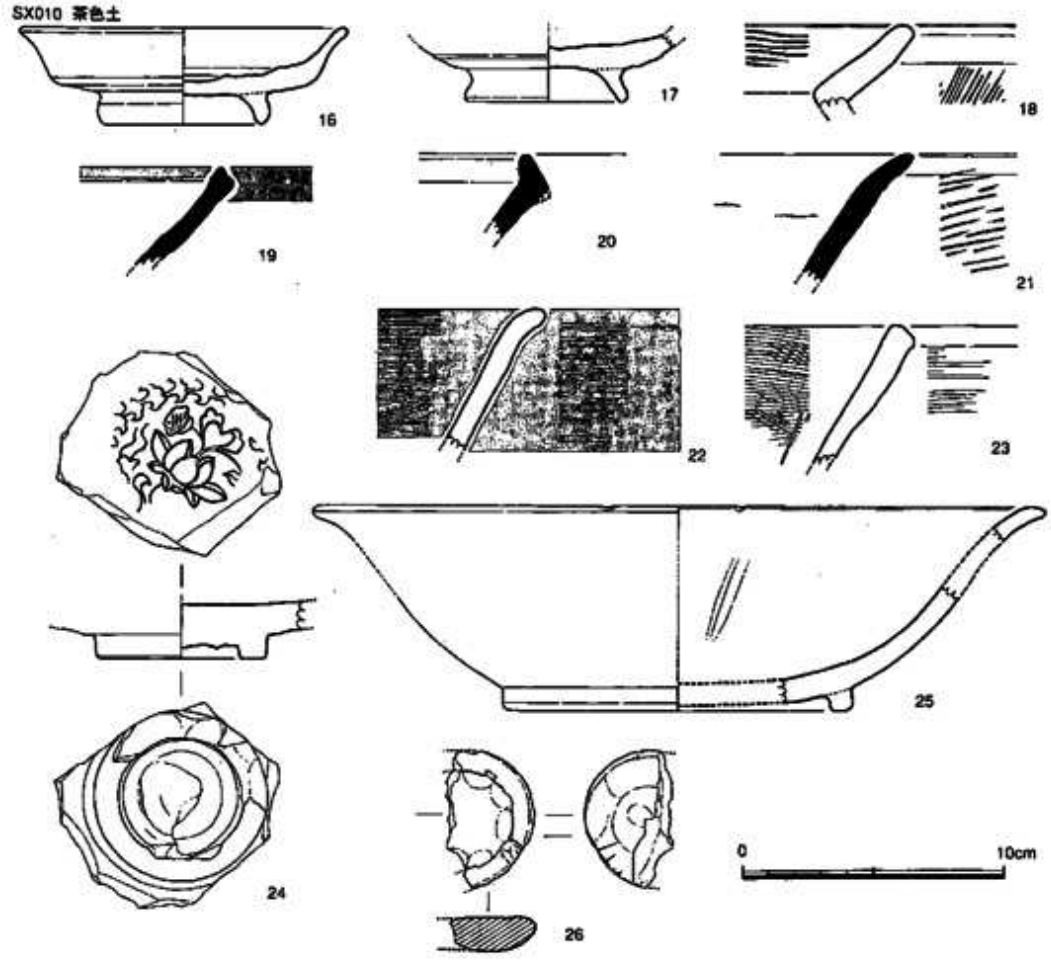


図29.149SX010出土遺物実測図（2）(1/3)

捏鉢（19・20）　口縁部をやや肥厚させ、20は上方に摘んでいる。19は青灰色を呈しキメが細かいが、20はキメが粗い。

壺（21）　赤茶色のキメの細かい胎土で、口縁部外面に平行叩きを行い、その上から横ナデ調整している。搬入品と考えられる。

黒色土器

鉢（22）　内外面とも漆黒色で丁寧なミガキcを施している。口縁部が直線的に外方に開くのでここでは鉢とした。B類。

瓦質土器

擂鉢（23）　明灰色のキメの細かい胎土で、内面と口縁部外面上位は黒灰色を呈す。内外面に横方向に刷毛調整を行って、内面に擂目を入れる。

白磁

椀（24）　高台径6.4cm。明灰色の精良な胎土で、灰色味をおびた透明釉を施す。残存して

いる範囲では外面は露胎である。見込みに蓮花文のスタンプを押している。森田C類。

緑釉陶器

鉢（25）　口径28.0cmに復原される。口縁部破片と底部破片で体部中位を欠くが、釉調および胎土の状態から同一個体として復原した。淡黄緑色の釉が全面に施され、内面に一個ハリ痕がある。口縁部は輪花で、体部内面に堆線があるので輪花と対応していると考えられる。東海産と考えられる。

土製品

用途不明（26）　直径5.3cm程の円盤状のものの破片。上面は黒灰色、下面は茶白色を呈し、胎土は砂粒が多く粗い。上面の内側は0.1cm程凹ませて段になっている。

SX009 出土遺物（図30）

土師器

坏d（1）　口径13.9cm、器高3.3cm、底径7.9cmを測る。外面の底部から体部下位まで回転ヘラ削りし、内外面に粗いミガキaが残る。

甕a（2）　体部内面は手持ちのヘラ削り、口縁部内外面と体部外面は刷毛調整する。外面の屈曲部に指頭痕が残っている。

SX017 出土遺物（図30）

土製品

とりべ（3）　口縁部小片で、内面は焼き締まり、鉱物の付着物がある。分析の結果、成分に銅、鉛、錫等が検出された。

SX022 出土遺物（図30）

中国陶器

鉢（4）　底径は10.0cmに復原される。胎土は茶灰色から暗灰色を呈し、キメは細かいが黒色粒を含んでいる。明茶褐色の釉を底部外面を除いて全面に施しているが一部剥落している。口縁を内側に折って玉縁状に作る。体部下位に目跡あり。VII類。

SX023 出土遺物（図30）

土師器

坏a（5）　口径14.4cm、器高3.8cm、底径7.4cmに復原できる。底部はヘラ切り後ナデ、体部は横ナデし、内面に粗いミガキaがわずかに残っている。

皿a（6～8）　口径15.0～15.5cm、器高1.4～1.9cm。6・8は底部を回転ヘラ削りし、7はヘラ切り後ナデを行う。7・8は内面を磨いている。

甕（9）　明橙灰色の胎土に角閃石を少量含んでいる。器壁は薄く、口縁部と体部外面は横ナデ、体部内面はナデ調整。頸部に工具の当たりが残るのは刷毛調整のためと考えられるが上

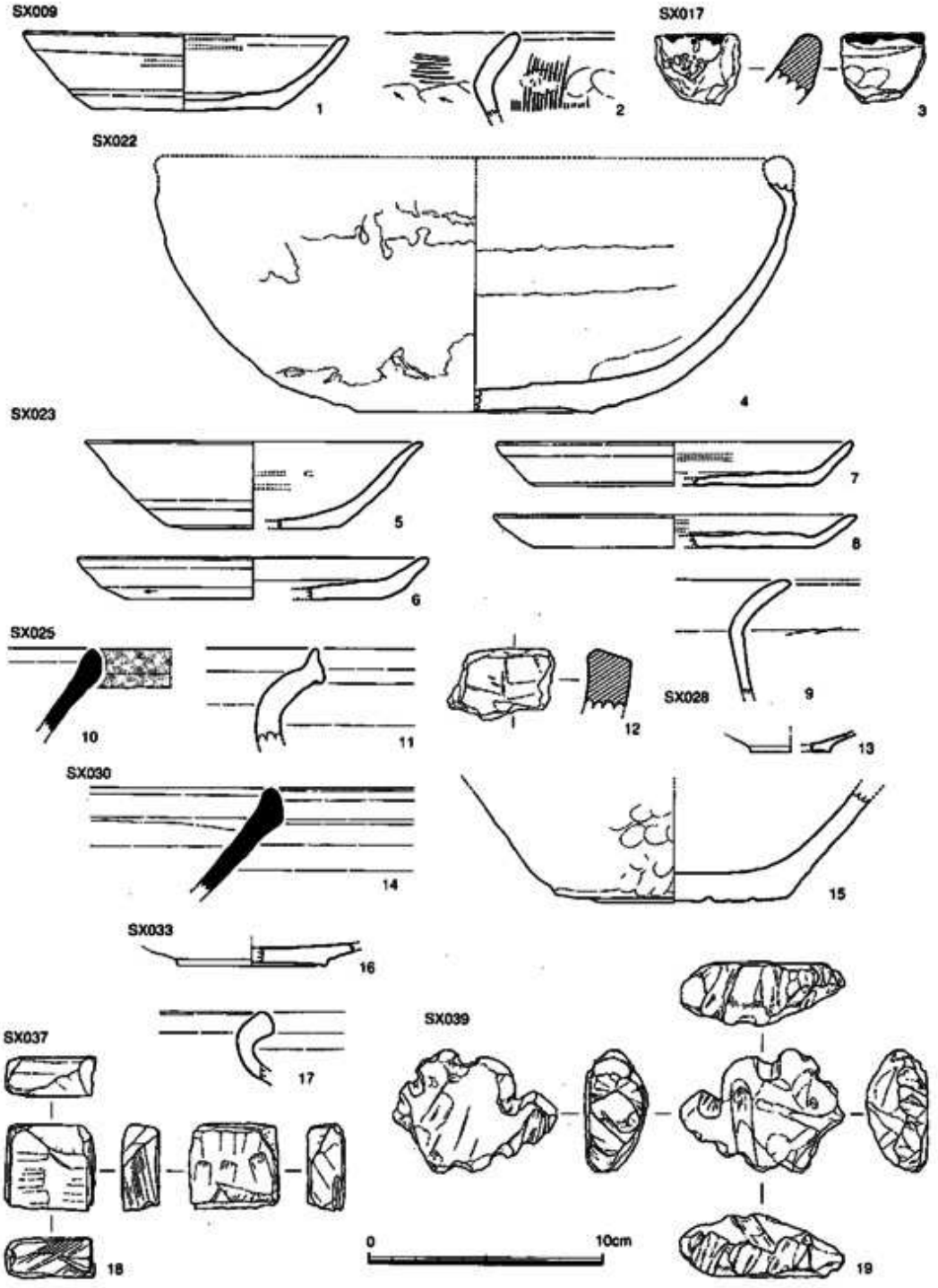


図30.149SX009・017・022・023・025・028・030・033・037・039出土遺物実測図（1/3）

から丁寧に横ナデされている。全体的に丁寧な作りで搬入品と考えられる。

SX025 出土遺物 （図30）

須恵質土器

捏鉢（10）　灰白色の胎土で口縁部外面は黒灰色になっている。口縁部を玉縁状に作り、焼成は瓦質である。

国産陶器

甕（11）　暗灰色の緻密な胎土で、暗紫茶色の釉が薄く掛けられている。口縁は外反させ、端部は上下に摘む。

石製品

石鍋（12）　滑石製石鍋の口縁部。緑色味をおびた滑石を素材としている。

SX028 出土遺物（図30）

白磁

皿（13）　底径3.4cm。胎土は灰色を呈し、灰色味をおびた透明釉を施す。非常に薄く小さい作りで、底部は輪状高台に削りだし露胎で、赤茶色に発色している。

SX030 出土遺物（図30）

須恵質土器

捏鉢（14・15）　14は青灰色を呈し粗い胎土で、口縁部は玉縁状にする。15は底部を糸切りし、体部外面下位には小さい指頭痕が多く残っている。見込みは平滑で、使用された痕跡であろう。両者とも東播系のものと考えられる。

SX033 出土遺物（図30）

緑釉陶器

皿（16）　底径6.3cm。茶白色の胎土に淡い黄緑色の釉を施す。底部は糸切りで円盤高台に仕上げている。土師質で京都産と考えられる。

SX037 出土遺物（図30）

朝鮮系無釉陶器

壺（17）　緻密な胎土で暗赤茶色を呈す。口縁を外反させ端部は丸く納めている。

石製品

用途不明（18）　現存は3.7×3.8×1.7cm。滑石製石鍋の再利用製品で煤の付着が見られる。ほぼ正方形に成形しているが用途は不明。

SX039 出土遺物（図30）

石製品

砥石（19）　現存5.3×7.0×2.7cm。外周と上面に幅0.8cm前後の溝状の凹みがあり丸味のある小さな刃物を研いだと考えられる。石材は砂岩。

SX043 出土遺物（図31）

土師器

坏d（1）　口径12.8cm、器高3.0cm、底径6.0cmに復原される。外面の底部と体部下位を回転ヘラ削りし、内外面にミガキaを施している。

小壷（2）　口径は7.6cm前後で、体部は横ナデし口縁部を短く上方に引き出す。

高坏（3）　口径33.4に復原される。坏部の器壁は厚く、外面は回転ヘラ削りで内外面にミガキaの痕跡が残る。

SX048 出土遺物（図31）

土師器

椀c2（4）　口径16.2cm、器高5.2cm、高台径7.1cmを測る。内面はコテあて後ミガキcを行っている。外面も同様にヘラミガキして太めの高台を付す。

須恵質土器

捏鉢（5）　青灰色を呈し、口縁端部は黒色に焼けている。一部口縁を凹ませ片口とする。東播系と考えられる。

瓦質土器

火鉢（6）　黄灰色の胎土で砂粒を少量含んでいる。体部は丸く内湾し口縁部に×印のスタンプを巡らせる。

黒釉陶器

椀（7）　高台径2.8cmを測る。暗灰色の緻密な胎土で、残存部では内面のみに黒褐色の釉が施されている。恐らく外面は体部中位まで施釉されたと考えられる。高台は浅く輪状に削り出す。いわゆる天目茶碗で、中国産。

輸入陶器

小皿（8）　底径3.8cm。暗灰色から灰褐色の胎土でやや砂っぽい。内外面に暗緑灰色の釉が掛かるが、かなり白濁している。底部は上げ底風で見込みと底部に四足の目跡が付く。李朝のものと考えられる。

石製品

用途不明（9・10）　いずれも滑石製石鍋の再利用品。9は鍋の鍔を削って二カ所に穿孔している。10は鍔を真ん中にしてほぼ方形に成形している。

SX052 出土遺物（図31）

土師器

鉢（11）　口径23.0cm、器高10.8cmに復原される。キメの細かい暗茶色の胎土で器壁を厚く作る。内面は指と工具によるナデ、外面はヘラミガキを行っている。手捏ねによる脚が貼付され、三足になるものと推定される。

SX057 出土遺物（図31）

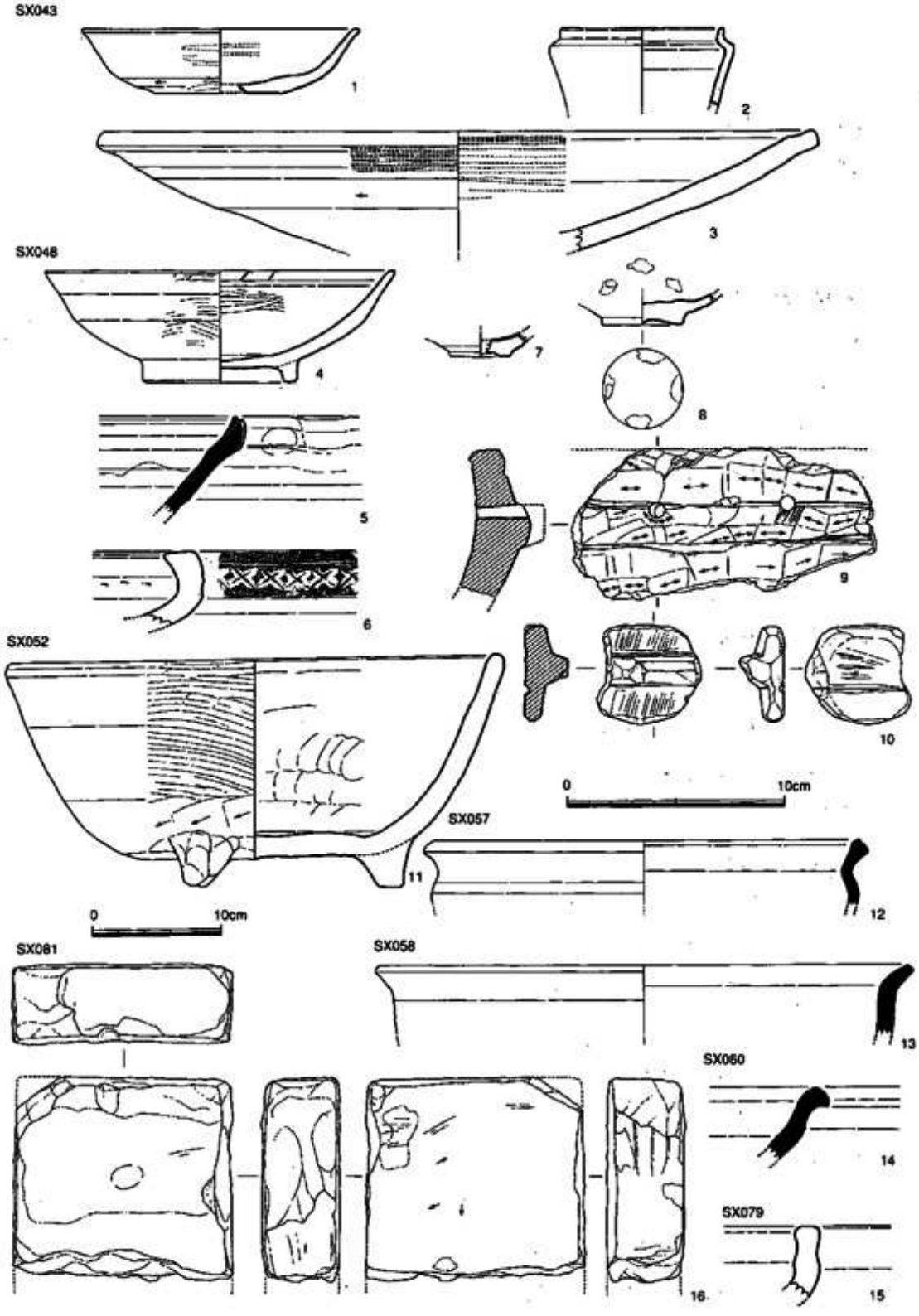


図31.149SX043・048・052・057・058・060・079・081出土遺物実測図（1/3・1/5）

須恵器

鉢（12）　口径20.5cm前後に復原される。黄灰白色を呈するキメの細かい胎土で、口縁部近くで体部をすぼめ、口縁部を「く」の字に外反させる。内外面とも回転ナデ調整。

SX058 出土遺物（図31）

須恵器

鉢（13）　口径は25cm前後を測り、胎土は明灰色を呈しキメは細かい。口縁部は短く外反している。

SX060 出土遺物（図31）

須恵器

鉢（14）　明灰色の胎土に白色砂粒、黒色粒を多めに含みキメはやや粗い。口縁端部を強い回転ナデを用いて外反させている。

SX079 出土遺物（図31）

灰釉陶器

器種不明（15）　やや厚めの器壁で端部は平坦に作り、平面では直線的に、断面では下位で屈曲して口縁は真っ直ぐ立ち上がる。硯の可能性がある。内外面に薄く自然釉が掛かっている。

SX081 出土遺物（図31）

瓦類

塼（16）　15.4×16.7×5.9cmを測る無文塼。灰白色の胎土で砂粒を多めに含んでいる。

SX085 出土遺物（図32～37）

土師器

蓋（1・2）　口径15.6・17.1cmに復原される。1は口縁端部をシャープに屈曲させる。蓋3。2は天井部外面を回転ヘラ削りし、口縁部内面に幅0.3cm程の浅い沈線を巡らせて内外面にミガキaを施している。蓋4。

坏e（3）　口径10.3cm、器高3.7cm、底径5.5cmを測る。底部はヘラ切り後丁寧なナデ、体部は横ナデ調整する。

坏a（4～14）　口径12.9～16.0cm、器高3.0～3.8cmを測る。底部はヘラ切りし、体部を横ナデ調整する。

坏d（15～20）　口径13.2～14.2cm、器高2.8～3.1cm。20は底部はヘラ切りで体部も横ナデ調整だが、器形の形状から坏dとした。他はいずれも外面の底部と体部下位を回転ヘラ削りし、体部の内外面にミガキaで仕上げている。

皿（21）　口径14.4cmを測る。明橙色の胎土で、器壁が厚く口縁端部で短く外反、口縁部外面に浅い沈線が巡っている。通常の皿とは異なっている。

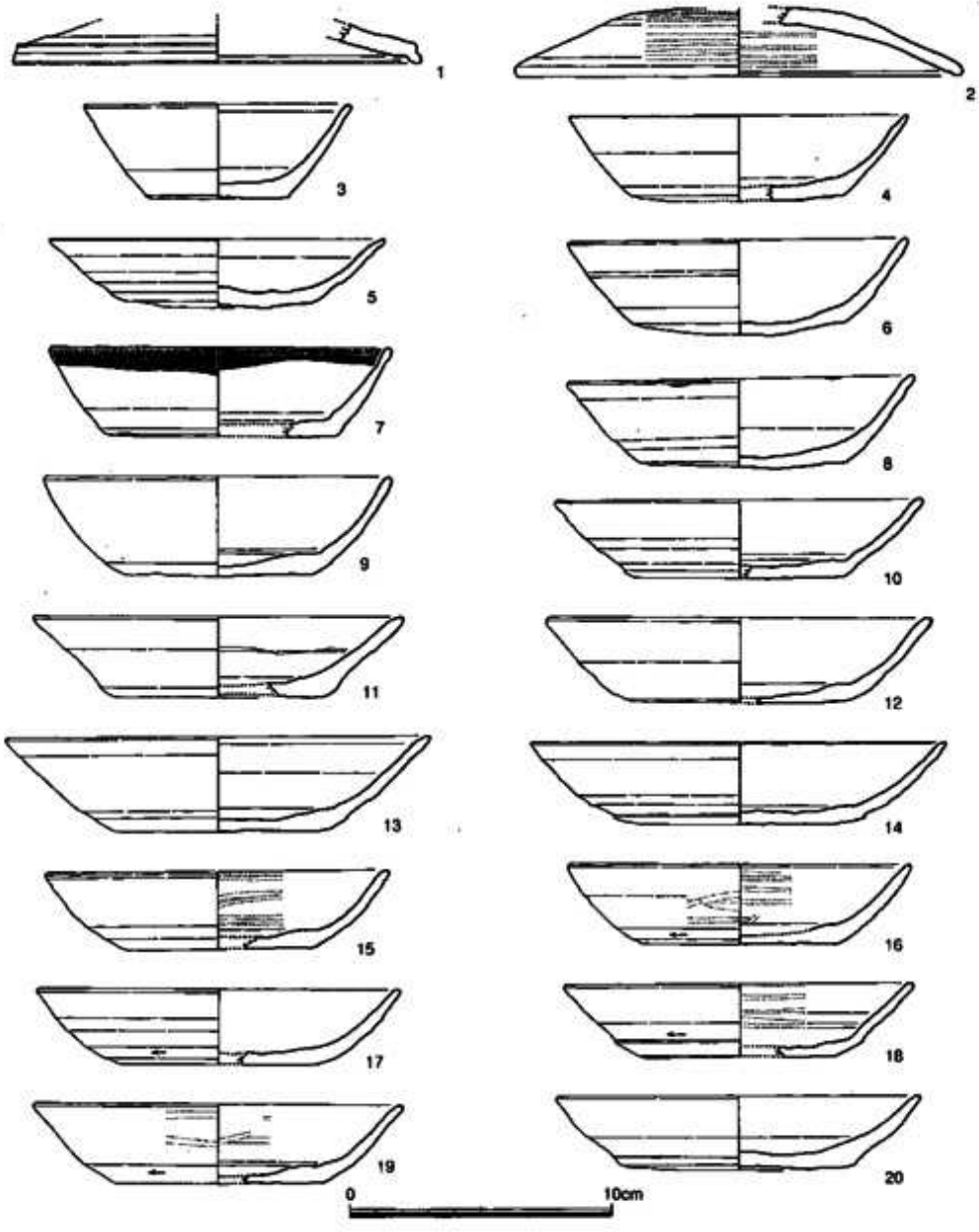


図32.149SX085出土遺物実測図（1）（1/3）

Ⅲa（22～27）　口径14.4～15.8cm、器高1.8～2.3cmを測る。23・25の底部外面は回転ヘラ削りを行い、体部の内外面にミガキaを施す。他のものの底部はヘラ切り後ナデ調整している。

椀c1（28・29）　口径20.0・20.4cm、器高7.7・8.9cm、高台径10.3・10.2cmを測る。いずれも体部は直線的に外方に開き、体部外面下位を回転ヘラ削りして内外面をミガキaで仕上げている。

鉢（30）　明茶色のキメの細かい胎土で、口縁は大きく外反し、端部を丸く肥厚させている。体部の調整は内外面とも横ナデ。

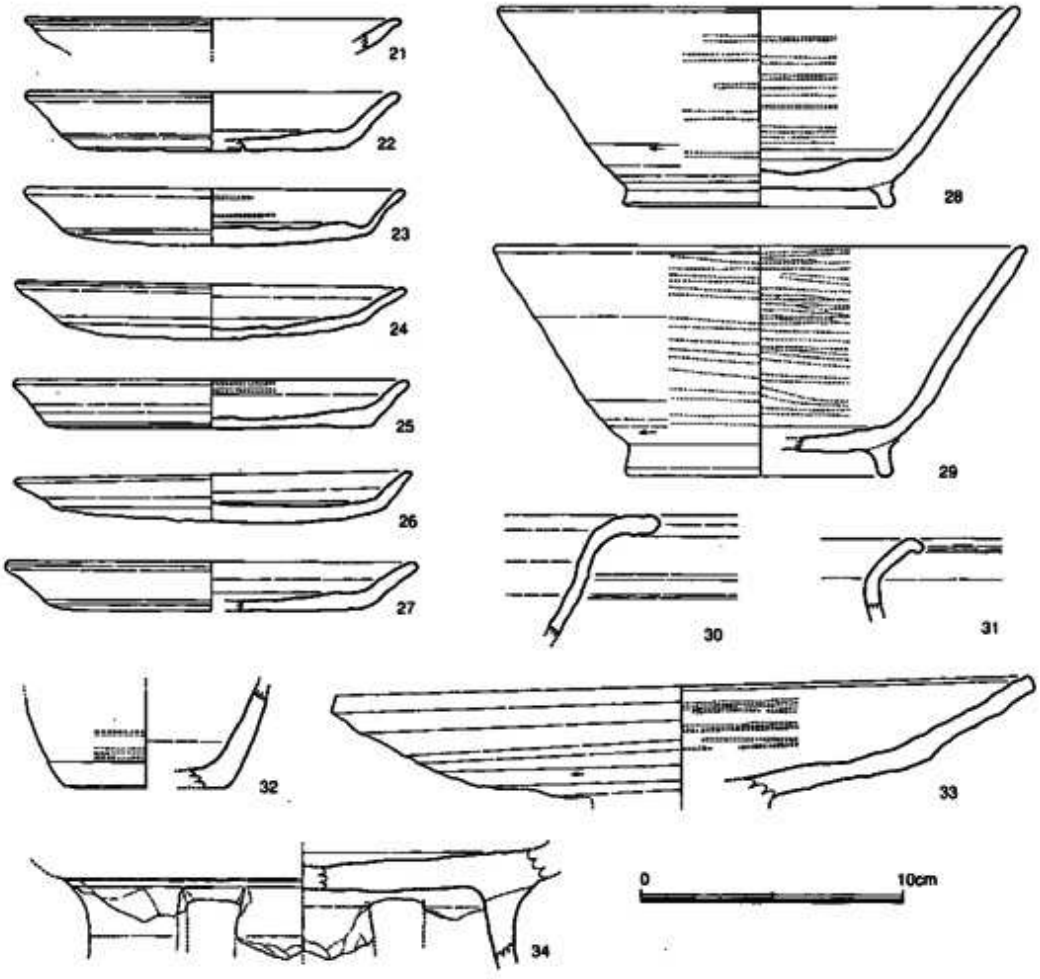


図33.149SX085出土遺物実測図（2）（1/3）

甕（31）　口縁部が「く」の字形に外反して、端部は折ったように屈曲させる。胎土に角閃石を少量含み在地のものでないと考えられる。

小壷（32）　底径6.2cm。外面は底部と体部下位を回転ヘラ削りして、体部外面はミガキaで仕上げる。

高坏（33）　口径27.0cm前後に復原される。坏部の外面は回転ヘラ削りし口縁部は横ナデ、端部は方形に納める。内面はやや粗いがミガキaを行っている。

盤（34）　胎土は粗く白雲母や砂粒を多く含む。底部外面は回転ヘラ削りし、見込みはナデている。高めの高台を付し、方形の透かしを削り出す。全体の形状は不明で、高台部の径が16cm前後である。

須恵器

蓋（35～40）　35は口縁部を外方に開き端部は面取りをせずに内面に浅い沈線が巡る。蓋4。36は鉄釉を掛けたように赤味を帯びた茶色に発色。天井部に丸味をもたせた形状で器壁を薄く

作り、口縁部で外方に開いている。37～39 は復原口径13.8～18.2cm、器高2.1～3.7cm。いずれも蓋a3で天井部外面はヘラ切りし未調整、37の内面は平滑で墨痕もあり硯に転用されていたことがわかる。40は蓋4、口径19.0cmに復原される。天井部外面はヘラ切り未調整である。

坏a（41・42）　口径12.9・13.6cm、器高3.8・3.5cmを測る。体部を外方に開き底部はヘラ切り、体部は回転ナデ調整。

椀c（43）　高台径8.1cm。やや粗めの胎土で底部から体部まで回転ナデ調整されている。

皿a（44）　口径14.0cm、器高2.0cm、底径9.6cmを測る。底部から体部への境界に丸味があり、底部はヘラ切りされる。

鉢（45）　口径22.9cmに復原される。口縁部を大きく外反させ、体部外面下位を回転ヘラ削

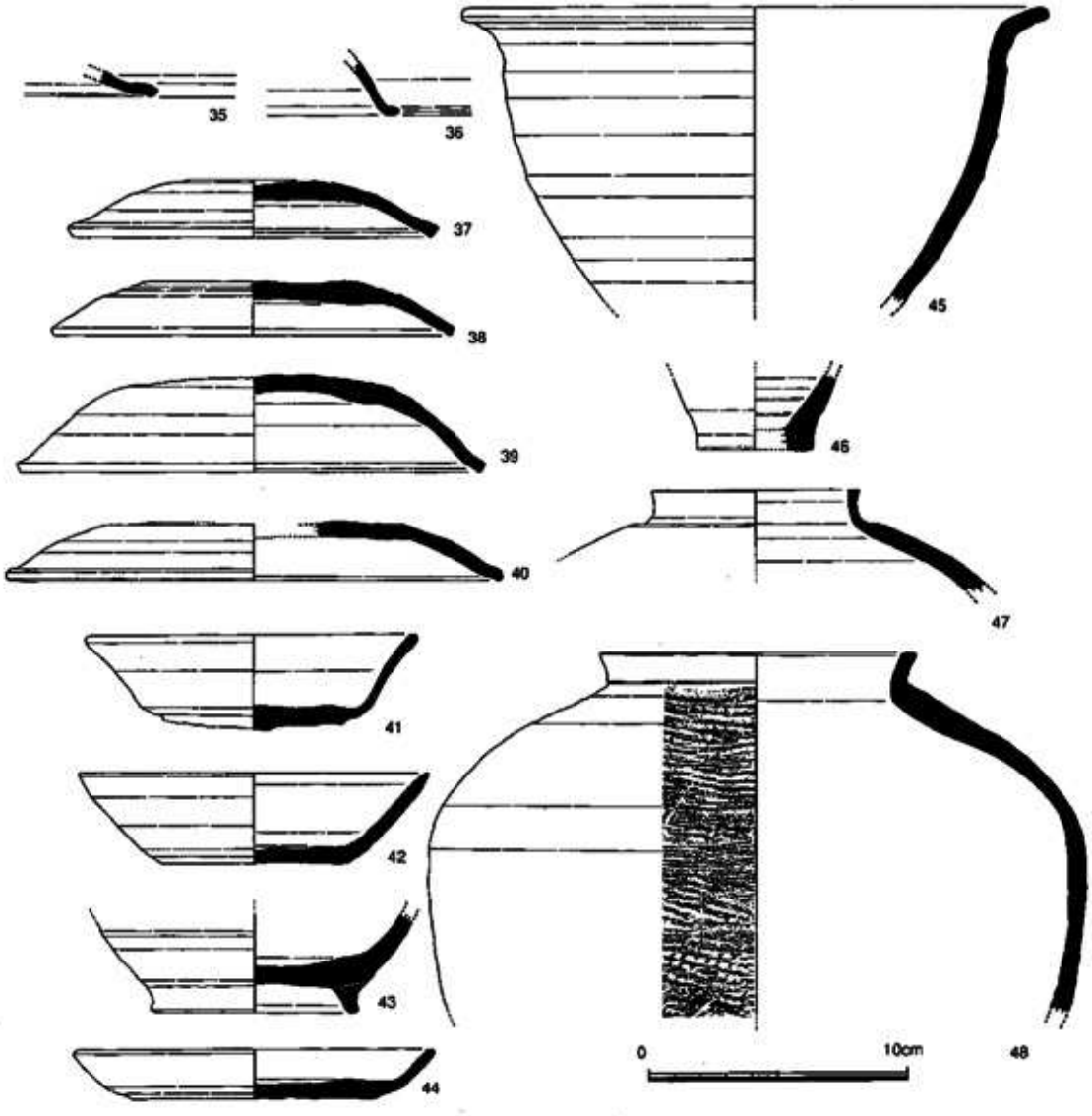


図34.149SX085出土遺物実測図（3）（1/3）

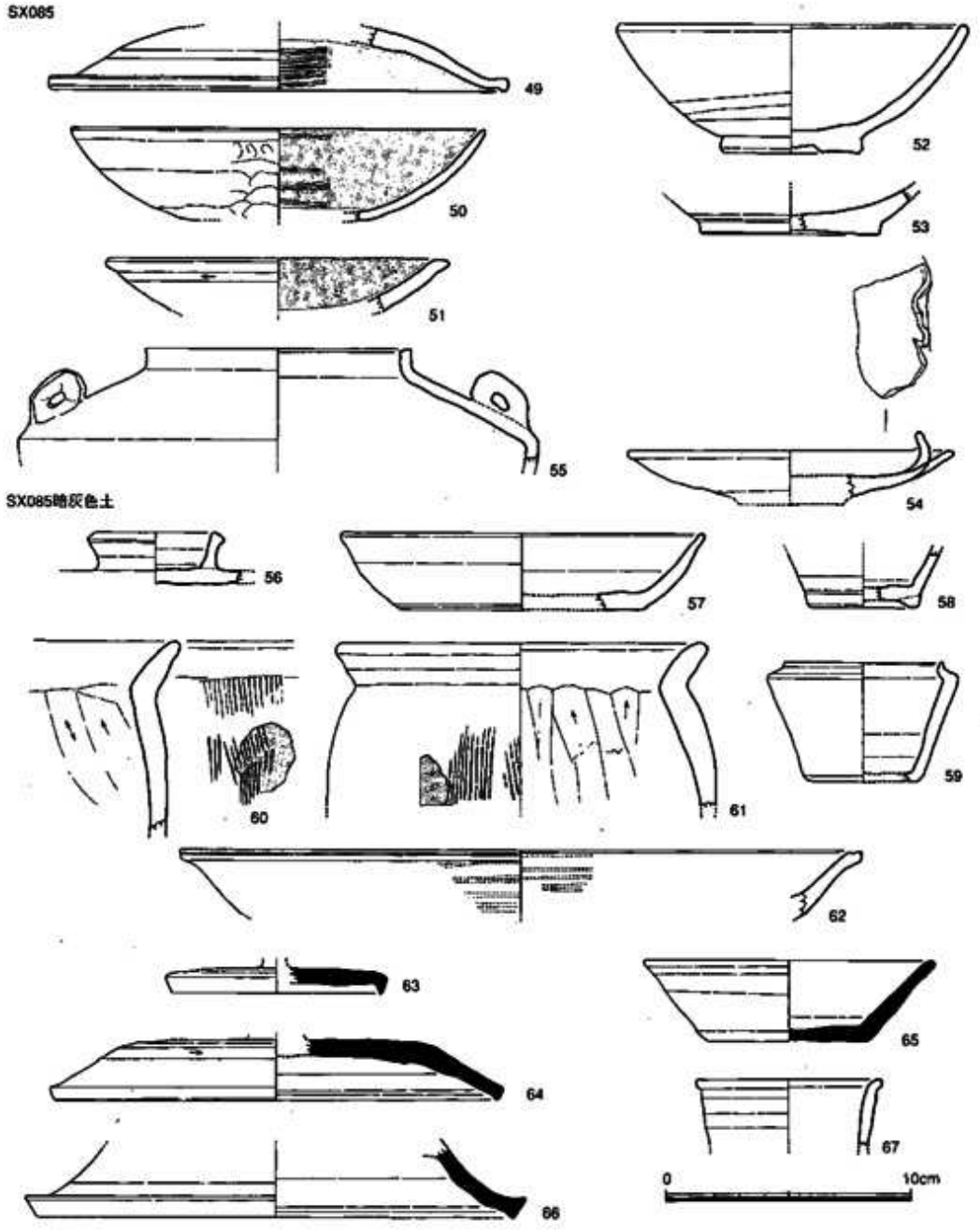


図35.149SX085出土遺物実測図（4）（1/3）

り、他は回転ナデである。

壺（46～48）　46は底径4.4cmを測る。灰色を呈する精良な胎土で底部は糸切り、体部は回転ナデされる。搬入品と考えられる。47・48は壺a、口径は8.1・12.3cmに復原され、直線的に短く立ち上がる口縁をもち、肩部から下方へ平行叩きを行っている。内面の当て具痕は体部上位はどちらも回転ナデで消されており、48は下位に同心円の痕跡が観察される。48の外面は平行

叩きと格子叩きを併用しており、叩き痕の上から細かい刷毛状の工具でカキ目調整している。46と同様に搬入品と考えられる。

黒色土器

蓋3（49）　口径18.6cmに復原される。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は丁寧なミガキcを行う。A類。

椀（50）　口径17cm前後に復原される。外面の口縁部下位は明灰褐色を呈し、胎土はキメ細かく精良である。器壁が薄く、外面には指頭痕が多く残る。内面は細かいヘラミガキで丁寧に仕上げている。A類で畿内よりの搬入品と考えられる。

皿（51）　口径14.0cmに復原される。器壁が厚く外面の口縁部直下を凹ませ端部を短く外反させている。外面は口縁部近くまで回転ヘラ削りし内外面にミガキcを施している。A類。

長沙窯系青磁

椀（52）　口径14.4cm、器高5.3cm、高台径5.8cmを測り、胎土は明茶灰色で精良だが砂質である。器壁は厚めで、高台は小さめの蛇の目高台に削りだすが畳付の内側の抉りは工具を一回転させただけの簡略な作りである。体部外面下位まで回転ヘラ削りし黄色味の強い灰緑色の釉が、体部外面下位まで施されている。体部から口縁部を1／5程欠いているが、口縁部がやや内湾する形状から、横田分類のB類と考えられる。

緑釉陶器

椀（53）　底径7.4cm。明茶白色の胎土で底部を円盤高台に削り出す。磨耗して釉も殆ど剥落している。土師質に焼成され、京都産と考えられる。

耳皿（54）　底部は欠損するが折り返しの無い部分の口径は13.3cm前後を測る。暗灰色の胎土で折り返し部にひだをつけている。残存部は全面施釉され焼成は須恵質である。京都産と考えられる。

灰釉陶器

双耳壺（55）　口径10.8cmに復原される。胎土は灰色を呈しやや粗めで白色粒を含んでいる。口縁から肩部まで回転ナデ調整され、外面に自然釉が掛かっている。肩部に粘土紐を貼り付け耳を二つ貼付する。K-14型式期のものと考えられる。

SX085 暗灰色土出土遺物

土師器

蓋b（56）　高めの環状摘みを貼付する。摘みの径は5.6cmで、蓋の内面は粗く磨いている。

坏a（57）　口径15.0cm、器高3.2cm、底径9.8cmを測る。底部はヘラ切り、体部は横ナデし、見込みは粗いミガキaを行っている。坏dの可能性あり。

小壺（58・59）　58は高台径4.6cmで体部外面下位を回転ヘラ削りし、高台を貼付する。59

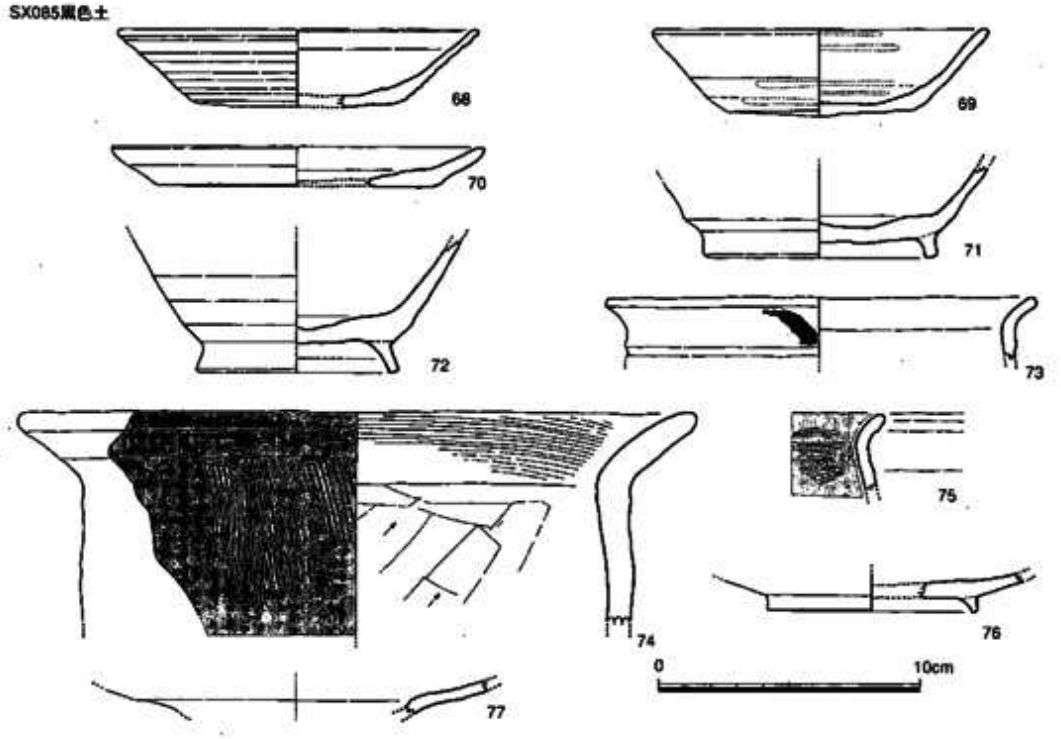


図36.149SX085出土遺物実測図（5）（1/3）

は口径6.5cm前後で、口縁を短く上方に摘み、体部内外面は横ナデされる。

甕a（60・61）　61は口径15.2cmに復原され、器壁を厚く作っている。調整は両者とも同じで、体部内面はヘラで削り、外面は刷毛を用いている。

高坏（62）　口径は推定復原28.0cm。体部は外方に開き口縁部で「L」字形に屈曲、外側は横ナデして面取する。体部の内外面にやや粗いヘラミガキを行っている。ここでは高坏としたが、大皿cないしは浅い鉢の可能性もある。

須恵器

蓋c3（63・64）　口径8.5・18.0cmを測る。63は暗灰色を呈し、口縁を内側に屈曲して断面三角形に作る。64の天井部外面はヘラ切り後外周のみ簡単に回転ヘラ削りしている。いずれも摘みの接合痕がある。

坏a（65）　口径12.0cm、器高3.4cm、底径6.6cm。底部をヘラ切りし、体部は直線的に外方へ開く。

鉢（66）　高台径20.4cm前後に復原される。灰色の精良な胎土の撥高台で、脚の端部は上下方向に摘んでいる。内外面に自然釉が残っている。ここでは鉢の脚と考えた。

灰釉陶器

瓶（67）　口径7.6cmに復原される。明灰色の胎土で、口縁の内側に灰緑色の自然釉が掛かっている。口縁端部を短く外反させ丸く納めている。K-14型式期のものと考えられる。

SX085 黒色土出土遺物

土師器

坏a（68）　口径14.0cm、器高3.0cm、底径8.2cmに復原される。底部はヘラ切り後ナデ、体部は工具を使って横ナデしている。

坏d（69）　口径13.0cm、器高3.3cm、底径7.1cm。外面は底部から体部下位を回転ヘラ削りし、内外面に粗いミガキaをおこなう。

皿a（70）　口径14.4cm、器高2.1cm、底径10.9cm。底部はヘラ切り。

椀c1（71・72）　高台径9.0・7.8cmを測る。底部はヘラ切り、高めの高台を底部の際に貼付

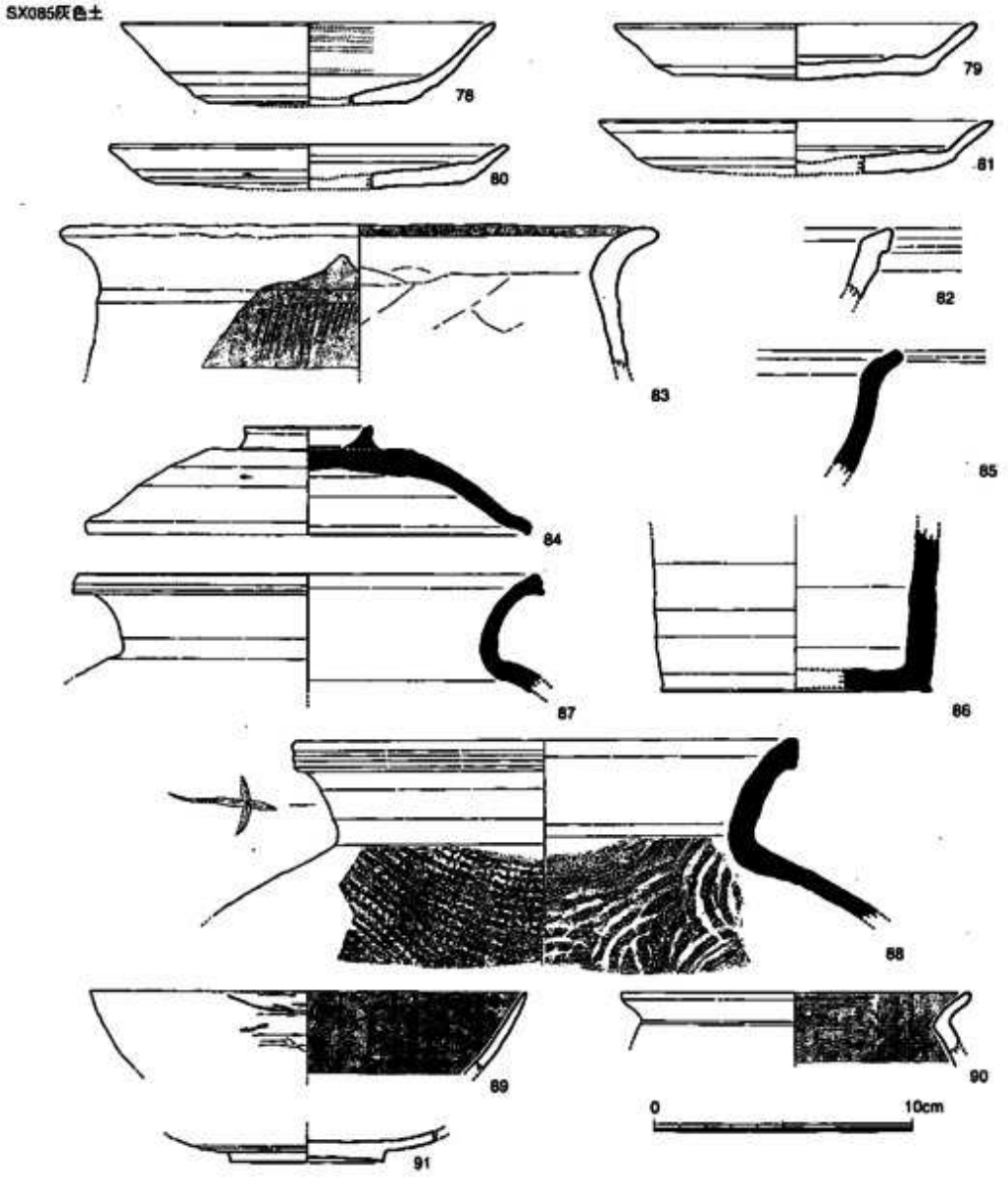


図37.149SX085出土遺物実測図（6）（1/3）

している。

甕（73・74）　口径は推定で16.5・26.0cm前後を測る。73は砂粒混じりの粗い胎土で、器壁を薄く作り体部から口縁部まで横ナデされる。74は口縁部と体部外面を刷毛調整し、体部内面をヘラ削りしている。口縁部に粘土紐の接合痕あり。

黒色土器

甕（75）　キメの細かい胎土で、外面は横ナデ、内面は口縁部までミガキcを行う。内面は暗灰色を呈し、A類である。

緑釉陶器

皿（76）　高台径8.0cmに復原される。胎土は茶白色を呈しキメはやや粗い。黄緑色の釉は厚めで光沢があり、小さめの角高台を貼付する。土師質に焼成され見込みにハリ痕が一カ所見える。防長産と考えられる。

灰釉陶器

段皿（77）　口縁と底部を欠損するが、見込みの段で計測して復原した。明灰色のキメの細かい胎土で残存部の内外面に釉が施される。斎藤孝正氏よりK-14 後半～K-90 前半の型式期のものであろうという御教示を受けた。

SX085 灰色土出土遺物

土師器

坏d（78）　口径14.6cm、底径8.8cmに復原される。外面の底部から体部を回転ヘラ削りし、内面にミガキaを施している。

皿a（79～81）　口径14.2～15.6cm、底径11.0～12.3cmを測る。80は底部外面を回転ヘラ削りし、他はヘラ切りである。

鉢（82）　断面を「く」の字に屈曲させ端部を面取りしている。調整は横ナデ。

甕a（83）　口径23.4cm前後に復原される。内面をヘラ削りし外面は刷毛調整を行っている。体部外面と口縁部内面に煤が付着する。

須恵器

蓋b3（84）　口径17.2cm、器高4.2cmを測り、環状の摘みを接合する。不明瞭であるが外面の体部中位に回転ヘラ削りを行っており、口縁端部を下方に摘んでいる。全体的に丁寧な作りで、口縁部は黒っぽい自然釉が掛かっている。

鉢（85）　明灰色の精良な胎土で口縁部を外反させている。調整は回転ナデである。

壺（86）　底径10.6cm。外面の底部と体部は回転ヘラ削りし、底部の際を体部と底部の両側から強く回転ナデして高台に仕上げている。

甕a（87・88）　口径17.8・19.6cmを測る。いずれも口縁端部外面に浅い沈線を巡らせ、87は

体部を平行叩き、88は格子叩きを行っている。87は還元不良、88には頸部にヘラ記号があり、SX009出土のものと接合した。

黒色土器

椀（89）　口径17.0cm前後を測る。薄手で手持ちの細かいヘラミガキを施し、外面には粘土紐の接合痕が観察される。外面は指頭で凹凸のついた上からヘラミガキしている。SX085出土の50と同一個体の可能性あり。A類で、搬入品と考えられる。

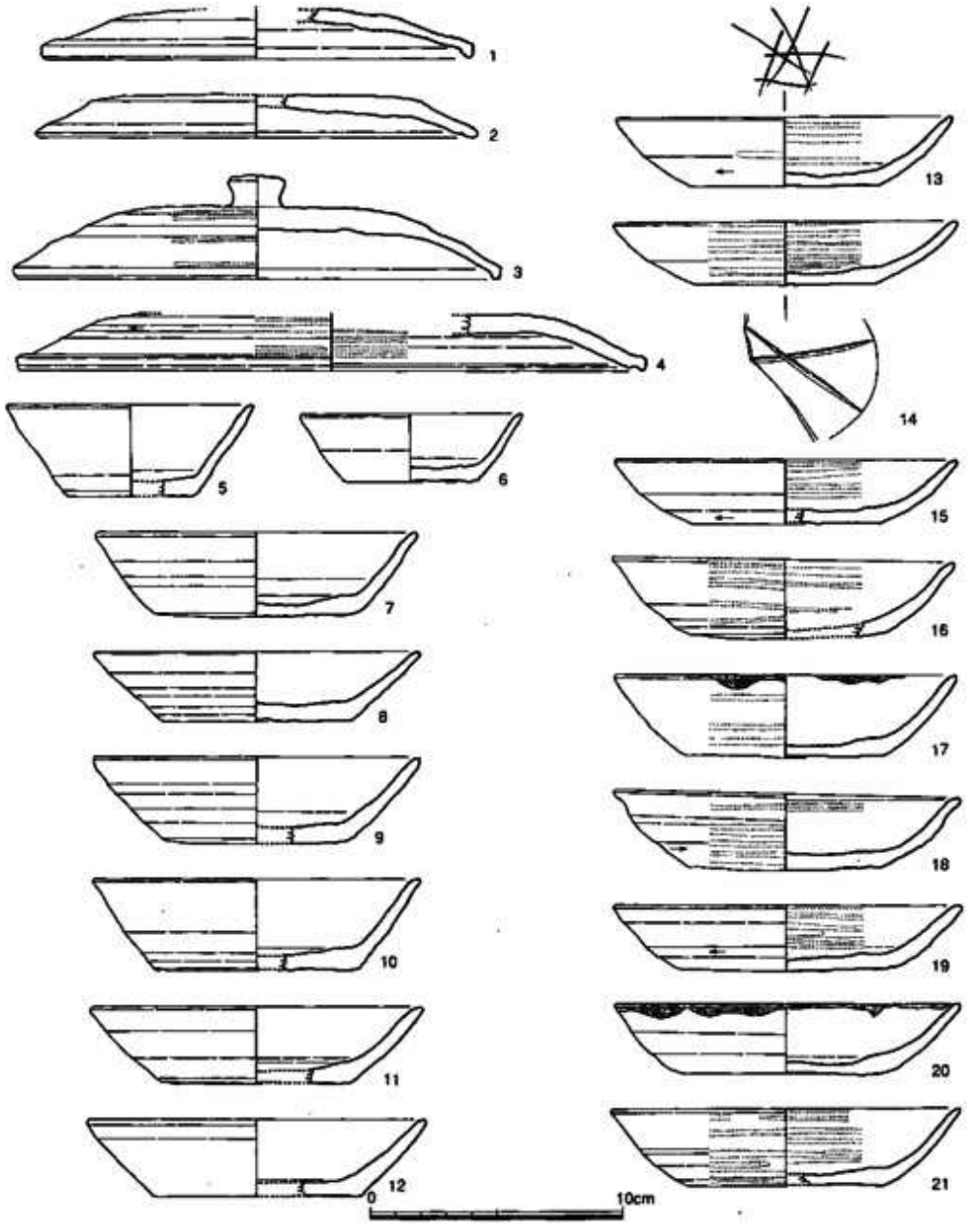


図38.149SX090出土遺物実測図（1）（1/3）

甕（90）　口径は推定13.6cm前後である。口縁部が「く」の字形に屈曲している。外面は横ナデ、内面は口縁部までヘラミガキしている。A類。

緑釉陶器

椀（91）　底径6.0cmを測る。明茶灰色の胎土に黄色味の強い黄緑色の釉を全面に施す。見込みに3 箇所、底部外面にも3 箇所の極小さなハリ痕がある。内外面とも丁寧なヘラミガキを施して土師質であるがやや硬質に焼成されている。京都産と考えられる。

SX090 出土遺物（図38～43）

土師器

蓋（1～4）　口径17.2～25.0cm。1のみ天井部外面はヘラ切り未調整で、他は回転ヘラ削り調整を行う。1と4は蓋3。2は蓋4、3は蓋c3、3と4は内外面をミガキaにて仕上げている。

坏e（5）　口径9.8cm、器高3.7cm、底径5.0cmを測る。外面の底部から体部にかけ回転ヘラ削りを行う。

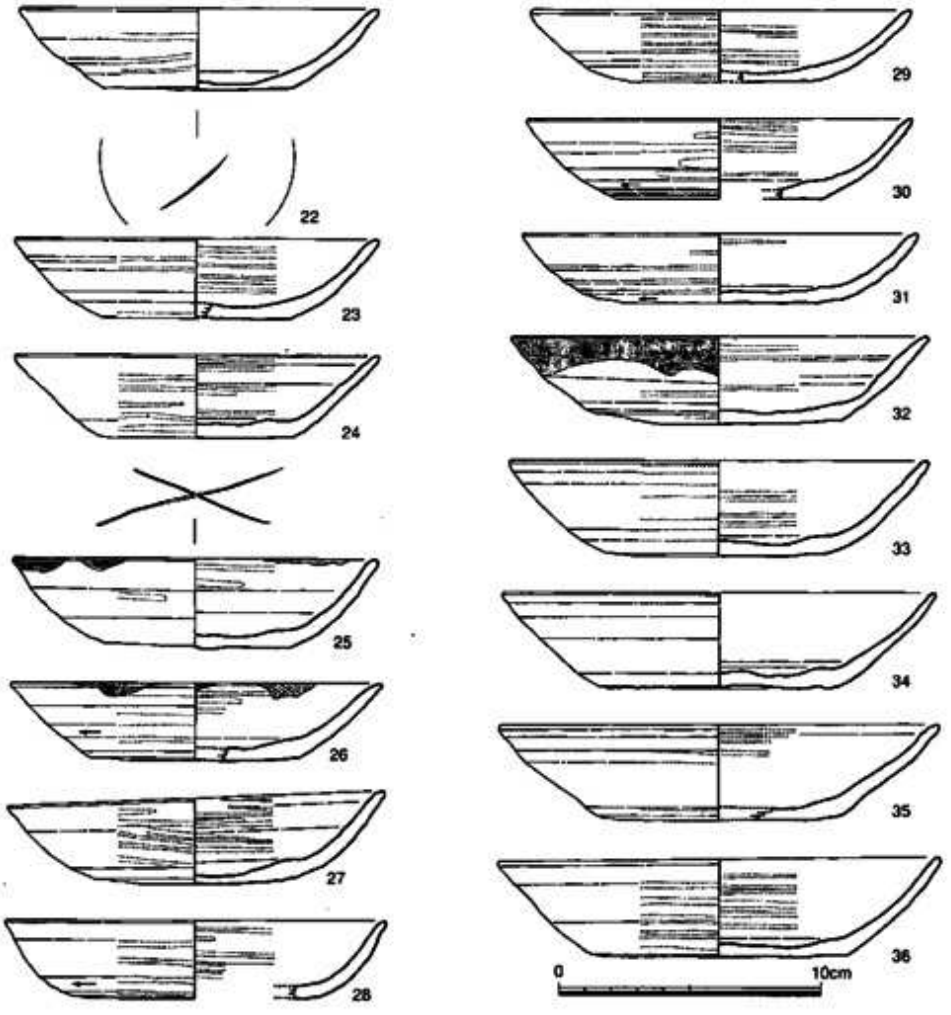


図39.149SX090出土遺物実測図（2）（1/3）

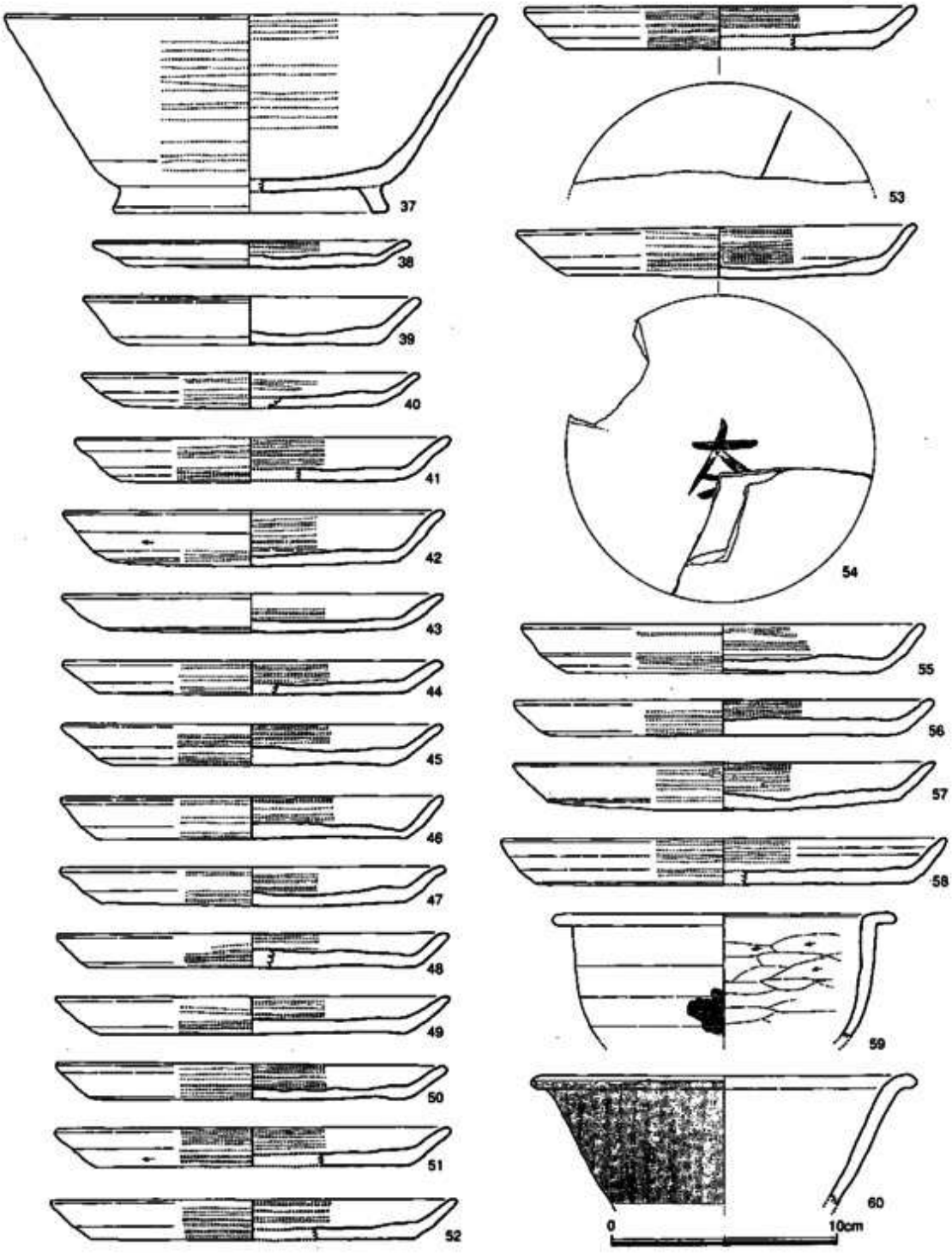


図40.149SX090出土遺物実測図（3）（1/3）

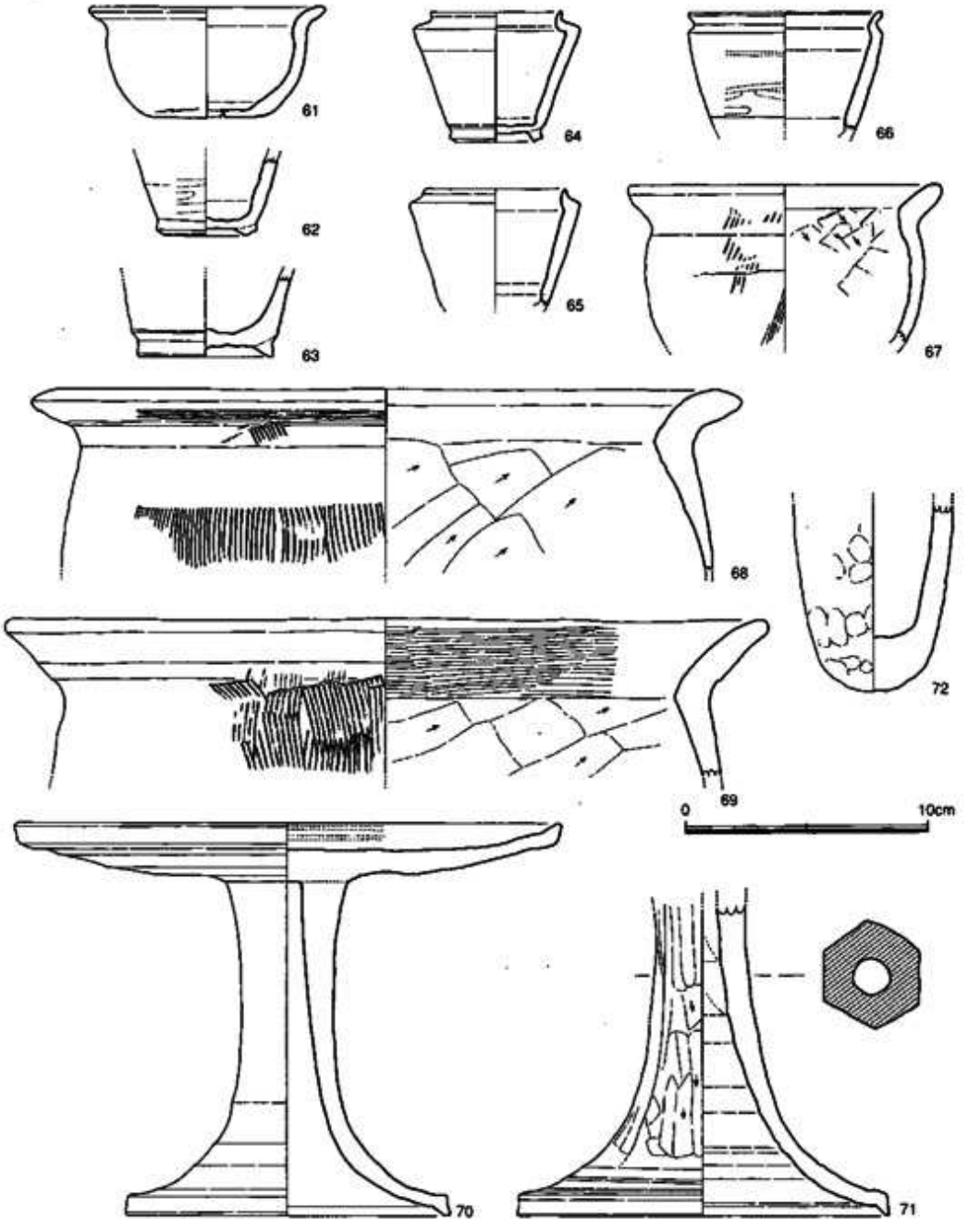


図41.149SX090出土遺物実測図（4）(1/3)

坏a（6～12）　6は口径8.8cm、器高2.7cmで口径に比して器高が低いので小坏とした。他は口径12.8～13.5cm、器高3.0～3.6cm。すべて胎土は橙灰色を呈し、底部はヘラ切り後ナデている。

坏d（13～36）　口径13.4～17.0cm、器高2.6～3.8cm、底径7.1～9.8cmを測る。外面は底部から体部下位にかけ回転ヘラ削りし、20は磨耗して確認できないが他はミガキaを施している。

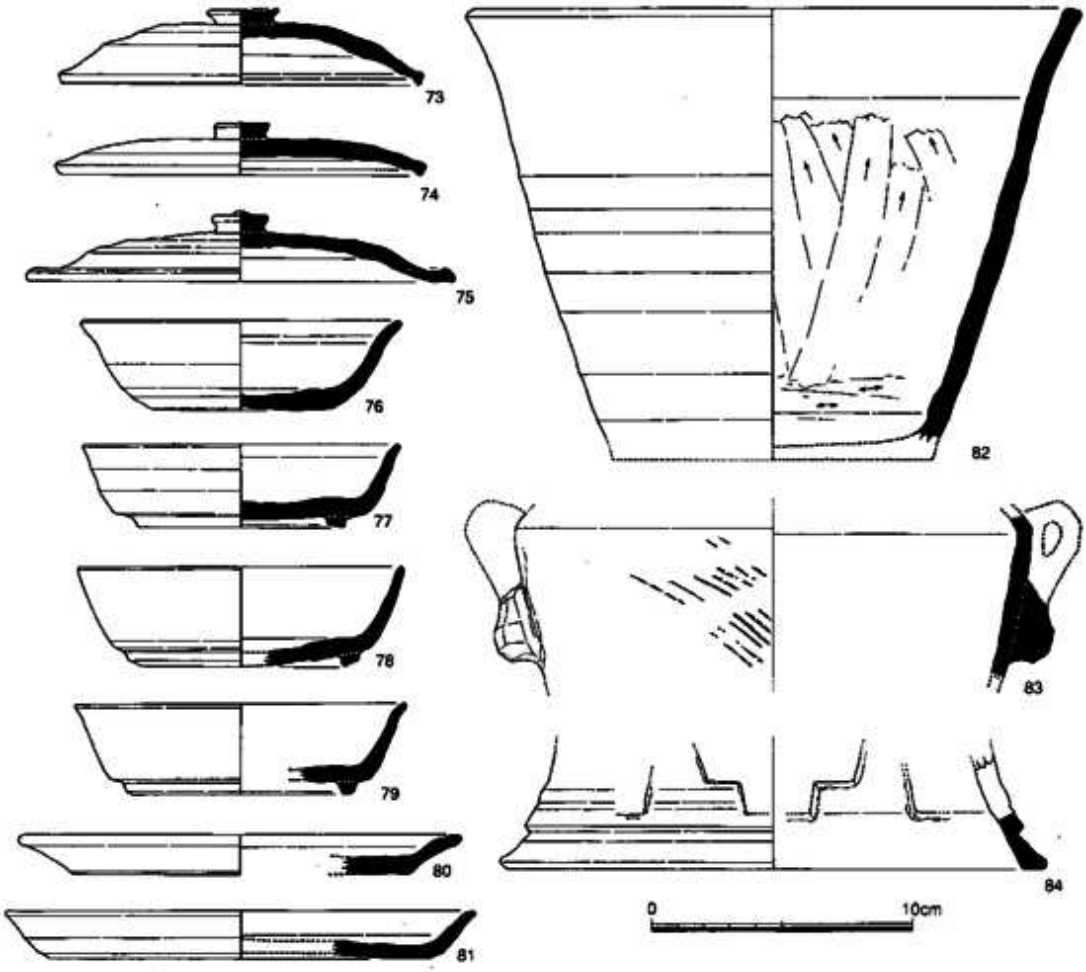


図42.149SX090出土遺物実測図（5）（1/3）

13・25は見込みに、14・22は底部外面にヘラ記号が線刻される。17・20・25・26・30には口縁部に煤が付着している。

大椀c1（37）　口径21.9cm、器高8.9cm、高台径12.2cmに復原される。体部は直線的に外へ開き、外面の底部と体部下位を回転ヘラ削りし、内外面にミガキaを施している。

皿a（38～58）　口径14.2～19.8cm、器高1.2～2.5cmに復原される。39・43は底部をヘラ切り後ナデ、体部は磨耗気味だが39は横ナデ、43はミガキaを行っている。他は全て外面を底部、もしくは底部から体部下位にかけて回転ヘラ削りし、体部は内外面ともミガキaを施す。53は底部にヘラ記号の一部が残る。54には墨書があるが、文字の下位を欠いている。

鉢（59～61）　59・60は口径15.3・17.2cmに復原される。59は体部外面は回転ヘラ削り、内面を手持ちのヘラ削りし、口縁部は横ナデして逆「L」字形に屈曲させる。60は胎土が粗く砂粒を多量に含み、横ナデで口縁部を短く外反させている。それぞれ体部や口縁部に煤が付着している。61は小鉢で口径は9.8cm。体部は横ナデしている。体部下位に粘土の接合痕があり、

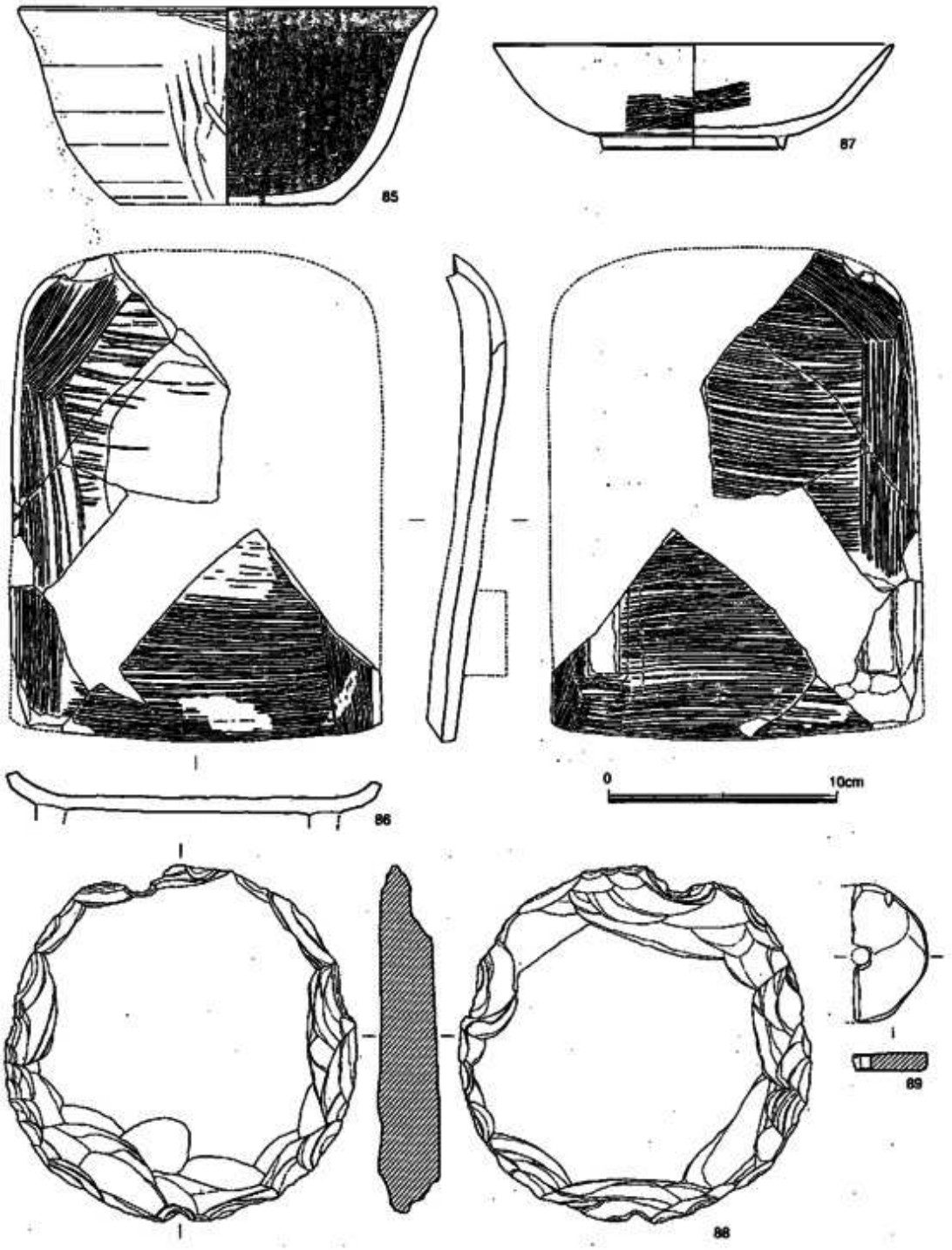


図43.149SX090出土遺物実測図（6）（1/3）

粘土紐を巻き上げて成形したものと考えられる。

小壺（62～66）　口径は5.4～8.0cmに復原される。62～64は底部はヘラ切り、底部際に高台を貼付、体部外面は下位を回転ヘラ削りし上位は横ナデされる。口縁は薄く摘んで立ち上げている。

甕a（67～69）　口径13.0～31.6cm。体部内面はヘラ削り、外面は刷毛調整で、口縁部は69は内面に刷毛、68は外面をカキ目調整している。いずれも口縁部が肥厚する。

高坏（70・71）　70は口径22.6cm、器高16.3cm、底径13.4cmに復原される。坏部の体部外面は回転ヘラ削り、内面にミガキaを施す。脚はすべて横ナデで端部を下方に摘んで断面三角形にしている。71は脚部のみで外面を縦方向にヘラ削りし６面に面取りをしている。削った後にやはり縦方向にヘラミガキを行う。脚底部は横ナデで端部調整は70と同じである。

焼塩壷（72）　胎土はキメが細かく、二次的加熱を受けたと考えられ、赤茶色から橙灰色を呈する。焼き締まって、内面に灰白色の付着物がある。外面に指頭圧痕が多く残っており型作りであろう。I類。

須恵器

蓋c3（73～75）　推定復原で口径13.6～16.2cm、器高2.1～2.7cm。73は天井部外面をヘラ切り、74・75は回転ヘラ削り調整している。摘みは73・75が擬宝珠で74はボタン形。74・75は内面が平滑で転用硯と考えられる。

坏a（76）　口径12.4cm、器高3.5cm、底径7.0cmに復原される。体部を回転ナデし口縁部は外反させる。底部はヘラ切り後、粗雑にナデている。

坏c（77～79）　口径12.2～12.8cm、器高3.2～3.9cm、高台径8.0～8.8cm。底部はヘラ切り、体部は回転ナデである。高台を底部際に接合し、体部はやや開き気味に立ち上がる。77は見込みが平滑で転用硯として使用されたのであろう。

皿a（80・81）　口径17.0・18.0cm、器高1.5・1.9cmを測る。底部はヘラ切り後ナデている。

鉢b（82）　口径23.6cmに復原される。体部外面上位まで回転ヘラ削りし内面はナデている。口縁部は回転ナデ調整し、端部を平坦に作る。

壺d（83）　体部を平行叩きし、その上から粗くヘラ削りを行い、肩部のすぐ下に左右に縦耳を貼付する。残存部内面に黄灰色の付着物が残っている。

円面硯（84）　推定で底部径21.0cmを測る。圏台に大きく透かしを彫っているが形状は不明。還元不良で赤茶色を呈している。

黒色土器

鉢（85）　推定復原で口径18.4cm、器高8.8cmを測る。手持ちによる成形と考えられ、体部を緩く外方に開き、口縁部はやや外反気味に作っている。内外面に縦方向のヘラミガキを行って、全体的に丁寧な作りである。底部外面の中央が黒色に焼けている。A類。

風字硯（86）　21.7×16.1の方形の硯。外面に長方形の剥落痕が二カ所あり、おそらく方形の脚が付いてたと考えられる。内外面、硯の縁部ともかなり細かいヘラミガキを丁寧に行っている。内外面とも黒色に焼成されB類。条坊19次調査のSD070出土資料と接合した。

緑釉陶器

椀（87）　口径17.6cm、器高4.7cm、高台径8.0cmを測る。体部は緩やかな丸味をもち、口縁は直線的に開く。細い高台が貼付される。茶白色の胎土に淡い黄白色の釉を全面に施す。体部内外面のヘラミガキは細かく丁寧である。防長産と考えられる。

石製品

用途不明（88）　15.8×15.5×2.6cm。両面とも外周を打ち欠いて加工している。石材は結晶片岩。

土製品

紡錘車（89）　土師器の坏か皿を再利用したもので、直径6.0cm程度に丸く削り、中心に直径0.7cm程の穴を穿つ。上面にヘラミガキの痕が観察される。半分を欠損している。

なお、陶磁器では長沙窯系青磁の椀片が2片、長沙窯系青磁か越州窯系青磁か不明であるが、水注で3本の紐を接合した把手片が出土している。

SX110出土遺物（図44）

土師器

坏a（1～3）　口径11.4～15.0cm、器高3.0～3.6cm、底径6.2～12.3cmを測る。1・2は明茶灰色の胎土で底部はヘラ切り、体部は横ナデされる。3は橙灰色の胎土で底部はヘラ削り、体部は横ナデ調整を行っている。

皿a（4）　口径14.6cm、器高1.4cm、底径11.0cmに復原される。底部はヘラ切り、体部は外方へかなり開く。

甕（5・6）　5は口径30.2cmに復原され、体部内面はヘラ削りし、口縁部内面と体部外面を刷毛で調整する。体部の内外面に煤が付着している。6は口縁部の小片で磨耗しているが体部内面をナデ、口縁部は横ナデと考えられる。

白磁

托（7）　胎土はわずかに灰色をおびた白色で、乳白色の光沢のある釉が全面に施されている。口縁部の小片で、体部外面下位に浅く段がつき、恐らく浅い皿型の托であろう。口縁端部を数カ所内側に折り輪花風に作っていると考えられる。I類。

長沙窯系青磁

水注（8）　底径15.6cmに復原される。茶灰色のやや粉っぽい胎土で、明黄茶色の釉を体部下位まで施している。平底で、外面は体部最下位に鋭い屈曲をもち、底部と体部を明瞭に画す。

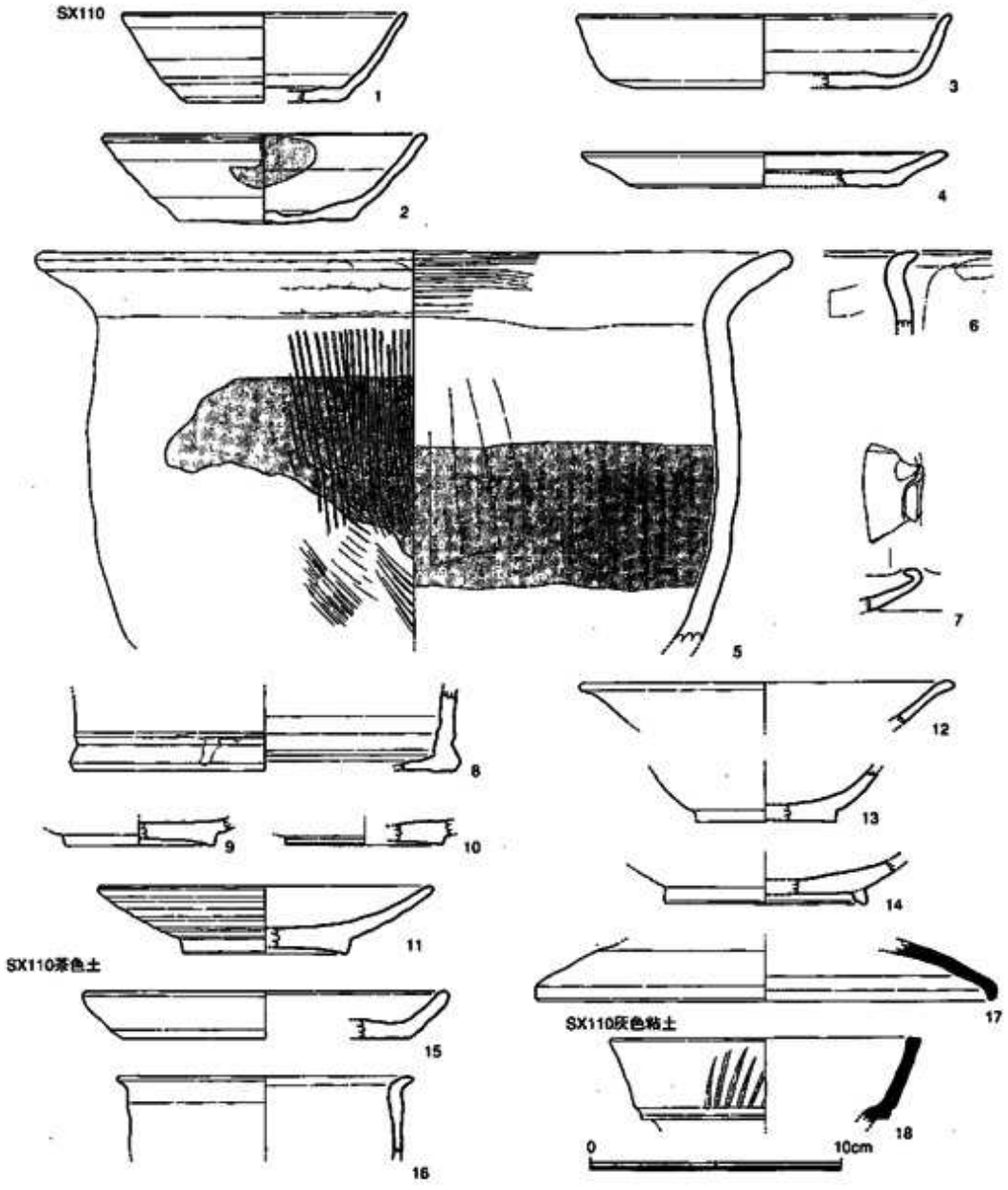


図44.149SX110出土遺物実測図　(1/3)

底部外面の周縁部には目跡が残る。

緑釉陶器

椀（13・14）　高台径5.6・8.0cm。13は青灰色を呈し、砂粒をやや多めに含む胎土に、黄緑色の釉が全面に薄く掛かっている。体部外面下位は回転ヘラ削りして、須恵質に焼成される。京都産と考えられる。14は胎土は灰白色で、淡い黄緑色の釉を全面に施す。見込みにハリ痕がある。焼成は焼きむらがあるが須恵質に近い。東海産と考えられる。

皿（9～12）　9・10は底径6.0・6.3cm。11は口径13.4cm、器高2.8cm、底径6.6cmを測る。12

は口径15.0cm前後。いずれも全面施釉し、10は土師質、他は須恵質に焼成される。すべて京都産と考えられる。他に図示していないが防長産と考えられる高台片も同じ遺構から出土している。

SX110 茶色土出土遺物 (図44)

土師器

皿a (15)　口径14.6cm、器高1.9cm、底径11.6cmを測る。底部はヘラ切りで体部は横ナデされる。

甕 (16)　口径は11.8cmに復原できる。体部から口縁部へ横ナデ調整し、口縁部を「く」の字に屈曲させている。

須恵器

蓋3 (17)　口径18.4cmに復原され、外面は自然釉が全面に掛かっている。口縁端部を下方に摘んで断面三角形に作る。

SX110 灰色粘土出土遺物 (図44)

須恵器

鼎 (18)　口径12.4cmに復原される。口縁部が直線的に立ち上がる。外面にヘラで縦方向に彫った線が巡っているが、線の割り付けは不正確である。口縁部下位に突帯を巡らす。円面硯かとも考えられるが、ここでは鼎とした。古墳時代の遺物の混入と考えられる。

SX098 出土遺物 (図45)

肥前系磁器

白磁

紅皿 (1)　口径7.5cmを測る。乳白色の精良な胎土で外面は蜻唐草文を型押ししている。内面から口縁部外面まで乳白色の釉を施す。

SX101 出土遺物 (図45)

越州窯系青磁

椀 (2)　口径15.0cm。茶灰色の精良な胎土で明黄茶色の釉を施す。器壁が薄く作られており、外面は体部上位までヘラ削りしている。I類。

SX111 出土遺物 (図45)

石製品

砥石 (3)　現存4.4×

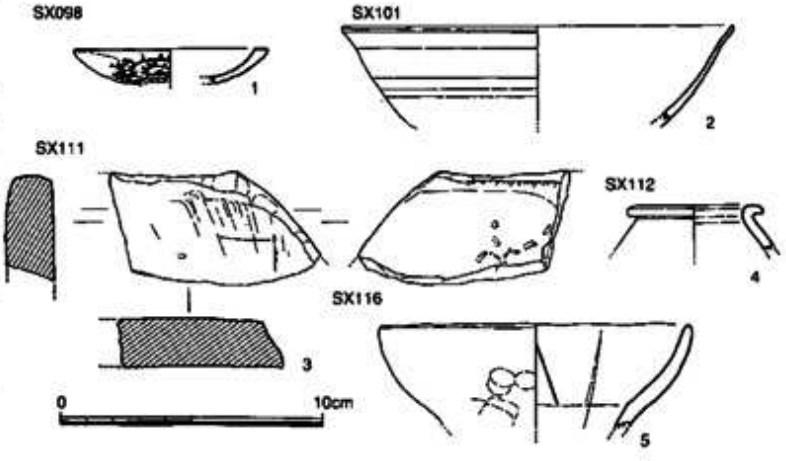


図45.149SX098・101・111・112・116出土遺物実測図 (1/3)

8.0×1.9cm。表裏二面を使用し側縁の一部は焼けている。石材は砂岩。

SX112 出土遺物 (図45)

中国陶器

壺 (4)　口径5.2cm。胎土は明灰色を呈し精良で若干黒色粒を含んでいる。濁灰緑色の釉を口縁部内面と外面に施し、内面の露胎部は赤茶色に発色している。口縁部は外側に大きく屈曲させる。I類。SX119に同一個体と考えられる口縁部の破片が出土している。

SX116 出土遺物 (図45)

土師器

焼塩壺 (5)　口径は推定で12.0cmに復原される。明橙灰色のやや粗い胎土で内面は工具でナデている。二次加熱は不明。II-b 類。

SX127 出土遺物 (図46)

瓦類

平瓦 (1)　胎土は灰色を呈し、砂粒をやや多めに含んでいる。叩きは大きめの斜格子に、葉文と葉の先が尖り気味の四葉文を配している。同様な叩きを持つ瓦は『太宰府天満宮III』でも報告されている。

SX148 出土遺物 (図46)

土師器

椀c (2)　高台径6.6cmを測る。黄灰色のキメの細かい胎土で、底部は糸切りし体部内外面を粗くヘラミガキしている。内外面一部に黒色の煤が付着している。西部瀬戸内沿岸よりの搬入品と考えられる。

瓦器

椀 (3・4)　3は口径16.0cm前後で、底部破片と共に1個体として図上復原した。高台径は7.3cmを測る。明灰色の胎土で内外面に細かいヘラミガキを施し、口縁端部内面に沈線を巡らせている。楠葉型と考えられる。4は明灰色の胎土で内外面に粗いミガキcを施す。

皿 (5)　口径10.0cm、器高1.7cmに復原される。明灰色の胎土で、底部をヘラ切りして押し出している。内外面にヘラミガキを行う。

須恵質土器

鉢 (6)　6は黒灰色のキメの粗い胎土で砂粒を多量に含んでいる。体部から口縁部にかけ横ナデし、口縁の一部を押圧して片口にしている。7・8は胎土は暗灰色を呈し、8は砂粒を多く含む。いずれも体部を直線的に開き口縁端部を内側に摘んでいる。7・8は東播系のものと考えられる。

瓦類

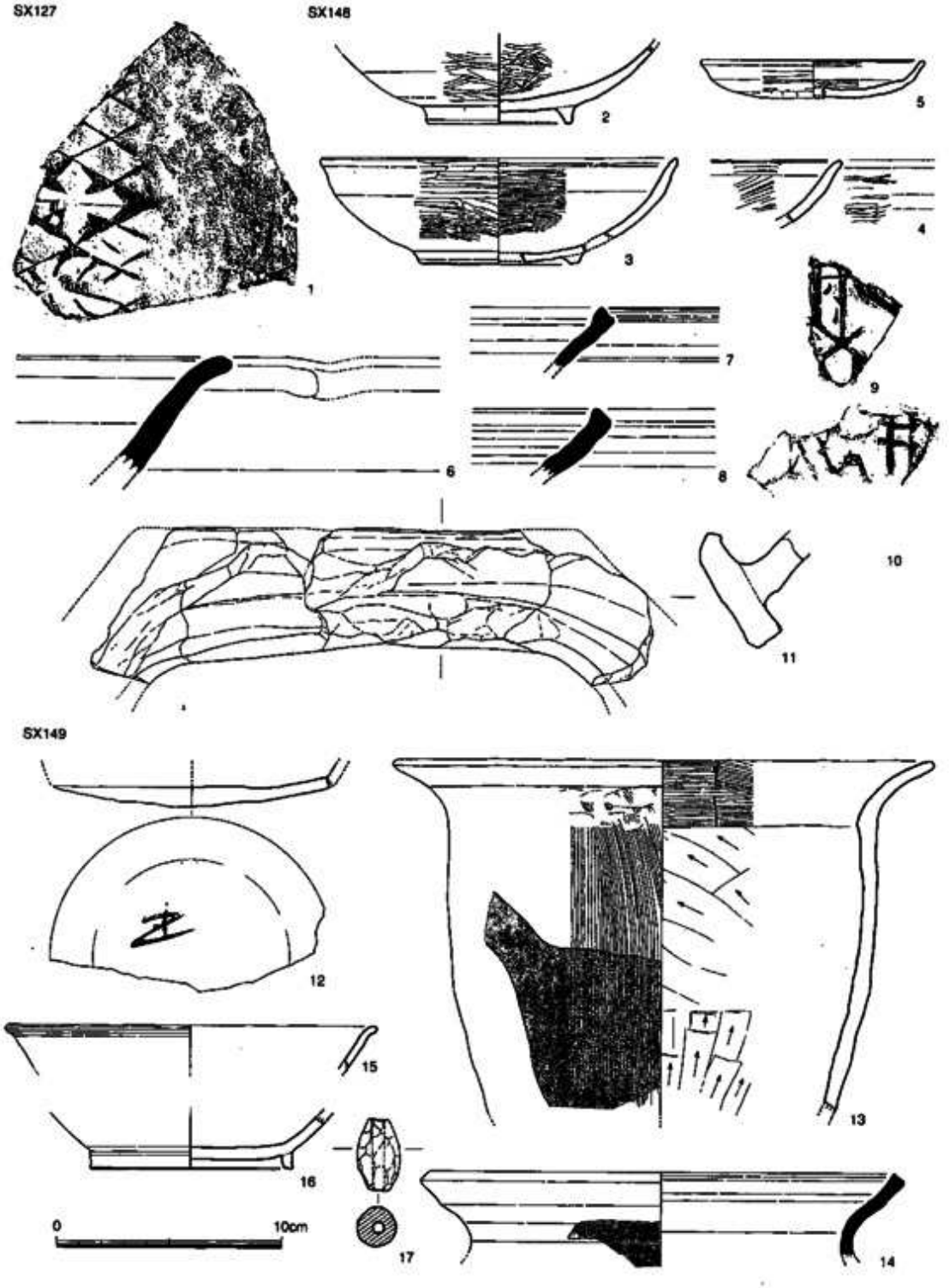


図46.149SX127・148・149出土遺物実測図（1/3）

平瓦（9・10）　灰白色から明灰色の胎土で、9の文字は「安楽之寺」を縦線で消したもので IV-1b 類。10は「平井」でI-12 類。

土製品

カマド（11）　胎土は明橙色を呈しキメは細かい。カマドの上位と炊き口の庇部が出土した。庇は上方に開いている。

SX149 出土遺物（図46）

土師器

皿a（12）　底部片で底径は12.5cm前後を測り、ここでは皿とした。ヘラ切り後ナデた底部外面に墨書□があり、「生」とも読めるがはっきりしない。

甕a（13）　口径24.2cmに復原される。体部内面は削り、外面と口縁部内面は刷毛調整している。外面は煤が付着する。

須恵器

甕（14）　口径21.6cmを測る。口縁部を外反させた後、端部を緩く内湾させている。

緑釉陶器

椀（15・16）　15は口径16.5cm前後に復原される。暗灰色の胎土に濁黄緑色の釉を施し、口縁端部を短く外反させている。須恵質で京都産と考えられる。16は高台径は9.0cm。胎土は茶白色で明黄緑色の釉を施す。体部は直線的に開き、高台畳付には段がついている。土師質に焼成され防長産と考えられる。

土製品

土錘（17）　明茶灰色で3.3×2.0を測る。直径0.5cmの穴を貫通させている。重量は11.5g。

SX158 出土遺物（図47～49）

土師器

蓋（1～7）　口径15.2～18.4cm。いずれも明橙灰色を呈する。1・2・4～6は蓋3、3は蓋c3、7は蓋4。1～4と6は天井部外面を回転ヘラ削り後内外面にミガキaを行い、5・7は天井部外面はヘラ切り後ナデ調整である。

坏e（10）　口径9.8cm、器高3.4cm前後を測る。底部はヘラ切りで体部は横ナデされる。内外面に煤が付着している。

坏a（11～15）　口径12.3～13.5cm、器高2.8～3.9cm、底径7.4～8.0cmに復原される。底部はヘラ切り。

坏d（16～18）　口径13.6～14.7cm、器高3.0～4.2cmに復原される。外面は底部から体部下位を回転ヘラ削りし、ミガキの有無は磨耗しているので不明。

坏（19）　底部破片。茶白色のキメの細かい胎土で底部の切り離しは糸切りである。西瀬戸

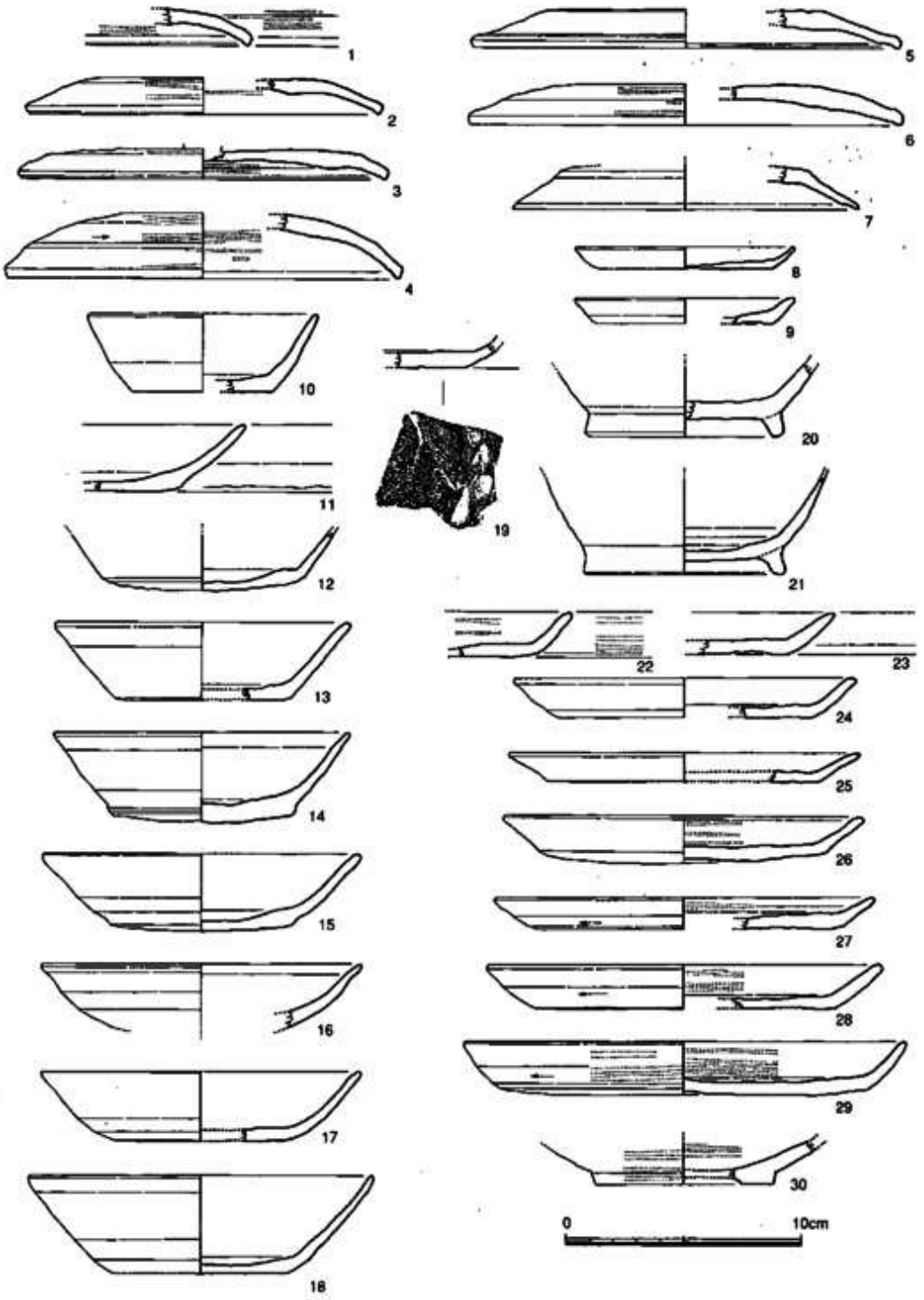


図47.149SX158出土遺物実測図（1）（1/3）

内地域よりの搬入品と考えられる。

椀c1（20・21）　高台径8.4・8.6cmを測る。底部はヘラ切りし、高台は底部際に貼付、体部を直線的に開いている。

小皿a（8・9）　口径はいずれも9.4cm、器高1.0・1.1cm、底径7.6・7.5cmに復原される。底部はヘラ切りで、8には底部に強い板状圧痕がある。上層からの混入の可能性がある。

皿a（22～29）　口径14.5～18.8cm、器高1.3～1.9cmに復原される。23・25・26は底部をヘラ切り後ナデ調整で、その他は回転ヘラ削りしている。23～25以外は体部にミガキaを施す。

皿（30）　底径7.6cmに復原される。明橙灰色のキメの細かい胎土で、底部を蛇の目高台風に削りだし体部の内外面にミガキaを施している。極めて稀な製品で在地のものか否かは小片のため判断出来なかった。

甕a（31～33）　口径26.8・27.0cmに復原される。体部内面をヘラ削りし、外面は刷毛調整を行う。32の外面は一部黒色に焼けている。33は口縁部で粘土を接いだ痕が観察され、また角閃石を多く含んでいる。

器台（34）　器高4.7cm、底部径5.8cmで器壁を厚く作り、体部は横ナデしている。内面の上位に布のようなものを抜いた痕跡があり、型作りをして、最後に横ナデ調整したものと考えられる。焼けた痕はない。

耳皿（35）　胎土は赤橙色を呈しキメは細かい。底径、6.7cm前後を測り、底を厚く作って、口縁端部を曲げ耳皿にしている。折り返しは浅い。

製塩土器

焼塩壺（36・37）　橙色～淡灰褐色を呈し胎土は粗い。いずれも二次加熱を受けている。36はI類。37はII類。

須恵器

坏c（38）　口径14.0cm、器高4.9cm、高台径8.2cmを測る。胎土は青灰色を呈し、砂粒を多めに含む。底部はヘラ切り未調整、体部下位は回転ヘラ削りを行う。

甕（40・41）　40は明灰色のきめ細かい胎土で、口縁部で外反させ端部を外側に摘んでいる。搬入品と考えられる。　41は口径31.6cmを測り、体部中位に格子叩きを行い、内面は粗くナデている。

須恵質土器

捏鉢（39）　暗灰色を呈し、細かい砂粒を多く含んで胎土は粗めである。体部を直線的に開き内外面は回転ナデである。東播系。上層からの混入と考えられる。

白磁

椀（42）　胎土はわずかに灰色をおびた白色で精良である。小さい玉縁を作り、淡い青味の

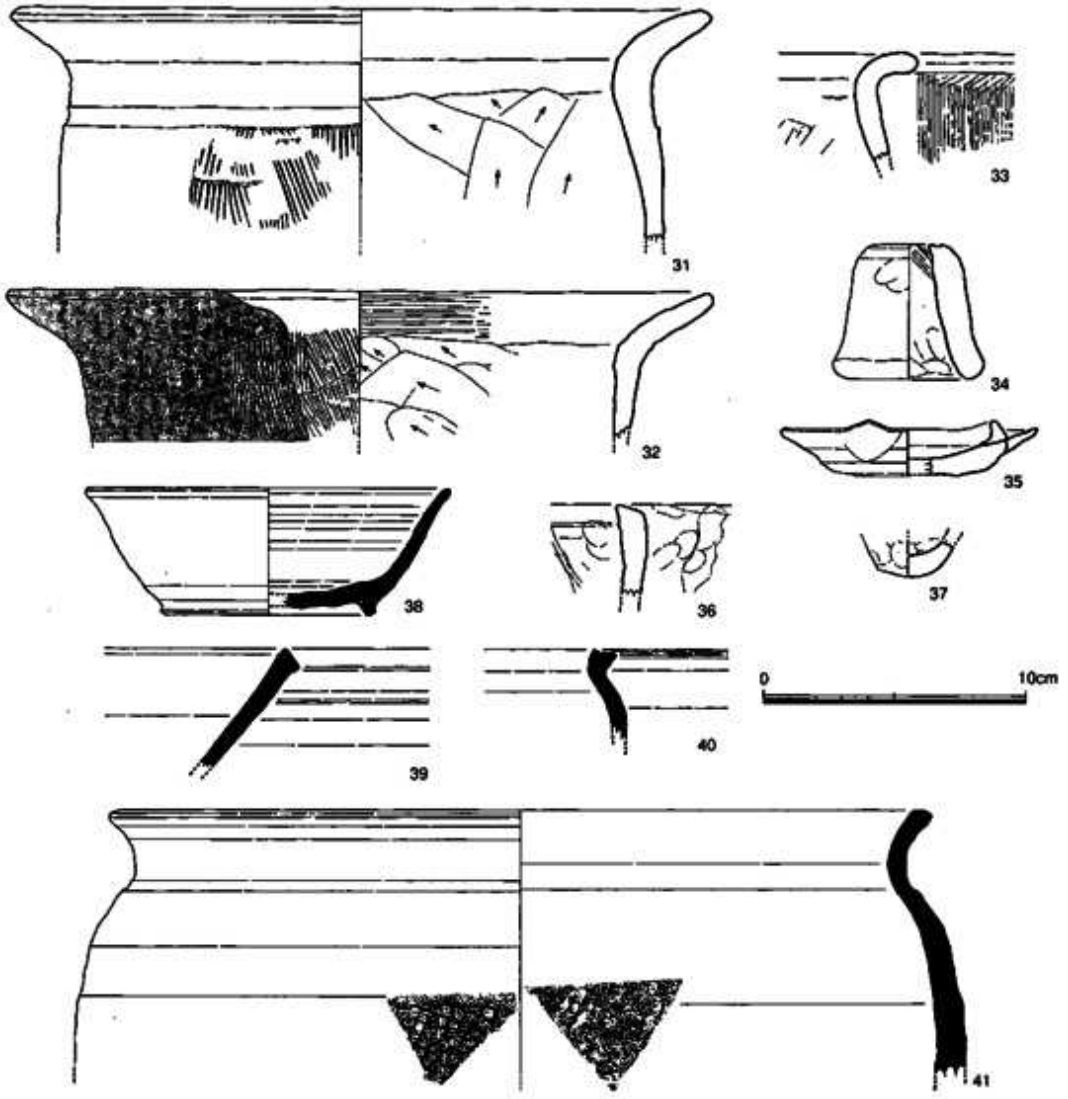


図48.149SX158出土遺物実測図（2）(1/3)

ある透明釉が施され貫入が入っている。IV類ないしはXI類。上層からの混入の可能性あり。

越州窯系青磁

水注（43）　注ぎ口のみで、灰色の精良な胎土に淡い灰緑色の透明釉を施す。壺の体部側は内面も釉が掛かっている。III類。上層からの混入の可能性がある。

中国陶器

壺（44）　口径21.0cmを測る。胎土は茶灰色から灰色を呈し白色粒、褐色粒を若干含んでいる。明茶褐色の釉を施すが、施釉範囲と厚みにムラがあり、刷毛塗りと考えられる。ドーム型に膨らんだ体部に鍔状の口縁を付す。上層からの混入の可能性あり。

緑釉陶器

椀（45～51）　45～48・53は底径5.0～8.5cm。49は口径13.4cm、51は口径22.2cm、器高6.5cm、

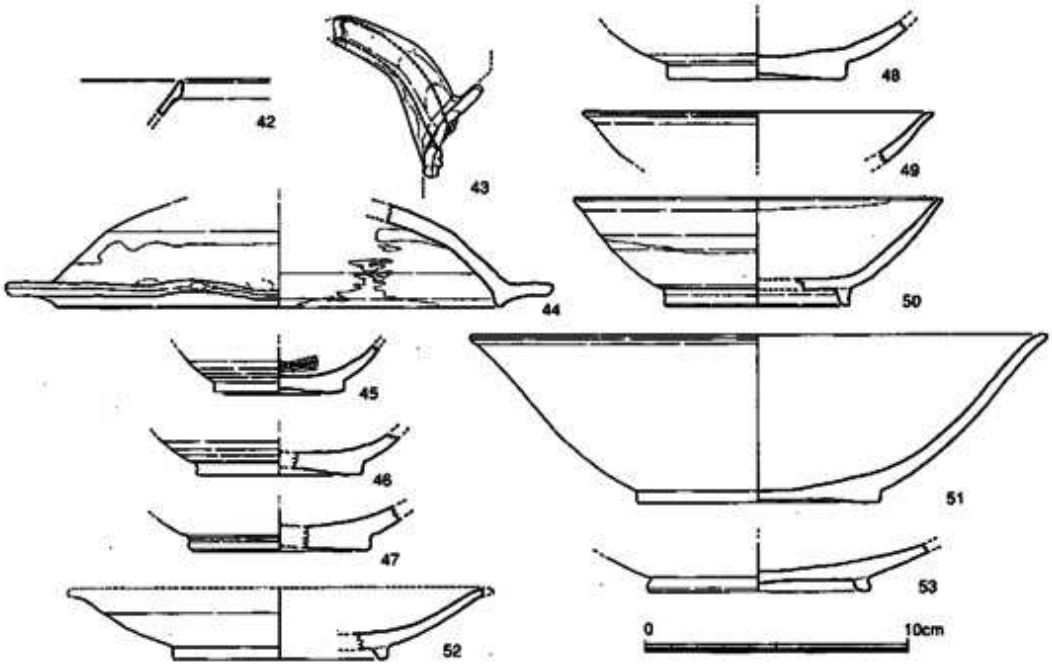


図49.149SX158出土遺物実測図（3）(1/3)

底径9.3cmに復原される。45～48・51は円盤高台を削りだし45は糸切りのままで底部は露胎、49・51は口縁部を短く外反させている。47・49・51が土師質で他は須恵質に焼成されている。50を除きすべて京都産と考えられる。50は全面に黄緑色の釉が施されているが口縁部は内外面とも明黄茶色になっている。高台畳付に浅い段がつき、土師質に焼成される。浅めの椀で、防長産で高橋氏分類のB-2タイプと考えられる。

皿（52・53）　52は口径16cm前後で高台径8.2cmである。53は高台径8.5cmを測る。52は茶灰色の胎土に黄色味の強い釉を全面に施している。体部は丸味を持って開き口縁部で短く外反する。53は硬質焼成で内外面はミガキが観察される。全面に淡い黄緑色の釉を施す。52は防長産で、53は東海産と考えられる。

SX154 出土遺物（図50）

須恵器

円面硯（2）　外堤部の径は14.4cmに復原できる。胎土は赤茶色を呈し還元不良。外堤部が外方へ開き、圏台部に矩形を含わせたような透かしが彫られている。

須恵質土器

捏鉢（1）　口径31.4cmに復原される。灰色の胎土に黒色粒を少量含み、直線的に口縁部まで開いて端部を内側に摘んでいる。口縁部は暗灰色を呈する。東播系と考えられる。

越州窯系青磁

水注（3）　胴部の小片で、胎土は淡灰褐色で精良、濁った灰緑色の釉を内外面に掛けてい

る。毛彫りとヘラの片切り彫りで蓮弁を施文する。壺の可能性も考えられる。III 類。

高麗青磁

壺（4）　口径9.6cmに復原される。胎土は黄灰色を呈しキメはやや粗めで砂粒を少量含んでいる。やや黄色味をおびた灰色の不透明釉が施されている。口縁部で上方に屈曲し盤口壺とする。焼成はあまい。素地と、釉調からIII 類と考えられる。

SX156 出土遺物（図50）

須恵質土器

捏鉢（5）　口径33.6cmに復原される。灰色の胎土に白色粒・黒色粒を含んで、体部を直線的に開きながら回転ナデ調整をおこなっている。内面に使用の痕跡あり。東播系と考えられる。

SX159 出土遺物（図50）

緑釉陶器

皿（6）　口径8.3cm前後を測る。胎土は灰白色で芯が暗灰色になっている。内面は磨いて、淡黄緑色の釉を施すが、口縁部以外は剥落している。高台の有無は不明。防長産と考えられる。

SX162 出土遺物（図50）

土師器

皿（7）　底径6.2cm。茶灰色を呈し、器面は淡赤茶色を呈す。底部を糸切りし外方に真っ直ぐ開いている。搬入品。

瓦器

椀（8）　灰白色の胎土で、内外面に細かいヘラミガキを行い銀黒色を呈す。口縁部の内側に沈線を巡らせている。楠葉型。

緑釉陶器

皿（9）　高台径6.8cmに復原される。胎土は明青灰色で少量の砂粒を含み、高台外面まで淡緑色の釉を掛けている。輪状高台は削りだしで須恵質に焼成される。京都産と考えられる。

SX164 出土遺物（図50）

土師器

小皿（10）　口径9.0cm、器高1.5cmを測る。胎土は橙色を呈し、底部をヘラ切り後、押し出して丸底に作っている。搬入品の可能性がある。

SX178 出土遺物（図50）

高麗青磁

椀（11）　底部と口縁部も欠損するが、灰色の精良な胎土で青味の強い灰緑色の釉を施す。見込みは一段凹ませた段をつけて体部と画している。II 類。

SX196 出土遺物（図50）

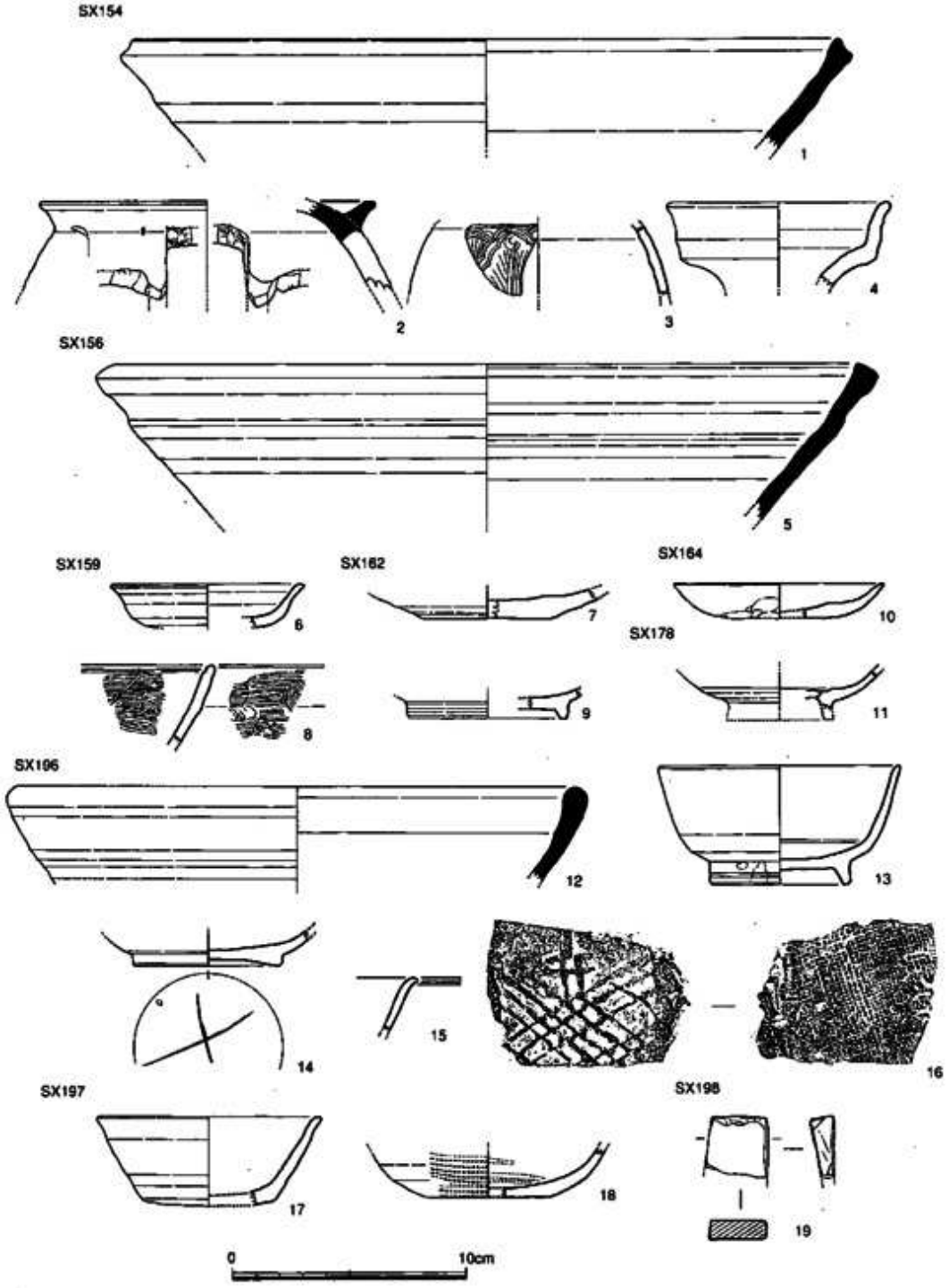


図50.149SX154・156・159・162・164・178・196・197・198出土遺物実測図（1/3）

須恵器

鉢（12）　口径は24cm前後を測る。胎土は灰白色を呈し、細かい黒色粒を含んでいる。体部を回転ナデし、口縁を内側に折って玉縁を作る。篠察。

白磁

椀（13）　口径10.2cm、器高5.1cm、高台径6.0cmを測る。胎土は乳白色を呈しやや粉っぽい。釉は乳白色で光沢があり、細かい貫入が入っている。体部下位で屈曲し、直線的に口縁まで立ち上がる。

緑釉陶器

皿（14）　高台径6.3cm。暗灰色の胎土に濁灰緑色の釉を全面に施している。内面には重ね焼き時のハリ痕が4個つき、底部外面にヘラ記号がある。須恵質。京都産と考えられる。

灰釉陶器

椀（15）　口縁部を外反させ、内外面に淡灰緑色の釉が薄く施されている。

瓦類

平瓦（16）　表に格子叩きとともに「井」の字が残っている。I-8b 類。

SX197 出土遺物（図50）

土師器

坏e（17）　口径9.6cm、器高3.8cm。赤茶色の胎土で体部は横ナデ、底部はヘラ切りと考えられる。

坏d（18）　底部径5.4cmに復原される。底部外面は回転ヘラ削りし、体部内外面はミガキaを施している。

SX198 出土遺物（図50）

石製品

砥石（19）　現存は2.6×2.7×0.8cmの小片である。四面とも使用される。石材は細粒凝灰岩ないしは泥岩。

SX207 出土遺物（図51）

土師器

坏e（1・2）　口径8.9・10.0cm、器高4.4・3.7cm。1は底部外面を回転ヘラ削り、体部は内外面にミガキaを施す。2は底部をヘラ切りし体部は横ナデである。

坏d（3～7）　口径14.0～17.4cm、器高2.8～4.2cm、底径7.2～8.8cmに復原される。底部外面を回転ヘラ削りし体部はミガキaを行う。

皿a（8～10）　口径18.0～19.8cm、器高1.6～2.1cm。8は粗雑な作りで器壁が厚い。底部から体部は手持ちナデにて成形しており、外面に粘土を接いだ痕が観察される。搬入品の可能性が

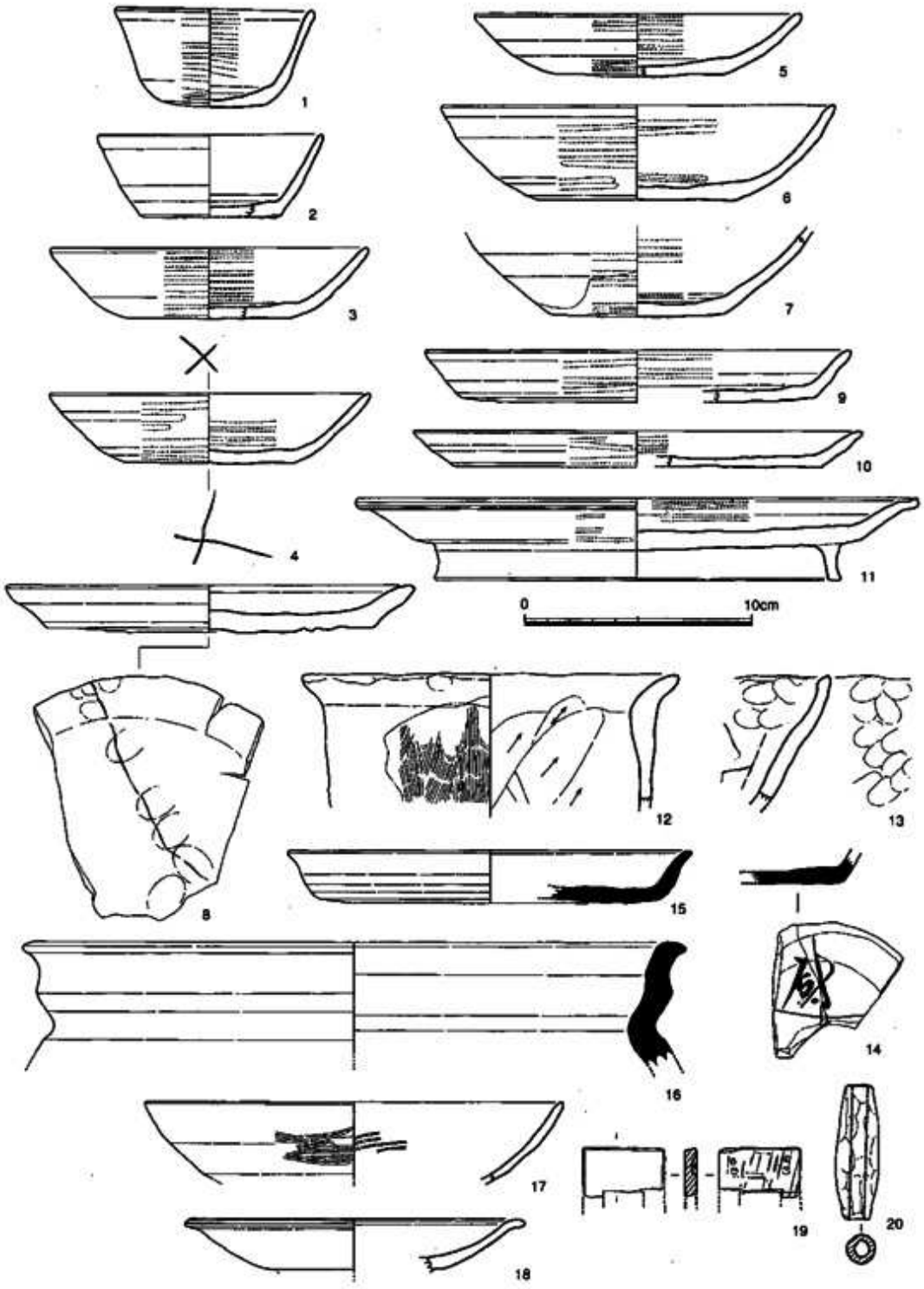


図51.149SX207出土遺物実測図（1/3）

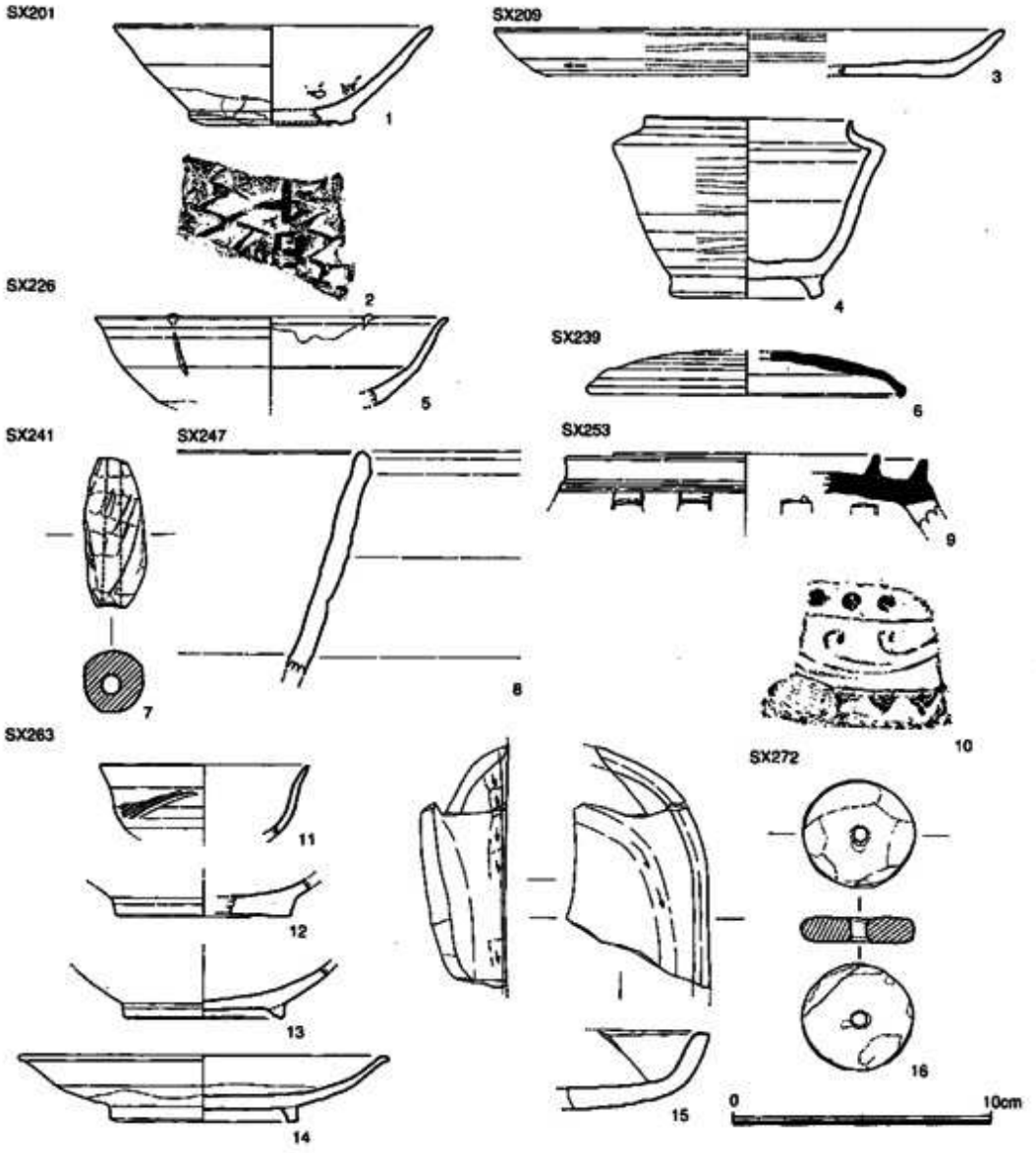


図52.149SX201・209・226・239・241・247・253・263・272出土遺物実測図（1/3）

高い。9・10は底部外面を回転ヘラ削りし、内外面を磨いている。

皿c（11）　口径24.8cm、器高3.7cm、高台径18.0cmを測る大皿。底部外面をヘラ削りして体部は内外面とも磨いている。口縁部は「く」の字に外反させ端部を上方に摘み上げる。

甕a（12）　口径16.6cmを測る。体部内面はヘラ削りし、外面を刷毛調整。内面の頸部から口縁部への屈曲は緩やかで、境界が不明瞭になっている。

製塩土器

焼塩壷（13）　橙色から灰褐色を呈し、内面はヘラでナデ、外面には乱雑な指頭痕が残る。II-b 類。

須恵器

坏a（14）　底部は回転ヘラ切り後ナデ。外面に墨書があり、「厨」と読める。

皿a（15）　口径17.8cm、器高2.4cm、底径14.9cm。茶灰色から明灰褐色を呈し、底部をヘラ切り、体部は回転ナデ調整される。還元不良。

甕（16）　口径29.3cm前後を測る。口縁を二重口縁にしている。

黒色土器

椀（17）　口径18.4cm前後に復原される。器壁を薄く作り、内外面に丁寧なヘラミガキを行っている。外面は茶灰色から暗褐灰色を呈す。A類で搬入品。

緑釉陶器

皿（18）　口径15.0cm。胎土は灰色を呈し白色砂粒を少量含んで粗い。釉は濁灰緑色を呈す。体部は丸く開いて口縁端部を外反させる。須恵質に焼成され、京都産と考えられる。

石製品

巡方（19）　縦3.6cmで厚さ0.5cm。石帯に装着する方形の飾りで、表面は丁寧に研磨し下位に窓を作る。裏面には二カ所、糸通しの穴が残っている。石材は淡緑灰色に黒色が混ざった蛇紋岩。

土製品

土錘（20）　明茶色で7.0×1.9cmを測り、直径0.6cmの穴が貫通している。土師質。重量は20.0g。

SX201 出土遺物（図52）

越州窯系青磁

小椀（1）　口径12.4cm、器高3.9cm、高台径6.4cm。胎土は明灰色を呈し精良だが若干気泡が入り、淡灰緑色の釉が外面の体部下位まで施されている。高台の削りは浅く、体部は外方に開く。見込みに目跡があり、推定で7～8個であろう。外面にも体部下位に目跡を削った箇所があり、明茶色に発色している。I類と考えられる。

瓦類

平瓦（2）　格子叩きの間に「小ト瓦」の下位の文字が読める。X類。

SX209 出土遺物（図52）

土師器

皿a（3）　口径19.8cm、器高1.9cm、底径15.8cmを測る。外面を底部から体部まで回転ヘラ削りし、内外面を磨く。

小壺（4）　口径8.0cm、器高7.1cm、高台径5.9cmを測る。体部外面中位まで回転ヘラ削りし、外面はミガキaを施す。

SX226 出土遺物（図52）

白磁

皿（5）　口径13.8cmに復原される。明灰色の胎土に淡い灰緑色の透明釉が体部下位まで施されている。内面に口縁部と体部を画す段がつき、口縁端部は外側からヘラで押圧して輪花にする。XI 類か。

SX239 出土遺物（図52）

須恵器

蓋3（6）　口径12.0cm。天井部外面を回転ヘラ削りしている。内面に赤色顔料が付着する。

SX241 出土遺物（図52）

土製品

土錘（7）　青灰色を呈し、5.9×2.4cmを測る。直径0.5cm前後の穴が貫通し、焼成は須恵質である。重量は34.5g。

SX247 出土遺物（図52）

須恵質土器

鉢（8）　胎土は茶灰色から明灰色を呈して粗く、砂粒を多めに含んでいる。体部から口縁へ強い回転ナデをおこない、内面に使用した痕跡がある。

SX253 出土遺物（図52）

須恵器

円面硯（9）　外堤の径は14.0cm前後を測る。二本の突帯を貼付して外堤・内堤とし、海を作っている。圏台部には切り込みがあり、幅1.0cm程の方形の透かしを巡らせたと考えられる。

瓦類

軒平瓦（10）　胎土は灰白色を呈し、焼成は良好。外区に突鋸歯文と珠文、内区に偏行唐草文を配している。老司 II 式。

SX263 出土遺物（図52）

白磁

小椀（11）　口径8.1cmを測る。胎土は乳白色を呈しきめ細かく、やや黄色味をおびた白色の釉を施す。器壁を薄く作り、丸味を持った体部は口縁部で外反する。外面に櫛目文が施される。

緑釉陶器

椀（12・13）　底径6.2・6.8cmを測る。12は須恵質に焼成された椀の高台で、円盤状に削り、全面に施釉している。。13は灰白色の胎土で芯が黒色を呈する。器面が荒れているが、淡黄緑色の釉を全面に施している。高台底部に段がつく。12は京都産、13は防長産と考えられる。

灰釉陶器

皿（14）　口径14.4cm、器高2.6cm、高台径7.3cm。胎土は明灰色で、口縁部内外面に明灰緑色の釉を漬け掛けしている。底部から口縁部近くまでヘラ削りし断面四角形の高台を付す。灰黒色土出土の灰釉と接合した。

風字硯（15）　風字硯の硯頭部、右側1／3程の破片で、内面は暗灰色、外面は自然釉が付着している。硯面は海方向になだらかに斜傾、硯尻に脚が付くと考えられる。内面をナデ、縁端部はヘラで面取りしている。灰黒色土出土の破片と接合した。

SX272 出土遺物（図52）

石製品

紡錘車（16）　4.4×4.2×1.0cmを測る。ほぼ円形に削り、中央に直径0.5cmの穴を穿つ。石材は暗黒緑色を呈する蛇紋岩。

5）土層出土遺物

表土出土遺物（図53）

越州窯系青磁

皿（1）　胎土は明灰色を呈し精良である。内外面に灰緑色の釉を施す。見込みにヘラで花文を片切り彫りしている。III 類。

最上層出土遺物（図53・54）

土師器

坏a（2）　口径15.0cm、器高3.0cm、底径10.0cmを測る。底部を糸切りし、体部は横ナデされる。

皿c（3）　口径21.6cm、器高4.2cm、高台径14.0cmを測る。底部は糸切り、体部を横ナデしている。高めの高台を貼付する。

ミニチュア坏（4）　口径3.0cm、器高2.3cm。手持ちによる成形で、体部に指で摘んだ痕が観察される。

須恵器

小蓋c3（5）　口径8.1cm、器高2.3cmを測る。天井部外面を回転ヘラ削りし、口縁部は下方に摘んで回転ナデ調整している。外面に自然釉が付着。

鉢（6～8）　8は口径20.0cm前後に復原される。胎土は暗青灰色を呈し精良である。内面に刷毛状工具でナデたような痕がある。6は口縁部を内湾させ端部を平坦に調整している。7は青灰色の精良な胎土で口縁端部を玉縁状に作っている。篠窯系。

甕（9）　胎土は明灰色を呈し、黒色粒をやや多めに含む。口縁部外面下位に格子叩きを行

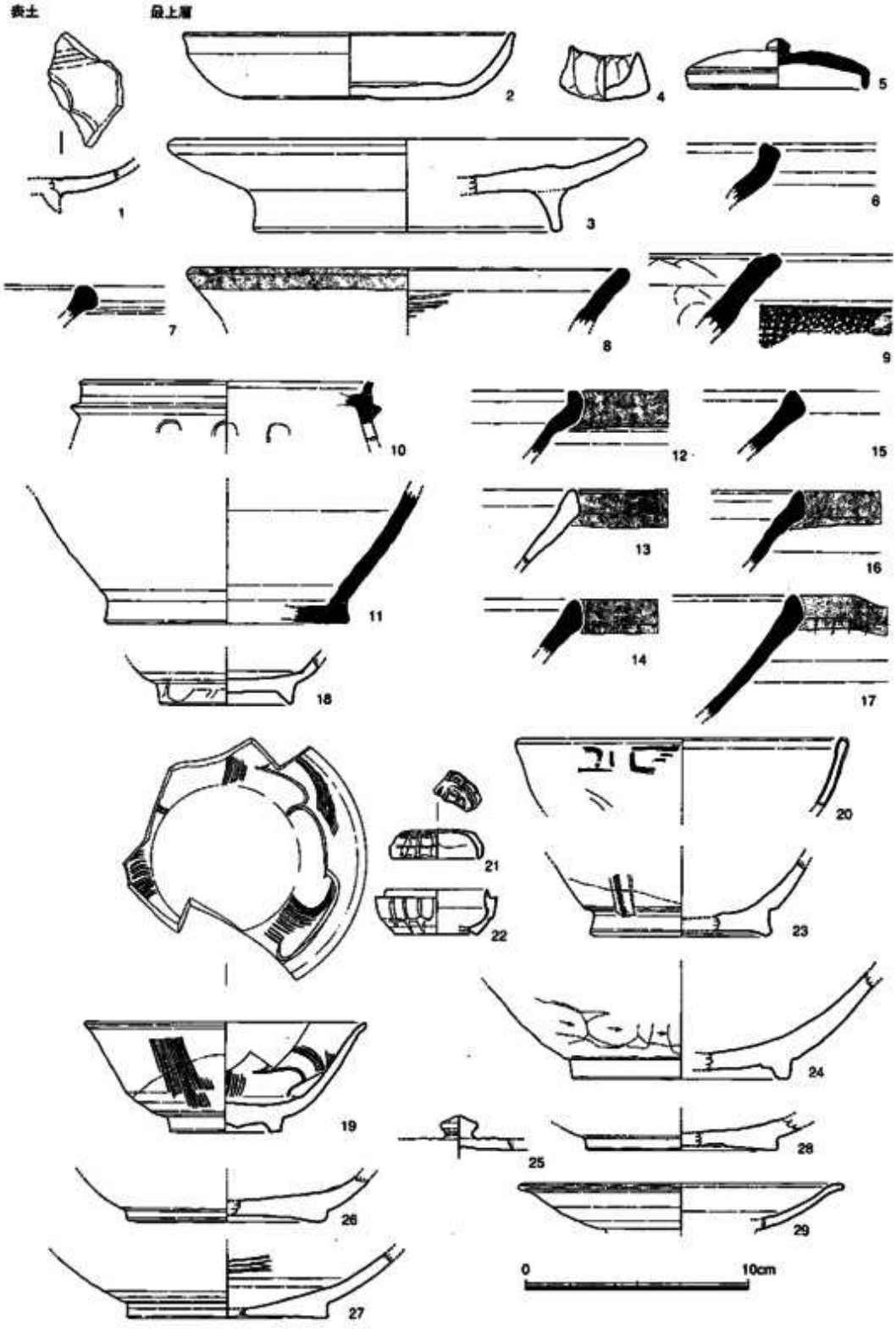


図53.表土・最上層出土遺物実測図（1）(1/3)

っている。

円面硯（10）　外堤径13.3cmに復原される。外堤下に突帯を巡らせ、圏台には長円形の透かしを彫っている。

須恵質土器

捏鉢（11～17）　11は底径11.0cmを測る。灰白色の胎土で底部は糸切り、体部は回転ナデしている。12～17はいずれも回転ナデで体部を調整し、口縁部を断面三角形に作ってる。13は瓦質に焼成され、他は須恵質で口縁端部が暗灰色から黒灰色になっている。17は片口鉢である。

白磁

小椀（18）　高台径6.0cm。胎土はわずかに灰色味をおびた白色を呈し精良、やや粉っぽい。水色をおびた釉を高台際まで掛けている。底部から体部へ大きく屈曲し、体部は開き気味に立ち上がると考えられる。SX196出土のものと同じ種類と考えられる。

龍泉窯系青磁

椀（20）　口径15.0cmに復原される。胎土は明灰色でやや濁った淡緑色の釉を厚めに施している。口縁部外面には簡略な雷文が巡り、体部にもヘラで施文される。上田C-II類。

同安窯系青磁

小椀（19）　口径12.7cm、器高4.7cm、高台径5.0cmを測る。胎土は灰色を呈し精良、灰緑色をおびた透明釉を施す。外面に細い櫛目、内面に櫛目とヘラで施文する。

青白磁

合子（21・22）　21は口径4.0cm、22は口径4.6cm、器高2.1cm、底径3.8cmに復原される。いずれも型作りで、乳白色の胎土に水色味をおびた釉を施している。

中国陶器

壺（23）　底径8.2cmを測る。黄白色でやや軟質の胎土で、外面に黒褐色釉を施す。底部外面は円盤状底部の内側を浅く削って高台風に作り、体部外面は縦方向に削りを施し、間に2本の陽刻線を彫っている。

鉢（24）　高台径9.8cm。胎土は茶灰色～灰色を呈し砂粒を少量含んでいる。内面と外面の体部下位まで茶褐色の釉を施すが、内面は使用のためか白濁している。体部外面のヘラ削りは粗雑である。中国陶器と考えられる。

緑釉陶器

蓋（25）　灰白色の胎土にやや濁った黄緑色の釉が厚めに施される。宝珠型の摘みを接合、香炉等の蓋と考えられる。焼成は土師質である。

椀（26・27）　底径は8.8・9.1cm。26灰色の素地に少量の砂粒を含み、全面に釉を施している。須恵質に焼成される。27は見込みが円形に明茶灰色、他は灰色を呈し、重ね焼きした際の

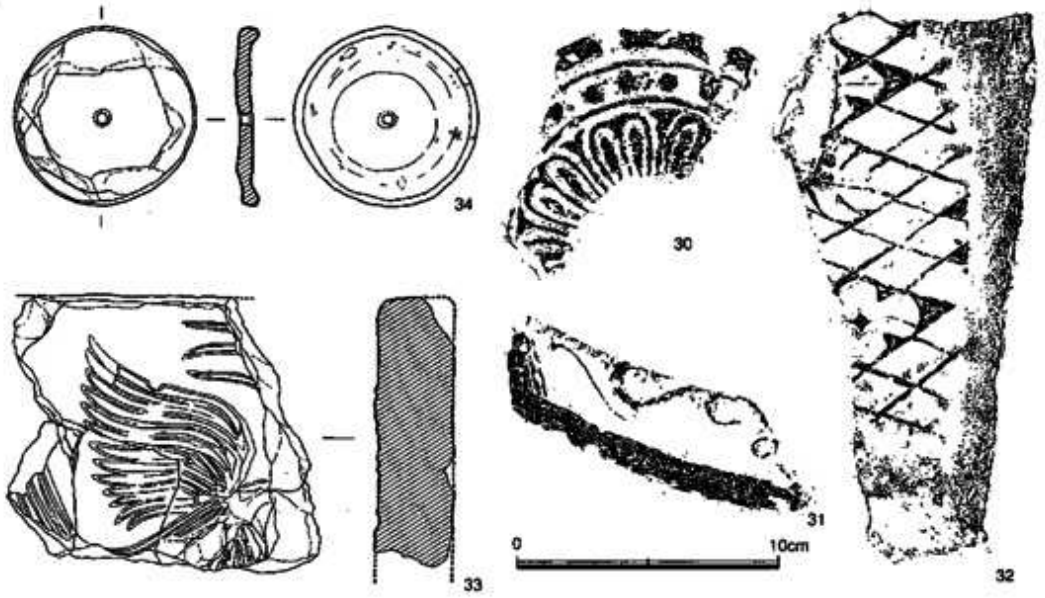


図54.最上層出土遺物実測図（2）(1/3)

変色と考えられる。全体に薄く施釉しているがほとんど剥落している。いずれも京都産と考えられる。

皿（28・29）　28は底径8.6cm、茶白色の胎土に黄緑色の釉を全面に施し、底部を蛇の目高台風に削っている。土師質。29は口径14.7cmに復原、体部は丸味をもって開き、口縁部で外反させる。須恵質。いずれも京都産と考えられる。

瓦類

軒丸瓦（30）　内区に複弁蓮華文、外区に珠文を配している。胎土は灰色を呈し焼成、還元ともに良好である。

軒平瓦（31）　明灰色を呈し、内区に偏行唐草文を配し、外区は無文。

平瓦（32）　SX127出土の平瓦と同種。斜格子叩きに葉文と四葉文を配している。

塼（33）　胎土はやや橙色をおびた茶灰色を呈し、砂粒を多く含んでいる。厚さは3.0cm。通常の塼より法量が小さめで、文様は型取りで、上面に鳥をレリーフ風に施文している。残存部は鳥の尾の部分と考えられる。

土製品

紡錘車（34）　直径7.0cmほどの円形で、黒色土器・椀の高台付き底部をそのまま転用。中央に0.4cmの穴を貫通させている。

黒色土出土遺物（図55）

土師器

小皿a（1）　口径10.6cm、器高1.2cm、底径6.8cm。口縁部が外方に引き出され、口径に比し

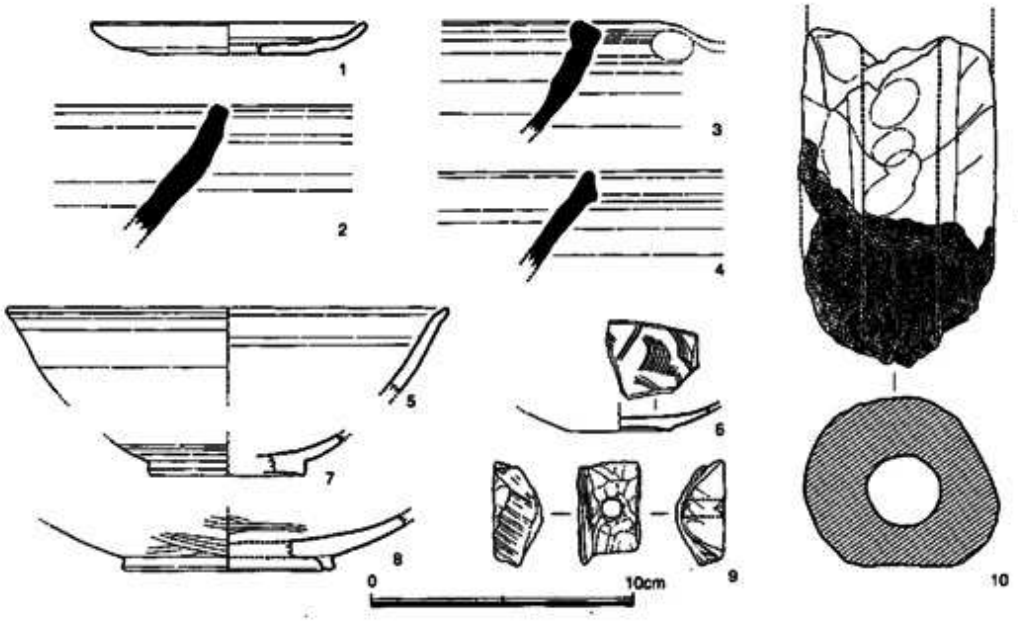


図55.黒色土出土遺物実測図（1/3）

底径が小さい。底部はヘラ切り後ナデを行う。

須恵質土器

捏鉢（2～4）　いずれも青灰色を呈し砂粒と黒色粒を含んだやや粗めの胎土で、体部を回転ナデ調整し外方に開く。3は片口鉢。いずれも東播系と考えられる。

同安窯系青磁

椀（5）　口径16.9cmに復原される。明灰色でキメがやや粗めの胎土に、青味をおびた灰緑色の透明釉を施している。外面は口縁部直下まで回転ヘラ削りし、口縁端部は外反する。口縁部内面に沈線をいれるがその他は施文されない。II類。

青白磁

皿（6）　底径3.8cmを測る。灰白色の精良な胎土で、水色をおびた透明釉が施されている。見込みに櫛とヘラで施文。底部は釉を掻き取り、明茶色に発色している。

緑釉陶器

椀（7・8）　底部径6.0・8.2cm。7は青灰色の胎土に砂粒を含む。暗緑色の釉を薄く施している。須恵質に焼成。8は茶灰色から灰色を呈する胎土で黄緑色の釉を全面に掛けている。内外面を丁寧にヘラミガキしている。須恵質に焼成。7は京都産、8は東海産と考えられる。

石製品

滑石製品（9）　4.0×2.4cmで、本来は円柱状に削った側面に直径0.8cmほどの穴を貫通させ、石鍋にあいた穴を補填するための製品と考えられるが、現存部は縦半分に削っている。円柱本体は黒色の煤が付着している。

土製品

フイゴ羽口（10）　現存は13.1×7.6cmで直径2.8cmほどの穴が貫通している。粗い胎土で砂粒を多めに含む。下位にいくほど焼き締まっているが断面は軽石のように空隙が多い。上位から茶灰色、灰色、灰白色、灰色と変化して、下端にはタール状になった黒色の鉱物が付着している。

灰黒色土出土遺物（図56）

土師器

小皿a2（1）　口径10.9cm、器高2.2cm、底径7.7cmを測る。胎土は茶灰色から暗紫色を呈し、精良である。底部はヘラ切り、内面の口縁端部に沈線様の浅い段が巡っている。

皿（2・3）　口径は14.0cm、器高1.7cm、底径10.0cm前後に復原できる。口縁部が直線的に横に伸び、底部は平坦で円盤状に近いが、処理が雑で小片なので正確には判らない。口縁部の調整は横ナデである。胎土に角閃石を少量含んでいる。3は橙灰色の胎土で内面に丁寧なヘラミガキ、外面は横ナデを行う。口縁部は外方に「く」の字に屈曲し端部を丸く納める。体部下位は内湾しているので皿とした。

鉢（4）　底部径は12cm前後を測る。体部を横ナデし底部際に手捏ねの脚を貼付している。脚の数、底部切り離しは不明。外面に黒色の煤が付着している。

須恵器

円面硯（5）　円面硯の圏台部片で、底部径16.5cmを測る。底部を「L」字型に屈曲させ、端部を短く下方に摘んでいる。体部に小円形と長方形の透かしを彫り、内外面に自然釉が付着している。

黒色土器

蓋3（6）　口径は18.0cmに復原される。胎土は精良で、天井部外面を回転ヘラ削りし内外面にやや粗くヘラミガキを施している。内面は漆黒色を呈す。A類。

長沙窯系青磁

椀（7）　口径14.1cmに復原される。灰色の胎土で砂味である。体部外面の中位ほどまで黄色味をおびた灰緑色の釉を施す。器壁が厚く、緩く内湾しながら引き出している。

越州窯系青磁

香炉（8）　口径15.0cmに復原される。胎土は淡灰褐色を呈し精良。濁灰緑色の釉を全面に施している。口縁部の外面から蓋受けの部位に目跡が残る。I類。

白磁

小椀（9）　口径11.4cmを測る。胎土は乳白色を呈し精良、水色をおびた光沢のある釉を掛けており、貫入が入る。体部は下位で屈曲し口縁まで真っ直ぐ立ち上がる器形はSX196出土と

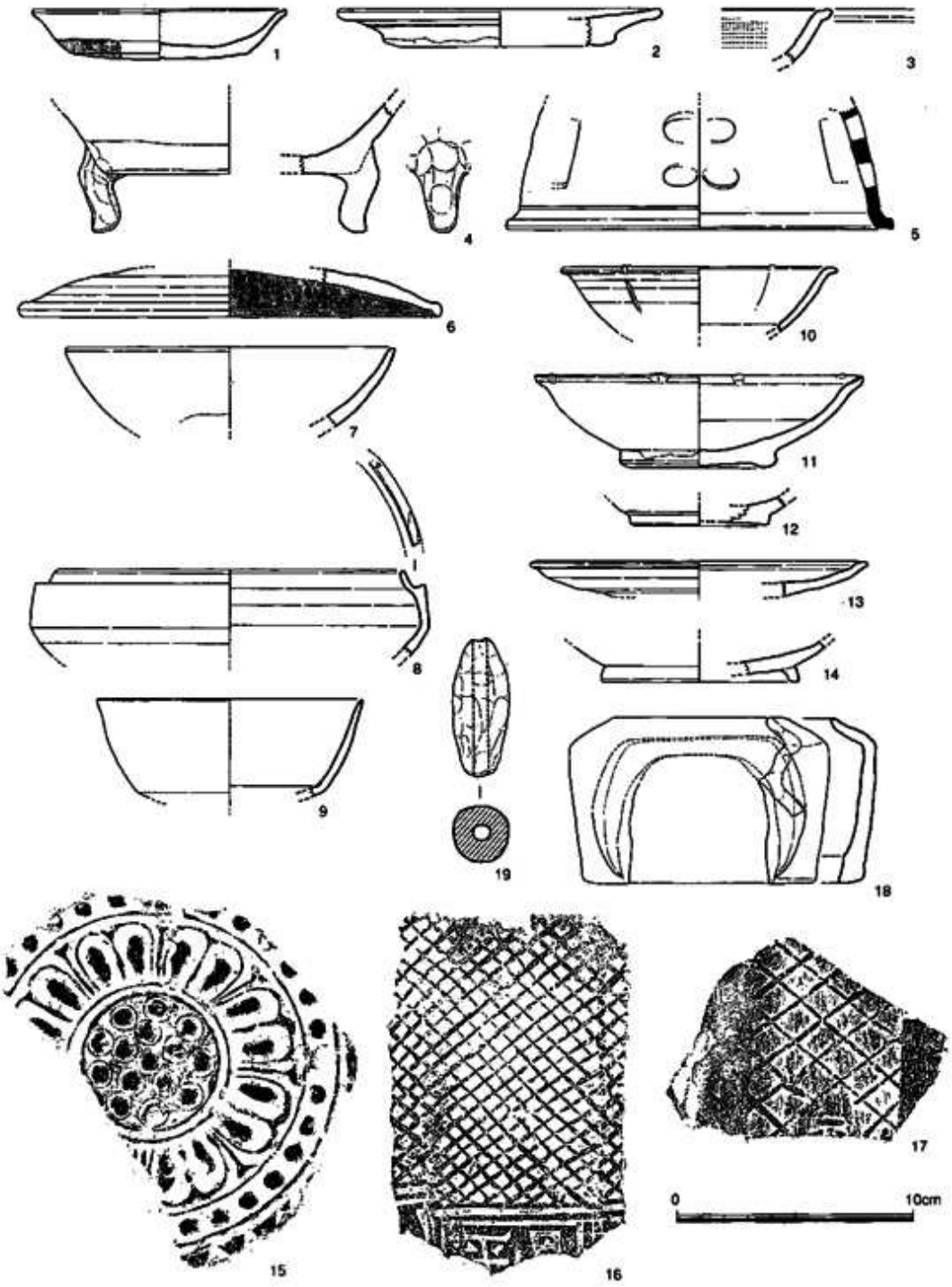


図56.灰黒色土出土遺物実測図（1/3）

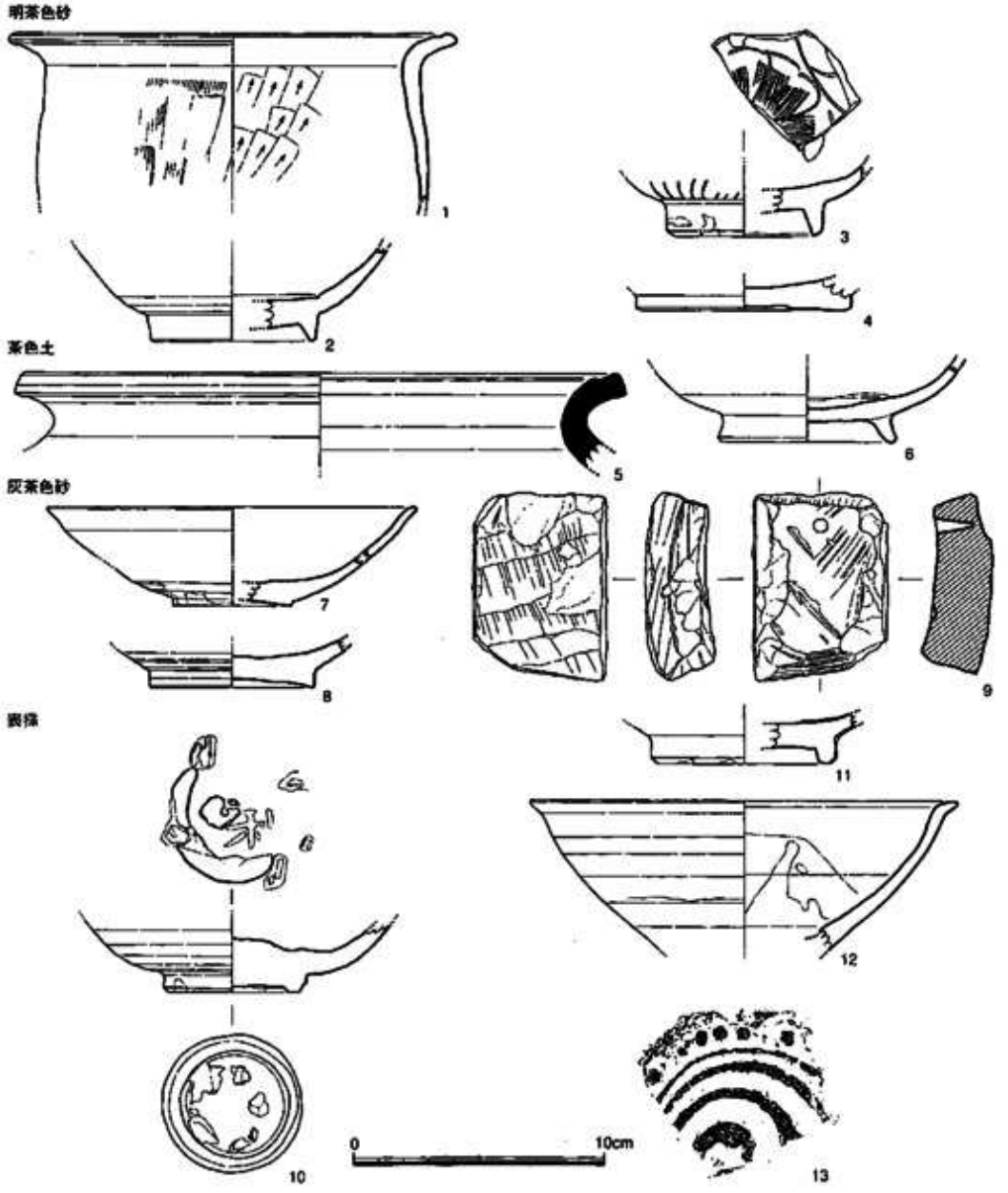


図57.明茶色砂・茶色土・灰茶色砂出土および表採遺物実測図（1/3）

同種のものである。

椀（10）　口径が11.8cmに復原される。灰白色の精良な胎土で水色をおびた釉を施す。釉調は前記9に似ている。口縁端部は丸く外反、外面の口縁端部から下方向に体部まで、ヘラで押圧しながら縦線を入れ、輪花にしている。小椀ないしは皿のXI-3 類と考えられる。

皿（11）　口径14.0cm、器高4.0cm、高台径6.7cmを測る。胎土は灰白色を呈し、わずかに水色味をおびた白色の釉を施す。外面を体部中位まで削り、口縁部は外方に屈曲しながら内湾する。口縁部の外側から押圧し推定7～8個の輪花をつくっている。高台はIV 類の椀に似る。

緑釉陶器

椀（12）　高台径5.9cm。淡灰色で砂粒をやや多めに含む胎土で淡緑色の釉を全面に施す。須恵質で京都産と考えられる。

皿（13）　口径14.4cm。暗青灰色のキメの細かい胎土で濁緑色の釉を薄く掛けている。須恵質。京都産と考えられる。

灰釉陶器

椀（14）　高台径8.4cmを測る。明灰色の胎土で、内面に明灰緑色の釉が厚く施される。体部外面は回転ヘラ削りし、断面四角形の高台を貼付している。

瓦類

軒丸瓦（15）　灰白色から明茶灰色を呈す。瓦当面の直径が18.0cm前後を測る。老司II式。

平瓦（16・17）　いずれも叩きは斜格子で16は「平井瓦屋」の陰刻でI-1。17は「平井」の陽刻、I-7a。

土製品

カマド（18）　橙灰色を呈し、焚き口の開口部に庇が付く。体部を横ナデ調整し、内面の体部下位と焚き口はヘラで削っている。外周は正円として残存部を推定復原した。器高は7.0cmをはかる。ミニチュアのカマド。

土錘（19）　灰色を呈し、6.0×2.4cmを測る。直径0.7cm程の穴が貫通。須恵質で重量は約31gである。

明茶色砂出土遺物（図57）

土師器

甕a（1）　口径18cmに復原される。胎土は淡茶灰色を呈し、やや粗めで砂粒や角閃石を多めに含む。体部内面はヘラ削り、外面は刷毛調整した後ナデる。口縁部を大きく外反させ端部の内側に浅く幅広の沈線を巡らせている。搬入品と考えられる。

越州窯系青磁

椀（2）　高台径6.6cmを測る。胎土は明灰色を呈し若干黒色粒を含んでいる。焼成が悪く、釉が白濁して粉っぽいが全面に施釉される。高台は断面三角形に近く、貼り付け高台と考えられる。見込みに段あり。III類と考えられる。

白磁

椀（3）　高台径6.2cm。乳白色の胎土に、灰色味をおびた透明釉が高台底部まで施される。見込みに櫛目とヘラで花文を描き、体部の内外面にもヘラで施文している。高い高台を付す。XIII類。

緑釉陶器

皿（4）　底径8.6cmを測る。茶白色の胎土に黄色味の強い淡黄緑色の釉を全面に施している。高台は蛇の目高台ふうに削る。土師質である。京都産と考えられる。

茶色土出土遺物（図57）

須恵器

甕（5）　口径24.5cmに復原される。明灰色の胎土で内外面回転ナデ調整、丸く外反した口縁の端部内側に幅広で浅い凹帯を巡らせ、外面は面取りする。搬入品と考えられる。

灰釉陶器

椀（6）　高台径7.0cm。灰色の胎土でキメは細かいが、白色粒、黒色粒を多めに含んでいる。内面は口縁部のみ施釉、外面には釉は観察できない。体部下位は回転ナデ調整。やや八の字に開いた高台は断面三角形に近い。

灰茶色砂出土遺物（図57）

白磁

皿（7）　底径4.7cm。同一個体と考えられる口縁部破片を合成して推定復原している。乳白色から明黄白色を呈すやや粉っぽい胎土で、体部下位まで、黄色味をおびた透明釉を施す。高台は若干高さがあり、円盤高台ふうに削っている。見込みから口縁まで沈線は無い。VI 類。

緑釉陶器

椀（8）　底径6.6cmを測る。灰色から茶灰色の胎土で、若干砂粒を含む。円盤高台を削りだし全面に薄く施釉している。やや須恵質に焼成され、京都産と考えられる。

石製品

用途不明品（9）　滑石製石鍋の再利用品で側面を四面とも削り、裏面に穴を穿つが貫通していない。現存7.6×5.3×2.5cm。

表採（図57）

龍泉窯系青磁

椀（10・11）　高台径5.5・7.5cm。10は灰色の精良な胎土に灰緑色の釉を外面高台際まで施し、見込みに「利」の文字が判読できる。I 類。11は灰白色を呈する胎土でキメは粗い。明青緑色の釉が全面に掛かっているが、高台畳付と底部外面は釉を拭き取っている。見込みの釉も環状に掻き取る。IV 類。

同安窯系青磁

椀（12）　口径17.1cmに復原される。胎土は黄灰色を呈しキメは細かい。茶色味をおびた灰緑色の釉を外面の体部下位まで施しているが、内面は釉の掛け残しがある。口縁部上位まで回転ヘラ削りして、口縁端部を外反させる。III 類。

瓦類

軒丸瓦（13）　暗青灰色の胎土にやや多めに砂粒を含む。瓦当面には左巻きの巴文を内区に、外区には珠文を密に配している。焼成、還元ともに良好。

金属製品

各遺構出土の金属製品

SD055～SK035 出土金属製品（図58）

鉄釘（1～5・7～9）1はSD055、2・3はSD130 4はSD147、5はSD170、7はSD190、8はSD227、9はSK001で出土。いずれも断面は四角形、一部は錆により変形している。2は中位で屈曲する。

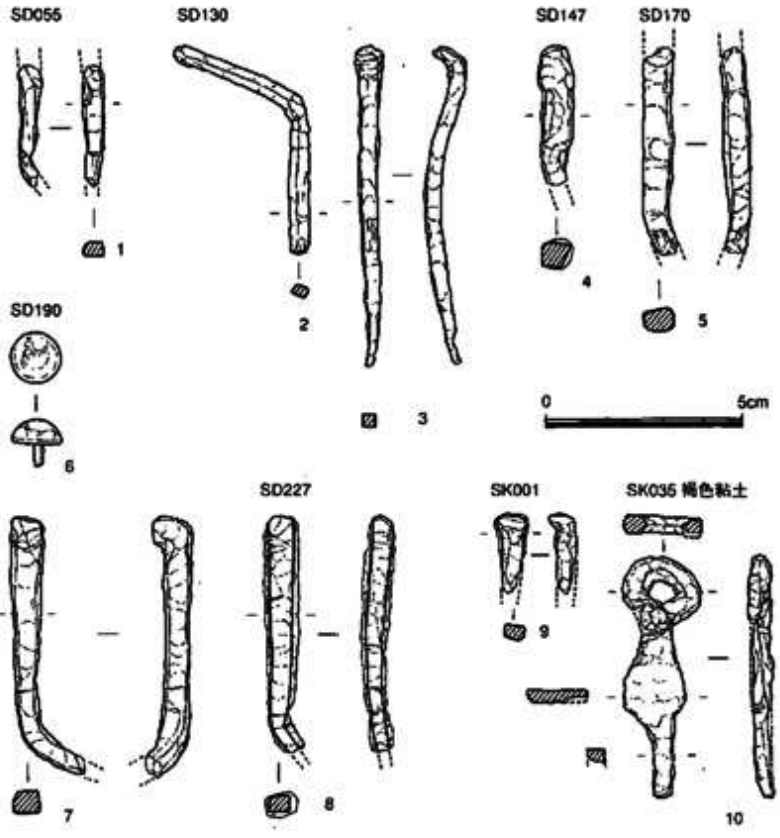


図58.149SD055・130・147・170・190・227
SK001・035出土金属製品実測図（1/2）

装飾留具（6）　銅製で、直径1.3cmの半球状の頭に細い足が付く。先端は欠損しているので形状は不明。頭部には金メッキが残る。SD190出土。

環状金具（10）　現存長6.2cm。上部は直径2.0cmの環状になっている。鉄製で、鍵の可能性も考えられる。

SX003～SX085 出土金属製品（図59）

鉄釘（1～8・13・15・16・19）　1・2はSX003、3はSX008、4～6はSX010、7・8はSX025、13はSX059、15はSX080、16はSX081、19はSX086出土。いずれも一部欠損しており、8のみ9.1cmを測る。15・16・19は錆で肥厚している。

鏨（9・10）　現存長21.5・20.0cm、最大幅2.5cm、厚さ0.9cmで先端を欠質するが、ほぼ同寸法である。鉄製で重量感がある。

刀子（11・17・18）　11・17は刀身部で切っ先は欠損、18は刀身の一部と中子で、関は錆のため不明瞭である。11はSX039、17・18はSX085出土。

不明製品（12）　現存長6.5cm、幅1.4cmで、直径0.2cm程の鉄製心棒を板状の鉄を折り曲げ

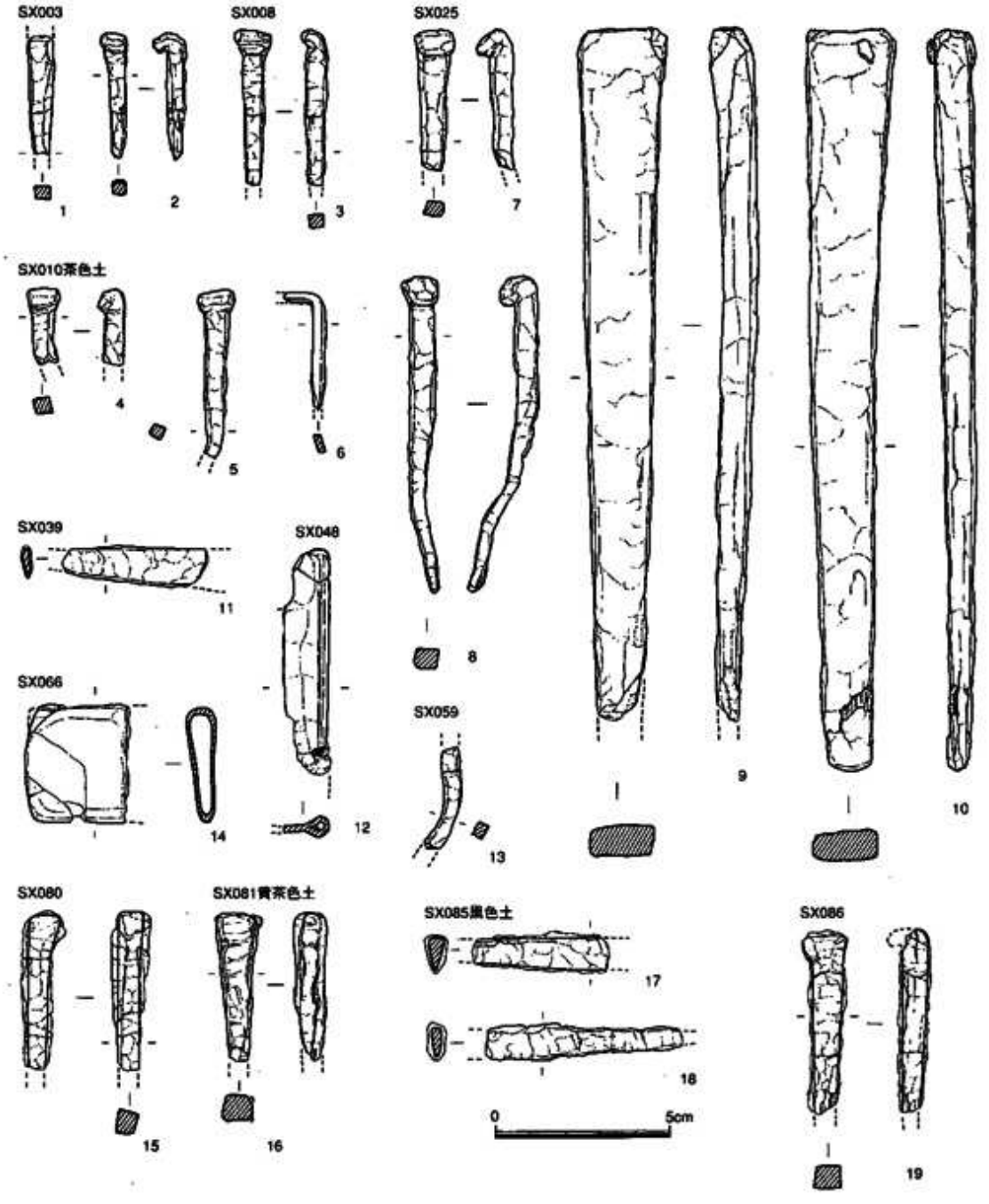


図59.149SX003・008・010・025・039・048・059・066・080・081・085・086出土金属製品実測図（1/2）

て挟んでいる。SX048出土。

口金（14）　責金とも言う。幅3.4cm、長さ3.0cm。刀身を固定するため、鍔の下にあて金したもの、銅製品。SX066出土。

SX090～SX158 出土金属製品（図60）

鎌（20）　現存長17.3cmで刃部の厚さ0.3cm。一方の端部は折り曲げている。鉄製。

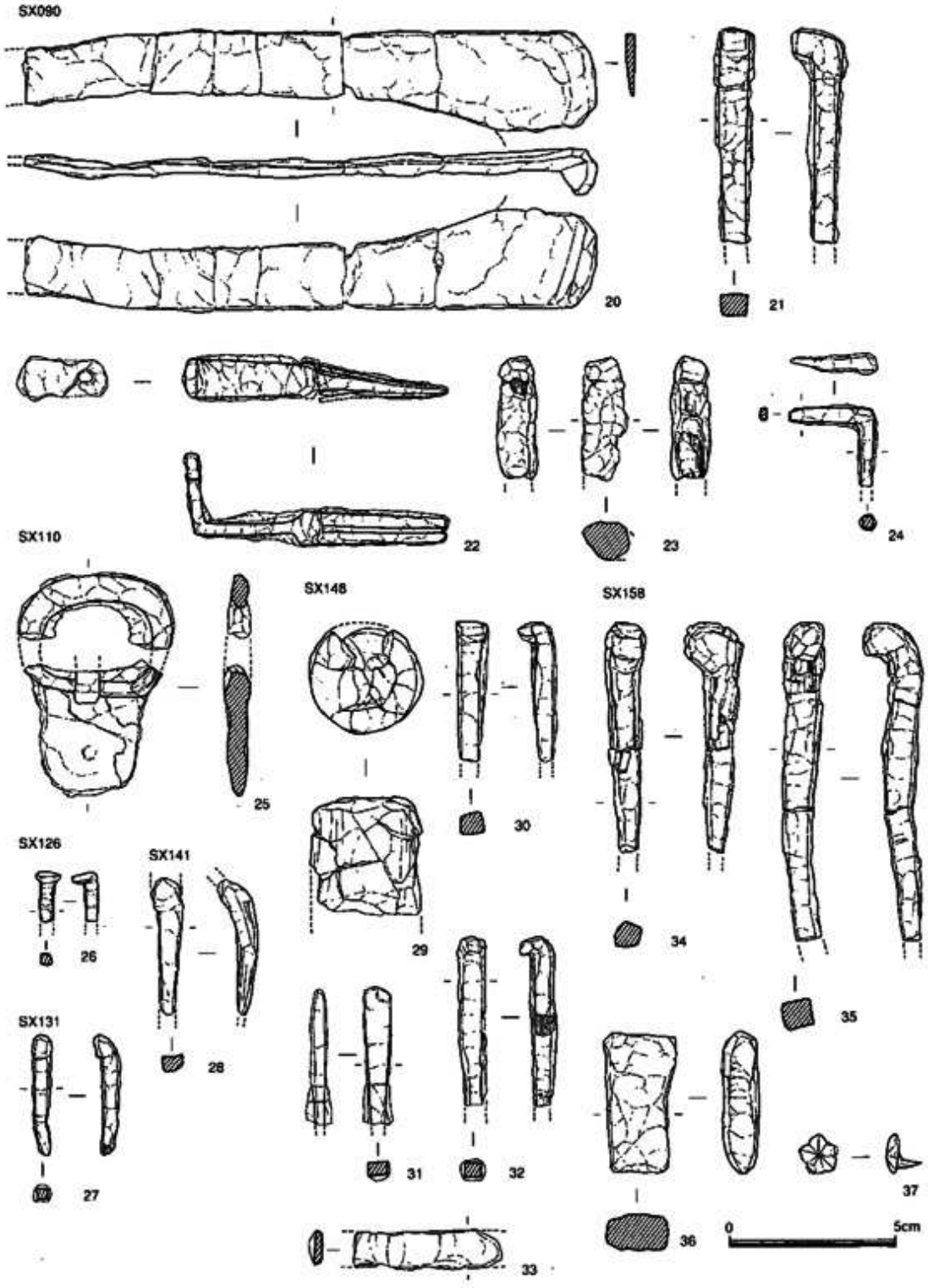


図60.149SX090・110・126・131・141・148・158出土金属製品実測図（1/2）

鉄釘（21・24・26～28・30～32・34・35）24は直角に曲がる。21・24はSX090、26はSX126、27はSX131、28はSX141、30～32はSX148、34・35はSX158出土。

海老錠（22）　7.0×2.8cm。二枚バネを使用した錠で、牡金具。SX090出土。

不明鉄製品（23）　現存長3.7cm、錆による変形が著しいが割れ口に木質が若干残っている。SX090出土。

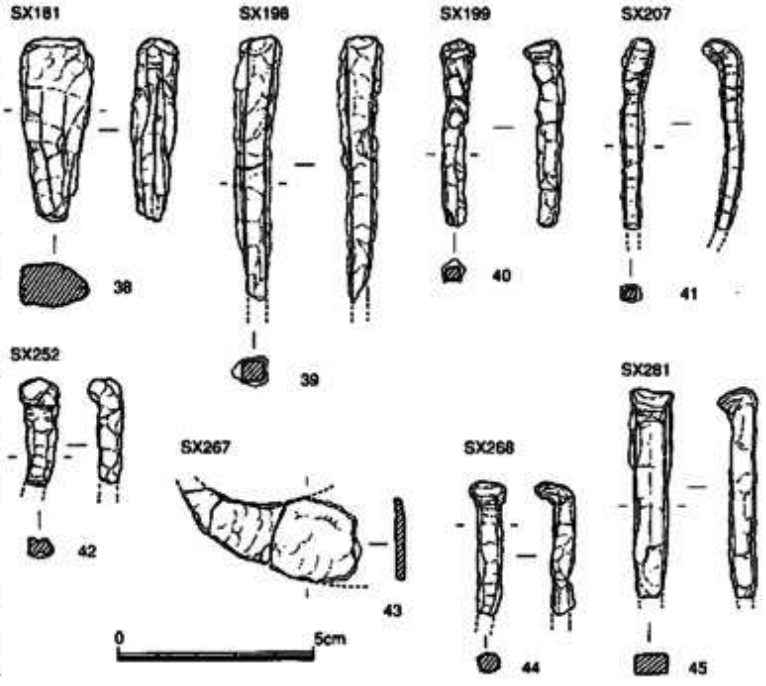


図61.149SX181・198・199・207・252
267・268・281出土金属製品実測図（1/2）

鉸具（25）　6.8×4.7cm。銙帯の一端につける金具。SX110出土。

不明鉄製品（29）　円柱状の形状をしており、直径3.5cm、現存長は3.5cmを測る。SX148出土。

刀子（33）　刀身のみ残る。SX148出土。

楔（36）　4.3×2.2cmで、下端はやや尖る。鉄製。SX158出土。

鈴（37）　頭部は星型に装飾し、針は0.7cmほどである。銅製品。SX158出土。

SX181～SX281 出土金属製品（図61）

不明鉄製品（38）　現存長4.7cm。先細りだが、先端は欠損する。SX181出土。

鉄釘（39～42・44・45）　頭部を短く折る。39はSX198、40はSX199、41はSX207、42はSX252、44はSX268、45はSX281出土。

火打金（43）　幅4.6cm程で、厚さは0.2cm。鉄製で、幅広い方は山型になると考えられ、ここでは山型の火打金とした。携帯用であろう。SX267出土。

各土層出土金属製品（図62～図64）

鉄釘（1～11）　1は湾曲しているが、9.0cm前後。すべて最上層出土。

鉄鏃（12）　鏃身が三角形を呈し、下方に関が残っている。錆で覆われているが、レントゲ

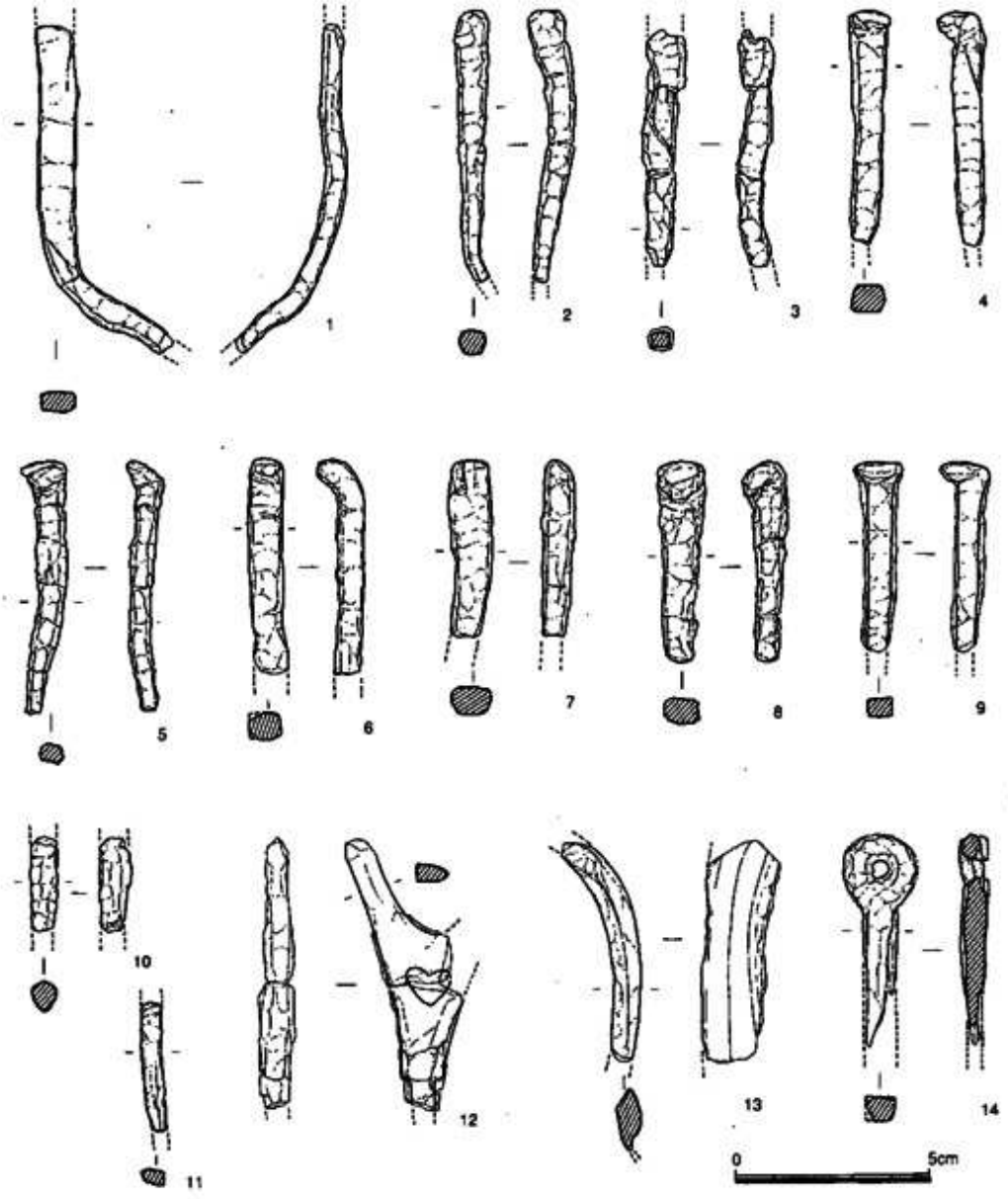


図62.最上層出土金属製品実測図（1/2）

ン写真で中央に猪の目型の透かしが確認できた。現存長7.0cm。最上層出土。

不明銅製品（13）　器の口縁とも考えられるが正円形になっていない。端部は玉縁状に肥厚させる。最上層出土。

環状金具（14）　現存長5.6cmで下端は欠損している。鉄製で鍵の可能性も考えられる。最上層出土。

鉄釘（15～18・22～25）　先端がいずれも欠損している。15は明茶色土、16～18は黒色土、22～24は灰黒色土、25は明茶色砂土出土。

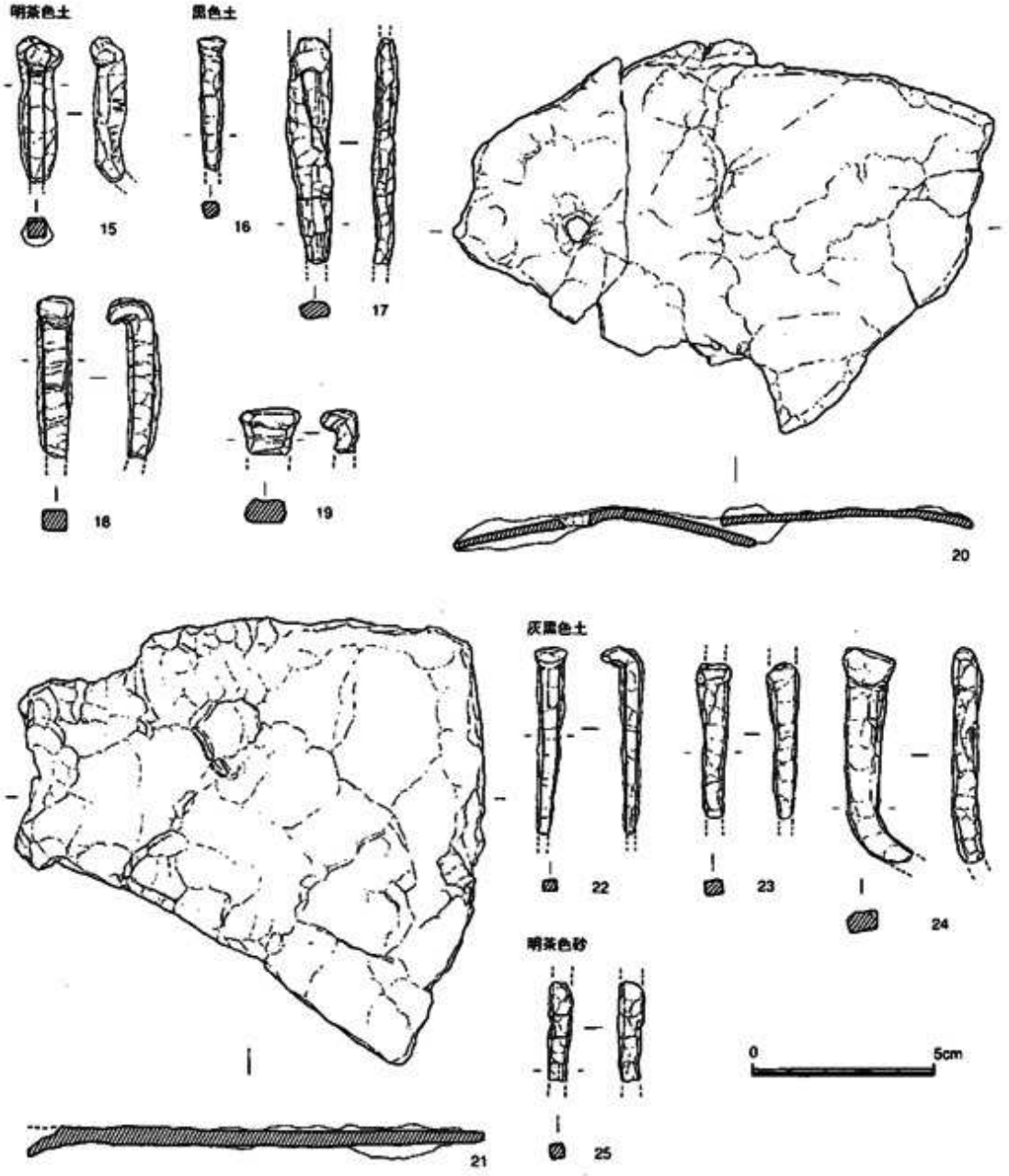


図63.明茶色土・黒色土・灰黒色土・明茶色砂出土金属製品実測図（1/2）

不明鉄製品（19・20・21）　19は幅1.4cm程の鉄を釘の頭のように折っている。太めの釘かもしれない。20・21は板状の鉄製品で厚さが0.3・0.5cm。いずれもやや丸味があり、20は二枚の鉄が故意か偶然かくっついている。すべて黒色土出土。

銅銭（1～8）　1は「元祐通寶」でSX103出土、2は「開元通寶」、3は「皇宋通寶」4は「嘉祐通寶」、5・6は「元豊通寶」、7は「元符通寶」、8は「政和通寶」ですべて最上層出土。

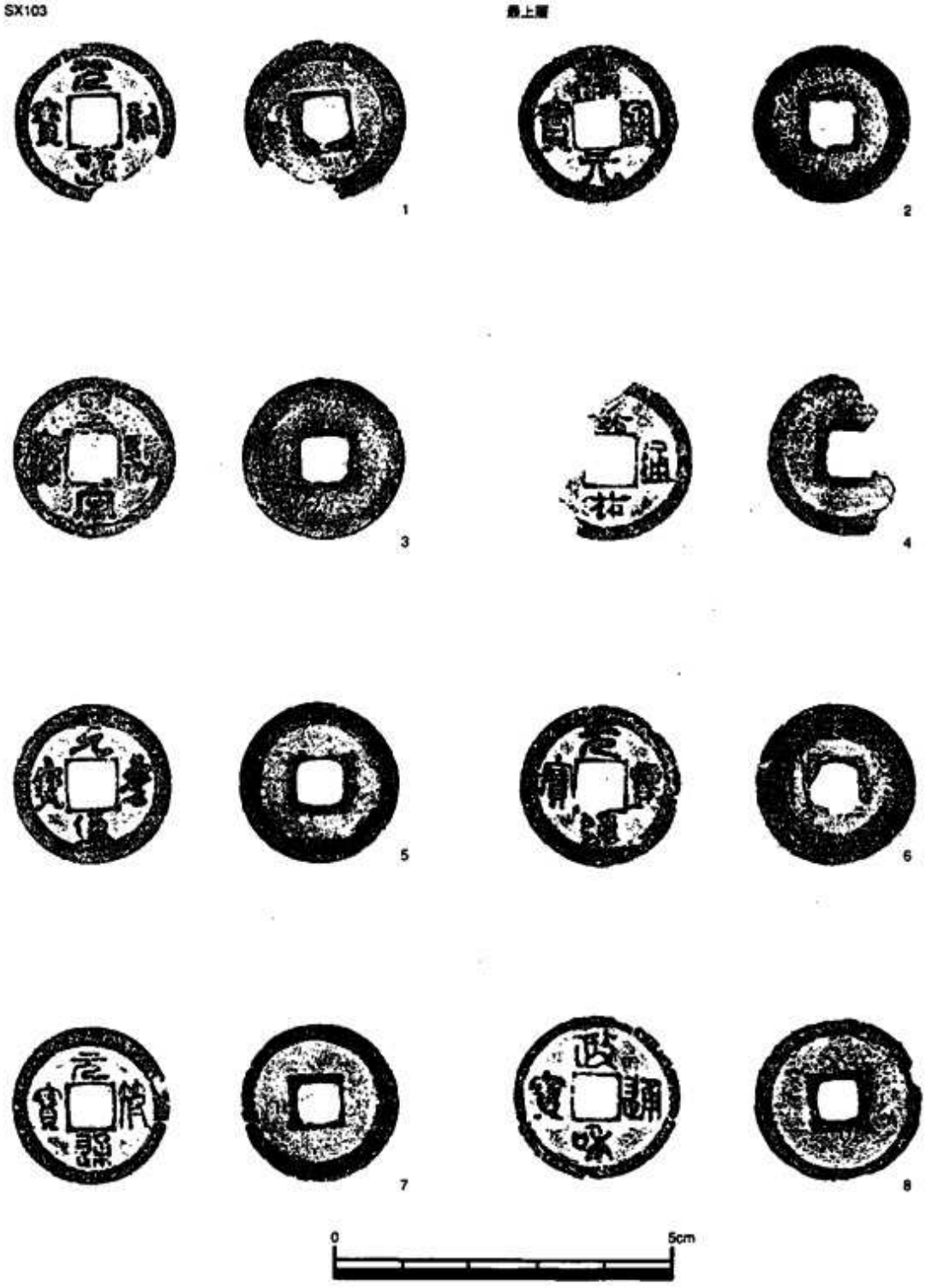


図64.149次出土銅銭拓影（1/1）

小結

・SD015は古墳時代の坏から、糸切りの在地土師器まで含んで年代に幅があるが、陶磁器や国産陶器、瓦質土器等から13C後半から14C前半までが下限と考えられる。

・SD040はXII期まで。SD140で出土した坏d、坏c、皿aは長岡京で出土例があり、出土土師器の殆どに磨きが施されている。下限は8C末までと考えられる。

・SD165の殆どの遺物は8C代におさまるが、9C初頭と考えられる土師器の坏aが出土しているので下限を9C初頭とする。

・SD170は須恵器の蓋、坏いずれもSD165より古く、8Cの中頃までと考えられる。

・SD185は8C後半までと考えられる。

・SD190は9Cに下る遺物は含まれておらず、8C後半までと考えられる。

・SK092は共伴土師器は少ないので、破片資料であるが陶磁器で検討すると龍泉III・IV類が出土しており、下限は14Cと考えられる。

・SX010はSX010→SX010黒灰色土→SX010茶色土とSX010茶色土が最も古く、SX010茶色土から14Cの後半からみられる土師質擂鉢が出土している。

・ SX085はSX085が一番上層で以下の層の暗灰色土、黒色土、灰色土の層位関係は不明。出土土師器から奈良時代を中心とし、下限は9C前半までと考えられる。

・SX090の土師器・坏aは9C初頭に位置づけられるもので、共伴する須恵器・壺、黒色土器・風字硯とも矛盾はない。従って奈良時代を中心とし下限は9C初頭と考える。

・SX110は土師器・坏a、皿a、甕aの形状から9C前半までを下限とする。

・SX207は主体は8C後半であるが、丸坏や小皿a等の土師器も出土、平安後期が下限と考えられる。

・SX263は土師器の小皿aも出土、下限を平安後期までと考えられる。

3.出土金属製品の保管状況について

今回の条坊149次調査の報告書作成にあたり出土金属製品の抽出・整理をおこなったところ、鉄・銅の材を問わず劣化が進行しているものが見受けられ、再処理あるいは保管状況の改良を必要とする状況が生じていた。これらの遺物については応急的な保存処理をおこなってから約3年半が経過しており、当時の保存処理の方法、今までの保管方法に何か問題がなかったかどうか考える必要がでてきたとも言える。この遺跡の出土金属製品に限ったことではなく、今後も増加していく遺物に対応していくためにもここでもう一度出土金属に対する現状を把握し、処理・保管方法について検討したい。

a.劣化の状況

条坊149次調査の出土金属については以下のような状態が認められた。

（鉄製品）

・表面に黄～黄褐色の粉状の錆が生じていた。

・材軸方向の亀裂、あるいは元々あった亀裂の拡張、そこからの崩壊。

・錆汁の発生。見つけた段階ではすでに錆汁が乾燥し、黄褐色の跡を残していた。

・表面の剥離。

（銅製品）

・灰緑色の脆い錆が銅銭の表面に生成され、細片化した部分があった。

以上の様な劣化は同じ様な状況で保管しているその他の金属製品についても個体差はあるものの当然考えられる現象である。

b.今までの保存処理と問題点

具体的な処理法については既に述べているので（下川、1996）、今回はこの処理法の中で後々の劣化を誘因すると考えられる点を以下に挙げてみる。

(1) 付着物除去

俗に言う“悪い錆”とされる錆を充分に除去できていない可能性。

(2) 温湯洗浄・強制乾燥

可溶性の塩類を溶かし出すのが目的であるが水道水を用いることや一度に処理する遺物の量、時間設定に問題はなかったか。充分に塩類の除去はできていたのか。

(3) 樹脂含浸

樹脂そのものの劣化はないか。ピンホール等の極々小さな空隙を完全に樹脂でコートできていたか。

c.現在の保存処理と問題点

基本的な作業内容は以前と変わっていないが、1996年4月以降、太宰府市文化ふれあい館内に設置された次の保存処理機器を使用するようになった。

・X線透過写真撮影装置……（株）ハイテックス製　HI-150S型

・脱塩処理装置（オートクレーブ式）……（株）平山製作所製　DSM-421K型

・熱風循環式恒温乾燥機……（株）タバイエスペック製　SPH-201型

・減圧樹脂含浸装置……（株）関西保存科学工業製　IF-90型

一般的にはすでに確立されていると考えられる方法で処理を行うようになり、以前に比べると処理効果は上がっているものと考えているが、脱塩処理の点で問題がある。オートクレーブによる脱塩はその効果が明らかにされているが、実際に様々なケースの遺物を処理する場合のそれはあくまでも参考でしかなく、当然オリジナルなデータを得たいわけであるが、処理効果

についての具体的な数値をとらえるまでに至っていないのが現状である。

d.保管時の環境

シリカゲルを封入したとはいえ、その効果は約1年である。またケースの身と蓋の間は幅約1.5～2.0cmのビニールテープで止め、空気の出入りが極力ないようにしている。しかし、ケースを置いている部屋の温湿度は年間を通して季節毎の格差が大きく、また日格差も大きい。もっとも、プレハブで保管していたときに比べるとだいぶ均一になってきたようにも思われる。これらの周囲の環境が劣化の原因となる可能性は充分であるが、具体的にその相関関係について明確に言えるところには至っていない。また完全に空気の出入りを遮断するのは不可能であること、室内の換気ダクトは外気を取り込むようになっているため換気中は相当量の外気が室内に流入することから、文化財の劣化に関係するといわれている空気中の汚染物質がケース内に入り込んでいく可能性もある。ただしこれについてはプレハブも現在の建物も国道3号線や九州縦貫自動車道等の幹線道路周辺といった汚染物質（NO_{χ}）高濃度地帯と考えられる場所からは約1km程入り込んだところにあり、史跡地や住宅地といった状況もあいまって緑が多く、車の量も少ない環境に立地する事からそれ程の劣化原因になるとは考えていないが近辺の汚染濃度など具体的な状況を確認したいと考えている。

e.今後の処理について

すでに発見した劣化の進行が認められる遺物については脱塩処理と鉄製品にはパラロイドNAD-10の30%溶液の減圧含浸、銅製品にはパラロイドB-72の5%アセトン溶液を含浸させて様子をみているが、劣化の原因が特定されたわけではないので適切な処置といえるかは不安が残る。

a～dで述べた劣化原因と考えられる点についてはそれぞれ以下のように対応していきたい。

(1) 付着物除去

X線透過撮影による充分な構造の把握のもとに錆の除去を実施する。

(2) 脱塩処理

すべての遺物に塩類が含まれていると想定し、一括して行う。その際充分な時間と処理回数を設定する。また早急に処理効果をチェックできるような方法を確立させるべきである。

(3) 乾燥・樹脂含浸

遺物内部に介在する水分は劣化の主たる原因であるし、樹脂含浸後もピンホール等のごく僅かに外気と接する部分があればそこに水分の吸着・凝集がおこり劣化を招くことから、充分な乾燥と樹脂含浸を行う。錆汁が生じるような遺物に関しては水分の凝集箇所が無くなるまで作業を繰り返すようにする。

(4) 保管

メタルチェッカーで残存メタルの有無を確認し、メタル反応のあるものについてはRPシステム（三菱ガス化学）を用いて脱酸素状態で密閉して保存するようにする。

f.まとめ

出土金属が劣化する時、様々な要素が絡み合っていることから明確な劣化原因を特定するのは難しいといえる。埋没環境が違っていたり、使用している材料が違ったりしてもすでにその劣化の程度には個体差が現れているはずであり、それを一様にマニュアル化した作業の流れの中で処理してしまうのは非常に危険である。しかしながら、確実に増加していく金属製品を迅速に処理するためにはある程度画一した方法が必要であるという矛盾もある。保存処理作業の中で、何処まで確実に処理を実施できたか、正しい遺物の保管方法がとられているかなどの確認していくべき課題は多く、その方法すら手探りの状態と言っていい状況ではあるが、今後に活かしていくためにも継続した取り組みが必要と考えている。（下川可容子）

文献

下川可容子（1996）「各調査出土金属の保存処理」『大宰府条坊跡　IX』太宰府市教育委員会

IV.自然科学分析

1.分析処理過程

遺跡から出土する様々な情報の内、調査担当者ではどうしても分析できないものがある。その中の一つとして自然科学分析による手法で解決できるもので、これら自然科学分析には各種目的に応じて、試料の抽出から分析結果を導くまでの諸過程に特殊技術を要するものから簡便な方法で採集できるものまである。太宰府市では、これら自然科学分析によって得られる情報を、遺跡調査精度によって捨てられることを極力避け、できる限りの情報を得る努力を行ってきた。以下に太宰府市で実施している分析試料抽出から分析成果を得るまでの過程を述べる。また自然科学分析試料を抽出することで得られる情報と、そこに表裏一体として横たわる課題についても記述する。

a.試料の抽出

試料は調査担当者の意志により、目的をもって抽出保管される。目的とする内容およびそれぞれの抽出方法については、表２に記載した通りである。表に示した手順を踏んでの抽出保管となるが、目的と分析方法が整合しない場合や、過剰な期待による抽出も見受けられ、これは分析方法と試料の抽出保管に関する知識の無さに起因している。しかし、行政的にどこまでの能力を期待できるのかは、個人の努力に委ねられていることも否めず、できるだけマニュアル化を進め、試料抽出ならび保管が抽出者の意志（目的）に答え得る内容であるように努力し

表２.分析目的と採集方法

	脂肪酸分析試料	花粉分析試料	炭素年代試料	材質分析（植物）	材質分析（金属）	材質分析（鉱物）	種子同定	動物種同定
採集試料	土壌・石器・木器	土壌（湿元粘土）	炭化物・植物遺体	植物遺体	金属	土壌・石製品	植物遺体	動物遺体
採集器具	スパチュラ	スパチュラ 移植ゴテ	スパチュラ 移植ゴテ	スパチュラ 移植ゴテ	スパチュラ 移植ゴテ	スパチュラ 移植ゴテ	スパチュラ 移植ゴテ	スパチュラ 移植ゴテ
器具の水洗	○	○	○	○	○	○	○	○
器具の熱湯処理	○							
採集前の処理	土層表面を削る	土層表面を削る						
採集箇所	目的とする各土層 および地山土	目的とする各土層						
保存環境	冷凍	常温常湿	常温常湿	冷蔵・浸水	乾燥	常温常湿	冷蔵・浸水	常温常湿
保存容器	アルミ箔	ビニール袋	アルミ箔に包み、 ビニール袋に密封	ビニール袋 フィルムケース等	タッパー等	ビニール袋他	ビニール袋他 フィルムケース等	ビニール袋他
採集量	400g～1000g程度	ビニール袋（中）程度	大きい破片が望ましい	大きい破片が望ましい	大きい破片が望ましい	大きい破片が望ましい		同定可能部位に注意
注意事項	有機物に触れない ビニール袋も厳禁	採集直後に密封	採集直後に密封		錆などの劣化を防ぐ			試料の水洗は不可 付着物除去のみ

その他：粒土分析・土壌化学分析等

ている。

つづいて試料抽出および保管に関して、分析者の手に渡るまでの履歴を情報として保管している。この履歴記載の目的は、試料の登録を目的としているが、それだけではなく分析者の行った分析成果を直接遺跡情報として加工するのではなく、試料抽出者の行った試料抽出および保管状況に、分析精度に関わるノイズがなかったかどうかの検討を踏まえた上で、遺跡情報へ還元する必要があると考えたことにある。例えば、花粉分析試料として採集された試料の場合、土層観察面を数週間に渡って露出し、その後新鮮な面を露出させる目的で表面を１回ないし２回程度軽く削り取った後、堆積土層に沿って試料を抽出した場合、現代の花粉の混入をどれだけ見込んだ解析が可能となるか。つまり現代の花粉の汚染を知らせた上で解析するか、全く知らせず解析させるかでは、得られる情報に大きな開きが生じることになる。これは分析者に問題があるのではなく、試料抽出者に問題がある。したがって、分析者の保護を目的としている。このような目的から、試料抽出から保管環境にわたる情報を情報カード（表３）に記入し、

表３.分析試料採集情報カード

Ar　2.　遺跡　3.遺構番号　（　区 S-　）　4.遺構年代：
第　次調査　5.目的：
所在地：　6.記録者（採集者）：

採集目的　a.花粉分析　b.残存脂肪分析　c.動物種同定（動物・昆虫）　d.植物種同定（樹種・種子）　e.年代測定　f.粒度分析　g.材質同定（顔料・鉱物岩石・金属）　h.

表土除去年月日　年　月　日　天候；　（野外放置期間：　日）
試料採集年月日　年　月　日　天候：

採集試料種別　a.土壌　b.動物遺存体（動物・昆虫）　c.植物遺存体（木片・種子・炭化物）　d.金属　e.液体　f.

採集器具　a.移植ゴテ（未洗浄・洗浄）　b.スパチュラ　c.竹ベラ　d.ガラス棒　e.

保管容器　a.ポリエチレン容器（フィルムケース）　b.ビニール袋　c.ガラス瓶　d.アルミ箔　e.アルシェネット　f.タッパー　g.

採集状況

採集土層図化　試料点数：

保管状態　a.冷凍環境　b.冷蔵環境　c.浸水環境　d.多湿環境　e.常温常湿環境　f.薬物添加環境（　）　g.乾燥環境

分析委託年度：　分析者：

自然科学分析試料採集記録　太宰府市教育委員会

表４.分析試料採集情報カード（コンピュータ登録）

遺跡名　島遺跡　遺構名　B～E2・3区　記録者　城戸康利　試料等級 0
調査次数　004　次調査　調査年度　平成9年度　遺構年代　近石器　分析目的　火山灰同定
所在地　太宰府市大字大佐野192　分析者（株）パリノ・サーヴェイ

採集道具　既使用（洗浄）　保存容器　ビニール袋　保存環境　常温常湿　保管場所　坂本事務所
表土除去年月日　1997.10.1　晴れ　抽出試料数　2　点
試料採集年月日　1997.10.15　晴れ　保管籍番号　2　試料種別　土壌
試料採集状況　火山灰の純層と考えられるものを面で検出した。検出後できるだけ新鮮な面を出しながら試料を洗浄した移植ゴテにて採集した。同一と考えられる層内で色調、粒度が異なっていたため垂直方向で2種類採集している。

掲載報告書
委託事業名　佐野遺跡群出土品分析業務委託　本報告　○
委託年度　平成　9　年度　情報カード有無　○
委託完了　完了　写真ネガファイル番号　1　分析目的有無　○
分析可能性　○
資料有無　有り
太宰府市教育委員会　文化財調査係

コンピュータへ登録し情報の整理を行っている（表４）。このコンピュータ登録の際、試料抽出方法および保管環境の適否によって、試料に等級をつけ分析するかどうかの判断を行っている。試料等級に関しては、試料採集方法と保管環境に関するマニュアル（表２）を作成して以降、あまり不適合のものは減少したが、このマニュアル化以前については不適合試料が多く、現在未分析試料として保管している。ただし将来への淡い期待から廃棄せず、保管しているが、これとて際限なく保管できるものではなく、いづれは淘汰されることになる。

b.分析

現在太宰府市独自で行える分析方法には、以下に示す６種の分析が可能である。

１）赤外線TV処理（墨書解析等）

２）軟X線撮影（遺物形状確認等）

３）実体顕微鏡（微細遺物の形状確認等）

４）生物顕微鏡（樹種鑑定等）

５）金属顕微鏡（使用痕跡観察等）

６）螢光X線分析機（化学組成等）

これら分析に専属の担当者が配置され、それぞれ実施しているのではなく、掛け持ちで実施しているのが現状である。また上記分析機器で実施できないものや、分析者の力量では解析できない内容のものに関しては、外部機関へ委託し処理している。外部機関への委託によって処理されるものは、過去の事績から以下の分析項目が該当する。ここで委託業務として取り上げた分析項目は、過去業務委託した内容であり、今後の抽出目的によって多岐に及ぶことはあるが、上記の太宰府市で実施可能な分析以外は、全て外部委託によって処理されることになる。

１）花粉分析（古環境復原等）

２）鉱物・岩石鑑定

３）粒度分析

４）土壌化学組成（湿式分析）

５）炭素年代測定

６）火山灰分析

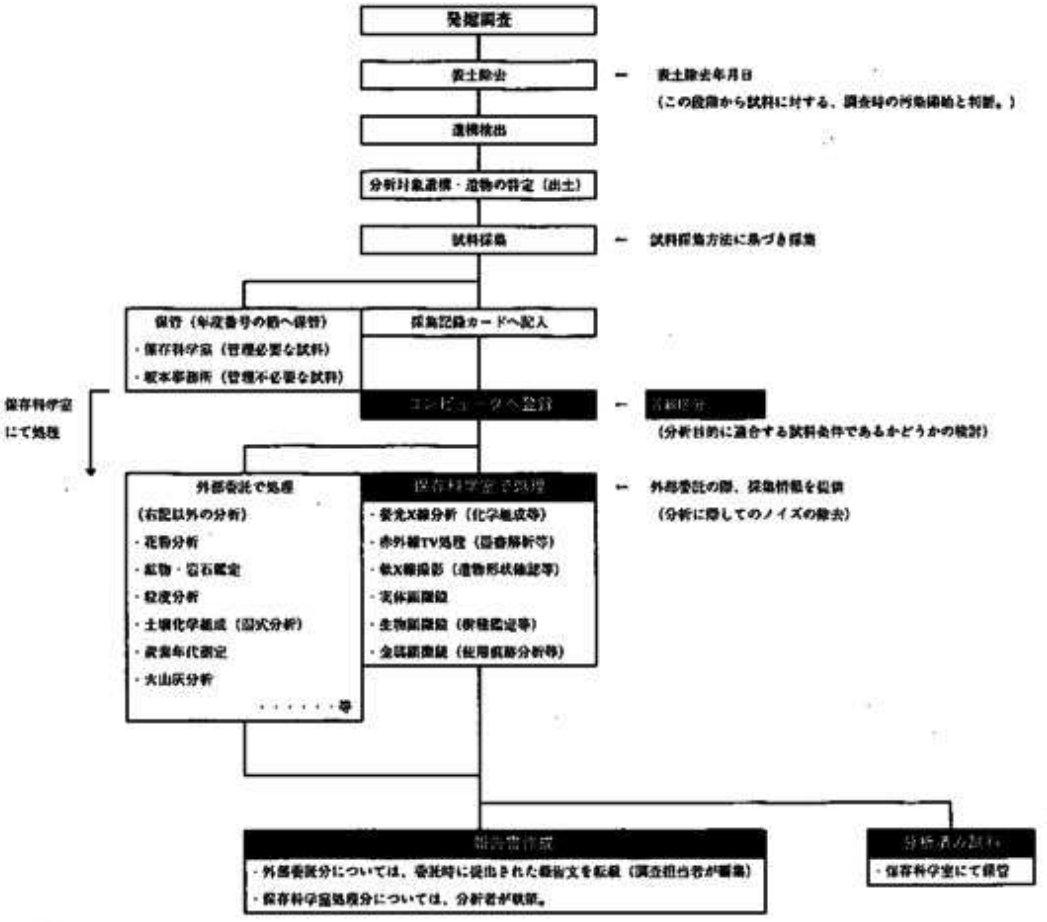
７）残存脂肪酸分析

c.成果

分析成果については、発掘調査報告書作成時に掲載するように努めているが、予算の関係から調査報告書刊行に間に合わなかったものや、既に報告書刊行がなされているものについては、未報告のまま放置されている。将来的には発掘調査報告書刊行の現場周辺をまとめる形での分析成果報告を掲載する必要がある。

以上、太宰府市で行っている一連の流れを表５にまとめた。

表５.自然科学分析試料の採集から報告までの流れ



d.課題

自然科学分析によって得られる情報は、調査担当者が有している分析能力を上回る成果をもたらしてくれる場合もあり、今後とも実施していくべき分析方法であろうと考えているが、以下に列記する課題もあり、悪戯な適用は無意味な試料の増加等検討すべき時がきている。

1）分析方法と調査担当者の目的が適合していない。

・「とにかく採集すれば良い」という無目的な方式で採集されている。

・分析に適合する量が不足している。

・保管環境が不適当（例：花粉分析試料を冷凍した等）

2）採集方法の認識不足

・表２を配布しているにも関わらず、学習されていない。

3）保管後の管理不備

・多湿・浸水保管試料が乾燥してしまった。

4）採集記録の不備

・未提出（情報として残らないため、委託事業からは除外されることになる。）

・分析目的が整理されていないか、不明瞭。

5）採集記録はあるが、試料が無い。

・保管場所が記載されていない。

6）報告書作成時の忘れ。

・分析が終了し、委託報告書が完成しているにも関わらず、調査報告書作成時に掲載されない。

7）自然科学分析成果の活用がなされていない。

・「科学分析」という項目名は無くなったが、分析成果を掲載するのみで、遺跡情報として消化されないものがある。

8）上記課題克服が面倒だという理由から、調査時から採集を放棄する。

上に示したような様々な課題があるが、課題1）が全ての課題の発端となる。担当者の僅かな努力によって解決する課題は別として、行政内部においてこれら全ての課題を克服し、かつ遺跡の発掘調査および行政事務を抱え処理するためには、個人の努力によって賄われている側面もあり、どこまで要求するべきか躊躇する面も存在している。

2.分析

a.金属生産用具の分析

金属製品を生産したであろうと考えられる工具および鉱滓が、表6に示したように主にI面からII面より出土している。鉱滓と考えられる遺物には金属反応を示すものや、湯玉状のものもあり、何らかの生産活動が為されていたことを充分想定できる。この中で生産工具にあたるフイゴ羽口およびルツボ片に付着している成分について化学組成の同定作業を実施した。

1）分析作業

分析作業は、大宰府史跡第170次調査報告時に実施した、エネルギー分散型螢光X線分析による化学組成同定法を行った。具体的な方法に関しては、報告書を御参照いただきたい（太宰府市教育委員会、1997）。なお分析を実施した個体は以下に記載したものである（巻頭図版）。

①149SX017　R-001（ルツボ）

ルツボ内面に付着している緑色および白色部分

②黒色土（羽口）

羽口外面に付着している緑色部分

2）分析結果

分析を行った結果、以下に示す金属成分が検出された（図65）。なお鉄については、埋没時の付着物である可能性もあり、同定金属からは除外した。

試料①：銅・鉛・錫

表6.条坊跡149次調査出土鉱滓一覧

番号	遺構・層位	報告遺構名称	地区	検出面	日付	備考
1	撹上層		B2	I	940509	
1	撹上層		D6	I	940427	金属
1	撹上層		D6	I	940516	金属
1	撹上層		C2	I	940422	
1	撹上層		E5	I	940422	
1	撹上層		E8	I	940414	
1	撹上層		B5	I	940428	
1	撹上層		D7	I	940426	
1	撹上層		G4・5	I	940415	
1	撹上層		E6	I	940422	
1	撹上層		E7	I	940425	
1	撹上層		C4	I	940509	
1	撹上層		C8	I	940513	
1	撹上層		E4	I	940422	
1	撹上層		E7	I	940414	
1	撹上層		A9	I	940519	
1	撹上層		F・G4	I	940413	
1	撹上層		C2	I	940428	
1	撹上層		D5	I	940509	
1	撹上層		C7	I	940516	
1	撹上層		B9	I	940513	
2	S-3	149SX003	F9	I・II	940408	
3	S-7	149SD007	F9	I・II	940408	
4	S-1	149SX010	F6	I・II	940413	
5	S-10黒灰色土	149SX010	F4	I・II	940425	
5	S-10黒灰色土	149SX010	F4	I・II	940425	
5	S-10黒灰色土	149SX010	E4	I・II	940425	
5	S-10黒灰色土	149SX010	F6	I・II	940425	
6	S-10茶色土	149SX010	F5	I・II	940512	
6	S-10茶色土	149SX010	F3	I・II	940510	
7	S-15	149SD015	E1	I・II	940421	候形滓
7	S-15	149SD015	E4	I・II	940422	
7	S-15	149SD015	E5	I・II	940427	
8	S-20黒色土	149SX020	F2	I・II	940527	
9	S-39	149SX039	D9	I・II	940426	
10	S-123	149SD040	C1	I・II	940517	
11	S-43	149SX043	G6・7	I・II	940415	
12	S-45	149SX045	D5	I・II	940520	
13	S-49	149SX049	E2	I・II	940421	
14	S-53	149SX053	F8	I・II	940425	
14	S-53	149SX053	E6	I・II	940516	
15	S-55	149SD055	E1	I・II	940601	
16	S-117	149SX117	D7	I・II	940516	
17	S-119	149SX119	E6	I・II	940516	
18	S-131	149SX131	C9	I・II	940518	
19	S-147	149SD147	E1	I・II	940527	
20	S-148	149SX148	F3	I・II	940530	
21	黒色土		B8	I・II	940517	
21	黒色土		C9	I・II	940517	
21	黒色土		C9	I・II	940510	
21	黒色土		B9	I・II	940517	湯玉状
21	黒色土		B5	I・II	940510	
22	S-95	149SK095	F4	III～V	940616	
23	S-158	149SX158	E5	III～V	940621	
23	S-158	149SX158	F5	III～V	940603	
24	S-160	149SE160	C5	III～V	940708	
25	S-160砂灰色土	149SE160	C5	III～V	940708	
26	S-170	149SD170	F4	III～V	940712	
26	S-170	149SD170	F4	III～V	940711	
27	S-181	149SX181	F1	III～V	940614	
28	S-185	149SD185	F4	III～V	940715	
28	S-185	149SD185	F4	III～V	940715	
29	S-198	149SX198	E5	III～V	940622	
30	S-241	149SX241	B8	III～V	940624	
31	S-243	149SX243	B8	III～V	940627	
32	S-249	149SX249	D9	III～V	940629	
33	灰褐色土		C7	III～V	940701	
33	灰黒色土		C3	III～V	940708	
34	灰茶色砂		A1	III～V	940530	
35	茶色土		B3	III～V	940527	
36	明茶土		B4	III～V	940520	

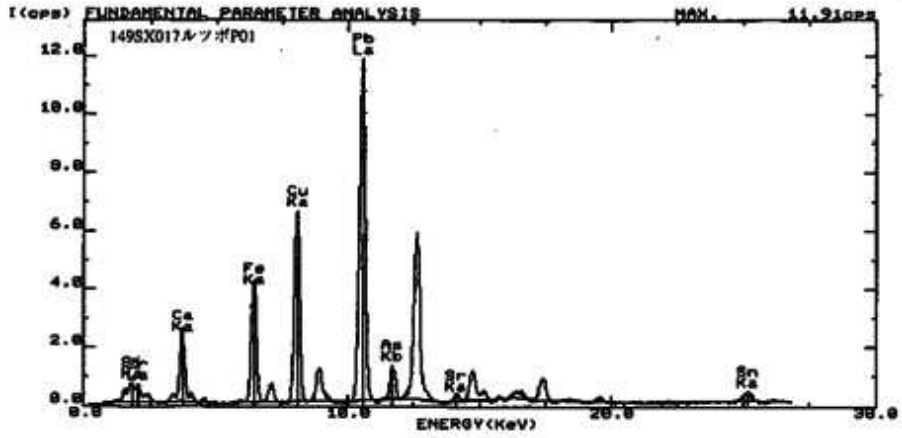
金属：金属検知器による同定のみで、化学組成については同定していない。

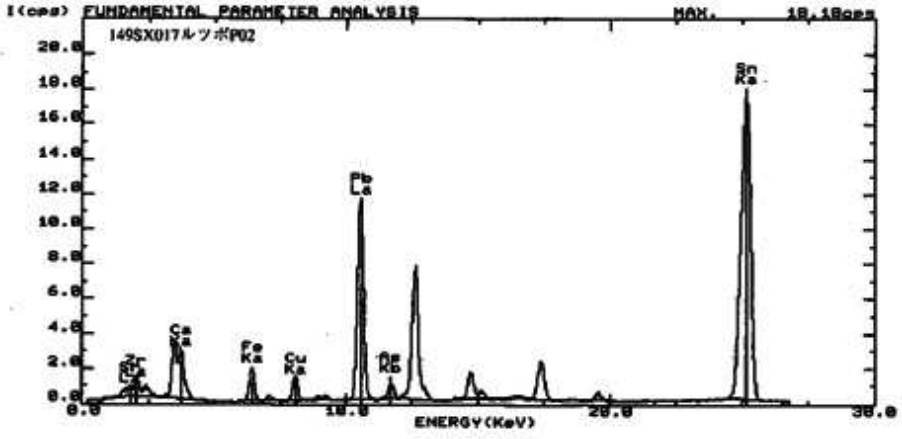
試料②：銅・鉛・錫

以上これらの金属を含有した製品が生産されたものと考えられるが、今次調査では鋳型の出土がなかったため、製品の特定はできていない。（中島恒次郎）

文献

太宰府市教育委員会（1997）『大宰府史跡』





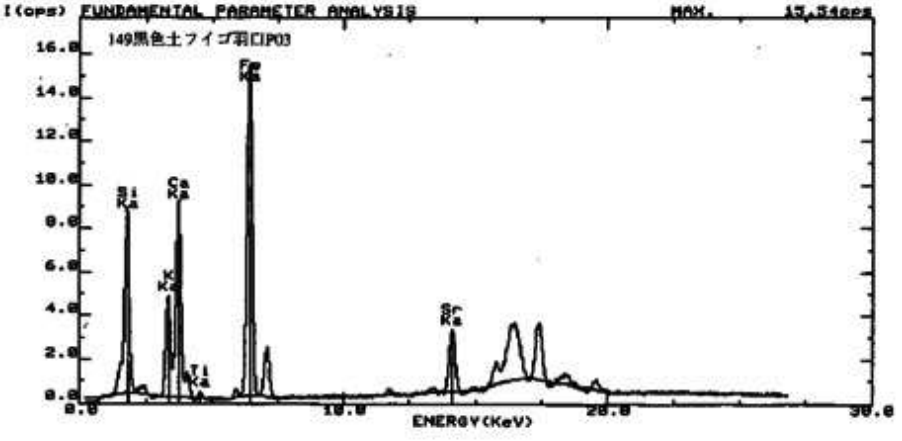


図65.定性分析結果（P番号：分析点を示す。巻頭図版と一致）

V. 調査成果と課題

1．搬入食器の出土状況

A. はじめに

大宰府へは、先学等が説くように国内はもとより、国外からもたらされた各種食器が数多く出土する。これら多種多様な食器の出土故に、各地の食器編年の相対年代決定の手掛かり、いわば空間上の安定性の確認として、多くの分析が加えられてきている。これら先学等の歩みについて析出する問題点および残された課題については別稿を用意し、本稿では各地の並行関係を掴む上での基礎資料となる、食器の出土状況について記述する。

今回報告を行なった大宰府条坊跡第149次調査地からは、緑釉陶器・灰釉陶器をはじめ多くの搬入品が出土している。これら搬入品の中で、実測図として掲載したものについての一覧を表7に示している。また、破片資料についても図化できなかたものについては、出土遺物一覧に記述している。御参照いただきたい。さらに出土状況を調査所見から判断し、表7に記載している。これは並行関係を問題とするとき、食器使用の共時性ないしは廃棄（埋置）の同時性をどの程度反映してくれているものかの判断基準となる。ただ出土しているという空間軸上での課題解決レベルから時空間軸上での課題解決レベルへの移行を表現しているとも換言できる。

B. 表作成にあたっての前提

a. 出土状況

出土状況から使用の共時性および廃棄（埋置）の同時性[1]を判断することは、理論的に考えられる材料を抽出するほど容易ではない。しかし、何らかの判断材料を持ち合わせなければ立論し難いため、本稿では以下に示す各要素を調査現場でどの程度満たしているのかを判断材料とした。この判断材料に関しては、すでに述べたことがあるし、ことさらに記述するまでもなく、多くの先学等によって記述検討されてきたことである（中島、1992）。

a）単一層である[2]。

b）遺物が集積している。

c）遺物の形状が完形であるか、近い状態のものであり、復原作業によって完形ないしは近い状態まで復原できるものも含める。

d）人的な行為が想定できる（流れ【廃棄】の方向が確認できる）。

e）遺物を包含している土層中に短期埋没を示す指標堆積物（角礫等）が混入している。

以上の材料が考えられるが、調査現場で認められる判断材料は他にもあるであろう。いずれにしても一括性を判断した根拠を如何に材料豊富に記述できるのかが、他者を納得させる材料に他ならない。したがって、遺構調査方法について方程式を用いて計算式を解いてゆく単一的

表7.条坊跡149次調査出土の搬入品一覧

番号	遺構	土層	性格	食器	器種	出土状況	図版番号
1	SE125		性格不明（井戸？）	黒色土器A類	椀c	c	図10-1
2	SE125		性格不明（井戸？）	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	c	図10-3
3	SD015	茶黒色土	溝	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	d	図11-13
4	SD055		溝	緑釉陶器（京都）	椀	d	図12-10
5	SD075		溝	灰釉陶器	椀	d	図12-14
6	SD227		溝	須恵器	こね鉢	d	図12-16
7	SD227		溝	須恵器	こね鉢	d	図12-17
8	SD140		溝	土師器	鍋a	c	図14-35
9	SD140		溝	灰釉陶器	壺c	c	図18-66
10	SD165		溝	灰釉陶器	小皿蓋	c	図19-14
11	SD170		溝	灰釉陶器	小皿	c	図20-13
12	SD185		溝	須恵器	壺	c	図22-35
13	SK035	茶色砂	土壙	須恵器	こね鉢	c	図27-1
14	SK078		土壙	須恵器	こね鉢	c	図27-2
15	SK078		土壙	須恵器	こね鉢	c	図27-3
16	SK095		土壙	緑釉陶器（東海）	椀×皿	d	図27-8
17	SX010	黒灰色土	性格不明（溝？）	須恵器	甕	d	図28-13
18	SX010	茶色土	性格不明（溝？）	須恵器	こね鉢	d	図29-19
19	SX010	茶色土	性格不明（溝？）	須恵器	こね鉢	d	図29-20
20	SX010	茶色土	性格不明（溝？）	緑釉陶器（東海）	椀c	d	図29-25
21	SX025		性格不明	須恵器	こね鉢	d	図30-10
22	SX030		性格不明	須恵器	こね鉢	d	図30-14
23	SX033		性格不明	緑釉陶器（京都）	皿	d	図30-16
24	SX048		性格不明	須恵器	こね鉢	d	図31-5
25	SX085		性格不明（溝？）	須恵器	小皿	c	図34-46
26	SX085		性格不明（溝？）	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	c	図35-53
27	SX085		性格不明（溝？）	緑釉陶器（京都）	耳皿	c	図35-54
28	SX085		性格不明（溝？）	灰釉陶器	双耳壺	c	図35-55
29	SX085	暗灰色土	性格不明（溝？）	灰釉陶器	瓶	c	図35-67
30	SX085	黒色土	性格不明（溝？）	緑釉陶器（防長）	皿	c	図36-76
31	SX085	黒色土	性格不明（溝？）	灰釉陶器	段皿	c	図36-77
32	SX085	灰色土	性格不明（溝？）	黒色土器A類	椀	c	図37-89
33	SX085	灰色土	性格不明（溝？）	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	c	図37-91
34	SX090		性格不明（溝？）	黒色土器B類	碗	c	図43-86
35	SX090		性格不明（溝？）	緑釉陶器（防長）	椀c	c	図43-87
36	SX110		性格不明	緑釉陶器（京都）	椀×皿	c	図44-9
37	SX110		性格不明	緑釉陶器（京都）	皿	c	図44-10
38	SX110		性格不明	緑釉陶器（京都）	皿（円盤）	c	図44-11
39	SX110		性格不明	緑釉陶器（京都）	皿	c	図44-12
40	SX110		性格不明	緑釉陶器（京都）	小椀	c	図44-13
41	SX110		性格不明	緑釉陶器（東海）	椀c	c	図44-14
42	SX148		性格不明	須恵器	こね鉢	d	図46-7
43	SX148		性格不明	須恵器	こね鉢	d	図46-8
44	SX149		性格不明	緑釉陶器（京都）	椀	d	図46-15
45	SX149		性格不明	緑釉陶器（防長）	椀	d	図46-16
46	SX158		性格不明	須恵器	こね鉢	c	図48-39
47	SX158		性格不明	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	c	図49-45
48	SX158		性格不明	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	c	図49-46
49	SX158		性格不明	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	c	図49-47
50	SX158		性格不明	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	c	図49-48
51	SX158		性格不明	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	c	図49-49
52	SX158		性格不明	緑釉陶器（防長）	椀	c	図49-50
53	SX158		性格不明	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	c	図49-51
54	SX158		性格不明	緑釉陶器（防長）	椀	c	図49-52
55	SX158		性格不明	緑釉陶器（東海）	椀	c	図49-53
56	SX154		性格不明	須恵器	こね鉢	d	図50-1
57	SX156		性格不明	須恵器	こね鉢	d	図50-5
58	SX159		性格不明	緑釉陶器（防長）	小皿	d	図50-6
59	SX159		性格不明	瓦器（輸入）	椀	d	図50-8
60	SX162		性格不明	緑釉陶器（京都）	皿c	d	図50-9
61	SX196		性格不明	須恵器（羽）	こね鉢	d	図50-12
62	SX196		性格不明	緑釉陶器（京都）	皿（円盤）	d	図50-14
63	SX196		性格不明	灰釉陶器	椀	d	図50-15
64	SX207		性格不明	黒色土器A類	椀	c	図51-17
65	SX207		性格不明	緑釉陶器（京都）	皿	c	図51-18
66	SX247		性格不明	須恵器	こね鉢	d	図52-8
67	SX263		性格不明	緑釉陶器（京都）	椀（円盤）	d	図52-12
68	SX263		性格不明	緑釉陶器（防長）	椀	d	図52-13
69	SX263		性格不明	灰釉陶器	皿	d	図52-14
70	SX263		性格不明	灰釉陶器	風字硯	d	図52-15
71	盛土層		須恵器（羽）	こね鉢	d	図53-7
72	盛土層		須恵器	こね鉢	d	図53-11
73	盛土層		須恵器	こね鉢	d	図53-14
74	盛土層		須恵器	こね鉢	d	図53-15
75	盛土層		須恵器	こね鉢	d	図53-16
76	盛土層		須恵器	こね鉢	d	図53-17
77	盛土層		緑釉陶器	壺	d	図53-25
78	盛土層		緑釉陶器（京都）	椀	d	図53-26
79	盛土層		緑釉陶器（京都）	椀	d	図53-27
80	盛土層		緑釉陶器（京都）	皿	d	図53-28
81	盛土層		緑釉陶器（京都）	皿	d	図53-29
82	黒色土		須恵器	こね鉢	d	図55-2
83	黒色土		須恵器	こね鉢	d	図55-3
84	黒色土		須恵器	こね鉢	d	図55-4
85	黒色土		緑釉陶器（東海）	皿	d	図55-6
86	黒色土		緑釉陶器（京都）	椀	d	図55-7
87	灰黒色土		緑釉陶器（京都）	椀	d	図56-12
88	灰黒色土		緑釉陶器（京都）	皿	d	図56-13
89	灰黒色土		灰釉陶器	椀	d	図56-14
90	明茶色砂		緑釉陶器（京都）	椀×皿	d	図57-4
91	茶色土		須恵器	甕	d	図57-5
92	茶色土		灰釉陶器	椀	d	図57-6
93	灰茶色砂		緑釉陶器（京都）	椀	d	図57-8

出土状況：a：一括、b：一括>一括、c：一括<一括、d：一括

所見が見受けられるが、そこからは調査方法を発案した者以上の所見を得ることは至難の技に近いものがある。新たな視野に立脚した所見を第三者に説明するためには、どうしたらよいのかを常に発案し、説明のための材料を獲得し記録してゆく方法が求められることになる。しかし行政発掘[3]を実際行なっている者にとって、現在の学界の動向を全てに渡って修得する能力をどこまで求めることができるのか、現状での実際を見た場合、筆者も含めていささか心もとないことも事実である。

b. 資料の認定

他地域で生産された食器の産地認定については、極力生産元で研究されている方々に御教示を受ける形で認定を行なってきた。しかし資料収集の限界から産地認定を既存の論考に頼った遺物もある。この場合の既存論考を以下に記す。なお緑釉陶器に関しては、詳述するため記載していない。 (中島恒次郎)

篠窯系資料

石井清司 (1983)「篠窯跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第7号

石井清司 (1995)「5. 篠窯須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

東播磨系資料

荻野繁春 (1986)「近畿地方における中世の須恵器」『東洋陶磁』第14号　東洋陶磁学会

荻野繁春 (1985)「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学々誌』第3号　福井考古学会

C. 緑釉陶器の産地別出土傾向

a.出土傾向

ここでは、多量に出土している緑釉陶器および灰釉陶器に焦点を絞って、産地別の傾向と、今次調査で出土した在地食器相中での出土状況について記述する。

緑釉陶器および灰釉陶器の定量化にあたっては、破片数量法を用いた[4]。その結果、緑釉陶器片184、灰釉片65出土した。総破片数では今まで報告された遺跡の中では最も多い。

破片資料を生産地別に分別し、出土傾向を算出したのが表8である。

表 8.産地別破片数

緑釉：灰釉 ≒ 7：3

生産地	破片数	割合
京　都	78	42.4 %
防　長	51	27.7 %
近　江	24	13.0 %

東　海	13	7.1 %
不　明	18	9.8 %

産地の同定については、過去、大宰府の資料を実見して頂いた各地の研究者諸氏の御教示に負うところが大きい[5]。さらに各氏の御教示によって産地が特定された資料、および研究者諸氏の論考等で示された定義に基づき産地を特定した。しかし、小片も多く産地特定に至らなかった資料も存在している。これらの資料については、産地不明として記載している。

また防長産について、近年周防国府跡の発掘調査で三叉トチン等の窯具が発見され[6]（防府市教育委員会、1995)、周防でも緑釉を生産した可能性が高くなってきており、長門産、周防産と区別され始めているが、本稿では判断し難いため防長産とまとめて記載している。

表８から、京都・防長産が上位を占める傾向が読み取れる。これは大宰府全体の傾向というよりは、平安中期に形成ないしは埋没の遺構が希薄であるという、今次調査地の遺跡形成時期を反映している可能性が高く、大宰府における緑釉陶器および灰釉陶器の消費状況については、時間軸を設定しての検討が必要である。

次に出土した遺構と遺物の詳細を検討してみたい。緑釉・灰釉は遺物包含層からの出土が圧倒的に多く、緑釉で約48%、灰釉で約33%を占めている。それらの中で、出土状況に不安定さは否めないが、在地食器相にまとまりが見られる５遺構について詳述する。抽出した５遺構はSX085・SX090・SD140・SD165・SD170で、各遺構から出土した食器の様相についてみることにする。

なお出土遺物の傾向から導き出される様相については、表９に記載している。

SD140　土師器は削り調整の上から更に回転ヘラミガキをおこなっている蓋・坏d・皿a・椀c・鉢が多く出土、須恵器では蓋c3 ・坏c・皿aなどV期の遺物が殆どである。この遺構から出土した土師器の坏d・皿a・椀cは長岡京で出土しているものと同型式と考えられ、実年代をある程度推定できるものである。以上のことから、SD140は下限が大宰府編年のV期と考えられる。また、この遺構で出土した遺物が、今次調査地の北に隣接している条坊19次のSD080出土遺物と接合しており、SD080との関連も注目される。ちなみに溝19SD080の埋没年代は８世紀後半と報告されている（太宰府市教育委員会、1984)。このSD140から原始灰釉の壺蓋の摘みが出土。宝珠型で下位を削り笠状に作っている。径は3.6cmと割合に大きい。胎土は精良でなめらかさがあり、灰褐色を呈している。焼成も良好で、斎藤孝正氏によれば、O-10（折戸10号窯式）かIG-78（井ヶ谷78窯式）段階の大型短頸壺の蓋ということであった[7]。(図66-2)。

SD165　この遺構から出土した食器はV期以前の食器を多く出土しているが、最新の食器として土師器の坏a（図19-4）が出土しており、この坏aは、口径および底部の特徴からVIA期に分布の中心がある型式であると考えられる。ここから灰釉の小型の瓶もしくは壺と考えられる

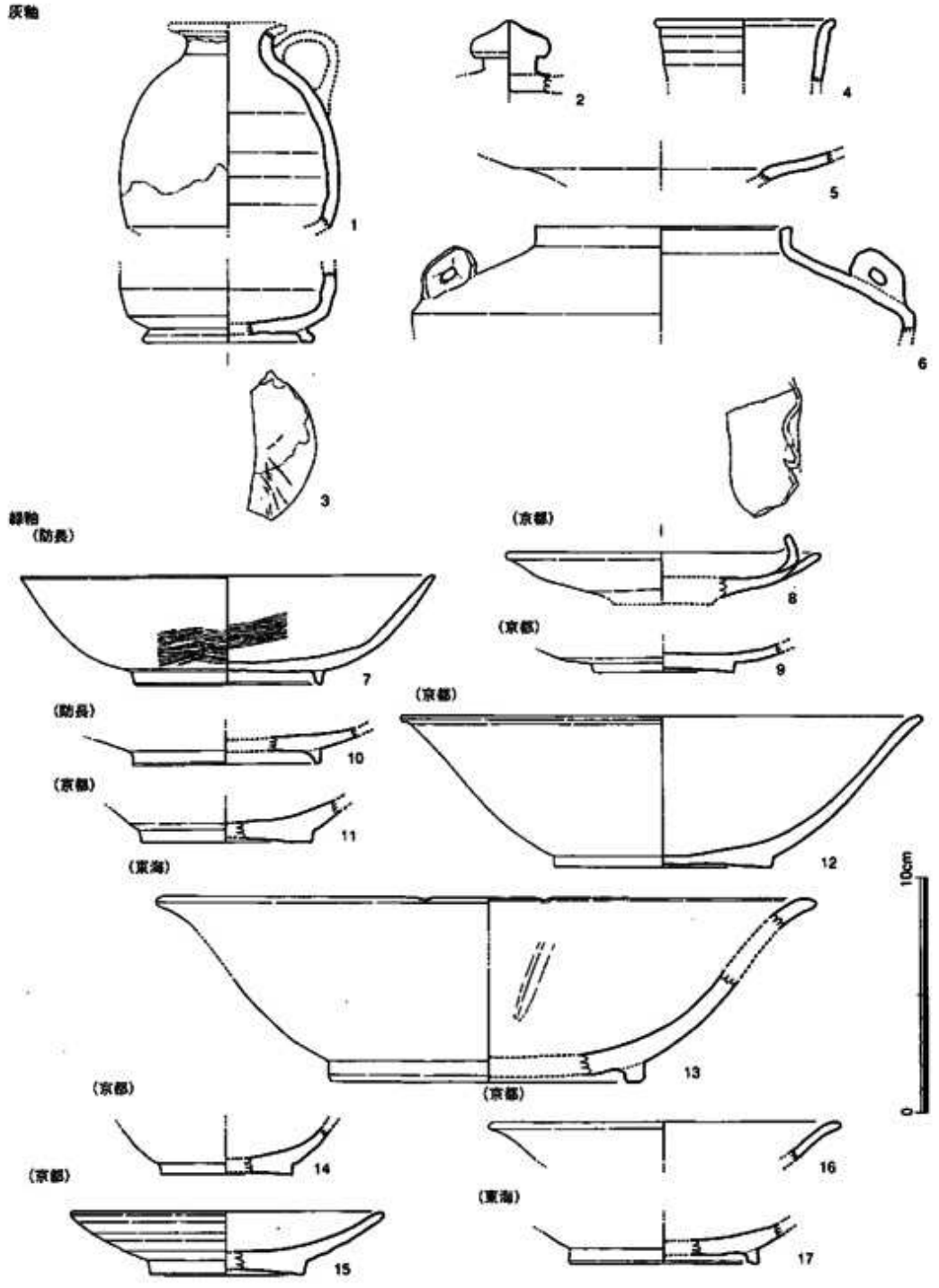


図66.条坊跡149次調査出土施釉陶器（1/3）

底部片が出土している。体部は直線的に立ち上がり、底部内面に、焼成時の降灰による灰釉が付着している。SX085出土の体部片と接合した。高台の形状に特徴があり、角高台がやや外方向に踏ん張ったように貼付されている。小壺に蛇の目高台がつく形態はあるとのこと[8]で、高

台の形状は異なるが、胎土、調整がよく似ているSD170（SD165の下層にあたる）出土の小壺と同一個体の可能性も考えられる。（図66-3）

SD170　SD170からは土師器の出土は少ないが、坏d、甕a、皿a等があり、須恵器は蓋3、坏cの形態からIII期以前と考えられる。ただしSD170はSD165の下層で、SD165の溝の底にあたる可能性もある。出土したのは灰釉で把手付の小壺の体部片である。胎土は明灰色、灰緑色の釉は施釉したというより、肩部に厚く、体部下位にいくほど薄くまだらになって自然釉のようである。K-14（黒笹14号窯式）段階の後半のものであろうとのことであった[9]。前述したようにSD165の底部片と胎土や色調が非常によく似ており、胴部下位の径が近いので、同一個体の可能性も考え、高台付き小壺を図上復原も想定したが、こういうタイプは事例がないとのことであった[10]。（図66-1）

SX090　土師器、須恵器の坏、皿が出土している。遺物はV期までの遺物が殆どだが一部、土師器の坏a等に大宰府編年のVIA期の遺物を含んでいる。ここから防長産の椀が出土した。口径17.6cm、器高4.7cmを測り口径／器高が3.7の浅型椀で、黄白色の胎土にわずかに淡緑色を帯びた明黄灰色の釉を全面に施す。直口縁で、細い高台底部の内側に浅い段がつく（図66-7）。高橋氏の分類ではB-2タイプにあたるものと考えられる（高橋、1993・1996）。ここでも、出土した黒色土器Bの風字硯が条坊19次調査SD070出土のものと接合しており、SD070の埋没年代は9C前半と報告されている。

SX085　SX085はSX090の上層にあたる。VIB期までの遺物を多量に出土しているが、出土傾向としては大宰府編年のVIA期にあたるものと、少数ではあるがVIB期に該当するものが含まれる。また、土師器の皿aや甕、須恵器の蓋bの形状も含めて考えると、埋没時期はVIB期と考えられる。 SX090に比してVIB期まで下るものが増加する。SX085では緑釉が全体の10.9％、灰釉が14.3％ 出土している。その中で緑釉を産地別にみると京都産10片、東海産4片、防長産4片、不明2片である。（図66-4～6、8～13）

SX110　土師器坏a、皿a、甕の法量や形状、共伴陶磁器から下限はVIB期までと考えられる。ここから京都産と考えられる硬質の皿、硬質の皿の口縁部、硬質の皿底部（円盤高台）、軟質の底部片（円盤高台）、硬質の椀（円盤高台）の五点とさらに、防長産の高台片、硬質で東海産の椀と考えられる高台片が出土している。（図66-14～17）

以上が条149次における主要遺構出土の施釉陶器の概要である。

b.画期の中での位置づけ

大宰府在地の食器相中における搬入食器の位置づけについて中島恒次郎が行った方法論をここで適用してみたい（中島、1996）。すなわち、出土遺物で遺構の時期を検討するにあたって、基準資料で画期の設定を行う際に量の概念を適用して基準資料の時間軸上での位置づけを行

う。それにより、遺構の時期を時間の推移の中で量的な変遷として捉えられると考えるからである。

まず、149次の上記の遺構についてまとめたものが表９である。

表９はa項で述べた149次主要遺構での土師器の出現頻度である。この結果を基にして年代順に並べるとSD170 → SD140 → SX090 ・ SD165 → SX085 → SX110 となるが出現頻度を画期の変遷にあてはめると表９の左側のようになる。

c.出土傾向と時期

以上を参考にして、共伴した緑釉・灰釉の大宰府で使用された時期を整理してみる。

１） SD170の灰釉手付小壺（図66-1 ）はIII期の可能性もあるが、上層のSD165の底と考えればVIA期まで下ることになる。また、SD165 出土の灰釉の底部片（図66-3）と同一個体の可能性もありこの小壺の時期の下限は９C 初頭に押さえられる。こうした手付小壺は猿投ではK-14（黒笹14号窯式）期から出現すると報告されており、前述したように斎藤氏の見解もK-14の2型式であった。

２） SD140 の埋没時期は、IV・V期にあたり、ここからは原始灰釉壺蓋のツマミ（図66-2 ）が出土している。このツマミはO-10（折戸10号窯式）、IG-78（井ヶ谷78号窯式）にあたるとされ、この型式は斎藤氏によると8 C末から9 C初頭となり、大宰府で想定している実年代観よりやや下ることになる。

３） SX090の埋没時期は、出土した食器の様相からV期≧VIA期と考えられる。図66-7 の 防

表９.頻度のセリエーション

土 師 器 坏

	遺構＼法量（単位：cm）	坏d	坏e	\ 14.0	13.9 \ 13.5	13.4 \ 13.0	12.9 \ 12.5	12.4 \ 12.0	11.5 \ 11.9	11.0 11.4	小計	参考共伴資料
III												
IV	条149SD170											※須恵器
V	条149SD140	11 69%	4 25%			1※ 6%					16	
	条149SD165	2 67%				1※ 33%					3	※陶磁器(長沙・椀)
VIA	条149SX090	23 82%				4 14%	1 4%				28	※須恵器
	条149SX085	7 33%		8 38%		5 24%	1 5%				21	※陶磁器(長沙・椀)
VIB	条149SX110			1 33%		1 33%			1 33%		3	※土師器 甕、陶磁器(白1・椀、長沙・水注)

※ SD170は計測可能な土師器はないが、坏dと坏aが出土している。SD110でも坏dが出土している。

※ SD140の1※の坏aは外面に回転ヘラミガキが残っており、8C代のものと考えている。

※ SD165の1※の坏aはVIAタイプだが、胎土中に雲母片を多量に含み在地のものでない可能性がある。

長産の椀は、口径に対する器高の比は3.4で、浅めで直口縁になる形状をもっている。また腰部にやや丸味があり、高橋編年ではB-2 タイプが該当するものと考えられる。この型式の持つ下限が9 C 初頭までと考えられており（高橋、1993)、大宰府ではこの防長産と考えられる椀が 9 C 初頭には出現した可能性が考えられる。

4） SX085 の埋没時期は、出土食器の傾向からVIA期・VIB期と考えられ、実年代は9 C 前半頃と推定できる。ここでは京都・洛北産とされる大きめの椀（図66-12）と東海産の鉢（図66-13 ）が出土している。どちらも他の遺構と接合関係があり、SX085の時期に限定出来ないが、最も上位の遺構であることを考慮すると、SX085に帰属させうる可能性も考えられるのでここに掲載した。ちなみに、類似タイプの東海産・緑釉鉢を出土した平安京二条二坊冷然院SD 1・SD 2 は平安京の土器編年で I 期新型式（9 C 前半）と報告されている。また須恵質に焼成された耳皿（図66-8）は京都・洛西のものと考えられる。図66-9は京都・洛北産、図66-10 は防長産の皿。灰釉の双耳壺（図66-6 ）はK-14、段皿（図66-5 ）はK-14・2 ないしはK-90・1 、瓶の口縁（図66-4 ）はK-14 と考えられる[11]。

5） SX110はVIB 期の様相が強く、前記のSX085よりは新しいものと考えられる。土師器の坏a に 1 点口径の小さいものがあり、法量から判断するとVII期のものであるが、残存する口縁部に歪みをもつ個体なのでここではVIB期の範疇に入れた。出土した東海産緑釉の椀（図66-17）はK-14から下限はK-90・1 までということであった[12]。また京都産の緑釉では硬質円盤高台 3 点（図66-14は洛西)、軟質円盤高台 1 点出土している。

最後にいままで述べた施釉陶器の搬入時期を遺構別に陶磁器の出土状況と対照させたのが表10である。これまで記述してきたことを実年代を付与して整理すると以下のようになる。

8 世紀後半までは日常什器以外の原始灰釉が少しずつ見られ、9 世紀初頭には初期貿易陶磁

表10.実年代観と出土陶磁器

	遺構	陶磁器			国産陶器	
		長沙窯青磁	越州窯系青磁	白　磁	緑釉陶器	灰釉陶器
8c 中頃	SD170					小壺1
8c 後半	SD140					壺摘み1
9c 初頭	SX090	椀(2) 長沙×越 水注(1)			防長産　(1) 不明(軟質) (1)	椀×皿K-14 (1)
↓	SD165	椀(1)				小型瓶?1
9c 前半	SX085	椀(1)	椀 I (1)	椀 I (2)	京都産　(12) 防長産　(4) 東海産　(4) 不明(軟質) (2)	9※
↓	SX110	水注(1)	椀 I (2) 椀 I-2 (1) 水注(1)	椀 I (1) 托 I (1)	京都産　(5) 防長産　(1) 東海産　(1)	

9※は段皿(1)、瓶(1)、双耳壺(1)、椀×皿(3)、器種不明(3)

器の流入と共に緑釉陶器が出現、9世紀前半には量的にそれが増加している。また生産地も京都、防長、東海産のものが確実に搬入されている。陶磁器の流入が飛躍的に増加するのは11Cの後半までまたなくてはならないが、表10から、古代中頃までの陶磁器が稀少な時期には大宰府においても緑釉陶器が一定の役割を果たしていたと考えられる。、灰釉は原始灰釉段階のものが8世紀中頃に遡る可能性があるが、量的に増加し、供膳具にまで及ぶのはやはり、9世紀の前半頃からと考えられる。 (森田レイ子)

D. 課題

他地域からの搬入品の持つ意味は、基礎レベルの出土状況の把握や型式認定にはじまり、応用レベルの生産と流通に至る解釈に関わる課題解決の手掛かりを与えてくれる。しかし、基礎レベルでの認定を誤れば、自ずと上位レベルの解釈は、机上の空論と化してしまう危険性を十分孕んでいる。本稿で簡単にではあるが記述してきたが、出土状況について現在のところ最も重視して考えてゆきたい課題である。この課題については、ゴミの混入、使用の共時性・同時性、廃棄・埋納の同時性の問題など散発的にではあるが記述してきる（中島、1992・1998・1999)。この課題をまず解決し、さらに一遺構から出土した各食器の定性レベルの分析から、定量化へ移行することで、各地において提示されている食器相変遷の時間軸上での並行関係の擦れを解消できるのではないかと考えている（中島、1996)。 (中島恒次郎)

2．遺構の展開

今次調査において、調査状況から完掘まで至らず、遺構形状から性格をある程度推することは可能であるが確定まで至らなかった遺構が幾つかある。その様な中で、調査区に数条の溝遺構を確認している。IおよびII面において検出した、溝SD040ならびに遺構性格は不明としながらも土壙の連続から溝と判断されるSX039は、大略南北を向く溝であり区画を示す境界溝である可能性を持つ。またIII～V面にて検出した溝SD075・130・155・180等も土壙の連続を思わせる溝遺構である。これらも大略南北方向を向いており、先述した2遺構同様の性格を想定できる。このような南北溝は、今次調査の南側で調査を行なった大宰府条坊跡第134次調査にても検出している。これらの溝に共通している点は、いづれも一条の検出であり、かつ各調査区どうしで南北に連続しているものではなく、一調査区内で完結する傾向にある。今次調査では明らかにできなかったが、第134次調査では溝遺構に平行に建物群が検出できており、敷地を画する境界溝である可能性は極めて高い。また今次調査の南東に位置している第71次調査地では、観世音寺から南進する道路遺構の西側々溝を検出しており、この溝からは約46.5～67.5mと、従来検出されている条坊痕跡間の距離では短い。したがって先の可能性を考えた方が、蓋然性は高いと考えられる。これら溝遺構の座標北からの振れについて表11にまとめておいた。いづ

れも政庁中軸線の振れ（N0°23′34″E）よりは大きく、政庁中軸線に沿う敷地境界とするには躊躇する。しかし、位置調査区内での振れからくる誤差の可能性もあるため、今次調査の南側や西側の調査成果を待って結論を出すべきであろう。

表11.溝遺構の座標北からの振れ

遺構名	座標		座標北からの振れ	埋没時期
	X座標	Y座標		
SD040（北）	56604.850	-44278.180	N1°0′55″E	平安後期以降
SD040（南）	56600.900	-44278.250		
SD075（北）	56612.700	-44282.800	N6°37′57″E	平安後期以降
SD075（南）	56610.550	-44283.050		
SD130（北）	56606.500	-44278.675	N4°40′55″E	平安後末期
SD130（南）	56600.700	-44279.150		
SD155（北）	56599.800	-44286.800	N1°1′23″E	平安後中期
SD155（南）	56597.000	-44286.750		
SD180（北）	56605.830	-44284.800	N2°3′16″E	平安末期以降
SD180（南）	56603.600	-44284.720		
SX039（北）	56605.950	-44300.150	N5°37′16″E	平安後期
SX039（南）	56603.410	-44300.400		

ついでIII面～V面において検出した調査区を北東から南西に斜向する溝であるが、今次調査区の北に位置する第19次調査にても検出していることから、連続する溝であると考えられる。最終埋没時期は、今次調査の成果では平安時代前期前半頃が考えられ、遺構の規模からみて自然流路であった可能性が高い。多量の食器を包含していることから、洪水による堆積作用を想定できるが、堆積物の状況からみて、砂を堆積させるほどの流速はなほどの流路であったと考えられ、廃棄に伴う可能性がある。しかし、調査所見でこれらを検証できる知見を得ていないことから、可能性の域はでない。今後の検討課題としたい。

次に平安前期埋没の遺構から平安後期以降に埋没ないしは形成された遺構が確認できた中で、平安中期に埋没ないしは形成された遺構が希薄な傾向にあった。この傾向は、南に位置する第134次調査地でも同じであった。この134次調査地では、平安中期初めに埋没した自然崩壊土層を最終面から検出しており、調査区南を平面形状でV字に覆う状況で確認できている。御笠川の洪水層である可能性が高く、遺構の欠失原因をつくった可能性はある。しかし残存箇所もあり、そこにはやはり平安中期に埋没ないしは形成された遺構が希薄であったことから、元来存在していなかった可能性もある。平安中期初めに堆積した自然崩壊土によって、生活空間としての土地利用には不向きであった可能性もあり第134次調査の調査所見の整理を待って検討を加えたい。

（中島恒次郎）

註

1）時間の長短を表現している。「同時」は短く、「共時」は長い。一つの行為に伴って廃棄された場合、いわば一時の祭祀行為などの場合、使用と廃棄の同時性が保障される。これに対し、複数の行為を想定できるが廃棄が一時に行われた場合、使用の共時性ならびに廃棄の同時性が保障されることになる。

2）川添遺跡第1次調査時に検出した井戸内から、多種多量の食器および瓦が出土している。これらの食器は、複数土層から出土しているが、各土層間で接合関係が認められ、決して単一層ではなかった。しかし、多くの炭化材および建材と考えられる物が共に出土しており、先述した複数土層に規則性が見受けられたため、片づけに伴う廃棄の同時性が看取できる資料群であると考えた（太宰府市教育委員会、1999）。したがって、判断材料として上げたa）項目については、最小

判断項目として判断しておいていただきたい。

3）興味の及ばない範囲までを調査しなければならない側面を有しているという点で、行政発掘という言葉を使用している。したがって学術発掘に合い対する言葉ではない。例として、一つの調査現場で旧石器時代の遺構・遺物から重層的に近世に至るまで調査をする場合があげられる。また俗に言う「サラリーマン行政発掘」とは次元が全く異なっている。

4）破片数量法を用いたが、中島が実施した器種定性後に定量化は行っていない（中島、1996）。また接合関係を確認し、接合資料については1個体のものと判断して1片とした。

5）井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、斎藤孝正（文化庁）、柴垣勇夫（静岡大学）、藤沢良祐（瀬戸市教育委員会）、前川要（富山大学）、百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、森田　稔（文化庁）各氏にご教示いただいた。

6）吉瀬勝康氏（防府市教育委員会）の御厚意により、実見した。記して謝意を表します。

7）斎藤　孝正氏ご教示による。

8）註7）と同様。

9）註5）と同様。

10）註7）と同様。

11）註7）と同様。

12）註7）と同様。

引用文献および参考文献

太宰府市教育委員会（1984）『大宰府条坊跡　III』

太宰府市教育委員会（1999）『筑前国分寺跡　II』

防府市教育委員会（1995）『周防国府跡　第78・84次発掘調査概要』

古代の土器研究会（1994）『古代の土器研究　律令的土器様式の西・東3　施釉陶器』

古代の土器研究会（1992）『古代の土器1　都城の土器集成』

森　隆（1991）「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」『考古学雑誌第76巻　第4号』

高橋　照彦（1995）「緑釉陶器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編

高橋　照彦（1993）「防長産緑釉陶器の基礎研究」国立歴史民俗博物館研究報告　第50集

中島恒次郎（1992）「椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究　VIII』

中島恒次郎（1996）「定量分析の試み」『大宰府条坊跡　IX』太宰府市教育委員会

中島恒次郎（1998）「西北九州からみた豊前国の食器相」『中近世土器の基礎研究　XIII』

付表

1.遺構番号一覧

2.出土遺物一覧

3.遺物計測表

（遺物計測にあたっての計測点に関しては、以下の文献を御参照いただきたい。）

太宰府市教育委員会（1996）『大宰府条坊跡　IX』

第149次遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種　別			地区
1	149SX010			14c以降	Fライン
2	149SX002	ピット群		中世	F8
3	149SX003	ピット群		XI期以降	F9
4	149SX004	ピット群		〃	F9
5	149SK005	土坑？		14c以降	F2
6	149SK006	ピット群		13c	F8
7	149SD007	溜まり		中世（鎌倉）	F9
8	149SX008	ピット群		奈良後	F8
9	149SX009	ピット	茶黒色土	8c後半	G6
10	149SX010			13c以降	Fライン
11	149SX011	ピット群		12c中以降	F1
12	149SX012	ピット群			F1
13	149SX013	ピット		平安後期以降	F1
14	149SX014	ピット			F1
15	149SD015	溝		14c 後	Eライン
16	149SX016	ピット群		平安後期以降	G1
17	149SX017	ピット群		中世	F2
18	149SX018	ピット		平安	G2
19	149SX019	ピット群		平安末～中世	G5
20	149SX020	集石遺構	黄色土→SX020→SX010	13c	F2
21	149SX021	ピット群		中世	G3
22	149SX022	ピット		中世(13c後～14c前)	G3
23	149SX023	ピット		中世(13c)	G6
24	149SX024	ピット群		中世	F8
25	149SX025	集石遺構		12c 後～13c	F5
26	149SX026	ピット		平安	F7
27	149SX027	ピット		平安後期以降	F5
28	149SX028	ピット		中世	F5
29	149SX029	凹み	黄色粘土ブロック	近世以降	F5
30	149SX030	凹み			CD2
31	149SX031	ピット		平安後期以降	F4
32	149SD032	溝	灰色粘質土	現代	Eライン
33	149SX033	凹み		奈良～平安初	G6
34	149SX034	凹み	灰色粘質土	中世	G7
35	149SK035	土坑		中世	C3
36	149SX036	ピット群		平安後	E8
37	149SX037	凹み		中世	G6・5
38	149SX038	ピット群		平安後期以降	E8
39	149SX039	凹み		中世	E8
40	149SD040	溝	灰色粘質土	平安後期以降	C1
41	149SX041	ピット		中世	F4

S-番号	遺構番号	種　別			地区
42	欠番				
43	149SX043	凹み		奈良後期以降	G6・7
44	149SX044	凹み		平安後期以降	F・G1
45	149SX045	凹み	黒色土	〃	D5
46	149SD046	溝		現代	E4・5
47	149SD047	溝		12c中以降	E4・5
48	149SX048	攪乱		現代	E4・5・6
49	149SX049	凹み		平安後期以降	E2
50	149SD050	溝	黒褐色土	中世	E2
51	149SX051	攪乱		現代	D1
52	149SX052	凹み		平安後期以降	D8
53	149SX053	床土		現代	Fライン
54	149SX054	ピット群		平安後期以降	E9
55	149SD055	溝		中世	E1
56	149SX056	ピット群		平安以降	E9
57	149SX057	ピット群		〃	D9
58	149SX058	ピット群		平安後期以降	D9
59	149SX059	ピット		平安以降	D9
60	149SX060	凹み		平安後期以降	B1
61	149SX061	ピット群		平安以降	D6
62	149SX062	ピット		平安後期以降	D8
63	149SX063	ピット		平安	D6
64	149SX064	凹み		平安後期以降	E6
65	149SD065	溝		平安中期以降	C1
66	149SX066	ピット		平安後期以降	C7
67	欠番				
68	149SX068	ピット群		平安	D4
69	149SX069	ピット群		平安中期	E8
70	149SX070	凹み	黒色粘質土	平安中期以降	E2
71	149SX071	ピット		〃	C6
72	149SX072	ピット群		平安後期以降	B4
73	149SX073	凹み		平安	D5
74	149SX074	ピット群		平安後期以降	C4
75	149SD075	溝	炭を混入する暗灰色粘質土	〃	F3
76	欠番				
77	149SX077	凹み	黒色土　SX077→SD015→SX048	平安以降	E5
78	149SK078	土坑		平安後期以降	A1
79	149SX079	ピット		〃	A2
80	149SD080	溝	褐色粘質土	中世	F3
81	149SX081	凹み	SX081→SX138	〃	C2
82	149SX082	凹み	灰色粘土	平安後期	B1

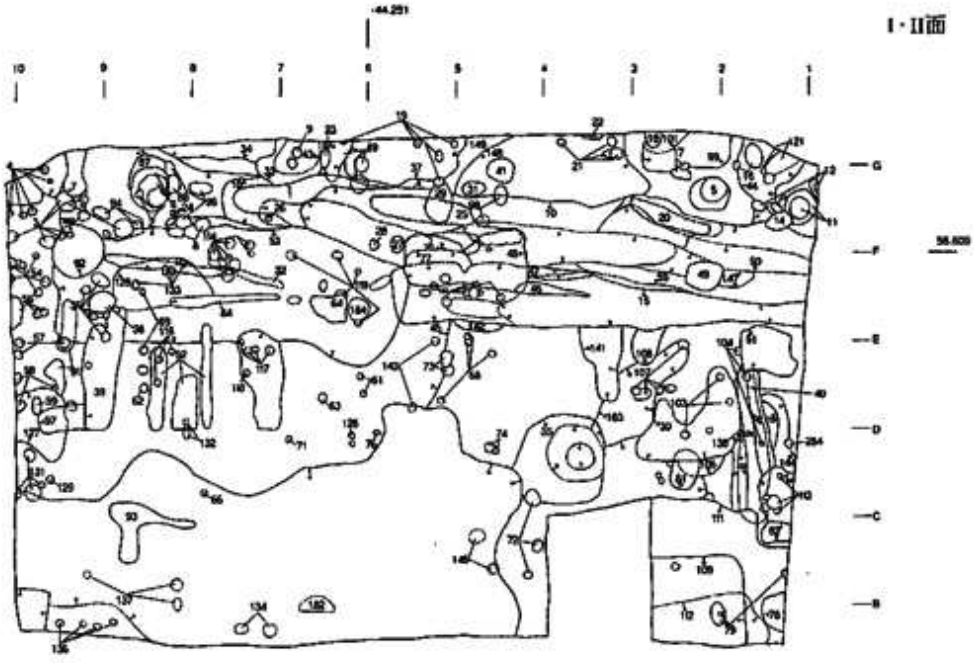
S-番号	遺構番号	種	別			地区
83	149SX083	凹み	黒色土		中世	C1
84	149SD084	溝	暗灰色土		〃	E7
85	149SX085	凹み	黒色粘質土		平安初期	F5・6
86	149SX086	凹み	灰色砂質土		平安	F9
87	149SX087	凹み	黒色土		中世	F8
88	149SX088	ピット	〃		平安	F8
89	149SX089	凹み	茶色土		〃	F6
90	149SX090	溝			奈良中期	F6
91	149SX091	凹み	茶色砂質土		平安	D9
92	149SK092	土坑	灰色砂		中世	F9
93	149SX093	凹み	茶色砂質土		平安後期以降	B8
94	欠番					
95	149SK095	土坑	黒色粘質土	SK095→SX154・153・159	平安後期以降	F4
96	149SX096	凹み			〃	F8
97	149SX097	凹み	灰茶色砂質土		〃	D9
98	149SX098	凹み	茶色土		現代	F4
99	149SX099	凹み	褐色砂質土		平安中期以降	G2
100	149SE100	井戸？			平安後期	B6
101	149SX101	凹み	黒色土	SX101→SX099	〃	G2
102	149SX102	ピット群		SX102→SD015	〃	E5
103	149SX103	ピット群		SX103→SX030	平安末期	D2
104	149SX104	ピット群			平安後期	D1
105	149SE105	井戸？		SE105→SE100	〃	B6
106	149SX106	凹み	黄色粘土ブロック混入暗灰土		〃	C2
107	149SX107	ピット群	暗灰色粘土		平安	D2
108	149SX108	凹み	暗灰色土		平安後期	D2
109	149SX109	凹み	明茶色土		鎌倉	B2
110	149SX110	凹み			平安中期	B7
111	149SX111	凹み	灰褐色土	SX111→SX109	平安末期	B2
112	149SX112	凹み	暗茶色土	SX112→SX109・SX111	〃	A2
113	149SX113	ピット群	暗灰色粘土	SX113→SX083	平安後期	C1
114	149SX114	ピット群	明灰色粘土	SX114→SX053	〃	E7
115	149SE115	井戸？			〃	B6
116	149SX116	ピット群			〃	D8
117	149SX117	ピット群			〃	D7
118	149SX118	ピット			〃	D7
119	149SX119	ピット群		SX119→SX053	奈良後期	E6
120	149SE120	井戸？			平安後期	B5
121	149SX121	凹み			〃	F1
122	149SD040	溝			〃	C1
123	149SD040	溝	SD040灰色土		〃	C1

S-番号	遺構番号	種	別			地区
124	149SD040	溝	SD040暗灰砂		平安後期	C1
125	149SE125	井戸？			〃	B5
126	149SX126	ピット		黄色砂→SX126	〃	C6
127	149SX127	凹み	黄色ブロック混入黒色土		〃	C9
128	149SX128	凹み			〃	E8
129	149SX129	ピット		SX129→黒色土	〃	C9
130	149SD130	溝	黒色粘質土		平安末期	C2
131	149SX131	ピット群		SX131→黒色土	平安中期	C9
132	149SX132	ピット群		SX132→黒色土	平安後期	C8
133	149SX133	ピット群		SX133→SX128	〃	E8
134	149SX134	ピット群			〃	A7
135	149SD140	凹み	炭化物混入黒色粘質土		奈良後期	C8
136	149SX136	ピット群		SX136→黒色土	平安後期	A9
137	149SX137	ピット群		SX137→黒色土	〃	B8
138	149SX138	ピット		SX138→SD040	平安中期以降	D2
139	149SX139	凹み	淡茶色砂質土		平安後期	D1
140	149SD140	溝			奈良	E7
141	149SX141	凹み		SX141→SD075	平安後期	D3
142	149SX142	凹み	黄色粘土ブロック混入黒色砂		〃	E4
143	149SX143	ピット群		SX143→SX045	〃	D5
144	149SX144	凹み	黄色粘土ブロック混入黒色粘質土		〃	C1
145	149SD145	溝	茶色砂質土		平安中期	F4
146	欠番					
147	149SD147	凹み		SD055→SD147→SD050	平安前期	E1
148	149SX148	凹み		黄色土→SX148	平安末期	F3
149	149SX149	凹み		SX149→SX148・033・037	平安後期	F5～6
150	149SE150	井戸？			〃	A1
151	149SX151	凹み		SX151→茶色土・黄茶色土	平安前期	C2
152	149SX152	ピット			平安後期	F4
153	149SX153	凹み	暗灰色粘質土	SX153→SX148・SX149	平安末期	F4
154	149SX154	凹み			〃	F4
155	149SD155	溝	炭混入黒色土		平安中期	B4
156	149SX156	凹み		SX156→SX154・148・SD050・055	平安中期以降	F3
157	149SX157	凹み		SX156→SX157→SX154	平安後期	E3
158	149SX158	凹み		SX158→SX148・SX149	平安前期頃	F6
159	149SX159	凹み	灰色粘質土		平安後期以降	E5
160	149SE160	井戸？			〃	C5
161	149SX161	ピット群		SX161→SX156	〃	F3
162	149SX162	凹み	暗灰色粘土		〃	G8
163	149SX163	凹み	炭含む明茶色砂質土		〃	F7
164	149SX164	凹み	明茶色粘質土		〃	F7

S-番号	遺構番号	種別				地区
165	149SD165	溝		SD165→SX085	平安初期	F4
166	149SK166	土坑			鎌倉以降	F8
167	149SX167	ピット群		SX167→SX085		F6
168	149SX168	ピット群		SX168→SX164	平安後期	F7
169	149SX169	ピット群			平安	F4
170	149SD170	溝	暗灰茶色粘質土	SD165→SD170	奈良中期	D4～G4
171	149SX171	ピット群		黄色土→SX171	平安後期	F4
172	149SK172	土坑	灰茶色粘質土		〃	F9
173	149SX173	凹み		SX173→SX164	〃	F9
174	149SX174	ピット			〃	F9
175	149SK175	土坑	黒褐色砂質土		平安末期	C3
176	149SD176	溝	黒色砂質土		平安後期以降	F4
177	149SX177	ピット群		SX177→SD176	〃	F5
178	149SX178	土坑		SX178→SX148	〃	G3
179	149SX179			SX179→SX181	平安中期以降	F1
180	149SD180	溝		SD180→SK223・SD227	平安	B3
181	149SX181	凹み		SX181→明茶色砂	平安後期以降	F1
182	149SX182	凹み	黒色粘質土		平安後期	B6
183	149SX183	凹み	黄色砂質土	SX183→茶色土	平安末期	D3
184	149SX184	土坑		SX184→SX053	平安後期以降	E6
185	149SD185	溝		SD185→SD165・SD170	奈良後期	
186	149SX186	ピット		SX186→SD176	平安中期以降	F5
187	149SX187	ピット群		SX187→明茶色砂	平安	F2
188	149SX188	ピット群			平安後期	F6
189	149SX189	ピット群		SX189→SX085	奈良	F5
190	149SD190	溝	暗茶色粘質土		〃	E7
191	149SK191	土坑		SK191→灰黒色土	平安後期以降	D9
192	149SX192	ピット群			平安後期	E9
193	149SX193	ピット群			〃	E5
194	149SX194	ピット群	黒色粘質土		平安	F3
195	149SX195	溝	黒色土		奈良	F6
196	149SX196	凹み	黒色砂質土		平安後期	E7
197	149SX197	凹み	〃		〃	E5
198	149SX198	ピット群		SX198→SX197	〃	E5
199	149SX199	ピット群		SX199→SX196	奈良後期	E7
200						
201	149SX201	凹み	黒色粘質土		平安後期	C9
202	149SX202	ピット群			〃	C9
203	149SX203	ピット群		SX203→SX201	〃	C9
204	149SX204	凹み	黒褐色砂質土		平安前期	E6
205						

S-番号	遺構番号	種　別			地区
206	149SX206	ピット群	SX206→SX204	奈良後期	E6
207	149SX207	凹み　暗茶色砂質土		平安	D9
208	149SX208	凹み		奈良後期	D7
209	149SX209	ピット群		〃	D8
210					
211	149SX211	ピット群		平安前期	D7
212	149SX212	ピット群		奈良後期	D7
213	149SX213	ピット群		平安前期	D7
214	149SX214	ピット群	SX214→SX208	平安後期	D7
215					
216	149SX216	ピット群		奈良後期	D6
217	149SX217	ピット群		平安前期	D6
218	149SX218	ピット群		〃	D6
219	149SX219	ピット群		平安後期	E4
220					
221	149SX221	ピット群		平安後期	D4
222	149SX222	ピット群		〃	D4
223	149SK223	凹み　黄色粘土ブロック混入褐色砂質土		〃	D3
224	149SX224	ピット群	SX224→SX226	奈良後期	D6
225					
226	149SX226	凹み		平安後期	D6
227	149SD227	溝　暗褐色砂質土		〃	D3
228	149SD227	溝　黒茶色砂質土		〃	D3
229	149SX229	ピット群		平安中期	D5
230					
231	149SX231	ピット群		平安後期	D5
232	149SX232	ピット群		〃	D5
233	149SX233	ピット群	SX233→SX226	〃	D6
234	149SX234	ピット群		〃	D6
235					
236	149SX236	ピット　黄色砂質土		奈良後期	C9
237	149SX237	ピット群		平安	B9
238	149SX238	ピット群		平安後期	B8
239	149SX239	ピット群		〃	B8
240					
241	149SX241	ピット群		平安後期	B8
242	149SX242	ピット群		平安	B9
243	149SX243	ピット群		奈良後期	B8
244	149SX244	ピット群		平安	B6
245					
246	149SX246	ピット群		平安	B8

S-番号	遺構番号	種　別			地区
247	149SX247	ピット群	SX247→SX207	平安後期	B8
248	149SX248	ピット群	SX248→SX207	〃	C8
249	149SX249	ピット	SX249→SX207	平安	D9
250					
251	149SX251	凹み	SX251→SX207	平安後期	D9
252	149SX252	ピット	SX252→SX261	平安	C9
253	149SX253	凹み		平安後期	B7
254	149SX254	ピット群		平安	B7
255					
256	149SX256	ピット群	SX256→SX267	平安後期	B6
257	149SX257	凹み	SX257→SE105	〃	B6
258	149SX258	ピット群		〃	C7
259	149SX259	ピット群		奈良中期	C7
260					
261	149SX261	ピット群		平安後期	B7
262	149SX262	ピット群		〃	C6
263	149SX263	ピット群		〃	B5
264	149SX264	ピット		〃	C7
265					
266	149SX266	ピット群		平安前期	C7
267	149SX267	ピット群		平安後期	C7
268	149SX268	ピット		〃	C6
269	149SX269	ピット群		平安前期	C7
270					
271	149SX271	ピット群		平安後期	B4
272	149SX272	凹み		平安前期	C6
273	149SX273	ピット群		平安後期	D2
274	149SX274	ピット群		〃	A2
275					
276	149SX276	凹み　茶色砂質土		平安後期	C1
277	149SX277	凹み		〃	E3
278	149SX278	ピット群		奈良後期	C4
279	149SX279	ピット群		平安末期	C5
280					
281	149SX281	ピット		平安後期	B3
282	149SX282	ピット群			E6
283	149SX283	ピット群	SX283→SD140	平安後期	E7
284					C1



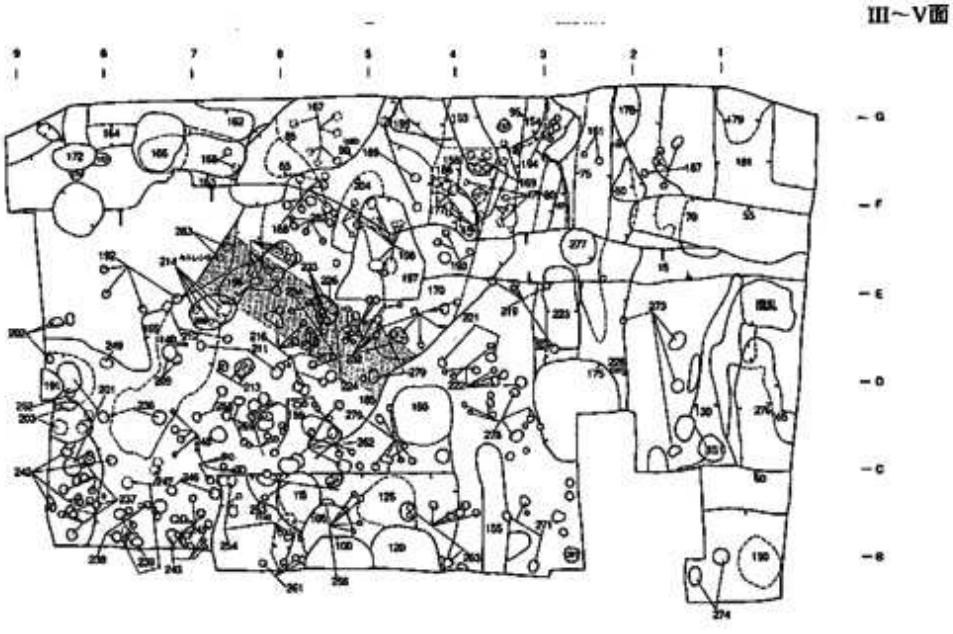


図67.遺構略測図（1/4）

第149次出土遺物一覧表

S-1

須恵器	甕、蓋3、壺c、坏c、坏(古)
土師器	坏a(イト)、坏d、小皿a(イト)、鍋×甕、鉢c1、こね鉢 蓋3、高坏、丸坏a
黒色土器A	椀c、蓋c
越州窯系青磁	椀：II(3)、I(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(2)、I-1(1)、I-5b(1)、III(1)、破片(1)
	他器種：龍泉？水注(1)
同安窯系青磁	椀：III-1b(1)
白磁	椀：V(1)、VI～VIII(1)、IX(1)、XIII(1)、くし目(1) 破片(4)
	皿：V～VII(1)
	壺他：壺×水注III(2)
青白磁	梅瓶(1)
中国陶器	鉢：I(2)
	他器種：破片-C(1)、E(1)、小皿(1)
瓦質土器	火鉢
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器壺
金属製品	鉱滓、鉄釘
石製品	砥石、滑石片、碁石、
弥生土器	壺×甕(朱塗り)
瓦類	丸瓦(縄目、格子-小)、平瓦(格子-大、小)、瓦玉 文字瓦(II-5、XVIII)

S-2

土師器	坏a(イト)、坏c×皿c
黒色土器A	破片
青白磁	破片(1)

S-3

須恵器	甕
土師器	丸坏a、小皿a(ヘラ)、鍋、蓋3、甕a
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
龍泉窯系青磁	椀：I-6(1)
灰釉陶器	椀(1)
白磁	椀：V(1)、破片(2)
金属製品	鉱滓、鉄釘
瓦類	破片

S-4

須恵器	破片
土師器	椀c、小皿a、丸坏
黒色土器B	破片
白磁	椀：破片(1)

S-5

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a(イト)、丸坏a、小皿a(イト)、把手
黒色土器B	小皿
越州窯系青磁	皿：I(1)
龍泉窯系青磁	椀：小椀I(1)
	他器種：壺III(1)
須恵質土器	こね鉢
国産陶器	甕(東海系)
白磁	椀：IV(1)、VI×VIII-2？(1)、破片(1)
	皿：II-1a(1)
	壺他：四耳壺III(1)
中国陶器	鉢：I(1)
	他器種：水注(1)破片-A' c(1)
瓦類	丸瓦(縄目、格子-大、小)、平瓦(縄目、格子-大、小)

S-5 黒灰色土

須恵器	甕、蓋3
土師器	坏
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦(縄目)

S-6 暗茶色土

須恵器	甕、坏a、蓋c
土師器	小皿a(イト)
龍泉窯系青磁	椀：I-5a(1)
瓦類	平瓦(縄目)

S-6 明茶色土

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a(イト)
黒色土器A	椀c
龍泉窯系青磁	椀：I-5a(1)
同安窯系青磁	椀：I-1b(1)
白磁	椀：IV(1)、V-4(1)
	壺他：合子の蓋(1)
肥前系陶磁器	染付片(1)
瓦類	平瓦(格子-小)

S-6 黒茶色土

須恵器	坏a
龍泉窯系青磁	椀：III-2(1)
国産陶器	甕
中国陶器	他器種：破片-A' b(1)
瓦類	丸瓦(格子-小)、破片(縄目)
その他	焼石

S-7

須恵器	甕、蓋c(古)
土師器	坏a(イト)、器台、甕
龍泉窯系青磁	椀：I(1)、I-5(1)、I-5b(1)
同安窯系青磁	椀：I-1b(1)
白磁	椀：V(1)、VIII(1)、V-1×VIII-2(1)、破片(1)
	皿：VII-1a(1)、IX-1(2)
中国陶器	他器種：破片-Bb(1)
石製品	石斧(片岩)
瓦類	丸瓦(格子-小)、軒平瓦、平瓦

S-8

須恵器	壺3、甕
土師器	壺c、坏a、椀c
金属製品	鉄釘
瓦類	平瓦(縄目)

S-9

須恵器	甕、壺c、壺3、坏a
土師器	坏c、坏d、甕a
黒色土器A	坏d
金属製品	鉱滓

S-10

須恵器	坏c、甕、壺c、壺
土師器	小皿a(ヘラ、イト)、椀c、丸坏a、坏c、皿a(ヘラ)
	焼塩壺
龍泉窯系青磁	椀：I-1(1)
緑釉陶器	破片
白磁	椀：V-1(1)、破片(4)
	皿：V～VII(1)
中国陶器	甕：破片(2)
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)

S-10 茶色土

須恵器	甕、坏a、坏c、坏(古)、把手、壺3×高坏、壺3、壺c
	蓋
土師器	坏a(ヘラ、イト)、丸坏a、坏c、坏d、甕a、椀c2、器台
	小皿a(ヘラ、イト)、壺3、高台付鉢、丸坏c
黒色土器B	甕、鉢
瓦器	小皿a(イト)、椀c
越州窯系青磁	椀：I(3)
龍泉窯系青磁	椀：I(1)、I-1(2)、I-4(1)、I-5(1)、I-5a(1)、I-5b(1)
	他器種：破片-III(1)
同安窯系青磁	椀：I-1b(1)、破片(3)、同安？(1)
	皿：I(1)、I-1(1)、I-2(1)
須恵質土器	こね鉢
瓦質土器	火鉢、鍋、鉢
緑釉陶器	椀(東海)、椀(京都)、椀(防長)、破片
灰釉陶器	破片
白磁	椀：II(2)、IV(4)、IV-1a(1)、V(1)、V-1×VIII-2(2)
	V～VIII(1)、VI～VIII(1)、VIII(3)、VIII-3(1)
	XIII(1)、くし目(1)、破片(15)
	皿：II×III(2)、VII(1)、IX(2)
	壺他：壺×水注III(1)
	求分類：椀(1)
青白磁	椀(1)
中国陶器	壺：破片-E(1)、Ab(1)、IV(1)
	鉢：I(2)
	甕：破片-F(1)
	他器種：破片-Ca(1)、C' a(1)、C' b(1)
金属製品	鉱滓、鉄釘
石製品	サヌカイト片、砥石
瓦類	丸瓦(縄目、格子-小、文字瓦II-1)
	平瓦(縄目、格子-大、小)

S-10 黒灰色土

須恵器	甕、壺3、壺(古)、坏c
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト)、丸坏a、高坏、甕a
	甕b、椀c、鍋、把手、すり鉢
黒色土器A	坏d
瓦器	椀c2
龍泉窯系青磁	椀：I(8)、I-1(1)、I-2c(1)、I-2～4(1)、I-2×3(5)、I-4(3)
	I-4a(1)、I-4b(1)、I-5(4)、I-5a(1)、I-5b(2)
	皿：I(1)、I-2(1)
	他器種：水注-龍泉？(1)
同安窯系青磁	椀：I-1b(1)
	皿：I(3)、I-1b(1)、III-1b(1)
青磁(不明)	椀(1)
土師質土器	すり鉢
須恵質土器	甕(東播？)
灰釉陶器	壺類、破片
国産陶器	甕(常滑)、甕(備前)
白磁	椀：II(5)、IV(5)、IV-1a(1)、V(1)、V-2b(1)
	V～VIII(1)、VI-1b(1)、VI×VIII-2(1)、VIII(2)
	くし目(1)、破片(25)
	皿：II(3)、II-1a(1)、II×III(3)、III(1)、V×VI(5)
	VI(1)、IX(1)
	壺他：水注×壺III(2)
青白磁	破片(1)
中国陶器	壺：IV(1)、破片-A' b(1)、Cb(1)、Db(1)、E(3)
	鉢：I(2)、I？(2)、VII(1)
	甕：I(1)、II(2)、破片-F(3)
	他器種：壺I(1)、壺I×II(1)、水注VI(1)、不明破片(1)
	破片-Ab(1)、A' b(3)、Ca(1)、C' a(3)、Cb(1)
	C' b(2)、Cc(1)
金属製品	鉱滓
土製品	フイゴ羽口
瓦類	丸瓦(縄目、格子-大)、平瓦(縄目、格子-大、小)

S-11

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)
瓦器	椀
金属製品	鉱滓
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦(格子-大、小)

S-12

土師器	破片、甕a
瓦類	平瓦(格子-大)

S-13

須恵器	壺
土師器	丸坏a、椀c
黒色土器A	椀c2

S-14

須恵器	甕、坏c
土師器	丸坏
黒色土器A	椀
白磁	椀：破片(1)

S-15

須恵器	甕、壺3、壺c、皿a、坏c、坏(古)
土師器	坏a(イト、ヘラ)、丸坏a、高坏a、坏c×皿c、椀c、甕
	小皿a(イト)、皿a2、器台、高台付鉢
	焼塩壺
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
瓦器	椀、小皿
龍泉窯系青磁	椀：I(4)、I-1(1)、I-2(1)、I-6(1)、III(3)、IV(1)、破片(3)
同安窯系青磁	椀：I-1b(1)
	皿：I(2)
青磁(不明)	椀(1)
土師質土器	こね鉢
須恵質土器	こね鉢
瓦質土器	すり鉢、火鉢
国産陶器	甕(常滑)、甕(備前)
白磁	椀：II(3)、IV(3)、IV-1a(3)、V(1)、破片(7)
	皿：V-1(1)、V～VII(3)、VI-1(1)
	壺他：壺III(1)
中国陶器	壺：耳壺XII-2(1)、破片-E(1)
	他器種：破片-Ca(1)、C' a(1)、Cb(1)、Ba(1)、Da(1)
金属製品	銙形滓
石製品	石鍋、砥石、臼
弥生土器	甕？
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小、文字瓦I-7b)、軒平瓦
	丸瓦(縄目、格子-大)

S-15 茶色土

須恵器	坏c、甕、壺3
土師器	器台、椀c、鍋、甕、坏a(ヘラ)
黒色土器A	椀c
瓦器	椀
越州窯系青磁	椀：I(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(3)、I-5(1)
同安窯系青磁	椀：破片(1)
	皿：I-2(1)
土師質土器	こね鉢(片口)
須恵質土器	こね鉢
白磁	椀：IV(1)、IV-1a(1)、V～VIII(2)、破片(3)
	皿：II×III(1)、VI-1b(1)
	壺他：鉢III(1)、灯皿IX(1)
青白磁	椀(1)
中国陶器	鉢：I(1)
	甕：破片-F(1)
金属製品	鉸滓
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)、丸瓦(格子-大)

S-15 茶黒色土

須恵器	坏c
土師器	椀c、甕a、器台、小皿a、坏a、丸坏a
黒色土器A	椀c
黒色土器B	壺3
越州窯系青磁	椀：I(1)、I-3(1)
緑釉陶器	椀、椀(京都)
灰釉陶器	壺類
白磁	椀：破片(1)
中国陶器	他器種：破片-Ca(1)
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(格子-大)

S-16

須恵器	甕、坏
土師器	焼塩壺
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦

S-17

須恵器	甕
土師器	鍋、坏a×小皿a、椀
	焼塩壺
黒色土器A	破片
須恵質土器	こね鉢
土製品	トリベ
瓦類	丸瓦(格子-小)

S-18

須恵器	壺c、甕、高坏(古)
土師器	椀c
瓦類	丸瓦、平瓦(格子-小)

S-19

須恵器	甕、坏c、壺1、壺3
土師器	坏a(イト、ヘラ)、坏c、甕
瓦器	椀c
白磁	椀：I(1)、II(1)
土製品	焼土塊
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目)

S-20

須恵器	壺c、甕、壺
土師器	坏a(イト)
瓦類	丸瓦(格子-小)、平瓦(格子-小)
金属製品	鉸滓

S-20 黒色土

須恵器	甕、壺(古)、坏c×皿c
土師器	坏a(イト)、椀c
龍泉窯系青磁	椀：I(1)
白磁	椀：V(1)、V-4(1)、破片(1)
青白磁	破片(1)
中国陶器	他器種：鉢I(1)、破片-Aa(1)
金属製品	鉸滓
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)

S-21

須恵器	甕、坏c、壺3
土師器	坏c、小皿a
黒色土器B	椀
白磁	椀：破片(1)

S-22

須恵器	壺3
土師器	坏a(イト)
中国陶器	鉢：VII(1)(殺上層、表土と接合)
瓦類	平瓦

S-23

須恵器	坏c、甕
土師器	皿a、甕a、坏a(ヘラ)、坏d、甕
黒色土器A	破片
周防窯系青磁	皿：I(混入)

S-24

須恵器	坏c、甕×壺
土師器	小皿、甕

S-25

須恵器	甕、坏c、壺×坏(古)、壺3、鏡面硯
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、皿a、煮沸具
龍泉窯系青磁	椀：I-1(1)、I-2×3(1)、I-5(1)
須恵質土器	こね鉢
国産陶器	甕(常滑)
白磁	椀：II(1)、IV(1)、V(1)、くし目(1)
	皇像：皇×水注III(1)
中国陶器	鉢：I(1)
	壺：破片-F(3)
	他器種：盤I×II(1)、破片-Cb(1)、C' b(1)、破片(1)
金属製品	鉱滓、たがね、鉄釘
石製品	滑石製品(緑色)
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)、丸瓦(縄目、格子-小)

S-26

土師器	椀c、皿×坏
白磁	皿：破片(1)

S-27

須恵器	坏c、甕
土師器	小皿a(イト)、坏
白磁	椀：IV(1)、破片(3)
瓦類	丸瓦(縄目)、平瓦

S-28

須恵器	坏c
土師器	甕a、坏a(ヘラ、イト)、椀c
龍泉窯系青磁	皿：I(1)
青磁(不明)	破片
須恵質土器	こね鉢
白磁	椀：破片(2)
青白磁	小皿(1)
金属製品	鉱滓

S-29

須恵器	甕、蓋、坏c
土師器	丸坏a、把手
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀：I-2×3(1)
白磁	皿：IX(1)
中国陶器	他器種：不明破片(2)
肥前系陶磁器	破片
弥生土器	甕
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)

S-30

須恵器	甕、坏(古)、坏c
土師器	小皿a(イト、ヘラ)小皿b(イト)、坏a(イト)、丸坏a
	椀c、甕a
黒色土器A	椀
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀：I-1a(1)、
龍泉窯系青磁	椀：I(2)、I-5a(1)、I-5b(2)
須恵質土器	こね鉢
緑釉陶器	破片(1)
国産陶器	甕(常滑)
白磁	椀：IV(1)、V-1(1)、くし目(1)、破片(1)
	皿：VII(1)、破片(1)
中国陶器	壺：破片(1)
	他器種：破片-B' a(1)
金属製品	鉱滓
石製品	鍋(滑石製)
瓦類	平瓦(縄目、格子-大小)、丸瓦

S-31

須恵器	甕
土師器	坏a(ヘラ)、皿a、甕×鍋、甕a
白磁	椀：破片(1)
瓦類	平瓦(縄目)

S-32

須恵器	坏c
黒色土器A	椀c
白磁	椀：V-1(1)、破片(1)
	皿：VIII-1？(1)、IX-1(1)
中国陶器	壺：破片-Da(1)
その他	石炭

S-33

須恵器	壺蓋、壺(古)、壺3、坏、高坏、甕、皿a
土師器	坏a(ヘラ)、丸坏a(混入？)、坏d(ケズリなし)
	大椀、椀c、皿a、小皿a(ヘラ)、甕a、壺3
緑釉陶器	椀、皿(京都)
灰釉陶器	破片(1)
土製品	焼土塊、カマド
石製品	碁石
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)

S-34

須恵器	甕
土師器	椀c、坏a(イト)、小皿a(ヘラ)、鉢、甕a
越州窯系青磁	椀：I(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(1)
白磁	椀：V-4×VIII-3(1)
瓦類	平瓦(縦格子-小)

S-35 褐色粘土

金属製品	環状金具

S-35 黒色砂土

須恵器	坏c、甕、鉢a3
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト、ヘラ)、甕a、椀c
黒色土器B	椀c
瓦器	椀
白磁	椀：IV(2)、VI×VIII-2(2)、V-4？(1)、V？(1)
	皿：II？(1)、II-1a(1)、II-1b(1)、破片(1)
	壺他：四耳壺(1)
中国陶器	他器種：破片-C' a(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦

S-35 茶色砂土

須恵器	鉢(鍋)、甕
土師器	坏a(イト)、坏c、小皿a
黒色土器B	蓋3
瓦器	椀
龍泉窯系青磁	椀：I-2×3(1)
同安窯系青磁	椀：I(1)
須恵質土器	こね鉢
白磁	椀：破片(2)
	皿：II×III(1)
弥生土器	甕(後期)

S-36

須恵器	坏c、甕、蓋3、蓋c、皿a
土師器	蓋3、坏d、丸坏、甕a
黒色土器B	椀c、甕
石製品	滑石片
瓦類	平瓦(格子-小)

S-37

須恵器	蓋、甕、蓋3、坏c
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、坏a(イト、ヘラ)、高坏、丸坏 蓋3
瓦器	椀c
白磁	椀：IV-1a(1)、IV(2)、V-4×VIII-3(1)、II-1×2(1) 破片(6)
中国陶器	壺：破片-F(1)
	他器種：鉢1×II(1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器壺
土製品	焼土塊
石製品	滑石片
瓦類	平瓦(格子-大、小)

S-38

須恵器	坏c、甕
土師器	椀c2、丸坏a、小皿a、坏d×皿a、煮沸具
青白磁	破片(1)

S-39

須恵器	甕、壺、壺蓋、蓋c、蓋3、高坏(古)、坏c、皿a
土師器	坏a(イト、ヘラ)、坏d、丸坏a、小皿a(ヘラ) 椀c、煮沸具
	焼塩壺
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀c
灰釉陶器	底部片
白磁	椀：IV-1a(1)、V-1×VIII-2(1)、破片(1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
金属製品	刀子、鉱滓
土製品	カマド、フイゴ羽口
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)

S-40

須恵器	甕、坏c、壺
土師器	壺、把手、椀c、甕a、坏c、丸坏a、小壺
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
高麗青磁	椀：破片(1)
緑釉陶器	緑彩壺
白磁	椀：IV(2)、II-1×2(1)、破片(2)
石製品	滑石製品
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)

S-41

須恵器	蓋3、甕
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)
瓦器	椀
灰釉陶器	破片
白磁	椀：IV(1)、II-5(1)、破片(1)
	皿：II×III(1)、V～VII(1)
瓦類	平瓦(格子-大、小)

S-42

金属製品	鉱滓

S-43

須恵器	坏、蓋c、甕、皿a
土師器	大蓋3、蓋3、皿a、大皿c、坏c、坏d、甕a、小壺 高坏
	焼塩壺
白磁	椀：破片(1)
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦

S-44

須恵器	蓋1、蓋c、坏c、甕
土師器	椀c1、小皿a(ヘラ)、煮沸具
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	壺：壺×水注II(1)
白磁	椀：IV(1)、破片(1)
瓦類	丸瓦(格子-小)、平瓦(縄目、格子-小)

S-45

須恵器	坏c、甕
土師器	丸坏a、坏a(ヘラ)、小皿a(ヘラ)、椀c、甕a
黒色土器A	椀c2
金属製品	鉱滓
瓦類	丸瓦(縄目)

S-46

須恵器	甕
土師器	破片
白磁	椀：破片(1)
瓦類	破片(格子-大)

S-47

須恵器	甕
土師器	小皿a(イト)
龍泉窯系青磁	椀：I(1)、I-2(1)
土師質土器	すり鉢
瓦類	丸瓦(格子-大)、平瓦(格子-小)

S-48

須恵器	甕、壺3、蓋c、大椀、皿、坏c、供膳具
土師器	小皿a(ヘラ)、小皿c、皿a、坏a(イト、ヘラ)、丸坏a 甕a、鍋、椀c2(X・XI期)、把手
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀：I(1)
長沙窯系青磁	壺(2)
龍泉窯系青磁	椀：I(1)、I-5b(2)、破片(1)
	他器種：盤III(1)
同安窯系青磁	皿：I(1)
高麗青磁	象嵌：椀(1)
土師質土器	こね鉢
須恵質土器	こね鉢(東播)
瓦質土器	火鉢
緑釉陶器	耳皿、破片
黒釉陶器	天目椀(1)
白磁	椀：I(1)、IV(4)、VI×VII(1)、くし目(1)、破片(3)
	皿：II×III(1)、VI-1a(1)、IX(1)、IX-2(1)
	壺他：水注×壺(1)、不明破片(1)
中国陶器	壺：破片-E(1)
	鉢：II-1a(1)
	他器種：盤I-3(1)、破片-A' b(1)、Ba(1)、C' a(1) C' b(2)
李朝	皿(1)
輸入須恵器	甕
肥前系陶器	椀(鉄釉)(1)
金属製品	鉱滓、刀子
石製品	石鍋B群(加工品)
瓦類	丸瓦(縄目、格子-小)、平瓦(縄目、格子-大、小) 破片

S-49

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a(ヘラ)、甕(角閃石、雲母混入)
黒色土器B	破片
瓦器	椀
瓦類	平瓦(格子-大、小)、丸瓦

S-50

須恵器	甕b、坏c、壺3
土師器	坏a(イト)、坏c、坏d、丸坏、椀c、甕
黒色土器B	椀c
龍泉窯系青磁	椀：I-2(1)、I-4(1)
同安窯系青磁	皿：I-1b(1)
白磁	椀：IV(1)、IV-1a(1)、VIII(1)、破片(2)
	皿：II×III(1)、IX(1)
中国陶器	他器種：甕：破片-F(2)
金属製品	鉱滓
瓦類	丸瓦(格子-大)、平瓦(格子-小)

S-51

須恵器	鉢
土師器	小皿a(ヘラ)、椀c2、丸坏a、坏a(イト)、壺3
龍泉窯系青磁	椀：I-5b
白磁	椀：IV(1)、V-2b(1)、くし目(1)、破片(6)
弥生土器	大型甕(中期)
瓦器	平瓦(縄目、格子-大、小)、丸瓦(格子-小)

S-52

須恵器	壺1、壺3、高坏、坏c、甕
土師器	皿a、壺3、椀c(XI期～)、甕×鍋、甕a、脚付皿？ 丸坏a、坏d、小皿a(イト、ヘラ)、小皿a2、鉢
黒色土器B	椀c
青磁(不明)	椀(1)
白磁	椀：II(1)、II-3×4(1)、II-5(1)、IV(5)、IV-1a(1) 破片(3)
木製品	炭化物
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)、丸瓦

S-53

須恵器	甕、壺1、壺3、皿、坏c、鉢b
土師器	坏a(イト)、坏c、坏d、丸坏a 甕a、皿a(ヘラ)、皿c、小皿a(ヘラ)、椀c、甑
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀：I(1)、I-2(2)、II-2(1)
	壺：水注×壺(1)
龍泉窯系青磁	椀：III(1)、上田B類(1)
同安窯系青磁	椀：I-1b(1)
	皿：I(1)
土師質土器	すり鉢
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	破片
白磁	椀：IV(3)、IV-1(1)、破片(5)
	皿：IX(1)
	壺他：水注II(1)
中国陶器	壺：破片-Cb(1)
	他器種：破片-Ca(2)、破片(1)
金属製品	鉱滓
土製品	カマド
瓦類	丸瓦(縄目)、平瓦(縄目、格子-小)

S-54

須恵器	壺、壺3、坏×壺(古)
土師器	丸坏a、椀c、甕、小皿a(ヘラ)
石製品	滑石製品(鍋？)
瓦類	丸瓦(格子-小)

S-55

須恵器	壺、甕、坏c、壺(古)、壺3、
土師器	坏a(イト)、坏c、大鍋、小皿a(ヘラ)、椀c
	焼塩壺
黒色土器A	椀c
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀：II(1)、1×III(タテヘラ)(1)
龍泉窯系青磁	椀：I-1(1)、I-5b(1)
同安窯系青磁	椀：III-1b×c(1)
高麗青磁	椀：III-2(1)
須恵質土器	こね鉢
緑釉陶器	椀(京都)
白磁	椀：II-1×2(2)、V(1)、V-2b(1)、V～VIII(2)
	V-4×VIII-3(1)、破片(6)
	皿：III-1(1)、IX(1)、XI×II(1)
青白磁	皿
中国陶器	他器種：破片-A' b(1)、Ca(1)、不明破片(1)
金属製品	鉱滓
石製品	石錘
瓦類	丸瓦(格子-小)、平瓦(縄目、格子-大、小)、塼

S-55黒黄色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	椀c1、坏a(イト、ヘラ)、甕a
黒色土器A	甕
中国陶器	鉢：I(1)、I-2a(1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
金属製品	鉄釘
瓦類	丸瓦(縄目、格子-小)、平瓦(縄目、格子-大)

S-56

須恵器	壺3、鉢a
土師器	椀c、坏a、甕b
緑釉陶器	破片

S-57

須恵器	鉢
土師器	坏a(ヘラ)、椀

S-58

須恵器	壺、壺3、鉢
土師器	椀c(XI期～)、坏a(ヘラ)、坏d、小皿a
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	椀：I(1)
白磁	椀：I(1)、IV(1)
	皿：破片(1)
瓦類	平瓦(格子-大)、破片(縄目)

S-59

須恵器	甕
土師器	坏c、甕a、器台
金属製品	鉄釘

S-60

須恵器	甕、壺(古)、壺3、小壺、鉢、坏c
土師器	椀c、大椀c、坏a(イト)、丸坏a、甕a、小皿a(イト)
	脚付鉢
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
瓦器	椀
越州窯系青磁	椀：I-2(1)
同安窯系青磁	椀：III-2(1)
高麗青磁	椀：III(1)
灰釉陶器	壺類
白磁	椀：I-5(1)、II-1×2(1)、IV(3)、V(1)、V-1×VIII-2(1)
	V～VIII(3)、VI-1(1)、XII(1)、破片(5)
	皿：II×III(1)、VI×VII(1)
中国陶器	他器種：盤I-1(1)、破片-A' a(1)、A' b(1)
木製品	炭化物あり
瓦類	平瓦(格子-大、小)

S-61

須恵器	壺3、甕
土師器	坏d
瓦類	破片(縄目)

S-62

須恵器	破片
土師器	丸坏a、小皿a(ヘラ)、煮沸具
黒色土器A	破片

S-63

須恵器	壺、壺(古)、壺3
土師器	小皿a(ヘラ)、皿、坏c、椀c、甕a
黒色土器B	椀c2、甕
灰釉陶器	皿c
瓦類	破片

S-64

須恵器	壺3
土師器	坏a、坏c、小皿a(ヘラ)、甕a
瓦類	丸瓦

S-65

須恵器	坏c、甕
土師器	甕a、小皿a、坏c
越州窯系青磁	椀：I(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)

S-66

須恵器	甕、供膳具
土師器	椀c、供膳具
	焼塩壺
金属製品	刀の柄(銅製)

S-68

須恵器	破片
土師器	甕a、椀c、坏a
高麗青磁	椀：III-2(1)
瓦類	丸瓦(格子-大)

S-69

須恵器	蓋3、坏(古)、甕
土師器	坏a(ヘラ)、丸坏a、椀c、小皿a(ヘラ)
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦(格子-大)

S-70

須恵器	甕、壺
土師器	甕、供膳具
白磁	椀：XI-1(1)
中国陶器	壺：破片-F(1)

S-71

須恵器	破片
土師器	甕、椀c、小皿a、皿a×壺

S-72

須恵器	甕、皿
土師器	甕、椀c、丸坏？、坏×皿(イト)
	焼塩壺
黒色土器A	椀
白磁	椀：破片(1)
瓦類	破片

S-73

須恵器	坏c、皿
土師器	甕×鍋
瓦類	丸瓦(縄目)

S-74

須恵器	破片
土師器	丸坏
	焼塩壺
白磁	椀：V-1×VIII-2(1)

S-75 B3

須恵器	蓋(古)
土師器	小皿a(ヘラ)、丸坏a、大椀c、甕a
緑釉陶器	破片、大形壺片
灰釉陶器	椀

S-75

須恵器	坏c、甕、蓋3、蓋c、皿a、壺a
土師器	椀c1、椀c2、甕a、甕b、把手付甕、小皿a(ヘラ)、皿a
	坏a(ヘラ)、坏c、丸坏a、高坏
黒色土器A	椀c
瓦器	小皿a、椀c2
越州窯系青磁	椀：I(1)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	壺、椀、破片
白磁	椀：II(1)、V(1)、V-3(1)、V-1×VIII-2(2)、破片(5)
	皿：II×III(1)
中国陶器	壺：III×IV(1)
弥生土器	甕
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小、文字瓦1-9)
	丸瓦(縄目、格子-小)

S-76

土師器	丸坏、甕a

S-77

須恵器	甕、供膳具
土師器	甕a、供膳具
黒色土器B	椀c2
瓦類	平瓦(格子-小)

S-78

須恵器	甕、坏a
土師器	坏a(イト)、丸坏、小皿a(イト)
	焼塩壺
須恵質土器	こね鉢(東播)
白磁	椀：IX-2(1)、IV(1)
青白磁	破片(1)
中国陶器	他器種：破片-A' c(1)
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)

S-79

須恵器	坏c
土師器	小皿a(ヘラ)、丸坏a
黒色土器A	破片
白磁	椀：破片(2)
灰釉陶器	不明品
土製品	焼土塊

S-80

須恵器	坏c、蓋1(古)、甕、把手
土師器	坏a(イト)、甕、皿a
黒色土器A	椀
瓦器	椀
灰釉陶器	椀
白磁	椀：破片(3)
青白磁	破片(1)
金属製品	鉱滓、鉄釘
石製品	粘板岩製品
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦

S-81

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a(イト、ヘラ)、丸坏、甕a(角閃石)、小皿a(ヘラ)
	椀c
	煮炊土器
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀：II(1)
白磁	椀：破片(3)
	皿：II-1a(1)、V-2(1)
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、鐘

S-81 黒色土

須恵器	破片
土師器	皿、甕a、甕×鍋
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片

S-81 黄茶色土

須恵器	坏c、甕
土師器	坏a(イト、ヘラ)、椀c
黒色土器B	破片
瓦器	破片
越州窯系青磁	椀：II(1)、
白磁	椀：II-1×2(1)、破片(1)
	皿：V×VI(1)
土製品	焼土塊
金属製品	鉄釘

S-82

土師器	坏a(ヘラ)
白磁	椀：破片(1)
	皿：V～VII(1)、II-1a(1)
瓦類	平瓦(格子-大、小)

S-83

須恵器	甕
土師器	小皿a(ヘラ)、坏a(イト)、丸坏a、椀c
瓦器	椀c
白磁	椀：IV(1)
土製品	焼土塊

S-84

須恵器	坏c、甕、壺3
土師器	甕、椀c、坏a(ヘラ)、小皿a(イト)
	焼塩壺
黒色土器B	椀c
青白磁	破片(1)
瓦類	丸瓦(格子-大)、平瓦(格子-大)

S-85

須恵器	甕、大甕、坏a、坏c、坏(古)、壺、小壺(糸切り)、椀c 皿a、鉢、皿a、壺n3、壺a4、壺b、壺c、蓋、壺1、壺3 壺4、把手
土師器	坏a(ヘラ)、坏d、坏e、高坏、皿、皿a、皿c、椀c、甕 甕a、甕b、小甕、鉢、鉢b、壺c、壺3、壺4、大壺3 小壺
	焼塩壺
黒色土器A	壺3、椀(搬入)、皿
黒色土器B	破片
長沙窯系青磁	椀II(1)
緑釉陶器	耳皿(京都)、椀(京都)、破片
灰釉陶器	壺頸底部(S-165と接合)、双耳壺
中国陶器	龍泉窯系；不明破片(1)
金属製品	鉱滓
土製品	カマド、フイゴ羽口
瓦類	平瓦(縄目-細)、丸瓦(縄目)、鴟

S-85 暗灰色土

須恵器	坏a、坏c、坏(古)、高坏、皿a×坏a、甕、壺3、小壺 壺c3、高台
土師器	坏a、坏c、坏d、小坏c、大高坏、甕a、甕b？皿a、鉢 小壺、壺b、壺3、高坏×鉢
	焼塩壺
黒色土器A	坏d
灰釉陶器	瓶
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子-小、縦格子)、丸瓦(縄目)

S-85 黒色土

須恵器	壺、甕、壺c、壺3、坏、坏a
土師器	甕a、甕(精製)、坏a、坏c、坏d、高坏、椀c1、皿a 小皿a
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	椀：I(1)
緑釉陶器	大椀片(東海)、皿(防長)
灰釉陶器	段皿
白磁	椀：I-1(1)、I(1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
石製品	砥石
金属製品	刀子
瓦類	平瓦(縄目-細、粗)、丸瓦(縄目)

S-85 灰色土

須恵器	甕、甕a、坏a、坏c、坏(古)、壺1、壺3、壺b？、壺c 壺(古)、円面硯？、鉢、壺
土師器	坏a、坏d、高坏、丸坏、皿a、甕a、椀c1、大椀c、壺c 壺3、把手、鉢
	焼塩壺
黒色土器A	皿c、坏c、椀(搬入)、小甕
緑釉陶器	皿(京都)-S-196段上層と接合、小椀(京都)、破片 大椀(東海)-S-10茶色と接合
灰釉陶器	双耳壺
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子-小、文字)、丸瓦(縄目)、軒丸瓦 塼、文字瓦(I-8-b)

S-86

土師器	弦溝具
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器甕
金属製品	鉄釘
瓦類	平瓦(格子-大、小)

S-87

須恵器	甕、坏c
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)
黒色土器A	椀
龍泉窯系青磁	椀：I-5(1)
白磁	椀：破片(1)
瓦類	平瓦(格子-大)

S-88

土師器	弦溝具
瓦類	丸瓦、破片(格子-小)

S-89

須恵器	壺、甕、壺1、壺3、坏c、坏壺(古)
土師器	甕a、皿a、小皿a(ヘラ)、椀c、壺3
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)、軒平瓦

S-90

須恵器	短頸壺、壺d、甕、坏a、坏c、坏(古)、高坏、皿a、鉢b
	壺1、壺3、壺c、壺c3、蓋壺、円面硯？
土師器	甕a、甕(精製)、甕(角閃石入り)、小甕a、皿a、小壺
	坏a、坏c、坏d、坏e、小坏a、高坏、椀、大椀c1
	椀c1、壺a4、壺c3、壺3、把手、鉢、小鉢
	焼塩壺、煎熬土器
黒色土器A	大型品片、鉢
越州窯系青磁	壺：水注把手、長沙×越(1)
長沙窯系青磁	椀(2)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	破片
金属製品	鉱滓、鐸、海老錠(牡金具)、鉄釘、不明品
土製品	紡錘車
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目、不明)、塼

S-90 灰色砂土

須恵器	壺c、壺3、坏c、高坏、甕、甕(精製)、皿a
土師器	坏a、坏c、坏d、高坏、大坏c×大皿c、皿a、壺、小壺
	甕a(角閃石)、壺c、壺3
	焼塩壺
黒色土器B	風字硯
緑釉陶器	椀
金属製品	鉱滓、鉄釘
石製品	用途不明石器
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦

S-91

須恵器	壺1、壺(古)、甕
土師器	椀c、坏a、高坏、甕a、甕×鍋
黒色土器A	坏×椀
瓦類	平瓦(縄目)

S-92

須恵器	坏c、坏(古)、甕、壺f×d
土師器	壺c、壺3、小皿a、甕a、椀c、甕×鍋
	焼塩壺
黒色土器A	破片
龍泉窯系青磁	椀：I(1)、I-5a(1)、I-5b(1)、破片(1)
	皿：I(1)
	他器種：盤(1)、坏III-4(1)
同安窯系青磁	椀：I(1)
緑釉陶器	破片
白磁	椀：II-1×2(1)、破片(2)
	皿：VIII(1)
中国陶器	壺：破片-Ab(1)、Cb(1)
	甕：II(2)、破片-F(1)
	他器種：破片-A' a(2)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
肥前系陶磁器	椀(釉ハギ)
安南	椀-ベトナム？(1)
金属製品	鉱滓
石製品	砥石
瓦類	平瓦(格子-大、小)、丸瓦、軒平瓦、瓦玉

S-93

須恵器	坏c、甕
土師器	小皿a(ヘラ)
瓦器	椀
白磁	椀：破片(1)
	皿：V～VII(1)
中国陶器	他器種：破片-A' b(1)
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)

S-94

須恵器	坏、甕
土師器	丸坏、坏×皿、坏c×皿c、甕×鍋
黒色土器A	破片
越州窯系青磁	壺：壺×水注I(1)
白磁	椀：破片(1)

S-95

須恵器	甕、皿a、坏c、壺c、壺3
土師器	坏c、丸坏a、坏a×坏d、小皿a(ヘラ)、甕a、壺3
	椀c2、大椀c
	焼塩壺
瓦器	椀c、小皿a、托、椀
越州窯系青磁	椀：I(3)
	壺：III(1)
緑釉陶器	高台(東海)
灰釉陶器	瓶、徳利、破片
白磁	椀：II(3)、II-1(2)、IV(2)、V-4b(1)、V～VII(6)
	破片(5)
	皿：VI-1b(1)
	他器種：壺×水注(1)
青白磁	破片(1)
中国陶器	壺：壺×水注(2)
	他器種：盤I(1)、破片-A' b(7)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)、平瓦×丸瓦(格子-小)

S-96

須恵器	甕、壺3
土師器	坏a(ヘラ)、小皿a、坏a×小皿a(イト)
瓦類	丸瓦

S-97

須恵器	坏a、甕、壺(古)
土師器	椀c、甕a、丸坏
黒色土器A	破片
龍泉窯系青磁	椀：I(3)、I(スタンプ)(1)、I-5(1)、I-5b(1)、IV(1)、
緑釉陶器	破片
白磁	椀：V(1)、VIII(1)、V-1×VIII(2)、破片(2)
	皿：II-1a(1)
中国陶器	鉢：I(1)
肥前系陶磁器	白磁合子、染付

S-98

須恵器	甕、蓋(古)、供膳具
土師器	坏a(イト)、坏c、丸坏、坏(円盤状高台？)、椀c2 甕a、小皿a(イト)
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
土師質土器	すり鉢
肥前系陶磁器	白磁：紅皿(1)
国産陶器	瓶利(近世)
中国陶器	鉢：I(1)
	悠器種：破片-C' b(1)
金属製品	鉱滓
石製品	滑石製品
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、平瓦×丸瓦(格子-大)
その他	貝、石炭

S-99

須恵器	坏c
土師器	椀c1×2、甕×鍋

S-100

須恵器	蓋(古)、蓋3、小壺、坏c、高坏、甕
土師器	小皿a(イト)、坏a(イト)、坏c、坏d、丸坏
黒色土器A	椀c2
瓦器	椀
両安窯系青磁	皿：I(1)
白磁	椀：II-1×2(1)、V-1×VIII-2(3)、破片(1)
	皿：II×III(1)
青白磁	破片(1)
瓦類	破片

S-101

須恵器	坏a、坏c、壺c、蓋3、皿a、甕
土師器	甕(精製)、甕a(角閃石)、坏c、小皿a2、皿c、鉢、把手 蓋b
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀：I(3)
金属製品	鉄
瓦類	丸瓦、平瓦(縄目)

S-102

須恵器	瓶、蓋3
土師器	坏c、椀c、甕a、小皿a、甕×鍋
黒色土器A	椀
瓦器	椀
金属製品	鉱滓

S-103

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、小皿a(イト)、弦滑具
金属製品	銅銭

S-104

須恵器	坏
土師器	坏a(イト)、甕a
	焼塩壺
越州窯系青磁	椀：I-5(1)
瓦類	破片

S-105

須恵器	坏c、甕a、蓋3
土師器	小皿a(ヘラ)、皿c、甕a、椀c、蓋3、坏a(ヘラ)、高坏 丸坏a
	焼塩壺
緑釉陶器	破片
白磁	椀：V-1×VIII-2(1)、VIII(1)、破片(3)
瓦類	丸瓦(格子-小)

S-106

須恵器	小壺、坏c、蓋3、甕
土師器	把手付甕、坏a(ヘラ)、甕、丸坏×椀
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀：I(1)
白磁	椀：XI-5(4)
中国陶器	鉢：I(1)
瓦類	平瓦(格子-小)

S-107

土師器	坏a(ヘラ)、椀c、弦滑具

S-108

須恵器	小壺、坏c、甕、蓋3
土師器	小皿a(ヘラ)、小皿a2(ヘラ)、椀c、甕a、甕×鍋
黒色土器B	椀c2
土製品	ルツボ
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(格子-小)

S-109

須恵器	壺c、甕、坏c
土師器	坏a(イト)、壺c
黒色土器B	椀
瓦器	椀
越州窯系青磁	椀：I(1)
両安窯系青磁	椀：破片(1)
緑釉陶器	破片
白磁	椀：IV(2)、V(1)、V-1×VIII-2(2)、V-4×VIII-3(1) 破片(9)
	皿：II-1a(1)
中国陶器	壺：I(1)
瓦類	丸瓦(格子-大)、破片(格子-小)

S-110

須恵器	大椀c、坏c、坏(古)、甕、甕b、蓋3、瓶c
土師器	椀c2、壺、甕a、甕b、小甕a、坏a(ヘラ)、坏d、高坏 皿a、把手、坏c×皿c、甕
黒色土器A	椀c1、椀c2
越州窯系青磁	椀：I(輪花)(1)
	壺：水注×蓋(1)
長沙窯系青磁	水注×壺(1)
緑釉陶器	椀(京都)、高台(京都)、瓶(京都)、椀(京都)
白磁	椀：I(1)、V-1×VIII-2(1)、破片(1)
	皿：托I(1)
	蓋他：瓶III(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)

S-110 灰色粘土

須恵器	甕、坏c、鉢、円面硯
土師器	把手、蓋、椀c、坏a(ヘラ)、坏c、甕
黒色土器A	椀c2
越州窯系青磁	椀：I-2(1)、I(1)
瓦類	丸瓦

S-110 茶色土

須恵器	壺、坏c、蓋3、蓋(古)、鉢b
土師器	甕(相裂)、甕a、蓋3、坏a(ヘラ)、坏c
	焼塩壺
黒色土器A	椀c2
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)

S-111

須恵器	甕、蓋3、小鉢a
土師器	小皿a(ヘラ、イト)、椀c2、坏a(イト)、甕×鍋
黒色土器A	破片
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀：I(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(1)、I-5(1)
白磁	椀：II-5(1)、IV(3)、IV-1a(1)V-2b(1)、V-3b(1)、IV-2(1) V-4×V-3(1)、破片(6)
	皿：II×III(1)、破片(1)
	壺他：鉢(1)
中国陶器	他器種：破片-Ba(1)
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)、丸瓦

S-112

須恵器	甕、坏c
土師器	坏a(イト、ヘラ)、高坏、椀c2、甕a
黒色土器A	椀
瓦器	椀
白磁	椀：II-1×2(2)、IV(4)、IV-1a(1)、V-1×VIII-2(2) V-3(1)、V-4×VIII-3(1)、破片(11)
	皿：II(1)、II-1a(1)、VI-1b(1)、VI～VII(1)
中国陶器	壺：A群(1)、壺B(1)
	甕：破片-F(1)
	他器種：不明破片(1)
瓦類	平瓦(格子-大)、丸瓦

S-113

須恵器	甕、供膳具
土師器	丸坏a、煮沸具
黒色土器B	破片
中国陶器	壺：破片-A' b(1)

S-114

須恵器	坏a、坏c、蓋3
土師器	蓋3、丸坏a(混入？)、椀c、甕a、小皿a(ヘラ)(混入？)
瓦類	丸瓦(縄目、格子-小)

S-115

須恵器	蓋3、甕、坏c
土師器	小皿a(ヘラ)、甕a、壺×鍋、椀c、坏a(ヘラ)、丸坏a
	高坏
	焼塩壺
黒色土器B	小椀c
白磁	椀：IV(1)、IV-1a(1)、V-1(1)、V-2a(2)
	皿：IV-1b(1)、破片(1)
瓦類	丸瓦(格子-小)、平瓦(格子-小)

S-116

須恵器	蓋1、蓋3、甕
土師器	丸坏a(イト)、高坏、甕、皿a(ヘラ)、小皿a、大皿a
	焼塩壺
黒色土器A	椀
金属製品	鉱滓
瓦類	破片

S-117

須恵器	甕、坏(古)、椀c(古)、壺蓋
土師器	甕a、坏d、丸坏a、小皿a
	焼塩壺
黒色土器B	椀
白磁	椀：IV(1)、破片(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目)

S-118

須恵器	破片
土師器	小皿a(ヘラ)、坏c、丸坏a
白磁	椀：破片(1)

S-119

須恵器	蓋3、甕、皿c×坏c
土師器	甕a、甕b、坏a(ヘラ)、坏d、丸坏(混入)、蓋c、蓋4
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)

S-120

須恵器	甕、坏c、壺、高坏、
土師器	小皿a(イト)、小皿a2(ヘラ)、椀c1、椀c2、坏a(イト)
	鍋
黒色土器A	椀c2
瓦器	椀c
龍泉窯系青磁	椀：I-1(1)、I-4(1)
緑釉陶器	椀(近江)
灰釉陶器	壺類、段皿
白磁	椀：II(1)、II-3×4(1)、II-1×2(3)、IV(4)、IV-1a(2) V-3b(1)、VIII(1)、破片(2)
中国陶器	壺-破片-A' b(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(格子-小)

S-121

須恵器	高坏、甕
土師器	蓋3、椀c
瓦類	平瓦(縄目)

S-122

須恵器	破片
土師器	椀c2、甕a、坏×小皿
黒色土器A	椀c2
白磁	椀：IV(2)、IV-1a(1)、破片(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(格子-小)

S-123

須恵器	坏c、甕
土師器	小皿a(ヘラ)、椀c、甕a、丸坏a
黒色土器B	椀c
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(格子-小)

S-124

須恵器	甕、蓋3、坏(古)
土師器	小皿a(ヘラ、イト)、小皿c、丸坏a、甕a
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
青磁(不明)	破片(1)
白磁	皿：V～VII(2)
瓦類	平瓦(縄目)、軒平瓦

S-125

須恵器	坏c、壺、蓋3、甕
土師器	小皿a、皿c、坏a(ヘラ)、坏c、丸坏a
黒色土器A	椀(混入？)
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	椀：I(1)
緑釉陶器	椀(京都)
灰釉陶器	皿、破片
白磁	皿：未分類(1)
金属製品	鉱滓
石製品	砥石
瓦類	平瓦(格子-大)、丸瓦(格子-小)、文字瓦(XV)

S-126

須恵器	甕
土師器	小皿a(ヘラ)、甕、丸坏a
金属製品	釘

S-127

須恵器	蓋3、坏(古)、高坏、甕
土師器	蓋c、小皿a(ヘラ)、椀c、甕a
白磁	椀：IV(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)

S-128

須恵器	坏a、坏c、甕、蓋3、鉢b、皿
土師器	甕a、椀c、小皿a2、皿c×椀c、甕×鍋
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦(縄目)

S-129

須恵器	甕
土師器	椀c、甕a
	焼塩壺
越州窯系青磁	壺：III(1)

S-130

須恵器	壺b、甕、坏c、大甕b
土師器	椀c2、甕a、坏a(ヘラ、イト)、坏c
	焼塩壺
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀：II(1)
緑釉陶器	破片
白磁	椀：破片(1)
石製品	滑石破片
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目、格子-小)

S-131

須恵器	蓋c、蓋3、高坏、甕
土師器	椀c2、甕a、丸坏a、鉢
	焼塩壺
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀：I(1)
金属製品	鉄釘
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)

S-132

須恵器	甕、壺(古)、
土師器	甕a、坏c
黒色土器A	破片
瓦器	破片
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器

S-133

須恵器	蓋3、甕
土師器	小皿a(ヘラ)、甕a
黒色土器A	破片

S-134

須恵器	蓋1、甕a
土師器	坏a(ヘラ)、坏d、丸椀a
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀：I(1)
緑釉陶器	破片
白磁	椀：破片(1)
瓦類	破片

S-135

須恵器	皿a、坏c、小坏a、甕、蓋3
土師器	坏a、坏c、坏d、高坏、皿a、椀c2、小壺(坩)、蓋3
	甕a、鉢(粗製)
	焼塩壺
黒色土器A	高坏
黒色土器B	椀c
瓦類	平瓦(縄目、格子-小、大)、丸瓦

S-136

須恵器	坏×皿
土師器	椀c2、小皿a(ヘラ)
黒色土器A	破片
緑釉陶器	大型壺片、破片

S-137

須恵器	蓋3
土師器	小皿a(ヘラ)、坏a(ヘラ、イト)、高坏、椀c、煮沸具
瓦器	椀
石製品	砥石
瓦類	破片

S-138

土師器	椀c、甕

S-139

須恵器	甕
土師器	小皿a2
黒色土器B	椀c2
白磁	椀：V-1×VIII-2(1)
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目、格子-小)

S-140

須恵器	坏a、坏c、蓋c、蓋c3、蓋3、壺蓋a、壺、皿a、大皿c 甕、甕a(大甕1)、大甕b、鉢
土師器	坏a、坏c、坏e、坏d、高坏、甕a(角閃石)、甕(精製) 皿a、鉢、小鉢、大鉢、ミニチュア鉢、小壺、椀c 蓋b、蓋c、蓋c3、蓋3、把手
	焼塩壺、煎熟土器
黒色土器A	椀c、蓋3、高坏
灰釉陶器	蓋ツマミ
金属製品	鉱滓
土製品	土錘、焼土塊、不明瓦質製品
瓦類	平瓦(縄目-大、小、格子)、丸瓦(縄目-小)

S-141

須恵器	甕、壺、坏、蓋3
土師器	丸坏、小皿a(ヘラ)、椀c2、甕a
黒色土器A	破片
緑釉陶器	破片(東海)
白磁	椀：IV(2)、IV-1a(1)、V(1)
金属製品	鉄釘
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)

S-142

須恵器	甕
土師器	丸坏、小皿a(ヘラ)
黒色土器A	椀c2

S-143

須恵器	甕
土師器	小皿a(ヘラ)、蓋3、甕a、丸坏a
黒色土器A	破片
瓦器	破片
白磁	椀：破片(4)
瓦類	丸瓦(格子-小)

S-144

須恵器	甕
土師器	椀c2、甕a
瓦類	破片(縄目)、丸瓦

S-145

須恵器	壺(古)、蓋3、皿×坏、坏c、甕
土師器	蓋3、坏a(ヘラ)、坏d、椀c、甕a
黒色土器A	椀
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦

S-147

須恵器	甕
土師器	鍋、椀c
金属製品	鉄釘
瓦類	破片

S-148

須恵器	坏c、坏(古)、高坏、甕、壺、蓋c、蓋1、蓋3、平瓶
土師器	甕a、甕b、小皿a(ヘラ、イト)、坏a(ヘラ、イト)、坏c 丸坏a、高坏、鍋、椀c、椀c2(イト)、竈、把手
	焼塩壺
黒色土器A	把手付甕
黒色土器B	椀c
瓦器	小皿a(ヘラ)、椀(輔象)、椀c2
越州窯系青磁	椀：I(1)、II-3(1)
	壺：II(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(2)、I-5b(1)、I-6b(1)
別府質土器	こね鉢(東播)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	椀、皿、蓋？
白磁	椀：II(6)、IV(4)、IV-1a(1)、V(2)、V-2(3)、V-2b(1) V-3(1)、V-1×VIII-2(1)、V-4×VI-1b(1) V～VIII(1)、VI×VIII(1)、くし目(1)、破片(16)
	皿：V×VI(1)、VII(1)、破片(2)
	壺他：壺II(1)
中国陶器	壺：破片-Da(1)
	鉢：I-1b(1)
	甕：破片-F(2)
	他陶磁：不明破片(1)
金属製品	鉱滓
土製品	カマド
石製品	石鍋
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)、丸瓦(縄目、格子-大、小) 文字瓦(IV-1b)

S-149

須恵器	甕、鉢b、鉢(古)、蓋3、坏c、坏(古)
土師器	甕a、坏a(ヘラ)、坏c、坏d、丸坏、高坏、小坏、小壺 皿a、小皿a(ヘラ、イト)、竈、蓋3、蓋4、椀c、こね鉢 把手
黒色土器A	破片
緑釉陶器	椀c、破片
灰釉陶器	破片
白磁	椀：II-1(1)、破片(6)
中国陶器	甕：破片-F(1)
金属製品	鉱滓
土製品	土錘
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目、格子-小)

S-149 下層

土師器	坏a(ヘラ)、瓷沸具
瓦器	椀c
緑釉陶器	椀(防長)
石製品	砥石

S-150

須恵器	甕、供膳具
土師器	坏a(イト)、坏c、丸坏、小皿a(イト)、甕×鍋
黒色土器B	椀c
白磁	椀：IV(1)、破片(1)
石製品	石鍋

S-151

須恵器	甕
土師器	坏a(ヘラ)、坏c、椀c2、甕
黒色土器A	破片

S-152

須恵器	甕
土師器	小皿a、椀c2、坏a(ヘラ)
黒色土器A	破片
石製品	サヌカイト

S-153

須恵器	甕、坏c、高坏、蓋3
土師器	小皿a(ヘラ、イト)、丸坏a、甕a
	焼塩壺
瓦器	椀c
白磁	椀：II-3(1)、IV(1)、V-4×VIII-3(1)、破片(2)
金属製品	鉱滓
石製品	石鍋B群
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目)

S-154

須恵器	蓋3、甕、坏c、高坏、円面硯
土師器	坏a(ヘラ)、坏c、丸坏、甕、小皿a(ヘラ、イト)、椀c2
黒色土器B	椀c
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀：II(1)
	壺：III(1)
長沙窯系青磁	水注×壺(1)
高麗青磁	壺
須恵質土器	こね鉢(東播)
緑釉陶器	椀(防長)
灰釉陶器	破片
白磁	椀：くし目(1)、破片(3)
	壺他：壺(2)
青白磁	水注×壺(1)
土製品	フイゴ？
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(格子-大)

S-155

須恵器	甕、蓋c、坏c、椀c
土師器	小皿a(ヘラ)、小皿a2(ヘラ)、坏a、坏d、丸坏、甕
	椀c1
黒色土器A	椀c、椀c2
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	椀：I-2(1)
白磁	椀：V-1×VIII-2(2)
瓦類	丸瓦(格子-小)、平瓦(縄目)

S-156

須恵器	小瓶、坏c、甕、蓋3、鉢(筒)
土師器	小皿a(ヘラ、イト)、坏a(ヘラ、イト)、坏c、丸坏
	高坏、甕a、甕b、器台、蓋3
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀
瓦器	椀c2
越州窯系青磁	椀：I-3×4(1)
	壺：I(1)
同安窯系青磁	他器種：同安？
須恵質土器	こね鉢(東播)
白磁	椀：I(1)、II(2)、II-1(1)、V-1(1)、V-1×VIII-2(1)
	破片(4)
中国陶器	壺：破片-Cb(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(格子-小)

S-157

須恵器	甕、蓋3、坏c
土師器	小皿a(イト)、坏c、坏d
黒色土器A	椀c2
黒色土器B	破片
白磁	椀：II-1(1)
弥生土器	甕
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目)

S-158

須恵器	坏c、坏(古)、高坏、蓋c、蓋1、蓋3、壺(古)、瓶a、甕
	壺b、把手、甕b
土師器	瓶、坏a(イト、ヘラ)、坏d、坏e、丸坏、高坏、甕a、
	皿a、小皿a1(ヘラ)、小皿a2(ヘラ)、鉢、大鉢(粗製)
	壺c、蓋c3、蓋3、蓋4、椀c、器台、把手、
	焼塩壺、煎熬土器
黒色土器A	蓋3、坏a、坏d、椀、椀c、椀(搬入)
黒色土器B	椀
瓦器	椀
須恵質土器	こね鉢(東播)
緑釉陶器	椀(京都)-S-149、S-151、S-85と同一個体
	皿(東海)、皿(防長)、椀(防長)、破片
灰釉陶器	瓶、破片
白磁	椀：IV×XI(1)
中国陶器	甕：破片(1)
	他器種：蓋(1)
金属製品	鉱滓
土製品	カマド
石製品	滑石石鍋A群
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目、格子-小)、塼

S-159

須恵器	壺、坏c、蓋3
土師器	小皿a(ヘラ)、甕、坏c、丸坏a
	焼塩壺
黒色土器A	破片
緑釉陶器	小皿(防長)
白磁	椀：II-1(4)、破片(2)
	皿：V～VII(1)
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦

S-160

須恵器	坏c、壺、蓋(古)
土師器	小皿a(ヘラ)、丸坏、甕a
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀：II(2)
緑釉陶器	破片
白磁	椀：I-1(2)、IV-1a(1)、V-1×VIII-2(1)、破片(1)
	皿：V×VI(1)
瓦類	平瓦(縄目)、軒丸瓦

S-160 暗灰色土

須恵器	甕、蓋(古)
土師器	椀c1、甕a、椀c2、小皿a(ヘラ)
黒色土器A	椀c2
黒色土器B	椀c2
白磁	椀：破片(1)
	皿：VI(1)
	壺他：壺II(1)
石製品	滑石
瓦類	平瓦(縄目)

S-161

須恵器	坏×皿
土師器	椀c、甕
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦

S-162

須恵器	甕、壺、坏c、高坏
土師器	小皿a(イト)、皿c、脚付盤、坏a(イト)、器台
黒色土器A	破片
瓦器	椀c、小皿a(イト)、椀(抽象)
越州窯系青磁	椀：II(1)
	壺：水注I(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(2)、I-5c(1)
同安窯系青磁	椀：I(1)、I-1a(1)
緑釉陶器	椀(京都)、皿、破片
白磁	椀：IB(1)、II-1(1)、V(1)、V×VIII(2)、VI×VIII-2(1) VIII(1)、破片(7)
	皿：IX-1(1)、IX-2(1)、破片(1)
青白磁	水注？(1)
中国陶器	壺：破片-A' b(1)、Cb(1)
	他器種：破片-B' a(1)
金属製品	鉱滓
石製品	石鍋A群
弥生土器	甕(箱)
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)、丸瓦(格子-小)

S-163

須恵器	甕
土師器	皿a、蓋c、丸坏
瓦類	破片(縄目)

S-164

須恵器	坏a、坏c、坏(古)、蓋3、甕
土師器	丸坏a、高坏、甕a、高台付鉢、小皿a
白磁	椀：IV(1)、破片(2)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(格子-小)、丸瓦(格子-大)

S-165

須恵器	坏a、坏c、坏(古)、高坏、蓋1、蓋3、蓋c、蓋c3 蓋(古)、甕、平瓶、壺、硯、円面硯
土師器	坏a(ヘラ)、坏c、坏d、高坏、蓋2×高坏、蓋c、蓋3 皿a、大皿c、甕a(角閃石)、壺
	焼塩壺
黒色土器A	椀c、坏d
長沙窯系青磁	椀(1)、破片(1)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	瓶？
中国陶器	他器種：盤I-1b(1)
金属製品	鉱滓
土製品	カマド
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目)

S-166

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、坏c、椀c1、小皿a(イト)、器台
瓦類	丸瓦(格子-小)

S-167

須恵器	甕、蓋3、坏(古)
土師器	甕a、坏c、坏d、皿
灰釉陶器	破片
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)

S-168

土師器	小皿a(ヘラ)、甕
瓦類	丸瓦

S-169

須恵器	坏c、甕、蓋3
土師器	甕a、椀c、小皿a
黒色土器A	椀c2
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦

S-170

須恵器	甕、坏a、坏c、坏(古)、高坏(古)、小坏c、壺a、蓋1 蓋3、蓋c3、蓋(古)
土師器	坏a(ヘラ)、坏c、坏d、高坏、坏c×鉢c、皿、甕(古) 甕a(角閃石)、皿a、把手付皿c、蓋3、蓋c、鍋、把手
	焼塩壺
黒色土器A	鉢、破片
灰釉陶器	小壺
金属製品	鉱滓、鉄釘
土製品	フイゴ羽口
弥生土器	高坏(中期)
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦、塼

S-171

須恵器	甕、坏c
土師器	甕a、鉢c、坏d、丸坏a、器台
黒色土器A	鉢c
瓦類	平瓦(縄目)

S-172

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、丸坏a、小皿a
岡安窯系青磁	椀：I-1b(1)
須恵質土器	こね鉢
国産陶器	甕(常滑？)
白磁	椀：IV-1a(1)、破片(1)
中国陶器	甕：破片-F(1)
瓦類	丸瓦(格子-小)

S-173

須恵器	坏
土師器	甕a、坏
白磁	皿：VII-1a(1)

S-174

須恵器	甕
土師器	甕×鍋
瓦類	丸瓦

S-175

須恵器	甕、壺a、蓋(古)
土師器	坏a(イト)、丸坏a、蓋c(赤彩)、鉢c、甕a
黒色土器A	鉢c
越州窯系青磁	椀：I(1)
土師質土器	こね鉢
白磁	椀：II(1)、V-1×VIII-2(2)、VI-1b×V-4b(1)、破片(3)
	皿：V～VI(1)、V～VII(1)
中国陶器	他器種：破片-A' b(1)
瓦類	丸瓦(縄目)

S-176

須恵器	瓶、坏c、鉢、鉢b
土師器	高坏、甕
黒色土器A	鉢c
須恵質土器	こね鉢(東播)
瓦類	平瓦(縄目)

S-177

須恵器	坏c×皿c
土師器	鉢c1、坏d、甕a
中国陶器	甕：破片-F(1)
瓦類	丸瓦

S-178

須恵器	坏a、坏c、甕、蓋
土師器	小皿a(ヘラ)、鉢c2、高台付鉢、甕a、丸坏a、高坏
黒色土器A	鉢c2
黒色土器B	鉢
高麗青磁	椀：高麗？I(1)、II-2(1)
緑釉陶器	破片
白磁	皿：V×VI(1)
石製品	焼け石
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)

S-179

須恵器	甕、壺(古)
土師器	甕a、甕b、坏a(ヘラ)、鉢c
白磁	壺他：水注×壺(1)
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)

S-180

須恵器	蓋3、甕、壺b、壺f×d
土師器	小皿a(イト)、甕a、坏a(イト)
黒色土器B	鉢c
瓦器	鉢c
須恵質土器	こね鉢
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(格子-小)

S-181

須恵器	坏c、鉢(古)、甕
土師器	坏a(ヘラ)、高坏、鉢c、蓋3、甕b、甕×鍋、器台
黒色土器A	鉢c
黒色土器B	鉢
越州窯系青磁	鉢他：水注3(1)
金属製品	不明製品(1)
土製品	鉱滓
石製品	石錘
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)、丸瓦(格子-小)

S-182

須恵器	坏c
土師器	坏a(イト)、坏d、甕a
須恵質土器	こね鉢
白磁	椀：IV(1)、V-1(1)

S-183

須恵器	壺、甕、坏c
土師器	丸坏a、鉢c2、小皿a(イト)、甕a、皿a
黒色土器A	鉢c2
緑釉陶器	破片
白磁	椀：破片(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、瓦玉

S-184

須恵器	坏c、甕
土師器	甕a、小皿c、坏d
黒色土器A	椀
瓦器	椀c2
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目)

S-185

須恵器	坏c、坏(古)、高坏、小坏c、大坏c、甕a、壺1、壺3 蓋c、小蓋c3(宋付着)、硯蓋、小壺、壺、瓶a、壺b、鉢 鉢b、椀(金属器模倣)、把手、皿a
土師器	甕、甕a(角閃石)、補製甕、坏、坏c、坏d(灯明皿)、壺 高坏、皿、皿a、大皿c、壺3、壺c、鉢b、壺a、把手
	焼塩壺
土製品	土馬の脚、カマド
石製品	珪化木
弥生土器	甕
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目)、軒平瓦、塼

S-186

須恵器	壺
土師器	椀c、皿a、坏×皿
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦

S-187

須恵器	壺×鉢
土師器	壺、坏d×皿a、蒸籠具
越州窯系青磁	椀：I(1)
瓦類	平瓦

S-188

須恵器	坏c、壺3、小壺、皿a、坏a×皿a
土師器	蓋3、甕a、坏c、坏d、皿a×坏a
	焼塩壺
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀：II(1)
瓦類	破片

S-189

須恵器	瓶
土師器	甕a、供膳具

S-190

須恵器	甕、大甕a、坏c、坏d、坏(古)、高坏、壺a、皿a、鉢b 蓋1、壺3、瓶c、壺c3、小蓋3、小壺c3
土師器	椀c、壺3、壺c3、皿a、坏a、坏c、坏d、坏e、高坏 鉢、椀c1、甕a、小甕、小壺、把手
	焼塩壺
金属製品	鉱滓、鉄釘
瓦類	平瓦(縄目-細、粗、格子)、丸瓦(縄目)

S-191

須恵器	坏c、壺3、甕
土師器	小皿a(ヘラ)、椀c
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦

S-192

須恵器	坏c、皿c、壺a、甕
土師器	坏d、丸坏a、小皿a(ヘラ)、甕a
	焼塩壺
黒色土器A	椀c
白磁	椀：V-2？(1)

S-193

須恵器	甕、坏c、
土師器	甕a、小皿a(ヘラ)、坏c

S-194

須恵器	甕、小壺、供膳具
土師器	小皿a(ヘラ)

S-195

須恵器	壺c3、壺1、坏c、鉢、壺
土師器	坏d、高坏、甕a、壺
	焼塩壺

S-196

須恵器	甕、壺3、高坏、鉢(筒)、鉢b×壺
土師器	壺c、壺3、椀c、椀c2、坏a、坏c、高坏、甕a、皿a 小皿a
	焼塩壺
緑釉陶器	皿
灰釉陶器	椀、破片
白磁	椀：小椀(1)
金属製品	鉱滓
土製品	フイゴ
瓦類	平瓦(縄目、格子-小、文字瓦I-7-b)

S-197

須恵器	坏(古)、甕
土師器	甕a、坏a(ヘラ)、坏d、高坏、丸坏a、壺、椀c
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目)

S-198

須恵器	坏c、甕、壺3、壺c
土師器	椀c、坏a(ヘラ)、壺3、甕a、小皿a
黒色土器A	椀c
金属製品	鉱滓、鉄釘
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目)、瓦玉

S-199

須恵器	坏c、壺c、甕
土師器	甕a、坏c、坏d、壺3、皿、小皿a(ヘラ)、椀c
	焼塩壺
黒色土器B	椀c
緑釉陶器	椀(防長)
白磁	椀：IV(1)
金属製品	鉄釘
土製品	ルツボ
瓦類	平瓦(縄目)

S-201

須恵器	皿a、坏a、坏c、壺c、壺3、甕
土師器	小皿a(ヘラ)、椀c2、坏d、小坏c、甕a、坏c×皿c
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀：小椀(1)
瓦類	平瓦(縄目、格子-小、文字瓦)、丸瓦

S-202

須恵器	坏a、坏c、甕
土師器	小皿a2、壺3
黒色土器B	破片
緑釉陶器	破片
土製品	フイゴ
瓦類	平瓦(縄目)

S-203

須恵器	甕、壺3、坏c
土師器	丸坏、椀c、壺3、小皿a
	焼塩壺
黒色土器A	椀c2、甕
瓦類	平瓦(縄目)

S-204

須恵器	甕、皿a、高坏、壺3
土師器	坏a(ヘラ)、坏c、甕a、皿a
	焼塩壺
灰釉陶器	椀
瓦類	平瓦(縄目)

S-206

須恵器	高坏、壺3、甕
土師器	小壺、坏a(ヘラ)、坏c、甕a(角閃石)、壺3
緑釉陶器	破片

S-207

須恵器	甕、坏a、坏c、高坏、皿、皿a、壺c、壺1、壺3、鉢a
	壺
土師器	甕a、坏a(ヘラ)、坏c、坏d、坏e、高坏、丸坏、壺c
	壺3、椀c、椀c1、皿a、小皿a2(ヘラ)、大皿c、皿c
	煎熬土器、焼塩壺
黒色土器A	椀c、椀(搬入)
黒色土器B	椀
越州窯系青磁	椀：I(2)、I-1a(1)、II(1)
緑釉陶器	皿(京都)、皿(防長)
灰釉陶器	皿、破片
金属製品	鉱滓、鉄釘
石製品	石帯
土製品	土錘
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目、格子-小)

S-208

須恵器	坏c、甕
土師器	皿a、甕a、坏a(ヘラ)、坏d、壺3
金属製品	鉱滓
石製品	砥石
瓦類	丸瓦(縄目)

S-209

須恵器	壺c、壺3
土師器	壺、壺c、壺3、皿a、坏c、坏d、高坏、甕a(角閃石)
白磁	椀：VIII(1)
瓦類	平瓦(縄目)

S-211

須恵器	坏c、壺1、甕
土師器	甕a、壺3、椀c、脚
土製品	焼土塊
瓦類	丸瓦

S-212

須恵器	坏、壺3、壺b、壺(古)、甕
土師器	壺3、甕
	焼塩壺
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)

S-213

須恵器	坏c、壺3、壺c、甕、壺
土師器	椀c、坏a(ヘラ)、坏d、高坏、壺c、壺3
黒色土器A	椀
白磁	椀：IV(1)
金属製品	鉱滓
土製品	フイゴ
瓦類	丸瓦(縄目)

S-214

須恵器	甕、壺3
土師器	皿a、甕a、丸坏a、壺3、坏c×皿c
黒色土器A	破片
金属製品	鉱滓
土製品	焼土塊
瓦類	破片(縄目)

S-216

須恵器	壺3、甕、坏c
土師器	坏c、甕a、壺3

S-217

須恵器	壺3、皿a
土師器	坏a(ヘラ)、甕、椀c
瓦類	平瓦(縄目)

S-218

須恵器	鉢a、壺b、甕、壺(古)
土師器	甕a、坏a(ヘラ)
黒色土器A	破片

S-219

土師器	坏a(ヘラ)、丸坏a、椀c、甕
瓦器	椀
土製品	焼土塊
瓦類	破片(縄目)

S-221

須恵器	甕、坏
土師器	椀c、皿a、小皿a(ヘラ)、甕a
	窯焼土器

S-222

須恵器	甕、坏
土師器	甕a、坏a(ヘラ)、椀c2
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
金属製品	鉱滓
瓦類	破片

S-223

須恵器	甕、壺1、壺
土師器	小皿a(ヘラ)、椀c2、坏a(イト)
黒色土器A	椀c
瓦器	椀c(イト、ヘラ)
緑釉陶器	破片
国産陶器	甕
白磁	椀：II(2)、破片(2)
	皿：II×III(1)、V～VII(1)、破片(1)
青白磁	水注×壺(1)
中国陶器	他器種：盤I(1)、破片(1)
石製品	滑石片
瓦類	平瓦(格子-小)

S-224

須恵器	坏c、壺、甕、蓋3
土師器	皿a、蓋3、甕、坏a(ヘラ)、坏c、坏d
	焼塩壺
瓦類	平瓦(縄目)

S-226

須恵器	壺、蓋3、高坏、小皿、供膳具
土師器	甕a(角閃石)、甕b、坏a(ヘラ)、坏d、高坏、小皿a
	皿a、坏d×皿a
黒色土器B	破片
龍泉窯系青磁	椀：I(1)
白磁	皿：II-1a(1)、XI(1)
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦

S-227

須恵器	小蓋3、壺、破片
土師器	小皿a(ヘラ)
	焼塩壺
瓦器	椀、小皿
白磁	椀：IV(2)、V-3(1)、破片(2)
中国陶器	他器種：四耳壺III×IV(1)、破片-A' b(1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
石製品	滑石製品
瓦類	破片

S-228

須恵器	壺3、蓋c、甕、坏c、皿a、鉢a×壺
土師器	小皿a(ヘラ)、坏a(ヘラ)、丸坏a、甕a、甕×鍋
黒色土器A	鉢
黒色土器B	椀
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀：I(1)
須恵質土器	こね鉢(東播)
緑釉陶器	破片
白磁	椀：II-1(1)、V-1×VIII-2(2)、破片(4)
	皿：V～VII(1)、VI(3)、XI(1)
中国陶器	他器種：盤I-1b(1)
金属製品	鉱滓、鉄釘
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(格子-小)、軒丸瓦

S-229

須恵器	甕、供膳具
土師器	甕a、椀c、坏a(ヘラ)
黒色土器B	破片
瓦類	破片

S-231

須恵器	坏、蓋1、甕
土師器	小皿a(ヘラ)、坏c、甕a、椀c1、蓋c
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)

S-232

須恵器	坏c、坏(古)、蓋3、甕
土師器	小皿a1(ヘラ)、小皿a2(ヘラ)、高坏、丸坏a、蓋3、甕a
	椀c2
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀：I(1)
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦(縄目)

S-233

須恵器	坏(古)、甕、蓋3、蓋c
土師器	坏c、高坏、丸坏、甕a
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦(縄目)

S-234

須恵器	甕、坏a×皿a
土師器	坏c、坏d、小皿a、坏c×皿c
瓦類	破片

S-236

須恵器	壺、蓋3
土師器	蓋c、蓋3、甕a、坏c
黒色土器A	破片
黒色土器B	破片
瓦類	破片

S-237

須恵器	甕、壺3、坏c
土師器	坏a(ヘラ)、坏c、壺c、小皿a、椀c、甕a
	焼塩壺
黒色土器A	甕
黒色土器B	椀
白磁	皿：V～VII(1)
弥生土器	甕(後期)
瓦類	平瓦(格子-小)、丸瓦(縄目)

S-238

須恵器	壺、壺3
土師器	小皿a(ヘラ)、小皿a2、甕
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦(縄目)

S-239

須恵器	坏c、高坏、壺3(朱)、甕、甕a
土師器	壺c、甕(角閃石)、丸坏a、椀c
	焼塩壺
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦(縄目)

S-241

須恵器	甕、壺c、壺3、坏c
土師器	坏d、甕(角閃石)、皿a、椀c
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀
土製品	土錘
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)、丸瓦

S-242

須恵器	壺3、坏c、甕
土師器	甕a、小皿a(ヘラ)、坏a(ヘラ)、坏c、椀c
瓦類	平瓦(縄目、格子-大)

S-243

須恵器	甕a、坏c、壺c、壺3
土師器	坏a、坏c、坏d、壺3、甕a、椀c
	焼塩壺
越州窯系青磁	椀：I(1)
金属製品	鉱滓
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目)

S-244

須恵器	壺(古)、甕、壺
土師器	甕a、小皿a
	焼塩壺
黒色土器A	椀c2
緑釉陶器	破片
白磁	椀：I(1)
瓦類	平瓦

S-246

須恵器	壺c、甕、坏c
土師器	大椀c、坏c、坏d、小皿a、甕
黒色土器A	椀c2
黒色土器B	椀
瓦類	軒丸瓦

S-247

須恵器	甕b
土師器	坏a(ヘラ)、椀c2、小皿a、小皿a2(ヘラ)、脚付鉢？
黒色土器A	椀c2
黒色土器B	破片
須恵質土器	ごね鉢

S-248

須恵器	甕、壺3、
土師器	甕a、甕b、椀c、壺3、坏c、坏×皿
	焼塩壺
黒色土器A	椀
瓦類	丸瓦

S-249

須恵器	皿a
土師器	甕a、壺3
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
金属製品	鉄釘

S-251

須恵器	壺3、坏c、甕
土師器	甕a、坏a、坏c、坏d、高坏、皿a、小皿a(ヘラ)、壺3
	椀c、把手
	焼塩壺
黒色土器A	椀c
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀：II(1)
緑釉陶器	破片
灰釉陶器	破片
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、軒丸瓦

S-252

土師器	小皿a(ヘラ)、坏a
金属製品	鉄釘
瓦類	破片

S-253

須恵器	坏c、甕、鉢b、甕a、甕b、甕c×f、壺1、壺3、円面硯
土師器	坏a(ヘラ)、坏c、高坏、丸坏、甕a、大椀c、椀c1、鍋
黒色土器A	椀c
越州窯系青磁	椀：I-2(1)
白磁	椀：I(1)
金属製品	鉱滓
石製品	叩き石
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、軒平瓦

S-254

須恵器	坏c、壺
土師器	坏a(ヘラ)、甕a、椀c

S-256

土師器	甕a、坏a
黒色土器B	椀c2

S-257

須恵器	坏c、壺、甕
土師器	甕a、椀c、器台、脚
黒色土器B	椀
緑釉陶器	破片
白磁	椀：IV-1a(1)、破片(2)
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(縄目、格子-大、小)

S-258

須恵器	坏c、壺(古)
土師器	坏、壺3、坏d
黒色土器A	甕
瓦器	破片
瓦類	破片

S-259

須恵器	蓋1、壺3、壺(古)、蓋壺、坏c、壺、甕
土師器	坏a、坏c、坏d、椀c、皿、壺3、甕a
	焼塩壺
黒色土器A	破片

S-261

須恵器	甕
土師器	坏a、甕×鍋
黒色土器B	破片
瓦類	丸瓦(縄目)

S-262

須恵器	甕、壺3、小坏c
土師器	坏a(ヘラ)、坏c、小坏c、丸坏、甕a、椀c、脚
黒色土器A	破片
瓦類	破片(縄目)

S-263

須恵器	坏a(ヘラ)、壺1、甕、壺1×坏
土師器	小皿a(ヘラ)、壺4、甕
	焼塩壺
緑釉陶器	椀(京都)、椀(防長)、破片
灰釉陶器	皿(灰黒色土と接合)、壺類、風字硯(灰黒色土と接合)

S-264

須恵器	坏c、甕
土師器	甕a(角閃石)、壺3、坏d、高坏、丸坏(混入？)、椀c
	焼塩壺
黒色土器A	破片
金属製品	鉄製品、鉱滓
瓦類	平瓦(縄目)

S-266

須恵器	壺3、坏c、鍋b(古)
土師器	甕a、坏a
	焼塩壺
黒色土器A	椀c2
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目)

S-267

須恵器	甕、坏c、蓋
土師器	坏a(ヘラ)、甕a、坏c×皿c
石製品	砥石
金属製品	火打金？

S-268

須恵器	坏c、甕
土師器	甕a、壺3、小皿a、丸坏
黒色土器A	椀
緑釉陶器	破片
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦
金属製品	鉄釘

S-269

須恵器	壺3、坏
土師器	椀c、甕、皿
金属製品	鉱滓
瓦類	丸瓦(縄目)

S-271

須恵器	壺1、甕
土師器	坏c、小皿a(ヘラ)、丸坏、甕
黒色土器B	破片
白磁	椀：破片(1)
瓦類	破片

S-272

須恵器	坏c、坏(古)、甕
土師器	坏a、高坏、甕、椀c
黒色土器B	破片
灰釉陶器	破片
白磁	皿：破片(1)
金属製品	鉱滓
石製品	紡錘車(蛇紋岩)
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦

S-273

須恵器	甕、壺3
土師器	坏a、椀c、甕a
緑釉陶器	破片
金属製品	鉱滓

S-274

須恵器	甕、壺3
土師器	甕、坏a(ヘラ)、丸坏
黒色土器A	甕
中国陶器	他器種：破片-A' a(1)、不明破片(1)
瓦類	平瓦(縄目)

S-276

須恵器	壺、甕
土師器	甕、椀c2
黒色土器A	椀、鉢
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	椀：I(1)、I-2(1)
白磁	椀：小椀片(1)
瓦類	平瓦(縄目、格子-小、老司)

S-277

須恵器	甕
土師器	丸坏a、小皿a

S-278

須恵器	甕
土師器	坏d、煮沸具
黒色土器A	破片
瓦類	平瓦

S-279

須恵器	甕
土師器	坏a(イト)、坏d、丸坏a、椀c
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀
瓦器	破片
越州窯系青磁	椀：I(1)
灰釉陶器	破片
白磁	椀：IV(1)、IV-1a(1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
瓦類	破片(格子-小)

S-281

土師器	坏a、椀c
金属製品	鉱滓

S-282

須恵器	坏
土師器	坏a、坏c、坏d、甕a
	焼土塊
黒色土器A	椀c
瓦類	丸瓦(縄目)

S-283

須恵器	甕、壺3
土師器	壺3、坏d×皿a

表土

須恵器	甕、坏c、坏a×皿a、壺3、壺
土師器	坏a(イト)、高坏、鍋、小皿a(イト、ヘラ)、甕、椀c2
	壺c
瓦器	椀c
越州窯系青磁	皿：III(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(1)、I-4(1)、III(1)
	他器種：坏III(1)
同安窯系青磁	椀：I-1b(2)
国産陶器	甕(常滑？)(2)
国産磁器	染付片(6)
白磁	椀：IV(1)、IV-1a(1)、V-4c(1)、VIII(1)、破片(4)
	皿：IX(3)、破片(1)
金属製品	鉱滓
土製品	焼土塊
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)、丸瓦(縄目)

盛土層

須恵器	甕b、大甕、壺c、壺1、壺3、壺c3、壺(古)、皿a、坏c
	坏(古)、高坏、壺a、壺d、小壺(瓶)、鉢a、鉢(鍋)、脚
	椀(古)、大椀c、鐙
土師器	坏a(イト、ヘラ)、丸坏a、小坏(ミニチュア)、坏c
	椀c2、皿a、皿c、大皿c、小皿a2、小皿b、小皿c、甕a
	甕b、甕×鍋、鍋、鉢、壺3、大壺3、小壺(平安)、瓶
	把手、器台
黒色土器A	椀c2、甕、鉢
黒色土器B	椀、皿a
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀：I(27)、I-2(2)、I-2a(1)、I-2b(1)、II(8)、II？(5)
	II-2(4)、II-2d(1)、II-3(1)、II×III(タテヘラ)(1)
	壺：I(1)、壺×水注I(1)、壺×水注II(1)
	鉢他：合子I(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(9)、I-1(23)、I-2(16)、I-2～4(4)、I-3(8)、I-4(7)
	I-5(4)、I-5a(2)、I-5b(30)、I-5c(1)、I-6(1)、I-6b(1)
	III(9)、IV(7)、小椀I-4(1)、破片(3)
	皿：I(3)、I-1a(1)、I-2b(1)、I-2c(1)
	他器種：坏I-2(1)、坏III(1)、坏III-1(1)、坏III-2×3(1)
	坏III-4(1)、坏III-4b(1)、壺III？(1)、盤？(1)
同安窯系青磁	椀：I-1(2)、I-1b(19)、III(6)、III-1b×c(1)、小椀(2)
	小椀I(1)、高台(1)、破片(10)
	皿：I(6)、I-2(1)
	他器種：同安？(1)
高麗青磁	椀：I(1)、II(2)、III-2(2)、III？(1)、破片(2)
	壺他：高麗？(1)
	象嵌：破片(1)
青磁(不明)	破片(1)
土師質土器	こね鉢、すり鉢
須恵質土器	こね鉢(東播)
瓦質土器	こね鉢(東播模倣)
緑釉陶器	椀(京都)、椀(防長)、皿(防長)、大型壺片、破片(東海)
	破片
灰釉陶器	椀、壺類、皿、高台、破片
肥前系陶磁器	紅皿(2)、染付(9)、その他(16)
国産陶器	破片(瀬戸)、破片(常滑)
白磁	椀：I(3)、I-5？(1)、II(15)、II-1(32)、II-3(11)、II-5(4)
	II-3×4(1)、IV(78)、IV-1a(16)、IV-2(1)、V(8)
	V-1(7)、V-1c(1)、V-2b(3)、V-3(6)、V-4(29)
	V～VIII(18)、V-1×VIII-2(41)、V-4×VIII-3(2)
	VI×VII(3)、VII(4)、VIII(5)、VIII-1(1)
	XII-1b(1)、XIII(1)、くし目(22)、破片(265)
	皿：II(1)、II×III(7)、III-1(5)、III-2(1)、IV(2)、IV-1(1)
	IV-1a(15)、IV-1b(2)、V(2)、V～VII(29)、V×VI(8)
	VI(5)、VII(4)、VII-1a(1)、VIII(4)、VIII-1b(3)
	IX(8)、XI(2)、XI-3(1)、XI-4(1)、破片(18)
	壺他：壺III(1)、小壺(1)、四耳壺III(2)、水注×壺(1)
	水注×壺II(1)、鉢(1)、破片(1)
青白磁	椀？(2)、合子(4)、破片(4)
中国陶器	壺：VII(2)、四耳壺(2)、四耳壺XII-1(1)、破片(18)
	鉢：I(5)、I-1b(1)、IV-1？(2)、VII(3)、VII？(2)
	破片(1)
	甕：II(2)、IV(1)、破片F(10)、壺片(11)
	他器種：盤I(2)、盤I-1b(2)、盤I-2(1)、盤I-2b(2)
	盤I-3(4)、盤I×II(6)、盤II-1(1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
黒釉陶器	壺類

中国産釉陶器	鉢
イスラム	陶器片
金属製品	鉄片、刀子、鉱滓、鉄釘、銅銭
土製品	カマド、焼土塊、土錘、紡錘車(黒B類加工品) フイゴ羽口
石製品	石鍋A群、砥石、サヌカイト片
弥生土器	甕
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小、文字瓦I-1) 丸瓦(縄目、格子-大、小、平行叩き、文字瓦III-3) 軒平瓦、軒丸瓦、瓦玉、塼

黒色土

須恵器	蓋1、蓋c3、壺(古)、壺蓋、甕、坏c、坏(古)、高坏 高坏(古)、壺b
土師器	小皿a(イト、ヘラ)、小皿a2、椀c2、坏a(イト、ヘラ) 坏c、坏d、丸坏a、蓋c、蓋3、甕a、鍋f×d、高台付鉢 鍋、器台、把手、脚(獣脚)
	焼塩壺
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
瓦器	椀c2
越州窯系青磁	椀：I(21)、I-2(1)、I-3×4(2)、I-2×I-5(1)、II(1) II-1(1)
	皿：I(1)
	坏：I(1)、I(タテヘラ)(1)、
	壺：水注(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(4)、I-1(3)、I-2(1)、I-3(1)、I-2～4(4)、I-5b(2) I-6b(2)
	皿：I-1c(1)、I-2(1)、I-2c(3)
同安窯系青磁	椀：I(1)、I-1(2)、I-1a(3)、I-1b(2)、I-1c(2)、II？(2) III-1b(1)
	皿：I(2)、I？(1)
	他器種：破片(4)
須恵質土器	こね鉢(東播)
緑釉陶器	皿(東海)、椀(京都)、椀、大型壺片、破片
灰釉陶器	皿、段皿(K14～K90)、破片
国産陶器	甕(常滑)、皿(唐津)
白磁	椀：II(5)、II-1(17)、II-3×4(4)、IV(39)、IV-1(6) IV-1a(2)、V(7)、V-1(5)、V-1c(2)、V-2(3) V-2b(2)、V-3a(2)、V-4(29)、V～VIII(6) V-1×VIII-2(16)、破片(202)
	皿：II(1)、II-1b(1)、III-2(1)、II×III(6)、IV(9) IV-1a(1)、IV-2a(3)、V×VI(1)、V～VII(4)、VII(1) VIII(1)、VIII-1b(2)
	壺：II(5)、水注III(1)
青白磁	椀(3)、皿(1)、合子(1)、瓶類(1)、破片(7)
中国陶器	壺：四耳壺II(1)、四耳壺III×IV(1)、四耳壺V(1) 水注(1)、水注V(2)、破片-E(2)、Ah(2)、A' b(4)
	鉢：I-2a(1)、IV-1(1)
	甕：F(2)、破片(2)
	他器種：盤I-2b(1)、破片-A' b(2)、C' a(1)、C' b(1) 不明破片(1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
金属製品	鉱滓、鉄釘、不明鉄製品
土製品	フイゴ羽口
石製品	滑石製品、黒曜石破片
弥生土器	大型甕
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)、丸瓦(縄目、格子-小) 軒丸瓦、瓦玉

茶色土

須恵器	甕、甕b、蓋3、壺、坏c
土師器	坏a(イト)、丸坏a、椀c2、甕a、甕b、小皿a(イト)
黒色土器A	椀
黒色土器B	甕
瓦器	椀c2、皿a(ヘラ)、椀(搬入？)
越州窯系青磁	椀：I(1)、I-2(1)、I(タテヘラ)(1)、II(1)、II-2(1)
	壺：II(1)
龍泉窯系青磁	I(3)
緑釉陶器	椀、破片
灰釉陶器	椀
白磁	椀：II(1)、II-1(3)、IV(10)、IV-1a(5)、V-3(3)、XIII(1) V-4×VIII-3(2)、V-1×VIII-2(9)、破片(18)
	皿：IV-1a(2)、IV-2b(1)、V～VI(2)、V～VII(1)、IX(1) XI？(1)、破片(3)
中国陶器	他器種：水注V(1)、破片-E(1)、A' a(1)、A' b(1)
金属製品	鉱滓
土製品	焼土塊
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)、丸瓦(格子-大)

灰黒色土

須恵器	坏a、坏c、坏d、坏(古)、高坏、甕、蓋c3、壺(古) 皿a、壺蓋、蓋a、甕b、硯(脚)、鉢b、鉢(猫)
土師器	坏a(ヘラ、イト)、坏c、坏d、小坏c、丸坏a、丸坏c 高坏、小皿a(ヘラ、イト)、小皿a2、皿c、大皿c 椀c1、椀c2、丸椀a、大椀、蓋3、壺c、壺蓋、小壺(埋) 甕a(角閃石あり)、甕b、把手、脚付鉢
	焼塩壺
黒色土器A	椀c2(薄摩？)、蓋3
黒色土器B	椀c2
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀：I(5)、I-1(2)、I-2(2)、I-5(2)、I(タテヘラ)(1)、II(4) II-2(1)
	瓶：II(1)、水注II(1)
	鉢他：香炉II(1)
長沙窯系青磁	水注×壺(1)、長沙？(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(3)、I-5？(1)
土師質土器	火鉢
緑釉陶器	高台(東海)、椀(近江)、壺(防長)、椀、大型壺片、破片
灰釉陶器	皿、風字硯(S-263と接合)、皿(S-263と接合)、壺類 破片
白磁	椀：I(2)、I-1(2)、II(1)、II-1(1)、IV(6)、IV-1a(3)、V(1) V-3c(2)、V-1×VIII-2(3)、V-4×VIII-3(1)、VI-4(1) V～VII(1)、V～VIII(1)、VIII(2)、XI-1(1) XI-5(1)、XII-2(2)、XIII(1)、小椀(2)、くし目(1) 破片(46)
	皿：II-1b(1)、II×III(3)、III-1(1)、IV-2(1)、V×VI(3) V～VII(3)、XI-3(1)、朱分類、破片(1)
	壺他：鉢II(1)
中国陶器	壺：四耳壺V(1)
	甕：破片(2)
	他器種：不明破片(2)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器
金属製品	鉱滓、銅滓、鉄釘
土製品	カマド、土錘
石製品	滑石製品、砥石(砂岩)、石鍋A群
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小、文字瓦I-1、I-7a)、軒平瓦 丸瓦(縄目、格子-小)、軒丸瓦

明茶色土

須恵器	坏c、甕、壺蓋、蓋3、瓶
土師器	坏a(ヘラ)、丸坏a(イト)、坏(京都?)、椀c、甕
	小皿a(ヘラ)
	焼塩壺
黒色土器B	破片
瓦器	破片
龍泉窯系青磁	他器種：破片(2)
同安窯系青磁	椀：I-1b(1)、くし目(1)
灰釉陶器	壺、皿、破片
国産陶器	不明破片
白磁	椀：IV(1)、IV-1a(1)、V(1)、V-3(1)、V-4(1)
	くし目(1)
	皿：II(1)、V～VII(1)、VI(1)
	壺他：破片(2)
金属製品	鉱滓、鉄釘
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目、格子-小)

黄茶色土

須恵器	壺3、甕、皿(古)
土師器	小皿a(ヘラ)、坏a(ヘラ)、椀c、甕a
黒色土器B	破片
越州窯系青磁	椀：II-1(1)、II-2(1)
白磁	椀：I(1)
	皿：XI(1)
瓦類	平瓦(縄目)

暗茶色土

須恵器	甕、壺1
土師器	丸坏a、甕a、小皿a(ヘラ)、椀c、器台
瓦器	椀c2、破片
龍泉窯系青磁	椀：I(2)
緑釉陶器	破片
白磁	椀：IV(1)、IV-1a(1)、V(1)、V-3(1)、V-4(1)
	くし目(2)、破片(2)
	皿：II(1)、II×III(1)、V×VI(2)、VI(1)、V～VII(1)
	壺他：破片(3)
瓦類	平瓦(格子-小)、丸瓦

黄色土

須恵器	甕、壺c、蓋1、蓋3、坏c、皿a
土師器	甕a、壺c、坏a(ヘラ)、坏d、椀c
瓦類	破片(縄目)

灰茶色土

須恵器	甕、壺3、坏c、
土師器	甕a、甕b、坏a(ヘラ)、小皿a(ヘラ)、椀c
越州窯系青磁	椀：II-1(1)、II-2(1)
白磁	椀：I-1(1)
金属製品	鉄破片
瓦類	丸瓦(格子-小)

灰茶色砂土

須恵器	甕a、坏c、高坏、蓋(古)
土師器	小皿a(ヘラ、イト)、坏a(ヘラ、イト)、高坏、器台
黒色土器B	椀
瓦器	椀c2
越州窯系青磁	壺：壺×水注(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(1)
同安窯系青磁	椀：I-1b(1)、破片(1)
緑釉陶器	椀(京都)、破片(1)
白磁	椀：I-1(1)、III(4)、II-1(2)、IV(6)、V(1)
	V-1×VIII-2(4)、V-4×VIII-3(1)、VIII(1)、輪花(1)
	堆線(1)、破片(14)
	皿：II-3×4(1)、III-1(1)、IV-2(1)、IV-2b(1)、V(1)
	V～VI(大型)(3)、VI(3)、VI-2a(1)、VI-2×VII-2(1)
中国陶器	他器種：壺(1)
金属製品	鉱滓
石製品	滑石破片
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)

明茶色砂土

須恵器	坏c、坏(古)、甕、甕b、壺、蓋c、蓋3(荒尾?)
	壺蓋、小蓋3
土師器	甕a、甕b、坏a(ヘラ)、坏c、坏d、丸坏a、高坏、椀c2
	小皿a(ヘラ)、小皿a2(ヘラ)、蓋3、把手
黒色土器A	椀
黒色土器B	椀c2
越州窯系青磁	椀：I(3)、I-5(1)、III?(1)
	坏：I(1)
土師質土器	こね鉢
緑釉陶器	椀(京都)、皿(防長)、破片
灰釉陶器	壺類
白磁	椀：IV(1)、V-1×VIII-2(1)、XI?(1)
輸入須恵器	朝鮮系無釉陶器甕
金属製品	鉱滓、鉄釘
土製品	カマド、焼土塊
石製品	石鍋A群
弥生土器	甕
瓦類	平瓦(縄目、格子-大、小)、丸瓦(縄目、格子-小)

表採

須恵器	甕a、坏c、坏(古)、蓋3、坏×皿
土師器	坏a(イト、ヘラ)、坏c、坏d、丸坏a、皿a、鉢、器台
	焼塩壺
黒色土器A	椀c、蓋b
瓦器	椀
越州窯系青磁	椀：I(1)
龍泉窯系青磁	椀：I(6)-スタンプ(1)あり
同安窯系青磁	椀：III(1)
	皿：I(2)
瓦質土器	こね鉢
肥前系陶磁器	皿(1)
白磁	椀：IV(1)、IV-1a(1)、IV-1b(1)、破片(2)
	皿：V×VI(1)、破片(1)
中国陶器	他器種：破片-C゜b(1)
石製品	砥石
瓦類	平瓦(縄目)、丸瓦(格子-小)、軒丸瓦

第149次 土器の計測表

S-1

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		9.2	1.5	7.0	—	—

S-5

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a イト	1	a-001		12.0	2.7	6.6	○	○
	小皿a イト	1	a-001		9.0	1.0	7.2	○	○

S-6 明茶色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a イト	1	a-001		13.6	2.9	9.4	○	—

S-6 暗茶色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿b イト	1	b-001		—	—	4.0	○	○

S-9

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d —	1	R-001	1	13.9	3.3	7.9		

S-10

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ?	1	a-001		9.4	1.1	7.2		
	ヘラ	2	a-002		8.6	1.2	6.2		

S-10 茶色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a イト	1	a-001		13.2	3.1	8.2	○	
	丸坏a	1	a-001		14.2	3.0	—		
		2	a-002		15.8	2.8+			—
	丸坏c	1	R-005	16	12.6	3.8	6.6		
	椀c	1	R-011	17	—	2.6+	6.2		
	小皿a —	1	a-001		8.0	1.0	7.0	○	○

S-11

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		9.0	1.0~1.9	7.5	○	○
	坏a イト	1	a-001		13.4	2.7	9.0	○	○

S-15

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		10.2	1.0	7.4	—	—
	小皿a2 ヘラ	1	a-001		10.2	0.9	7.7	○	○

S-15 茶色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	丸坏a ヘラ	1	a-001		15.0	2.5	7.8		○

S-15 茶黒色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏 —	1	R-002	10	14.0	3.0+	—	—	—

S-23

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿a ヘラ	1	R-001	6	15.0	1.8	10.9	○	—
		1	R-002	7	15.2	1.9	12.4	—	—
		1	R-003	8	15.5	1.4	12.0	—	—
	坏a ヘラ	1	R-004	5	14.4	3.8	7.4	—	—

S-30

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a イト	1	a-001		12.4	2.7	7.8	○	○
	〃	2	a-002		12.5	2.7	7.9	○	○
	〃	3	a-003		12.7	2.6	8.2	○	○
	〃	4	a-004		12.4	3.1	7.6	○	—
	〃	5	a-005		12.3	3.3	7.9	○	○
	〃	6	a-006		12.1	2.9	7.8	○	○
	〃	7	a-007		12.5	3.2	7.8	○	○
	〃	8	a-008		12.1	2.8	7.8	○	—
	〃	9	a-009		12.5	3.1	7.9	○	—
	〃	10	a-010		12.4	2.6	7.8	○	—
	〃	11	a-011		12.9	3.1	8.2	○	○
	〃	12	a-012		12.5	3.2	6.8	○	○
	〃	13	a-013		12.3	2.8	6.7	○	○
	〃	14	a-014		12.6	3.0	8.0	○	○
	〃	15	a-015		12.4	2.6	8.0	○	○
	〃	16	a-016		12.8	3.0	8.1	○	○
	〃	17	a-017		12.2	2.6	7.9	○	—
	〃	18	a-018		13.0	3.2	7.4	○	○
	〃	19	a-019		13.1	3.0	8.2	○	○
	〃	20	a-020		13.1	3.0	8.8	○	○
	小皿b イト	1	b-001		7.2	1.7	5.1	○	○
	〃	2	b-002		7.3	1.7	5.3	○	○
	〃	3	b-003		7.5	1.8	5.2	○	○
	〃	4	b-004		7.4	1.6	5.0	○	○
	〃	5	b-005		6.6	1.7	5.4	○	—
	〃	6	b-006		7.0	1.6	5.2	○	○
	〃	7	b-007		6.5	1.7	4.6	—	○
	〃	8	b-008		7.2	1.7	5.2	○	○
	〃	9	b-009		7.0	1.4	4.9	○	○
	〃	10	b-010		7.1	1.5	5.3	○	○
	〃	11	b-011		7.5	1.5	5.3	○	○
	〃	12	b-012		7.1	1.3	5.4	○	○
	〃	13	b-013		7.1	1.3	5.0	○	○
	〃	14	b-014		7.3	1.6	5.4	○	○

S-33

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a ヘラ	1	a-001		15.2	2.9	9.0	—	—
	小皿a ヘラ	1	a-001		9.4	1.0	7.4	○	○

S-39

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	丸坏a ヘラ	1	a-001		15.9	2.8~3.7	—		○
		2	a-002		16.4	2.1~2.7	—		—

S-41

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		9.2	1.0	7.2	○	○

S-43

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d ヘラ	1	R-001	1	12.8	3.0	6.0	○	—

S-45

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		7.6	1.1	7.0	○	—

S-48

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	椀c2 —	1	R-003	4	16.2	5.2	7.1	—	—
	丸坏a —	1	a-001		12.9	3.3		○	○
	小皿a ヘラ	1	a-001		9.8	1.2	7.9	○	○
	〃	2	a-002		8.4		6.2	○	

S-52

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	丸坏a —	1	a-001		14.4	2.6			
	小皿a ヘラ	1	a-001		10.0	1.3	7.0	○	○
	〃	2	a-002		8.7	0.9	6.7	○	○
	〃	3	a-003		10.4	1.1	8.2	○	○
	〃	4	a-004		8.9	1.1	7.0	○	—
	〃	5	a-005		9.9	1.0	7.8	○	○
	〃	6	a-006		8.7	1.2	6.8	○	○
	〃 イト	7	a-007		9.2	1.2	7.0	○	—
	〃 ヘラ	8	a-008		8.8	1.2	5.4	○	—
	〃	9	a-009		8.8	1.0	5.6	○	—

S-60

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		9.2	1.0	7.6		
	坏a イト	1	a-001		7.1	2.0	5.5		
	〃	2	a-002		7.6	2.3	5.6		

S-75

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		9.2	0.8~1.2	6.8	○	○
	〃	2	a-002		10.6	1.1	7.8	○	○
	〃	3	a-003		10.8	1.1	7.6	○	—
	〃	4	a-004		9.4	1.2	7.8	—	—
	〃	5	a-005		10.4	1.2	7.0	○	—
瓦器	椀c	1	R-003	12	15.4	5.0	5.9		
	小皿	1	R-001	13	9.0	2.3+	—		

S-78

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		7.8	0.9	6.2	○	○

S-80

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿a イト	1	a-001		15.6	1.9~2.0	12.0	—	—

S-81

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		11.6	1.2	—	○	
	〃	2	a-002		10.6	1.2	7.4	○	○

S-85

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋3 —	1	R-038	1	15.6	1.6+	—		
	蓋4 —	1	R-039	2	17.2	2.6+	—		
	坏e —	1	R-005	3	10.3	3.7	5.55		
	坏a ヘラ	1	R-008	4	13.0	3.3	8.15	—	—
	〃	2	R-029	5	12.9	2.65	8.15	—	—
	〃	3	R-030	6	13.1	3.6~3.7	8.2	○	×
	〃	4	R-007	7	13.3	3.5	9.4	○	—
	〃	5	R-009	8	13.4	3.3~3.7	8.0	○	○
	〃	6	R-011	9	13.4	3.9	7.2	—	—
	〃	7	R-016	10	14.2	3.0	8.0	○	—
	〃	8	R-006	11	14.2	3.1	8.05	—	—
	〃	9	R-015	12	14.8	3.3	8.8	—	—
	〃	10	R-032	13	16.3	3.7~3.8	8.3	○	×
	〃	11	R-033	14	16.0	3.2	9.8	○	×
	坏d —	1	R-012	15	13.2	3.0	7.0		
	〃 —	2	R-031	16	13.2	3.1	7.4		
	〃 —	3	R-013	17	14.0	2.9	7.6		
	〃 —	4	R-048	18	13.5	2.9	7.6		
	〃 —	5	R-014	19	14.2	3.1	8.1		
	〃 ヘラ	6	R-028	20	14.0	2.9	9.0	—	○
	鉢 —	1	R-052	21	14.4	1.2+	—	—	—
土	皿a ヘラ	1	R-037	22	14.4	2.3	10.6	○	—
	〃 —	2	R-035	23	14.6	2.1~2.2	11.6		
	〃 ヘラ	3	R-034	24	15.0	2.0~2.2	11.4	○	○
	〃 —	4	R-036	25	15.2	1.9	12.5		
	〃 ヘラ	5	R-010	26	15.2	1.3~2.3	12.8	○	×
	〃	6	R-049	27	15.8	1.9	12.4	○	—
	大椀c —	1	R-053	28	20.0	7.7	10.3		
	〃 —	2	R-054	29	20.4	8.9	10.2		
須	蓋a3 —	1	R-024	37	13.8	2.3	5.4		
	蓋a4 —	1	R-023	38	15.6	2.1	8.0		
	〃	2	R-025	39	18.2	3.8	9.8		
	蓋4 —	1	R-041	40	19.0	2.3+	11.6		
	坏a ヘラ	1	R-017	41	12.9	3.8	7.0	—	—
	〃	2	R-019	42	13.6	3.5	7.3	○	—
	椀c —	1	R-018	43	12.4+	3.9+	8.1		
	皿a ヘラ	1	R-022	44	14.0	2.0	19.6	○	—
黒A	蓋 —	1	R-046	49	18.6	2.6+	—		
	椀 —	1	R-047	50	17.0	3.8+	—		
	鉢 —	1	R-051	51	14.0	2.2+	—		

S-85 暗灰色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋b	1	R-010	56	5.6	2.1+	—		
	坏a ヘラ	1	R-006	57	15.0	3.2	9.8	—	—
須	小蓋	1	R-002	63	8.5	1.1+			
	蓋c3	1	R-003	64	18.0	2.5+			
	坏a ヘラ	1	R-007	65	12.0	3.4	6.6	○	×

S-85 黒色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a ヘラ	1	R-003	68	14.0	3.0	8.2	—	—
	坏d	1	R-006	69	13.0	3.3	7.1		
	皿a ヘラ	1	R-004	70	14.4	2.1	10.9	○	—
	椀c1	1	R-005	71	—	3.5+	9.0		
		2	R-007	72	—	5.2+	7.8		

S-85 灰色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d	1	R-006	78	14.6	3.25+	8.8		
	皿a ヘラ	1	R-008	79	14.2	2.2	11.0	○	○
	〃 —	2	R-005	80	15.6	1.8+	12.0	—	—
	〃 ヘラ	3	R-004	81	15.3	2.1+	12.3	○	—
須	蓋b3	1	R-001	84	17.4	4.2	5.0		
黒A	椀(瓶入)	1	R-012	89	17.0	3.0+			

S-90

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋3	1	R-014	1	17.2	2.0+	—		
	〃	2	R-007	4	25.0	2.3+	—		
	蓋a4	1	R-071	2	17.3	1.7	—		
	蓋c3	1	R-013	3	19.3	4.2	—		
	坏e?	1	R-035	5	9.8	3.7	5.0		
	小坏a ヘラ	1	R-034	6	8.8	2.7	5.4	○	—
	坏a ヘラ	1	R-046	7	12.8	3.4	8.1	○	—
	〃	2	R-008	8	13.0	2.8	7.4		
	〃 ヘラ	3	R-009	9	13.0	3.5	7.7	—	—
	〃	4	R-047	10	13.0	3.7	8.2	○	—
	〃	5	R-051	11	13.2	3.1	8.0	○	○?
	〃	6	R-050	12	13.4	3.1	8.3	○	—
	坏d	1	R-018	13	13.4	2.8	7.4		
	〃	2	R-053	14	13.6	2.6	7.1		
	〃	3	R-004	15	13.6	2.6	7.6		
	〃	4	R-055	16	13.6	3.2	7.7		
	〃	5	R-012	17	13.6	3.3	7.9		
	〃	6	R-001	18	13.7	3.1	7.6		

土	坏d	7	R-002	19	13.8	2.6	8.5		
		8	R-011	20	13.8	2.8	7.8		
		9	R-052	21	13.8	3.1	7.6		
		10	R-054	22	13.8	3.2	7.2		
		11	R-017	23	14.0	3.1	7.0		
		12	R-005	24	14.0	3.2	7.5		
		13	R-008	25	14.0	3.5	7.1		
		14	R-010	26	14.2	3.0	7.9		
		15	R-006	27	14.5	3.3	7.6		
		16	R-007	28	14.6	3.0	8.4		
		17	R-028	29	14.6	2.8	6.8		
		18	R-016	30	14.8	3.1	7.8		
		19	R-009	31	15.2	2.7	7.5		
		20	R-003	32	16.0	3.4	9.6		
		21	R-030	33	16.0	3.7	8.4		
		22	R-045	34	16.6	3.7	9.1		
		23	R-029	35	16.8	3.7	9.4		
		24	R-031	36	17.0	3.8	9.8		
	大椀e1	1	R-015	37	21.9	8.9	12.2		
	皿a 一	1	R-056	38	14.1	1.2	11.0	—	—
	ヘラ	2	R-060	39	15.0	2.2	11.0	○?	○?
	—	3	R-059	40	15.0	1.6	11.2	—	—
	—	4	R-068	41	16.8	2.0	12.7	—	—
	—	5	R-003	42	17.0	2.5	12.7	—	×
	ヘラ	6	R-070	43	17.0	1.7	12.1	—	○?
	—	7	R-063	44	17.0	1.5	13.6	—	—
	—	8	R-066	45	17.1	1.8	12.4	—	—
	—	9	R-072	46	17.1	1.9	13.8	—	—
	—	10	R-057	47	17.1	1.7	13.4	—	—
	—	11	R-058	48	17.4	1.5	14.6	—	—
	—	12	R-067	49	17.6	1.8	13.6	—	—
	—	13	R-073	50	17.4	1.6	14.5	—	—
	—	14	R-065	51	17.6	1.7	14.0	—	—
	ヘラ	15	R-069	52	18.1	1.8	14.4	—	—
	—	16	R-062	53	17.5	1.9	13.5	—	—
	ヘラ	17	R-074	54	17.8	2.3	13.7	—	—
	+	18	R-061	55	17.9	2.2	13.7	—	—
	+	19	R-064	56	18.7	1.6	14.6	—	—
	—	20	R-005	57	18.8	2.1	15.7	—	—
	—	21	R-004	58	19.8	2.1	16.9	—	—
瓦	蓋c3	1	R-019	73	13.6	2.9	—		
		2	R-020	74	13.8	2.1	—		
		3	R-021	75	16.2	2.7	—		
	坏a ヘラ	1	R-048	76	12.4	3.5	7.0	—	—
	坏c	1	R-024	77	12.2	3.2	8.0		
		2	R-025	78	12.6	3.9	8.8		
		3	R-013	79	12.8	3.5	8.8		
	皿a ヘラ	1	R-023	80	17.0	1.5	13.2	○	—
		2	R-022	81	18.0	1.9	15.5	○	○

S-95

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		8.6	1.0	6.2	○	○
	+	2	a-002		9.6	0.9	7.6	○	○
	+	3	a-003		9.0	1.2	7.4	○	○
	+	4	a-004		9.6	1.0~1.4	7.2	○	○
	+	5	a-005		9.5	0.9~1.7	7.0	○	○
	+	6	a-006		9.4	0.9~1.1	7.0	○	○
	+	7	a-007		9.6	1.0~1.4	7.7	○	—
	+	8	a-008		9.6	1.5	7.8	○	○
	丸坏a +	1	a-001		15.9	2.9~3.6	—		○
	+	2	a-002		15.2	2.8~3.5	—		○
	+	3	a-003		15.8	3.0	—		—
	+	4	a-004		14.6	3.3+	—		
	+	5	a-005		16.0	3.7+	—		
	+	6	a-006		16.2	2.5+	—		
瓦器	椀c	1	R-003	6	—	1.7+	6.2		
	小皿	1	R-001	7	10.4	1.8+	—		

S-100

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		9.2	1.15	8.0		

S-110 暗色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a ヘラ	1	R-011	3	15.0	2.95	10.2	—	—
	皿a ヘラ	1	R-002	14	14.6	1.9	11.6	—	—
	+	2	a-001		13.4	1.4	9.6	○	
瓦	蓋3	1	R-003	16	18.4	2.1+	—		

S-111

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		9.4	1.1	6.8	○	○
	イト	2	a-002		9.4	1.2	7.8	○	○

S-115

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	丸坏a ヘラ	1	a-001		15.8	2.6	11.5		
	小皿a ヘラ	1	a-001		9.5	1.1	7.6		
	+	2	a-002		9.6	1.25	7.7		
	+	3	a-003		9.0	0.9	7.05		
	+	4	a-004		10.0	1.0	7.2		
	+	5	a-005		9.8	1.1	7.2		

S-118

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		9.4	1.1~1.4	7.2	○	×

S-120

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		8.9	0.9	7.1		
	+	2	a-002		9.0	1.0	7.0		
	小皿a2 ヘラ	1	a-001		10.0	1.1	7.9		
	+	2	a-002		11.4	1.0	7.4		

S-124

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿a ヘラ	1	a-001		8.8	1.4	7.5	○	○
	小坏a イト	1	a-001		8.0	2.0	5.6	○	
	皿c	1	a-001		9.6	2.6	6.0	○	

S-125

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
瓦A	椀（墨内示）	1	R-003	1	14.5	5.1	8.1		

S-134

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	丸坏a	1	a-001		14.0	3.9	—		

S-140

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋c	1	R-046	1	18.6	2.8	12.4		
	ヘラ	2	R-051	2	22.0	3.75	13.1		
	蓋3	1	R-064	3	27.4	3.2+	—		
	坏a ヘラ	1	R-043	5	13.1	3.85	8.6	—	—
	坏c	1	R-019	6	7.8	3.0	5.4		
		2	R-020	7	8.4	3.0	5.9		
		3	R-021	8	9.6	3.5	6.2		
		4	R-022	9	10.5	4.1	6.8		
	坏d	1	R-045	10	10.4	2.7	5.9		
		2	R-044	11	12.0	3.3	6.0		
		3	R-053	12	13.0	3.4	8.0		
		4	R-053	13	13.1	3.6	6.6		
		5	R-052	14	13.8	3.15	8.9		
		6	R-034	15	16.0	3.3	7.4		
		7	R-049	16	16.2	3.6	8.1		
		8	R-050	17	—	1.9+	7.0		

土	坏d	9	R-033	18	16.8	3.8	8.0		
		10	R-048	19	17.8	4.3	7.8		
		11	R-047	20	18.4	4.1	8.8		
	坏c	1	R-032	21	12.8	4.3	6.6		
	椀c	1	R-067	22	13.0	4.7~4.9	7.3		
		2	R-036	23	15.2	4.0	7.2		
		3	R-039	24	—	2.1+	6.7		
		4	R-037	25	16.2	5.7	9.4		
		5	R-038	26	21.0	8.4	11.4		
	皿a —	1	R-059	27	14.8	1.9	10.6	—	—
	ヘラ	2	R-007	28	14.8	2.3	12.7	—	—
	〃	3	R-008	29	15.6	1.5	12.2	—	—
	〃	4	R-057	30	16.0	1.7	13.6	—	—
	〃	5	R-009	31	16.4	2.4	13.1	—	—
	〃	6	R-058	32	18.0	2.0	14.5	—	—
	—	7	R-054	33	20.4	2.05	16.4	—	—
	—	8	R-010	34	17.8	2.7	13.9	—	—
		9	R-060	35	28.2	1.85+	—		
須	蓋c3	1	R-025	42	14.0	2.3	8.2		
		2	R-024	43	15.0	2.6	10.8		
		3	R-023	44	14.4	2.6	19.1		
	坏a ヘラ	1	R-003	45	13.8	5.0	9.2	—	—
	〃	2	R-002	46	13.7	4.8	7.1	—	—
	〃	3	R-004	47	15.1	3.1	11.0	○	—
	坏c	1	R-005	48	11.9	4.4	5.8		
		2	R-006	49	12.3	5.0	7.6		
		3	R-012	50	12.6	4.1	7.4		
		4	R-011	51	12.9	4.3	7.8		
		5	R-013	52	13.0	5.0	6.3		
	皿a ヘラ	1	R-014	53	13.8	1.3	11.0	○	—
	〃	2	R-027	54	14.8	1.8	12.1		
	〃	3	R-015	55	16.0	2.5	13.6	○	—
	〃	4	R-016	56	19.2	2.6	10.0		
	〃	5	R-017	57	19.7	2.5	13.6		
	大皿c	1	R-018	58	—	2.4+	17.5		

S-148

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		8.8	0.95	6.6	○	○
	椀（嵌入）	1	R-008	2	—	3.6+	6.6		
瓦器	椀（錆釉）	1	R-002	3	16.0	3.6+	—		
		2	R-005	3	—	0.9+	7.3		
	椀	1	R-004	4	—	3.0+	—		
	皿a	1	R-003	5	10.0	1.7	9.0		

S-149

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		9.0	1.3	6.8	○	○

S-154

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		10.0	1.3	7.2	○	○
		2	a-002		9.2	1.3	—	○	

S-155

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		10.2	0.9~1.1	7.6	○	
	〃	2	a-002		9.6	1.5~1.6	7.0	○	○
	〃	3	a-003		9.8	1.6~1.8	7.4	○	○
	〃	4	a-004		10.0	1.2~1.5	7.2	○	○
	〃	5	a-005		10.2	1.3~1.6	8.2	○	
	〃	6	a-006		11.0	0.9	7.6	—	○
	〃	7	a-007		10.6	1.3~1.5	8.0	—	○
	〃	8	a-008		9.2	1.2~1.4	7.0	○	○
	〃	9	a-009		9.6	1.3~1.4	7.0	○	—
	〃	10	a-010		10.6	1.5~1.6	8.6	○	○
	〃	11	a-011		9.4	1.2~1.4	7.6	○	○
土	小皿a ヘラ	12	a-012		9.8	1.7	6.8	○	—
	〃	13	a-013		9.8	1.2	8.0	○	—
	〃	14	a-014		10.2	1.1	8.4	○	○
	〃	15	a-015		9.6	1.0	7.4	○	—
	坏a ヘラ	1	a-001		11.9	3.0	7.4		
	〃	2	a-002		14.2	3.7	8.2		
	丸坏a	1	a-001		17.6	3.4+			
	坏d	1	R-001	1	13.8	3.8	8.5		
瓦a	椀c	1	R-002	2	15.6	5.1+	—		

S-158

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋3	1	R-043	1	—	1.6+	—		
		2	R-017	2	15.2	2.1+	—		
		3	R-014	4	17.0	2.8+	—		
		4	R-042	5	18.3	1.7	—		
		5	R-015	6	18.4	1.9+	—		
	蓋c3	1	R-013	3	15.8	1.3+	—		
	蓋4	1	R-030	7	14.8	1.9+	—		
	小皿a ヘラ	1	a-001		8.8	1.5	7.0	○	○
	〃	2	R-019	8	9.4	1.0	7.6	○	○
	〃	3	R-018	9	9.4	1.1	7.5	—	—
	坏e	1	R-012	10	9.8	3.4	6.0		
	坏a —	1	R-049	11	—	2.8	—	—	—
	ヘラ	2	R-038	12	—	2.5+	8.0	○	○
	〃	3	R-033	13	12.6	3.3	7.4	○	—
	〃	4	R-037	14	12.6	3.8	7.8	○	—
	〃	5	R-036	15	13.5	3.1~3.5	7.7	○?	—
	坏d	1	R-051	16	13.6	2.8	—		
		2	R-034	17	13.6	3.0	7.0		
	坏d?	3	R-035	18	14.7	4.2	7.4		
	坏	1	R-020	19	—	1.2+	—		
	椀c1	1	R-041	20	—	3.1+	8.4		
		2	R-039	21	—	4.2+	8.6		
	皿a —	1	R-040	22	—	2.0	—	—	—
	ヘラ	2	R-048	23	—	1.8+	—	○	—
	—	3	R-011	24	14.5	1.7	10.8	—	—
	ヘラ	4	R-050	25	14.9	1.25	11.6	○	—
	〃	5	R-009	26	15.3	1.8~2.2	12.3	—	×
	—	6	R-028	27	16.2	1.35	12.4	—	—
	—	7	R-010	28	16.8	1.9	12.8	—	—
	—	8	R-027	29	18.8	2.3	15.6	—	—
	皿(緑釉陶器?)	1	R-052	30	—	1.6+	7.6		
	耳皿	1	R-029	35	9.9	1.8	6.7		
須	坏c	1	R-046	38	14.0	4.9	8.2		

S-159

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		8.8	1.15	7.1	○	○

S-160

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		10.4	1.0	7.6		
	〃	2	a-002		10.0	1.2	7.9		

S-162

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		8.9	1.15	7.0	○	○
	〃	2	a-002		9.4	1.1	6.5	○	○
	〃	3	a-003		9.0	1.1	7.0	○	○
	〃	4	a-004		9.2	1.0	7.3	○	—
	〃	5	a-005		10.0	1.3	7.3	○	—
	皿(嵌入) イト	1	R-002	7	—	1.2+	6.2	—	—
瓦器	椀(錆釉)	1	R-003	8	—	3.4+	—		

S-164

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a(鍋入)	1	R-001	10	9.0	1.5	4.0	○	—
	丸坏a	1	a-001		16.6	2.9	—		

S-165

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋3	1	R-008	3	13.9	1.5	—		
	坏a —	1	R-006	4	13.0	3.1	8.5	○	—
	坏d	1	R-003	5	12.4	3.7	7.4		
		2	R-007	6	14.4	2.8	7.8		
	皿a ヘラ	1	R-010	7	17.7	1.4	15.1	—	○
須	蓋c3	1	R-004	8	19.5	2.2+	—		
	蓋3	1	R-005	9	—	2.1+	—		
	坏c	1	R-002	10	13.3	4.0	9.0		
		2	R-009	11	15.2	4.6+	—		

S-166

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a イト	1	a-001		15.5	3.3	8.5	○	×
	小皿a イト	1	a-001		10.4	1.1	8.4	○	○

S-170

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	鍋 —	1	R-013	1	—	1.6+	10.5	—	○?
須	蓋1	1	R-006	4	15.1	1.95+	—		
	蓋c3	1	R-009	5	13.3	2.5	—		
		2	R-007	6	13.4	2.1	—		
	蓋3	1	R-005	7	13.7	2.2+	—		
	小坏c	1	R-003	8	—	2.0+	7.6		
	坏c	1	R-008	9	12.7	3.7	8.3		
		2	R-008	10	12.7	4.1	8.1		
		3	R-002	11	14.6	3.8	10.6		
		4	R-004	12	15.0	5.0	10.0		

S-172

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a イト	1	a-001		13.0	2.8	8.0	—	—

S-178

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		10.4	1.2	7.2	○	○

S-180

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		8.8	1.1	6.5	○	○
	〃	2	a-002		8.8	1.2	7.0	○	○
	〃	3	a-003		8.8	0.8	6.8	○	○

S-185

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏d	1	R-021	1	14.2	3.4	6.6		
		2	R-037	2	15.0	3.2	8.5		
		3	R-022	3	14.4	3.8	6.6		
		4	R-012	4	15.2	3.2	7.8		
		5	R-013	5	14.4	3.2	8.0		
		6	R-020	6	16.0	3.5	8.8		
	坏 ヘラ	1	R-019	7	—	1.7+	9.5	○	—
	皿a ヘラ	1	R-025	8	18.0	2.7	14.8	—	—
	—	2	R-024	10	18.5	2.1	15.4	—	—
	—	3	R-023	11	15.6	1.7	13.2	—	—
	鍋	1	R-018	9	—	1.1+	8.8		
	大鍋c	1	R-026	12	27.0	2.7+	22.0		
須	蓋1	1	R-005	19	—	1.4+	—		
	蓋3	1	R-006	20	—	1.5+	—		
	小蓋c3	1	R-032	21	9.4	1.1+	—		
	小坏c	1	R-001	22	10.0	4.2	5.6		
	坏c	1	R-002	23	12.4	4.2	8.4		
	大坏c	1	R-003	24	18.4	4.6	11.8		
	鍋	1	R-007	25	15.6	5.8+	—		
	皿a —	1	R-014	26	15.5	2.5	12.8	○	—
	ヘラ	2	R-004	27	17.6	1.4	13.0	○	—
	〃	3	R-033	28	19.0	2.2	15.2	—	—
	〃	4	R-015	29	21.0	2.5	17.0	○?	—

S-190

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	蓋c3	1	R-038	1	21.3	2.6+	—		
	坏c	1	R-013	2	10.0	4.2	5.4		
		2	R-012	3	10.3	4.1	5.5		
	坏a ヘラ	1	R-023	4	13.2	3.0	8.2	○	—
	〃	2	R-010	5	14.0	4.0	9.2	○	○
	坏d	1	R-017	6	13.2	2.8	7.6		
		2	R-011	7	13.3	3.2	8.1		
		3	R-018	8	13.8	2.8	7.8		
		4	R-016	9	13.8	2.7	7.2		
		5	R-015	10	14.2	3.7	7.6		
		6	R-019	11	14.4	3.1	6.8		
		7	R-020	12	14.4	2.9	9.0		
		8	R-021	13	15.6	3.6	9.0		
		9	R-022	14	17.3	3.0	9.2		
	鍋c1	1	R-035	15	—	4.5+	8.6		
		2	R-036	16	19.0	8.5	9.8		
	皿a —	1	R-025	17	13.9	1.9	11.2	—	—
	—	2	R-026	18	14.4	1.7	11.0	—	—
	—	3	R-027	19	14.6	1.8	11.1	—	—
	—	4	R-030	20	14.8	1.7	11.7	—	—
	—	5	R-031	21	15.1	1.7	11.2	—	—
	ヘラ	6	R-027	22	15.3	1.6	12.6	?	—
	—	7	R-028	23	16.2	1.9	13.0	—	—
	—	8	R-032	24	17.3	1.7	14.2	—	—
	—	9	R-029	25	17.6	1.6	13.6	—	—
	—	10	R-033	26	18.0	1.6	14.8	—	—
	—	11	R-034	27	19.0	1.9	15.2	—	—
須	小蓋3	1	R-001	34	10.0	1.0+	—		
		2	R-002	36	11.8	1.8+	—		
	蓋c3	1	R-004	37	14.6	1.9	—		
		2	R-003	38	14.5	2.5+	—		
	蓋3	1	R-005	35	17.0	1.9	—		
	坏d	1	R-006	39	13.3	3.1	7.5		

S-197

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏c ヘラ	1	R-001	17	9.6	3.8	5.7		
	坏d ヘラ	1	R-002	18	—	1.9	5.4		

S-199

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		8.6	1.1	5.6	○	○

S-207

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏c	1	R-003	1	8.85	4.4	4.6		
		2	R-002	2	10.0	3.7	6.2		
	坏d	1	R-004	3	14.0	3.15	7.2		
		2	R-007	4	14.2	3.1	7.5		
		3	R-006	5	14.4	2.8	7.6		
		4	R-008	6	17.4	4.2	8.8		
		5	R-005	7	—	3.6+	7.6		
	皿a ヘラ	1	R-013	8	18.0	2.1	14.3	○	—
	—	2	R-014	9	18.8	2.3	15.6	—	—
	—	3	R-015	10	19.8	1.6	16.2	—	—
	皿c	1	R-012	11	24.8	3.65	18.0		
須	坏a(器壁) ヘラ	1	R-016	14	—	1.3+	—	○	
	皿a ヘラ	1	R-019	15	17.8	2.4	14.9	○	—
黒A	鍋	1	R-020	17	18.4	3.5+	—		

S-209

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	皿a 一	1	R-001	3	19.8	1.85	15.8	—	—

S-239

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
瓦	面3	1	R-001	6	12.0	1.8	—		

最上層

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a イト	1	R-010	2	15.0	3.0	9.9		
	皿c イト	1	R-011	3	21.6	4.2	14.0		
瓦	小壺	1	R-007	6	8.0	2.2	—		

黒色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	R-015	1	10.6	1.2	6.2	○	
	〃	2	a-001		9.1	1.1	6.9	○	○
	〃	3	a-002		9.5	1.0	5.6	○	○
	〃	4	a-003		10.6	1.4	7.2	○	○
	〃	5	a-004		10.1	1.3	7.0	○	○
	〃	6	a-005		9.5	1.1	7.7	○	○
	〃	7	a-006		9.5	1.5	7.1	○	○
	〃	8	a-007		9.5	1.3	7.1	○	○
	〃	9	a-008		10.1	0.4~1.8	7.2	○	○
	〃	10	a-009		9.2	1.0	6.6	○	○
	〃	11	a-010		9.0	1.5	7.0	○	○
	〃	12	a-011		9.8	0.7~1.4	7.3	○	○
	〃	13	a-012		9.2	0.8~1.5	6.8	○	○
	〃	14	a-013		9.3	0.9~1.6	7.1	○	○
	〃	15	a-014		9.5	1.4	6.8	○	○
	〃	16	a-015		8.8	0.9	6.6	○	○
	〃	17	a-016		9.4	1.1	6.8	○	○
	〃	18	a-017		10.0	1.5	8.0	○	○
	〃	19	a-018		9.6	1.5	7.6	○	○
	〃	20	a-019		9.6	1.0	7.6	○	○
	〃	21	a-020		8.8	1.0	5.8	○	○
	〃	22	a-021		9.4	1.0	6.6	○	○
	〃	23	a-022		9.4	1.3	6.5	○	○
	〃	24	a-023		9.0	1.2	6.8	○	○
	〃	25	a-024		9.6	1.2	7.4	○	○
	〃	26	a-025		9.0	1.1~1.7	7.1	○	○
	〃	27	a-026		10.0	1.5	7.4	○	○
	〃	28	a-027		9.5	1.5	7.7	○	—
	〃	29	a-028		10.0	0.6~1.3	7.8	○	○
	〃 イト	30	a-029		9.0	1.1	7.1	○	○
	〃	31	a-030		9.0	1.2	7.0	○	○
	〃	32	a-031		9.1	1.1	7.4	○	—
	〃	33	a-032		9.2	1.0	6.3	○	—
	〃	34	a-033		9.1	1.0	6.9	○	○
	〃	35	a-034		9.2	1.0	7.8	○	○
	〃	36	a-035		9.0	0.9	6.8	○	—
	〃	37	a-036		9.0	1.0	6.4	○	○
	〃	38	a-037		8.8	1.4	7.0	○	—
	〃	39	a-038		9.6	1.2	6.4	—	—
	〃	40	a-039		9.6	1.0	7.0	○	—
	丸坏a ヘラ	1	a-001		15.6	3.3	—	○	○
	〃	2	a-002		15.7	2.6	—	—	○
	〃	3	a-003		15.2	3.3	—	○	○
	〃	4	a-004		16.2	2.6	—	—	○
	〃	5	a-005		15.6	3.6	—	○	—
	〃	6	a-006		17.2	2.8		—	○
	〃	7	a-007		16.0	—	—	—	○
	坏a イト	1	a-001		15.6	3.0	11.0	○	○
	〃	2	a-002		16.0	2.5~3.3	9.5	○	○
	〃	3	a-003		15.8	2.3	11.1	○	—
	〃	4	a-004		15.0	2.4	10.8	○	○
	〃	5	a-005		17.0	2.8	12.6	—	—
	〃	6	a-006		15.6	2.4	10.2	○	○
	〃	7	a-007		15.4	2.7	8.8	—	—
	〃	8	a-008		15.4	2.6	10.2	○	—
	〃 —	9	a-009		15.2	2.6	11.4	○	○
瓦B	鉢c	1	a-001		14.8	5.0	6.6		

灰黒色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		10.0	1.3	7.0	○	○
	〃	2	a-002		10.4	1.5	8.0	○	×
	〃	3	a-003		9.2	1.3	7.5	○	○
	〃	4	a-004		10.6	1.3	8.3	○	○
	〃	5	a-005		10.6	1.3	7.8	○	○
	〃	6	a-006		9.4	1.4	6.5	○	○
	〃	7	a-007		10.4	1.1	8.0	○	○
	〃	8	a-008		9.0	1.0	6.2	○	○
	〃	9	a-009		9.6	1.3	7.6	○	○
	〃	10	a-010		10.0	1.7	7.1	—	—
	〃	11	a-011		11.0	1.2	9.2	○	—
	〃	12	a-012		9.4	1.6	7.4	○	—
	〃 イト	13	a-013		8.4	0.9	7.2	○	○
	小皿a2 ヘラ	1	R-004	1	10.9	2.5	7.7		
	皿 —	1	R-016	2	13.9	1.65+	—	○	—
黒A	椀×坏	1	R-018	3	—	2.4+	—		
	面3	1	R-017	6	18.1	2.1+	—		

暗茶土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a ヘラ	1	a-001		9.6	1.1	8.0	○	○
	〃	2	a-002		10.0	1.2	7.4	○	○
	〃	3	a-003		9.6	0.9	7.8	—	○
	〃	4	a-004		9.4	1.1	6.8	○	○
	〃	5	a-005		9.8	1.2	8.0	—	—
	〃	6	a-006		9.8	1.0	7.8	○	○
	〃	7	a-007		9.4	0.8	7.0	—	—
	丸坏a —	1	a-001		16.6	—	—	—	—

茶色土

種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	坏a ヘラ	1	a-001		13.4	2.6	9.0	○	○
	小皿a ヘラ	1	a-001		9.4	1.1	6.7	○	○
	〃	2	a-002		9.4	1.2	7.0	○	○
	〃 イト	3	a-003		8.6	1.0	6.7	○	○
	〃 ヘラ	4	a-004		9.0	1.1	5.4	○	○

灰茶砂

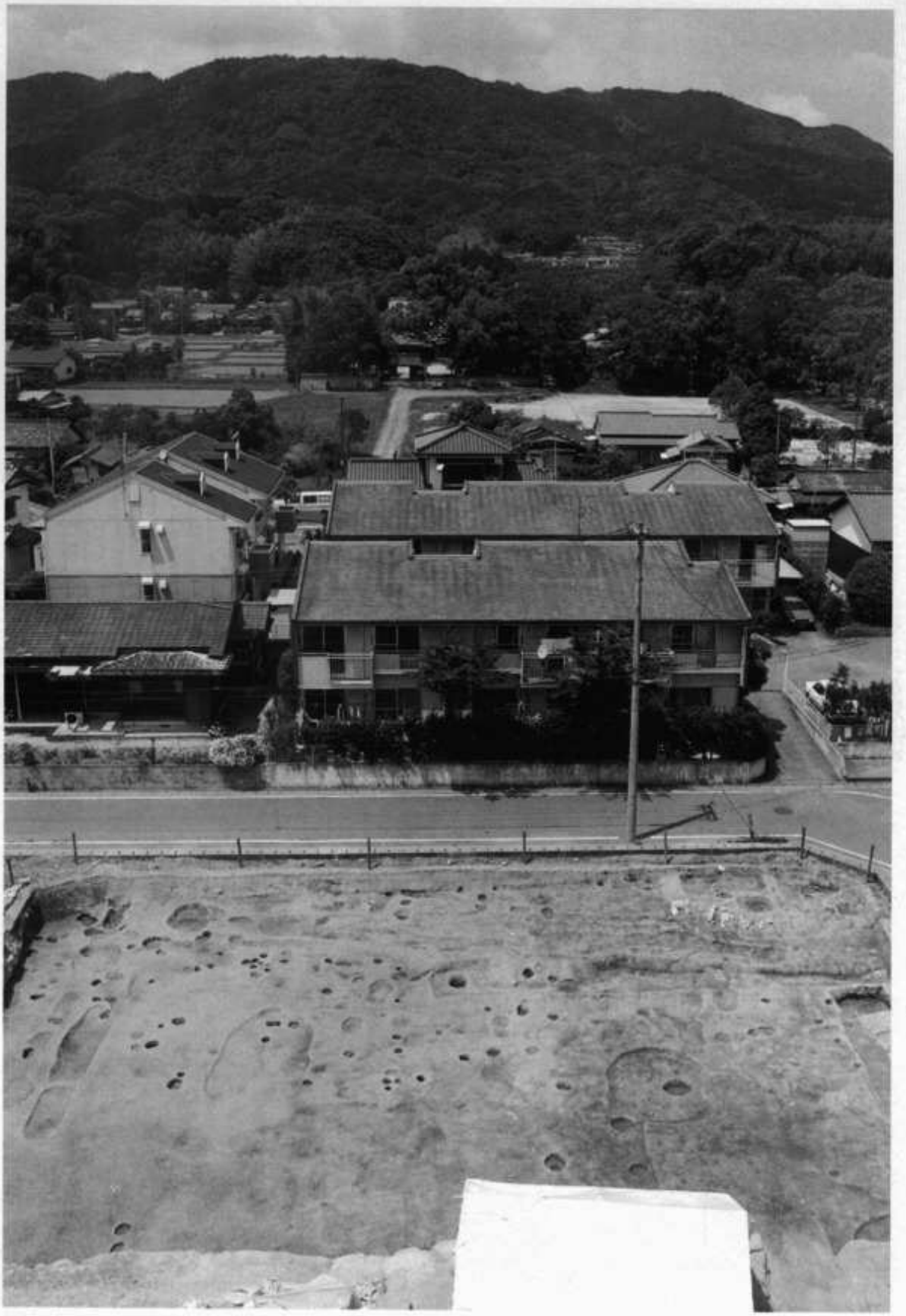
種別	器種	番号	遺物番号	図番号	口径	器高	底径	A	B
土	小皿a イト	1	a-001		9.2	1.1	6.8	○	○
	〃 ヘラ	2	a-002		11.0	1.3	8.0	○	—

写真図版

凡例

写真図版右下の番号は、
以下の要領で理解できる。

図版番号　　挿図番号



観世音寺および戒壇院を望む（後方は大野城跡）

149次調査　I・II面完掘状況（空中写真）

149SX020配石検出状況（南から）

149SX020配石検出状況詳細（東から）

149SX025検出状況（北から）

149SX025検出状況（東から）

149SD040土層観察（南から）

149次調査　III～V面遺構配置（空中写真）

149次調査　III～V面遺構配置（西半部、空中写真）

149SD055他土層観察（西から）

調査区北壁土層観察【1】（南から、1→4は西から東へ移動）

調査区北壁土層観察【2】

調査区北壁土層観察【3】

調査区北壁土層観察【4】

Aトレンチ設定状況（南西から）

Aトレンチ土層観察【1】（北から、1→2へ東から西へ移動）

Aトレンチ土層観察【2】

149SE125

10-1

149SD040

12-4

12-4

149SD040暗灰砂

12-6

149SD140

13-1

13-2

13-6

13-7

13-8

13-9

13-13

149SD140

13-14

14-26

14-28

14-29

14-31

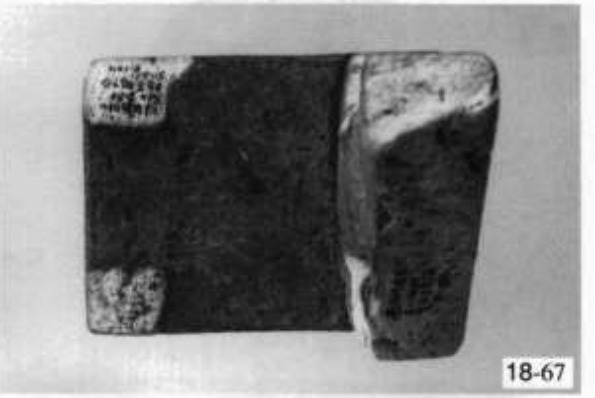
14-34

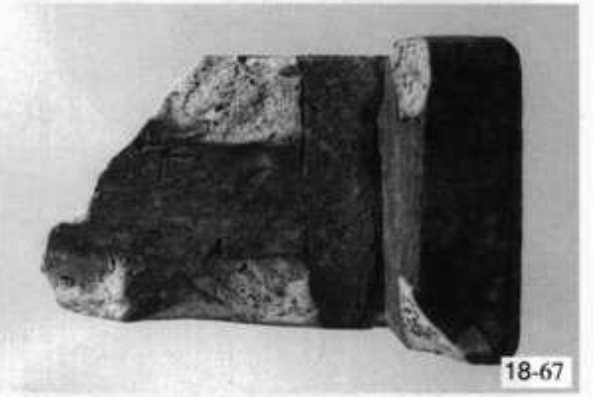
149SD165

19-7

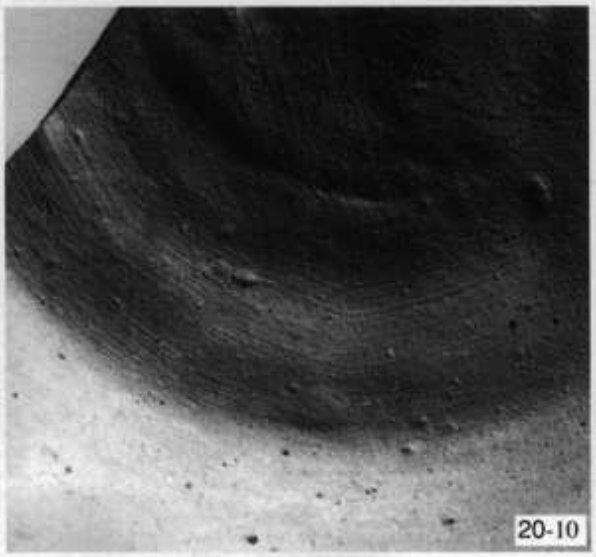
18-67

18-67


18-67


18-67

149SD170


20-10

21-14（内）

21-14（外）

149SD185

21-1

21-3

22-22

22-24

22-33

149SD185

22-35

23-39

23-39

149SD190

24-6

24-8

24-14

24-16

25-20

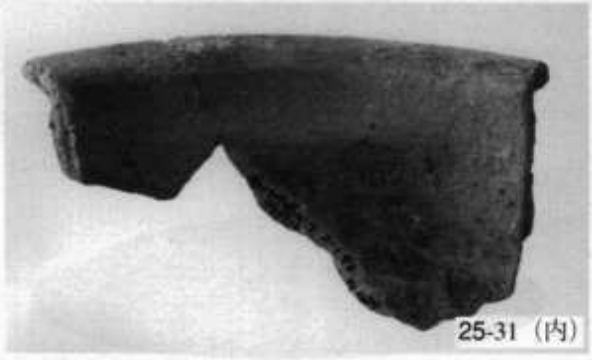
25-21

25-23

149SD190

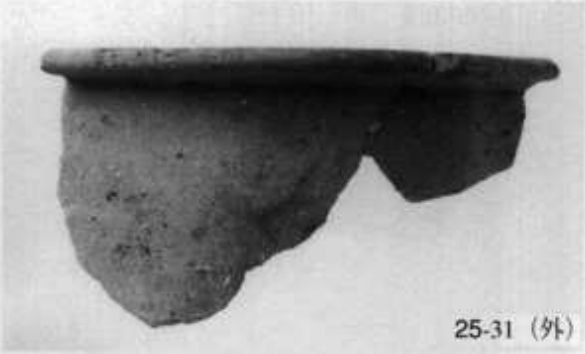
25-24'

25-26


25-31（内）

26-39

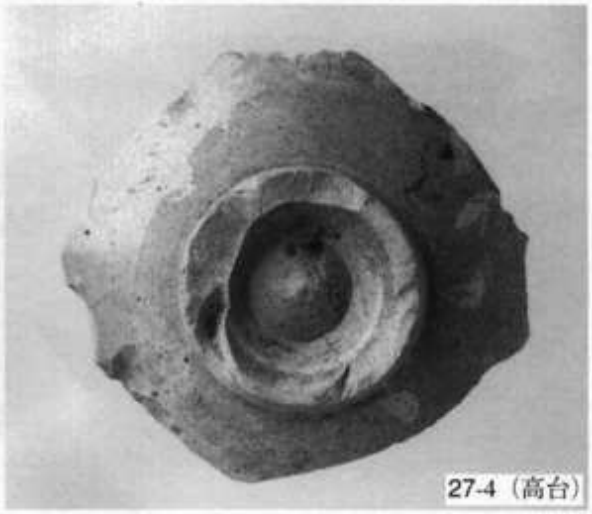
26-39（底）


25-31（外）

149SK092

27-4（見込み）

27-4


27-4（高台）

149SX010

28-6（底部）

149SX052

31-11

149SX085

32-3

32-4

32-8

32-11

33-23

33-24

34-38

34-42

35-52

149SX085暗灰色土

35-65

149SX085黒色土

36-69

149SX085灰色土

37-84

149SX090

38-3

38-5

38-6

38-16

38-17

38-18

38-19

38-20

39-22

39-27

39-32

149SX090

39-33

39-34

39-35

39-36

40-37

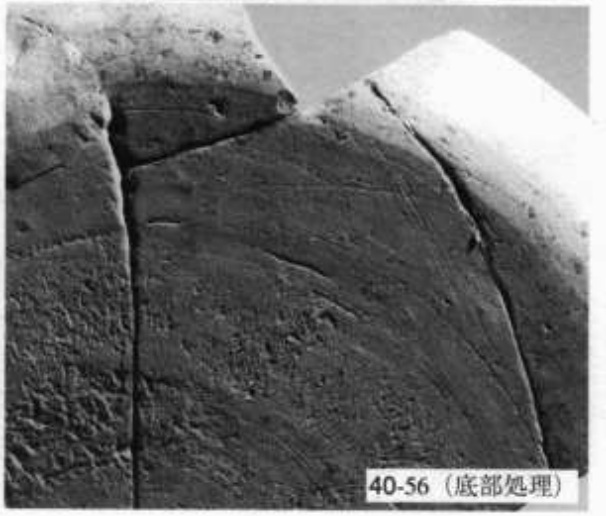
40-38

40-40

40-42

40-47

40-54（墨書）


40-56（底部処理）

149SX090

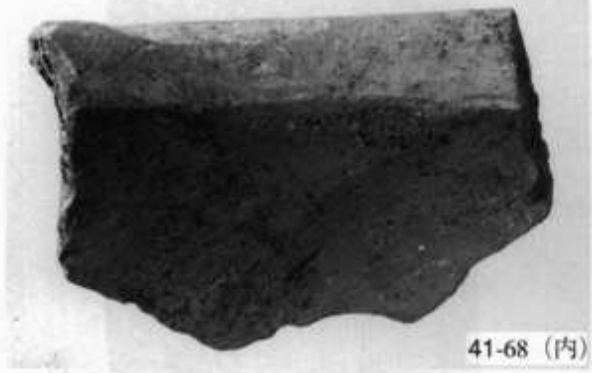
41-61

41-70

41-64

41-71

41-68（外）



41-68（内）

41-71（調整）

149SX090

42-73

42-75

42-77

42-82

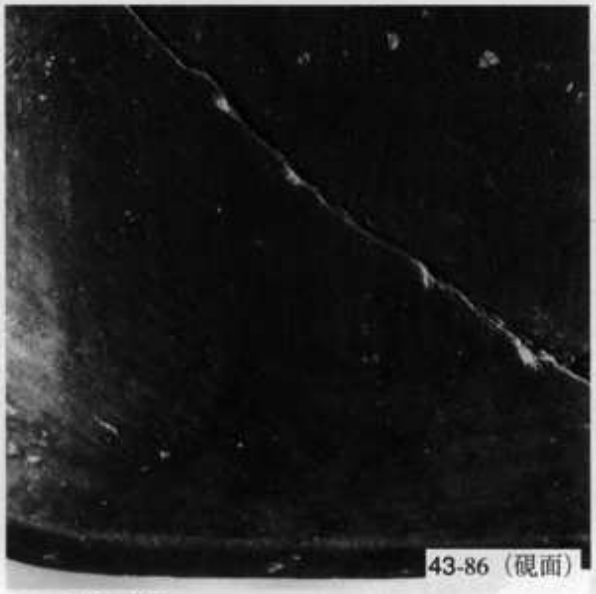
43-85

43-86

43-87

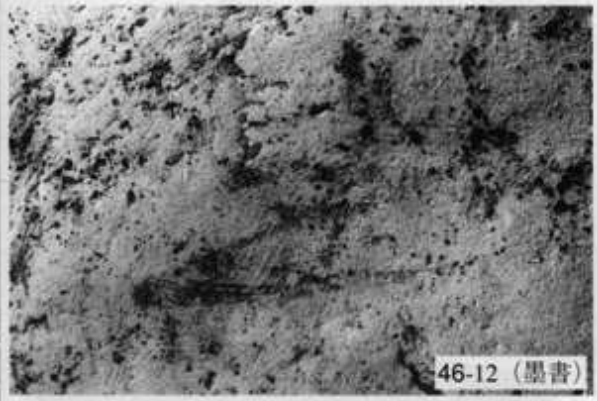
43-86（硯面）

43-86（脚部）

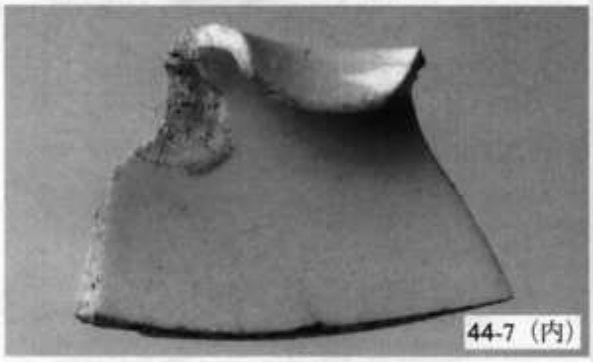

43-86（硯面）

149SX110

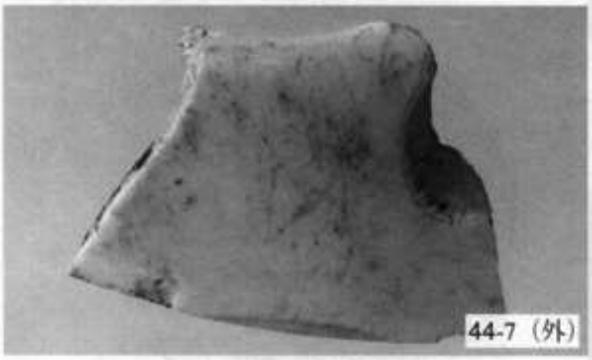
149SX149


46-12（墨書）

149SX158


44-7（内）

47-19

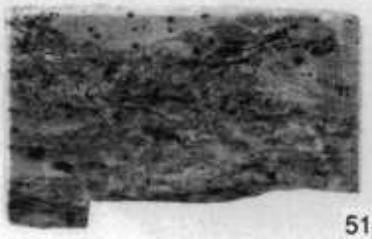

44-7（外）

149SX207

47-26

49-51

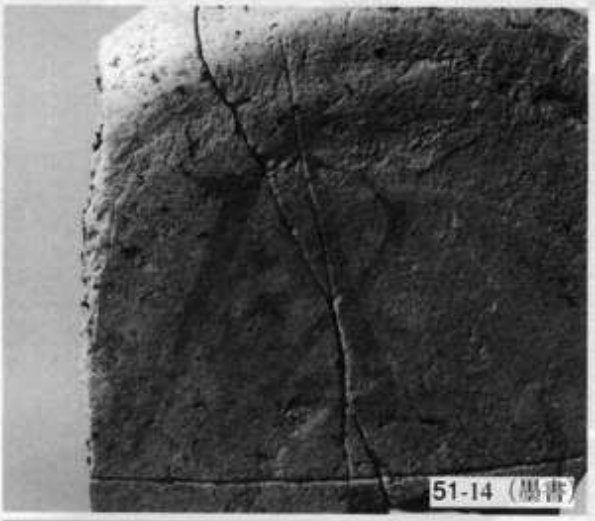
51-19（表）


51-19（裏）

149SX207

51-1

51-11



51-14（墨書）

51-8

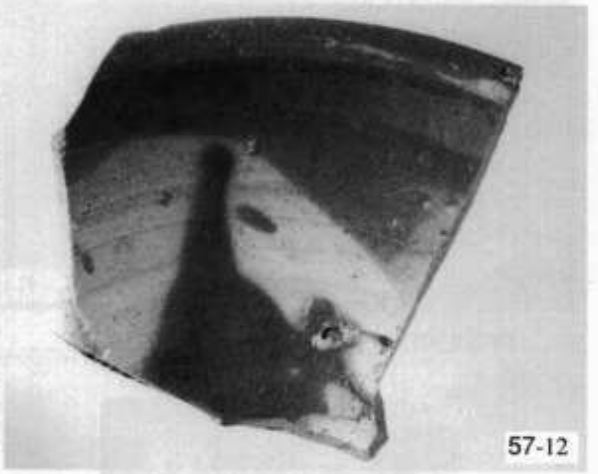
最上層

54-33

灰黒色土

56-11

表採

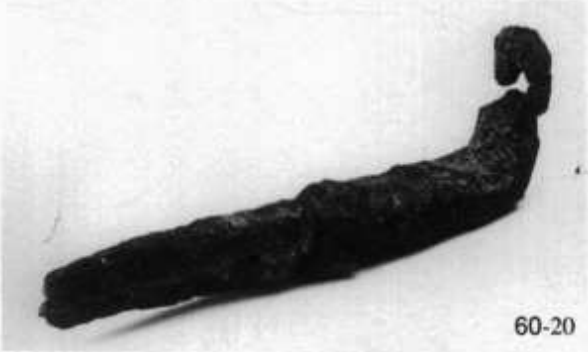


57-12

149SD190

58-6

149SX090



60-20

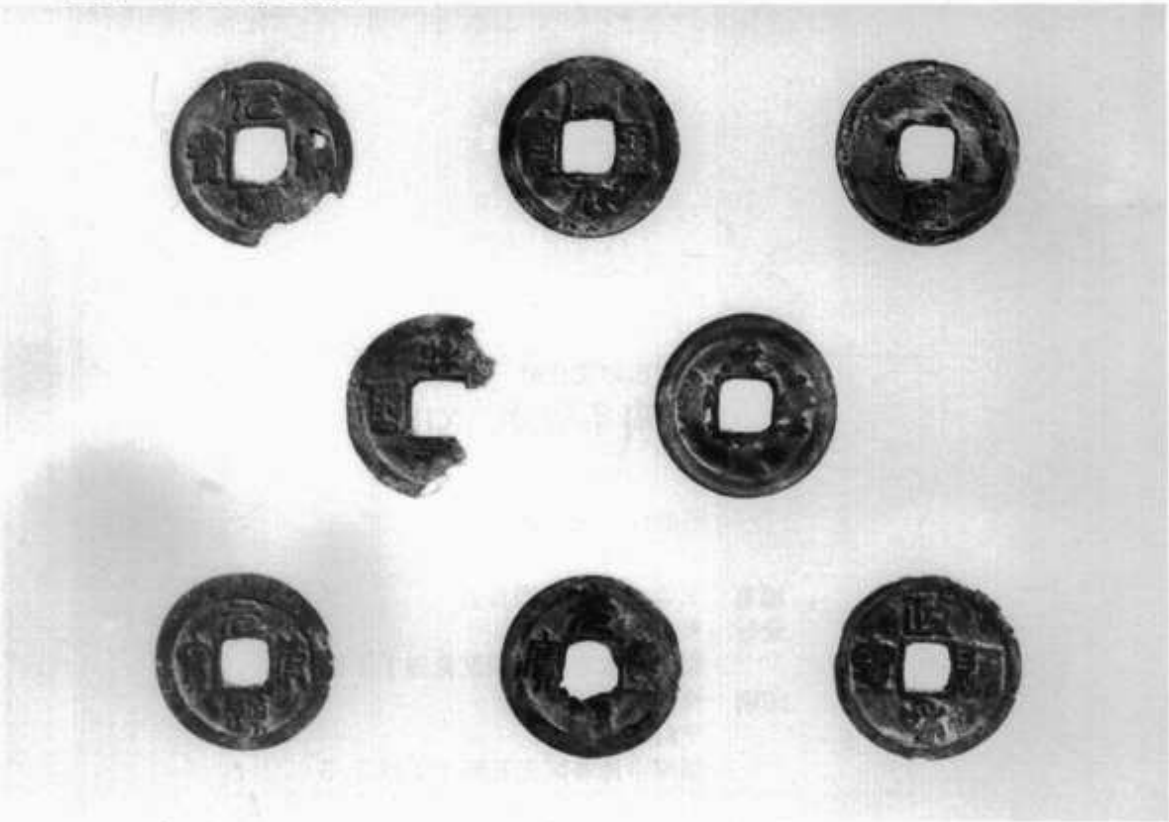
60-20（上）

60-20（横）

149SD015

椀形滓

最上層・149SX103出土銭貨



太宰府市の文化財　第43集
大宰府条坊跡　XII

平成11（1999）年3月

編集　太宰府市教育委員会
発行　〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1
印刷　株式会社 海援社
〒816-0074
福岡市博多区光丘町1丁目3-5